

京都府遺跡調査概報

第 34 冊

1. 丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡
 - (1) スクモ塚古墳群
 - (2) 大谷古墳状隆起
 - (3) アバ田東1号墳
 - (4) アサバラ遺跡
 - (5) 鳥取城跡
2. 北谷城跡・西八田城跡
3. 青野西遺跡第4次
4. 長岡京跡右京第277・306次
5. 長岡京跡左京第202次
6. 山崎遺跡(山城国府跡第18次)
7. 京奈バイパス関係遺跡(小田垣内遺跡)

1989

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年4月に設立され、本年3月をもって8年になります。この間、国・京都府及びこれらの設立した公社・公団の実施する公共事業に伴う遺跡の発掘調査・研究、文化財保護の普及・啓発事業などを鋭意推進してまいりました。これらの諸事業の成果につきましては、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を刊行し、利用に供してきたところであります。

本概報は、昭和63年度に実施した発掘調査のうち、丹後国宮農地開発事業関係遺跡、北谷城跡、西八田城跡、青野西遺跡、長岡京跡右京第277・306次、長岡京跡左京第202次、山崎遺跡、小田垣内遺跡に関する概要報告です。本書が調査地域の歴史を解明する上での一助になるとともに、ひいては京都府の地域文化の発展に寄与できることを願ってやみません。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり、調査を依頼された農林水産省近畿農政局、京都府中丹土地改良事務所、京都府企業局、京都府土木建築部、京都府教育委員会、日本道路公団大阪建設局をはじめ、地元の久美浜町教育委員会・弥栄町教育委員会・峰山町教育委員会・網野町教育委員会・綾部市教育委員会・向日市教育委員会・長岡京市教育委員会・大山崎町教育委員会・田辺町教育委員会ならびに、調査に直接参加し協力いただいた多くの方がたに深く感謝申し上げますとともに、今後とも当調査研究センターの事業に対し、御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成元年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

凡 例

1. 本冊に収めた概要は、下記のとおりである。
1. 丹後国営農地開発事業関係遺跡 2. 北谷城跡・西八田城跡 3. 青野西遺跡第4次 4. 長岡京跡右京第277・306次 5. 長岡京跡左京第202次
6. 山崎遺跡(山城国府跡第18次) 7. 京奈バイパス関係遺跡(小田垣内遺跡)
2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 丹後国営農地開発事業関係遺跡			農林水産省近畿農政局	増田 孝彦
(1)スクモ塚古墳群	中郡峰山町内記小字高山 竹野郡弥栄町吉沢小字荒木	昭63. 4. 18 ～63. 7. 8		中川 和哉
(2)大谷古墳群	竹野郡網野町島津	昭63. 6. 1 ～63. 7. 25		中川 和哉
(3)アバ田東1号墳	熊野郡久美浜町新庄小字 アバ田	昭63. 4. 19 ～63. 7. 20		荒川 史
(4)アサバラ遺跡	熊野郡久美浜町新庄小字 アサバラ	昭63. 5. 26 ～63. 7. 25		荒川 史
(5)鳥取城跡	熊野郡久美浜町浦明小字 鳥取	昭63. 6. 3 ～63. 8. 2		森島 康雄
2. 北谷城跡・西八田城跡	綾部市淵垣町北谷 綾部市岡安町	昭63. 11. 1 ～元. 1. 27	京都府企業局	引原 茂治
3. 青野西遺跡第4次	綾部市青野町上フケ	昭63. 5. 20 ～63. 10. 22	京都府中丹土地改良事務所	引原 茂治
4. 長岡京跡右京第277・306次	長岡京市粟生川久保	昭62. 9. 9 ～63. 1. 22 昭63. 6. 1 ～63. 7. 29	京都府土木建築部	竹井 治雄 岩松 保
5. 長岡京跡左京第202次	向日市上植野町西大田	昭63. 8. 8 ～63. 9. 30	京都府教育委員会	竹井 治雄
6. 山崎遺跡	乙訓郡大山崎町竜光	昭63. 11. 8 ～63. 12. 15	日本道路公団大阪建設局	竹井 治雄
7. 京奈バイパス関係遺跡	綴喜郡田辺町普賢寺小字 小田垣内	昭63. 8. 17 ～元. 3. 17	日本道路公団大阪建設局	伊野 近富

3. 本冊の編集には、調査第1課資料係が当たった。

目 次

1. 丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡	
昭和63年度発掘調査概要	1
(1) スクモ塚古墳群	4
(2) 大谷古墳状隆起	17
(3) アバ田東1号墳	18
(4) アサバラ遺跡	23
(5) 鳥取城跡	35
2. 北谷城跡・西八田城跡試掘調査概要	49
3. 青野西遺跡第4次発掘調査概要	57
4. 長岡京跡右京第277・306次発掘調査概要	75
5. 長岡京跡左京第202次発掘調査概要	95
6. 山崎遺跡(山城国府跡第18次)発掘調査概要	105
7. 京奈バイパス関係遺跡(小田垣内遺跡)昭和63年度発掘調査概要	113

挿 図 目 次

1. 丹後国営農地開発事業

(1) スクモ塚古墳群

第 1 図	調査地周辺古墳分布図	5
第 2 図	地形図	7
第 3 図	34号墳主体部	8
第 4 図	35号墳第 1 主体部	9
第 5 図	35号墳第 2 主体部	10
第 6 図	35号墳第 3 主体部	10
第 7 図	36号墳第 1・第 2 主体部	11
第 8 図	36号墳第 3 主体部	12
第 9 図	37号墳土器棺墓	13
第 10 図	37号墳主体部	13
第 11 図	出土遺物実測図(1)	14
第 12 図	出土遺物実測図(2)	15
第 13 図	出土遺物実測図(3)	16

(2) 大谷古墳状隆起

第 14 図	調査地位置図	17
--------	--------	----

(3) アバ田東 1 号墳

第 15 図	調査地位置図	18
第 16 図	新庄 1 団地内遺跡分布図	20
第 17 図	アバ田東 1 号墳墳丘測量図	21
第 18 図	アバ田東 1 号墳遺物実測図	22

(4) アサバラ遺跡

第 19 図	アサバラ遺跡トレンチ実測図	24
第 20 図	SH02実測図	25
第 21 図	SD01断面図	26
第 22 図	13トレンチ実測図	27
第 23 図	アサバラ遺跡出土遺物実測図(1)	28
第 24 図	アサバラ遺跡出土遺物実測図(2)	29

第 25 図	アバ田東 3 号墳周辺地形測量図	31
第 26 図	アバ田東 3 号墳下層住居跡実測図	31
第 27 図	アバ田東 3 号墳出土遺物実測図	32
第 28 図	クズレ谷遺跡出土遺物実測図	33

(5) 鳥取城跡

第 29 図	調査地位置図	35
第 30 図	調査区位置図	36
第 31 図	溝 8 断面図	36
第 32 図	第 1 調査区遺構実測図	37
第 33 図	第 1 調査区南隅拡張部遺構実測図	38
第 34 図	土坑 2 遺物出土状況実測図	39
第 35 図	第 2 調査区平面図	40
第 36 図	第 2 調査区断面図	40
第 37 図	鳥取城跡中世土器・石製品実測図	41
第 38 図	鳥取城跡土坑 2 出土土器実測図	42
第 39 図	鳥取城跡出土土器実測図	43
第 40 図	鳥取城跡出土石器実測図	44

2. 北谷城跡・西八田城跡

第 41 図	城跡位置図	50
第 42 図	北谷城跡調査地位置図	51
第 43 図	北谷城跡 3 地区地形図	52
第 44 図	北谷城跡 3 地区出土遺物実測図	53
第 45 図	西八田城跡調査地位置図	54
第 46 図	西八田城跡 1 地区地形図	55

3. 青野西遺跡第 4 次

第 47 図	周辺遺跡分布図	58
第 48 図	調査地平面図	59
第 49 図	第 1・4 次調査地位置図	61
第 50 図	竪穴式住居跡実測図	63
第 51 図	溝状遺構 SD02 断面図	64
第 52 図	溝状遺構 SD01 実測図	65
第 53 図	出土遺物実測図(1)	67

第 54 図	出土遺物実測図(2).....	69
第 55 図	出土遺物実測図(3).....	71
4. 長岡京跡右京第277・306次		
第 56 図	右京第277・306次調査トレンチ配置図.....	75
(1) 長岡京跡右京第277次		
第 57 図	右京第277次調査A・Bトレンチ遺構実測図.....	77
第 58 図	右京第277次調査C・D・Eトレンチ遺構実測図.....	78
第 59 図	建物跡SB27701実測図.....	79
第 60 図	溝SD27705断面実測図.....	79
第 61 図	竪穴式住居跡SH27701実測図.....	80
第 62 図	右京第277次調査出土遺物実測図.....	81
(2) 長岡京跡右京第306次		
第 63 図	右京第306次調査Aトレンチ検出遺構配置図.....	84
第 64 図	SB30601～04平面実測図.....	85
第 65 図	SB30605・SD30631平面実測図.....	86
第 66 図	SX30697・SB30606平面実測図.....	86
第 67 図	SX30697土層断面実測図.....	87
第 68 図	SD30601平面実測図.....	88
第 69 図	SD30601・SD30631土層断面実測図.....	88
第 70 図	右京第306次調査Bトレンチ検出遺構配置図.....	88
第 71 図	右京第306次調査出土遺物実測図(1).....	89
第 72 図	右京第306次調査出土遺物実測図(2).....	90
第 73 図	右京第306次調査出土遺物実測図(3).....	91
5. 長岡京跡左京第202次		
第 74 図	調査地位置図.....	95
第 75 図	トレンチ配置図.....	96
第 76 図	建物跡SB20201.....	97
第 77 図	建物跡SB20202.....	97
第 78 図	溝SD20201実測図.....	98
第 79 図	遺構実測図.....	99
第 80 図	東壁断面実測図.....	100
第 81 図	出土遺物実測図(1).....	101

第 82 図	出土遺物実測図(2).....	103
第 83 図	墨書土器実測図.....	104
6. 山崎遺跡		
第 84 図	調査地位置図.....	105
第 85 図	トレンチ配置図.....	106
第 86 図	遺構実測図.....	108
第 87 図	出土遺物実測図.....	110
第 88 図	染付蓋実測図.....	111
7. 京奈バイパス関係遺跡(小田垣内遺跡)		
第 89 図	調査地位置図.....	113
第 90 図	地形測量図.....	114
第 91 図	遺構平面図.....	115

付 表 目 次

1. 丹後国営農地開発事業		
付 表 1	昭和63年度国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧.....	1
付 表 2	国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表.....	2
(3) アバ田東 1 号墳		
付 表 3	新庄 1 団地内遺跡一覧表.....	19
4. 長岡京跡右京第277・306次		
(2) 長岡京跡右京第306次		
付 表 4	建物一覧.....	93

図 版 目 次

1. 丹後国営農地開発事業

(1) スクモ塚古墳群

図版第 1 (1)調査前全景(南から) (2)スクモ塚34号墳調査後(南から)

図版第 2 (1)スクモ塚34号墳第 1 主体部(北から)

(2)スクモ塚34号墳第 2 主体部(南から)

図版第 3 (1)スクモ塚35号墳調査後(南から)

(2)スクモ塚35号墳第 1 主体部(北から)

図版第 4 (1)スクモ塚35号墳第 2 主体部(南から)

(2)スクモ塚35号墳第 3 主体部(西から)

図版第 5 (1)スクモ塚36号墳調査後(北から)

(2)スクモ塚36号墳土器出土状況(南から)

図版第 6 (1)スクモ塚36・37号墳調査後(北から)

(2)スクモ塚37号墳土器棺(北から)

図版第 7 出土遺物

(2) 大谷古墳状隆起

図版第 8 (1)調査前全景(東から) (2)完掘状況(東南から)

(3) アバ田東 1 号墳

図版第 9 (1)アバ田東 1 号墳遠景(西から) (2)アバ田東 1 号墳全景(北東から)

(4) アサバラ遺跡

図版第10 (1)アサバラ遺跡・クズレ谷遺跡遠景(南西から)

(2)アサバラ遺跡全景(南東から)

図版第11 (1)アサバラ遺跡主要部全景(南東から)

(2)アサバラ遺跡SH02(南東から)

図版第12 (1)13トレンチ全景(北東から) (2)SH03・SH04(南東から)

図版第13 (1)アバ田東 3 号墳石材検出状況(北西から)

(2)アバ田東 3 号墳下層住居跡(南西から)

図版第14 出土遺物(1)

図版第15 出土遺物(2)

(5) 鳥取城跡

図版第16 (1)調査地遠景(西から) (2)第 1 調査区全景(北西から)

- 図版第17 (1)土坑 2 全景(南東から) (2)土坑 2 遺物出土状況(1)
 図版第18 (1)第 2 調査区全景(北西から) (2)第 2 調査区盛土断面(南西から)
 図版第19 (1)土坑 2 遺物出土状況(2) (2)出土石器
 図版第20 土坑 2 出土土器

2. 北谷城跡・西八田城跡

- 図版第21 (1)北谷城跡遠景(東から) (2)西八田城跡遠景(南から)
 図版第22 (1)北谷城跡 3 地区調査前近景(南西から)
 (2)北谷城跡 3 地区土器出土地点(北から)
 図版第23 (1)西八田城跡 1 地区頂部調査前近景(南東から)
 (2)西八田城跡 1 地区頂部調査状況(東から)
 図版第24 (1)西八田城跡 1 地区頂部西側調査前近景(東から)
 (2)西八田城跡 1 地区溝(南西から)
 図版第25 (1)西八田城跡 1 地区堀切調査前近景(東から)
 (2)西八田城跡 1 地区堀切全景(西から)
 図版第26 (1)西八田城跡 1 地区堀切東肩部断面(北東から)
 (2)北谷城跡 3 地区出土遺物

3. 青野西遺跡第 4 次

- 図版第27 (1)調査前全景(北東から) (2)調査地全景(東から)
 図版第28 (1)竪穴式住居跡SH03(西から)
 (2)竪穴式住居跡SH03特殊ピット(南から)
 図版第29 (1)竪穴式住居跡SH04(南東から) (2)竪穴式住居跡SH05(東から)
 図版第30 (1)竪穴式住居跡SH05遺物出土状況(1)
 (2)竪穴式住居跡SH05遺物出土状況(2)
 図版第31 (1)掘立柱建物跡SB07(北東から) (2)掘立柱建物跡SB08(東から)
 図版第32 (1)溝SD01(北から) (2)溝SD01遺物出土状況(東から)
 図版第33 (1)溝SD01断面(南から) (2)溝SD02(東から)
 図版第34 (1)溝SD02遺物出土状況(1) (2)溝SD02遺物出土状況(2)
 図版第35 (1)溝SD02 B 断面(北東から) (2)溝SD02 A 断面(東から)
 図版第36 (1)噴砂検出状況(SD02 B 南側) (2)噴砂・ピット検出状況
 図版第37 出土遺物 1 (土器)
 図版第38 出土遺物 2 (土器)
 図版第39 出土遺物 3 (土器)

図版第40 出土遺物4(土器)

図版第41 (1)出土遺物5(土錘) (2)出土遺物6(石器)

4. 長岡京跡右京第277・306次

(1) 長岡京跡右京第277次

図版第42 (1)調査地遠景(東南東から) (2)Aトレンチ全景(東から)

図版第43 (1)Bトレンチ全景(西から) (2)Cトレンチ全景(西から)

図版第44 (1)Dトレンチ全景(西から) (2)Eトレンチ全景(東から)

図版第45 出土遺物

(2) 長岡京跡右京第306次

図版第46 (1)Aトレンチ上層検出遺構全景(東から)

(2)Aトレンチ下層検出遺構全景(東から)

図版第47 (1)Aトレンチ西半下層検出遺構(西から)

(2)Aトレンチ東半検出遺構(東から)

図版第48 (1)Bトレンチ全景(東から) (2)Bトレンチ検出遺構(南から)

5. 長岡京跡左京第202次

図版第49 (1)調査前風景(北から) (2)トレンチ全体(南から)

図版第50 (1)北トレンチ全景(南から) (2)南トレンチ(南から)

図版第51 (1)溝SD20201出土状況(東から) (2)溝SD20201内側板出土状況

図版第52 (1)墨書土器 (2)土層断面

図版第53 各遺構検出状況

図版第54 出土遺物(1)

図版第55 出土遺物(2)

6. 山崎遺跡

図版第56 (1)調査前風景(南東から) (2)トレンチ全景(南から)

図版第57 (1)井戸Ⅰ・井戸Ⅱ(東から) (2)井戸Ⅰ

図版第58 (1)土坑SK07 (2)土坑SK03断面

7. 京奈バイパス関係遺跡(小田垣内遺跡)

図版第59 (1)調査前風景(北から) (2)城館北端部(北から)

図版第60 (1)調査風景(南から) (2)土壇状遺構SX01検出状況(南から)

図版第61 (1)Cブロック 石仏等検出状況(東南から)

(2)Cブロック 石仏検出状況(東南から)

図版第62 (1)石仏検出状況(東から) (2)SX04検出状況(南から)

(2)Cブロック 南端堀SD07土層断面(東から)

1. 丹後国営農地開発事業 (丹後東部・西部地区) 関係遺跡 昭和63年度発掘調査概要

はじめに

本概要報告は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)の開発事業に伴い、昭和63年度中に発掘調査を実施し終了した京都府中郡峰山町と竹野郡弥栄町にまたがるスクモ塚古墳群、竹野郡網野町大谷古墳状隆起、熊野郡久美浜町アバ田東1号墳、アサバラ遺跡、鳥取城跡の発掘調査概要である。

調査は、農林水産省近畿農政局丹後開拓事業所の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財

付表1 昭和63年度国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧

番号	遺跡名	所在地	調査期間	担当者
1	スクモ塚古墳群	京都府中郡峰山町 内記小字高山 京都府竹野郡弥栄町 吉沢小字荒木	昭和63年4月18日 ～昭和63年7月8日	調査第1係 辻本 和美 長 調査員 増田 孝彦 中川 和哉
2	大谷古墳状隆起	京都府竹野郡網野町 島津	昭和63年6月1日 ～昭和63年7月25日	調査第1係 辻本 和美 長 調査員 増田 孝彦 中川 和哉
3	アバ田東1号墳	京都府熊野郡久美浜町 新庄小字アバ田	昭和63年4月19日 ～昭和63年7月20日	調査第1係 辻本 和美 長 調査員 荒川 史 森島 康雄
4	アサバラ遺跡	京都府熊野郡久美浜町 新庄小字アサバラ	昭和63年5月26日 ～昭和63年7月25日	調査第1係 辻本 和美 長 調査員 荒川 史 森島 康雄
5	<small>とつとり</small> 鳥取城跡	京都府熊野郡久美浜町 浦明小字鳥取	昭和63年6月3日 ～昭和63年8月2日	調査第1係 辻本 和美 長 調査員 荒川 史 森島 康雄

調査研究センターが実施した。国営農地開発事業に伴う発掘調査は、当調査研究センターでは昭和60年度から開始し、付表2に示すように多大な^(注1)成果があがっている。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長辻本和美、同調査員増田孝彦、荒川 史、中川和哉、森島康雄があたった。

本概要報告の執筆は、「はじめに」を増田が、東部地区の「スクモ塚古墳群」を増田・中川が、「大谷古墳状隆起」は中川が主として担当した。西部地区の「アバ田東1号墳」・「アサバラ遺跡」は荒川が、「鳥取城跡」は森島が執筆した。

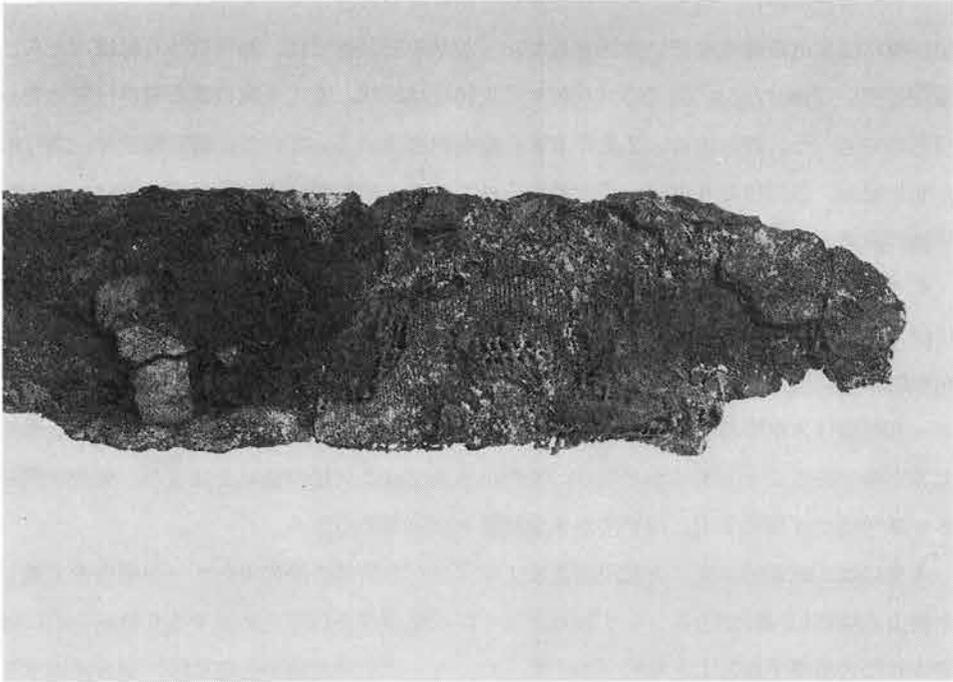
付表2 国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表

番号	遺 跡 名	所在地	調 査 期 間	概 要
1	有明古墳群・ 横穴群	大宮町三坂	昭和60年10月 ～昭和61年3月	古墳2基(4世紀後半～5世紀) 横穴3基(6世紀末～7世紀中葉)
2	桃山古墳群	峰山町内記	昭和60年11月 ～昭和61年3月	古墳2基(6世紀中葉)
3	宮の森古墳群	弥栄町鳥取	昭和61年4月 ～昭和61年7月	古墳4基(5世紀～6世紀中葉)
4	ゲンギョウの山 古墳群	弥栄町鳥取	昭和61年4月 ～昭和61年10月	古墳9基(4世紀後半・7世紀前半)
5	高山古墳群・ 高山遺跡	丹後町徳光	昭和61年7月 ～昭和62年9月	古墳6基(6世紀後半～7世紀前半) 中世～近世墓30基 竪穴式住居跡1(7世紀前半)
6	普甲古墳群 稲荷古墳群	弥栄町井辺	昭和62年6月 ～昭和62年12月	古墳11基(5世紀前半～6世紀前半)
7	新ヶ尾東古墳群	弥栄町吉沢	昭和62年10月 ～昭和63年1月	古墳3基(6世紀中葉・後半)
8	鳥取城跡	久美浜町浦明	昭和62年5月 ～昭和62年6月	城跡(柱穴・土坑)13世紀
9	アバ田古墳群	久美浜町新庄	昭和62年7月 ～昭和62年11月	古墳2基(6世紀末～7世紀前葉)

調査期間中、地元有志の方々や学生諸氏には、作業員および補助員・整理員として作業に従事していただいた^(注2)。また、調査にあたっては、峰山町教育委員会、弥栄町教育委員会、網野町教育委員会、久美浜町教育委員会をはじめとする関係諸機関の御協力を得ることができ、現地においても多くの方がたの御協力と御指導を賜った。あらためて感謝の意を表したい。

なお、調査に係る経費は、全額農林水産省近畿農政局が負担した。

(増田 孝彦)



スクモ塚34号墳出土の布付鉄剣(部分)

(1) スクモ塚古墳群

1. 位置と環境

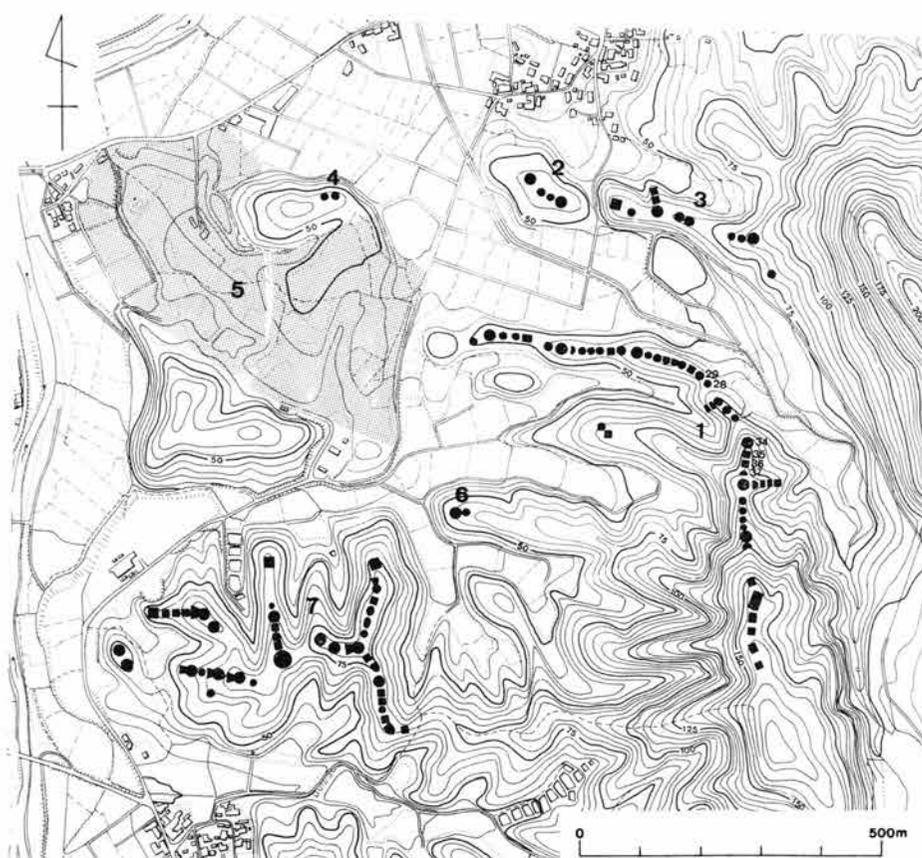
スクモ塚古墳群は、京都府竹野郡弥栄町吉沢小字荒木、中郡峰山町内記小字高山の町境の丘陵上に所在する。ここは、丹後半島最大の河川である竹野川により形成された中郡盆地と竹野郡盆地の狭隘部の東側にあたる。この付近は、標高185mの高山より樹枝状に派生した多くの支丘陵から構成され、その支丘陵上には、スクモ塚古墳群、桃山古墳群、名木山古墳群等多くの古墳が営まれている。京都府教育委員会が「国営農地開発事業」に伴い実施された分布調査結果によると、スクモ塚古墳群は、標高50～160mの丘陵上に横穴式石室墳を含む木棺直葬墳や台状墓状を呈するものが約30基確認されている。

スクモ塚古墳群は、過去2回にわたり京都府教育委員会によって発掘調査が行われた。昭和62年度に道路建設に伴い実施された28・29号墳の調査では、28号墳は石材はほとんど残存していなかったが、次に述べる新ヶ尾東10号墳同様、竪穴系横口式石室の可能性をもつものであった。29号墳は、2基の木棺直葬を内部主体としていた。築造時期は、28号墳が6世紀末、29号墳が6世紀中頃と考えられている^(注3)。昭和60年度の発掘調査では、28・29号墳の南東方向の丘陵上で6世紀代の築造と考えられている2基の古墳も確認された^(注4)。

スクモ塚古墳群周辺の遺跡をみると、入山川を挟んだ北岸の丘陵上には、新ヶ尾古墳群(4基)、新ヶ尾東古墳群(11基)がある。このうち新ヶ尾東8・9・10号墳については、昭和62年度に当調査研究センターが道路建設に先だち調査を行った。いずれも円墳であり、8・9号墳は木棺直葬を内部主体とし、10号墳は竪穴系横口式石室を内部主体とする特異な石室墳であることが明らかとなり^(注5)、竹野川水系では2例目の発見となった^(注6)。築造時期も8・9号墳が6世紀中頃、10号墳が6世紀後半頃と考えられる。

南側には、昭和60年度に内記団地造成工事に先だち当調査研究センターが調査を実施した桃山古墳群(2基)がある。いずれも円墳で、木棺直葬を内部主体とする6世紀中頃に築造された古墳群であることが明らかとなった^(注7)。さらにその南側の丘陵には、前方後円墳を含む円墳、台状墓状を呈するものからなる名木山古墳群(40基)がある。一部、昭和62年度に京都府教育委員会により調査が行われたが、古墳としては認められていない^(注8)。

一方、西側の台地上にある下上野遺跡は、スクモ塚古墳群と一対をなす大規模な集落跡と考えられていたが、昭和62年度に京都府教育委員会が実施した調査結果からすると、古墳時代～鎌倉時代の遺物は出土しているが、顕著な遺構は検出されなかった^(注9)。また、同じく下上野遺跡が立地する台地の北端に存在する上野古墳群(2基)も、昭和63年度に京都府



第1図 調査地周辺古墳分布図

1. スクモ塚古墳群 2. 新ヶ尾古墳群 3. 新ヶ尾東古墳群 4. 上野古墳群
5. 下上野遺跡 6. 桃山古墳群 7. 名木山古墳群

教育委員会により発掘調査が行われた。その結果、いずれも円墳で古墳周囲に溝を「C」字状に巡らし、木棺直葬を内部主体とする古墳であることが明らかとなった。さらにこの2基の古墳の周辺にも溝を「□」字状に設け方形に区画した内側に、木棺を安置するものも1基確認された。築造時期については、1・2号墳が6世紀前半頃、方形に区画したものについては、5世紀後半頃と考えられている。^(注11)

このように、調査地周辺は遺跡が密集する地域であり、調査成果も数多くあがっている。スクモ塚古墳群の調査成果によると、墳丘の築造方法、木棺直葬墓で複数の主体部を有するという共通性が認められ、家族単位の集団墓的性格を帯びるものと思われる。スクモ塚古墳群および当地域の古墳文化を考えていく上で貴重な資料を提供し得たものといえよう。

(増田 孝彦)

2. 調査経過

スクモ塚古墳群は、前述したように京都府教育委員会の分布調査では、約30基が確認されていたが、調査に伴い周辺の分布調査を再度行ったところ、台状墓状をなすものや、木棺直葬墳、石室墳約48基以上から構成される古墳群であることが明らかとなった。古墳の増加に伴い、古墳名称を整理する必要性が生じてきたが、すでに調査を行ったものについては番号が付してあるので、最終番号となるスクモ塚29号墳から順に番号を付し、34・35号墳の2基が今回の調査対象となった。

調査は、内記団地に伴う貯水槽建設工事に先だち行ったものである。

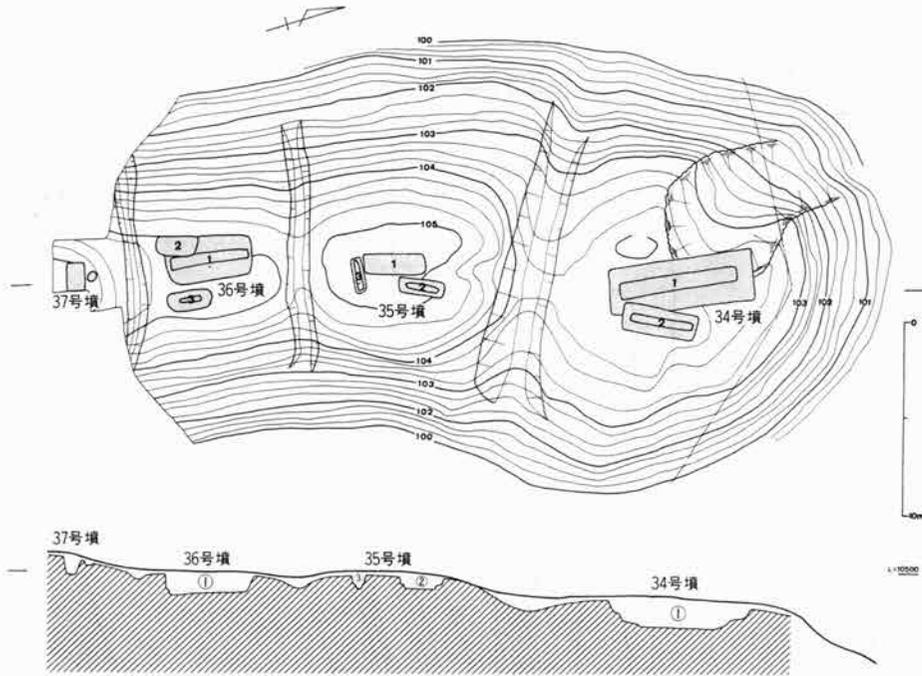
現地調査は、樹木伐採より開始し、伐採の終了した昭和63年4月20日より22日まで地形測量(50分の1、25cm等高線)を行った。掘削作業は、4月19日より開始した。その結果、35号墳の南側の掘削を行ったところ、もう1基古墳が存在し、この古墳の南溝は尾根高位側に曲っていくことや、溝内流入土中に土器片が含まれていることから、さらにもう1基古墳が存在することが明らかとなった。そのため、拡張し調査する必要性が生じたが、最南端に位置するものは、造成予定地境界のため古墳全体を掘削することはできなかった。このことは、34号墳も同様で墳丘の約1/4は造成予定地外となるため調査が実施できなかった。新たに2基の古墳を確認したことにより、4基の古墳が調査対象となり、古墳番号も35号墳に続き南へ順に36・37号墳とした。調査対象古墳が増加したことや、墳丘およびその周辺も含めて掘削を行ったため、掘削面積は900㎡にも及んだ。

調査の結果、古墳は地山の削り出し成形と溝による区画、小規模な盛土により築造されたことが判明した。埋葬施設は、いずれも木棺直葬と思われるが、1例壺棺があり、1古墳複数埋葬で埋葬施設総数は10基を検出した。実測作業、写真撮影はその都度行い、昭和63年7月8日にはすべての発掘器材を撤収し調査を終了した。なお、現地説明会は、昭和63年6月17日に行った。

(増田 孝彦)

3. 調査概要

①スクモ塚34号墳(第2・3図) 34号墳は、当古墳群の分布する尾根の傾斜がゆるくなる傾斜変換点に位置し、標高は約104mを測る。墳形は直径約14.0mの円墳で、35号墳とは、34号墳自身に若干回り込む溝によって区画されている。墳丘は、地山である花崗岩を削り、部分的に盛土を施すことによって墳形が整えられている。なお、尾根部は山道によって削られ、溝部は土橋状に埋められていた。



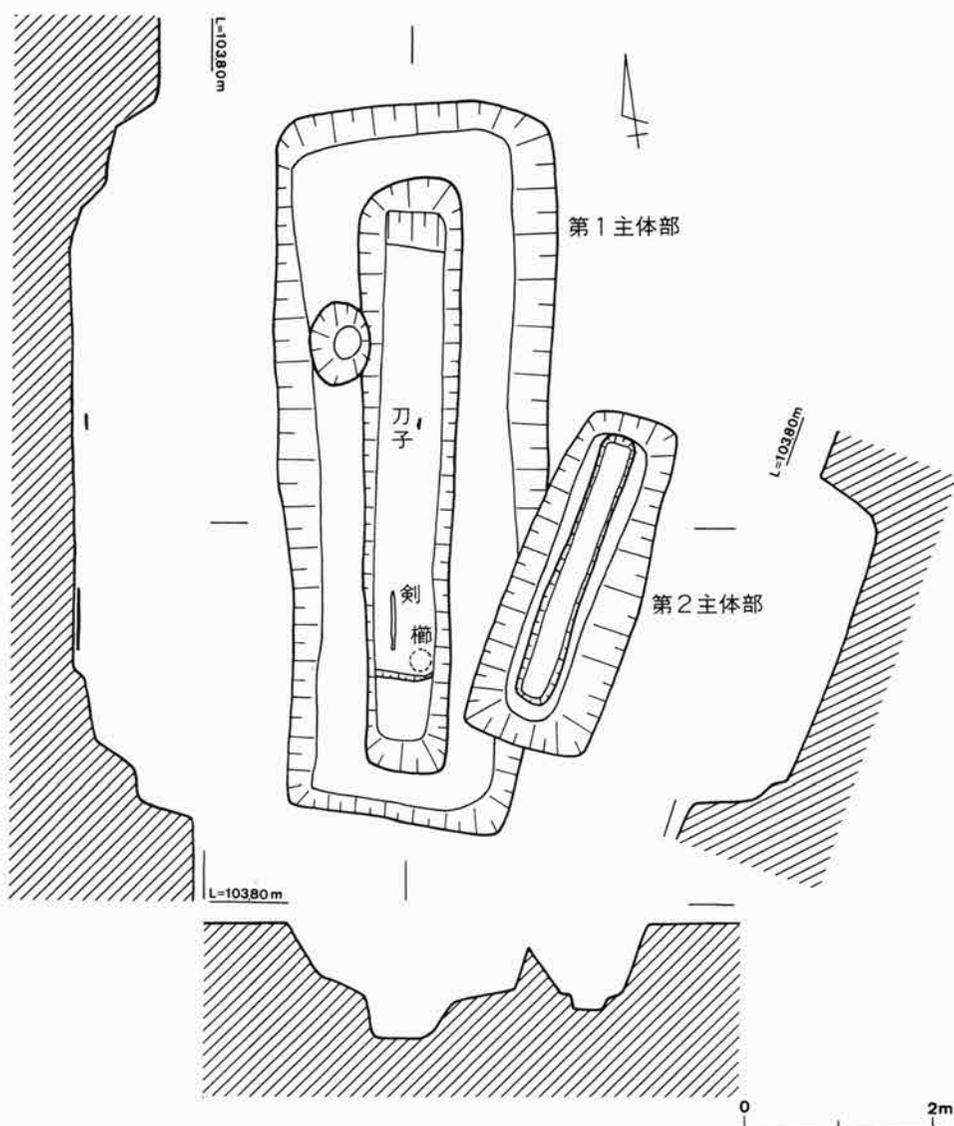
第2図 地形図

埋葬施設は、墳頂部中央の平坦部に重複した状態で、ほぼ尾根に平行する大小2か所の主体部を検出した。

第1主体部(第3図) 墳頂部中央よりで検出した。墓壇の平面形は隅丸方形を呈し、地山である花崗岩を二段に掘り込んでいる。しかし、二段目底部の南端には、もう一段浅い段差が認められる。長辺7.2m・短辺2.2m、検出面からの深さ1.3mを測る。墓壇一段目の西側には直径約0.8m・深さ0.6mの土坑が1か所あり、内部には木炭が多く含まれていた。第1主体部の検出面では認められなかったため、第1主体部と同時かそれ以前に掘られたと考えられる。木棺等の痕跡は認められなかった。

出土遺物は、すべて二段目底部より出土した。内訳は、鉄器2点(鉄剣、刀子)、竪櫛8点である。鉄剣は先端部を北に向けている。刀子は先端を南に向けて出土した。竪櫛は、墓壇底部の南端からまとめて出土した。鉄剣の出土位置や切先の方向、竪櫛の出土位置から考えると、被葬者は南に頭を向けて埋葬されたと想定できる。

第2主体部(第3図) 第1主体部の東方に位置しており、南西部が第1主体部と重複している。墓壇は平面形が隅丸方形を呈するよう、花崗岩の地山を二段に掘り込んでいる。長辺3.5m・短辺1.3m、検出面からの深さ0.9mを測る。木棺等の痕跡及び遺物は認められなかった。第2主体部の掘形が第1主体部の掘形を切っているため、第1主体部が第2



第3図 34号墳主体部

主体部に先行すると考えられる。

②35号墳(第2図) 34号墳の南隣りに位置し、34号墳とは若干の比高差が見られる。墳形は尾根に直交する溝と地山を削ることによって方形に整えられている。墳丘規模は約12m四方である。墳丘は山道によって北部中央が削られている。

埋葬施設は墳丘の中央部に尾根に平行する2基の埋葬主体、これらの南側に尾根に直交する1基の埋葬主体を検出した。

第1主体部(第4図) 墓壙の平面形は、隅丸長方形を呈し、断面逆台形に地山を掘り込

んでいる。長辺3.2m・短辺0.8m，検出面からの深さ0.7mを測る。木棺の痕跡等は確認できなかった。

出土遺物としては，検出面の墓壇北端より土師器片が出土した。破片のため全体像は不明であるが，外面にハケ調整が施された甕と考えられる。山道のため，大半の破片が失われたものと考えられる。

第2主体部(第5図) 尾根に平行し，第1主体部東隣りに位置する。墓壇の平面形は隅丸長方形を呈し，地山である花崗岩を二段に掘り込んでいる。長辺2.6m・短辺0.7m，検出面からの深さ0.6mを測る。木棺等の痕跡及び遺物は認め得なかった。

第3主体部(第6図) 尾根に直交し，第1・第2主体部の南に位置する。墓壇の平面形は隅丸長方形を呈し，地山の花崗岩を二段に掘り込んでいる。長辺1.9m・短辺0.7m，検出面からの深さ0.9mを測る。木棺の痕跡及び遺物は認められなかった。

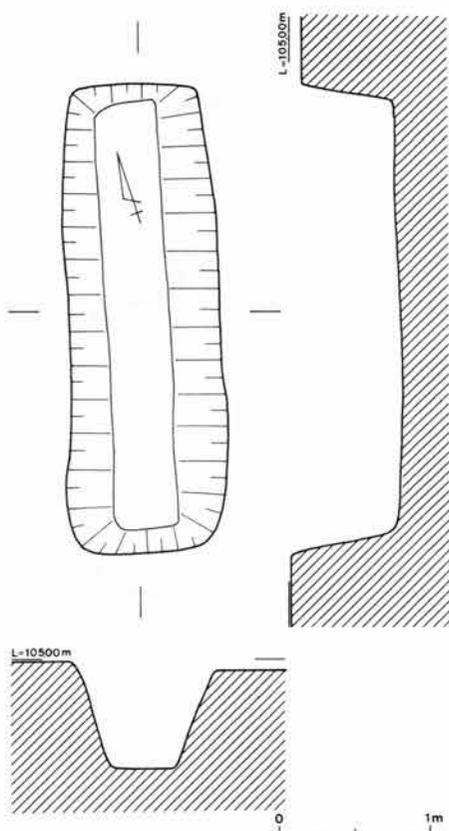
③36号墳(第2図) 35号墳の南に位置し，35号墳との比高差はほとんど見られない。墳形は尾根に直交する2本の溝によって区画され，地山を削って長方形を呈している。長辺10.0m・短辺8.5mを測る。

南側の溝肩より，土師器の直口壺が正位置のまま完形で出土し，壺の底部は地山に接していた。

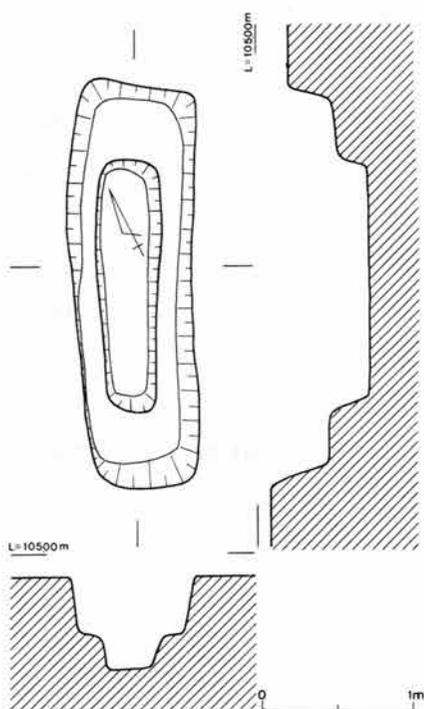
埋葬主体は，墳丘平坦面から3基検出できた。それぞれ尾根にはほぼ平行している。主体部のうち，2つは重複している。

第1主体部(第7図) 墳丘の中心からやや西よりに位置しており，墓壇の平面形は隅丸長方形を呈し，地山を二段に掘り込んでいる。長辺4.5m・短辺2.0m，検出面からの深さ0.9mを測る。木棺相当部の土層及び遺物は確認し得なかった。

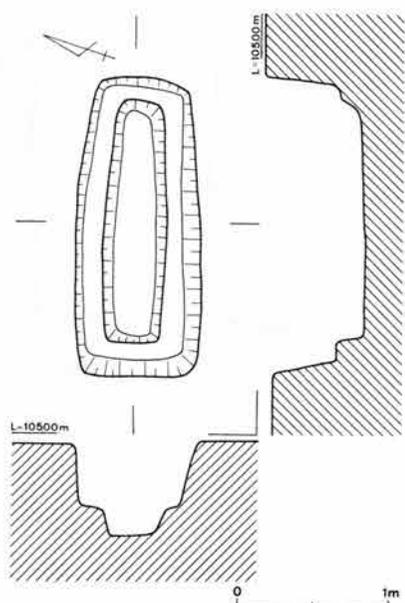
第2主体部(第7図) 第1主体部の南西部と大部分が重複している。墓壇の平面形は隅丸長方形を呈しており，墓壇の南側は二段に地山が掘り込まれている。墓壇底部には，墓壇の長軸に直交する溝状の掘り込みが2本みられる。長辺1.9m・短辺0.8m，



第4図 35号墳第1主体部



第5図 35号墳第2主体部



第6図 35号墳第3主体部

検出面からの深さ0.7mを測る。

木棺に相当する土層は確認し得なかったが、底部の溝が小口板あるいは、仕切り板を固定するための施設と考えられることから、組合式の箱形木棺が埋納されていたと想定できる。

第2主体部の掘形が、第1主体部の掘形を切っていることから、第1主体部が第2主体部に先行すると考えられる。

第3主体部(第8図) 第1主体部の東隣りに位置する。墓壇の平面形は隅丸長方形で、地山の花崗岩を二段に掘り込んでいる。二段目は非常に浅く皿状にくぼんでいる。長辺2.2m・短辺1.0m、検出面からの深さ0.4mを測る。木棺に相当する土層及び遺物は確認できなかった。

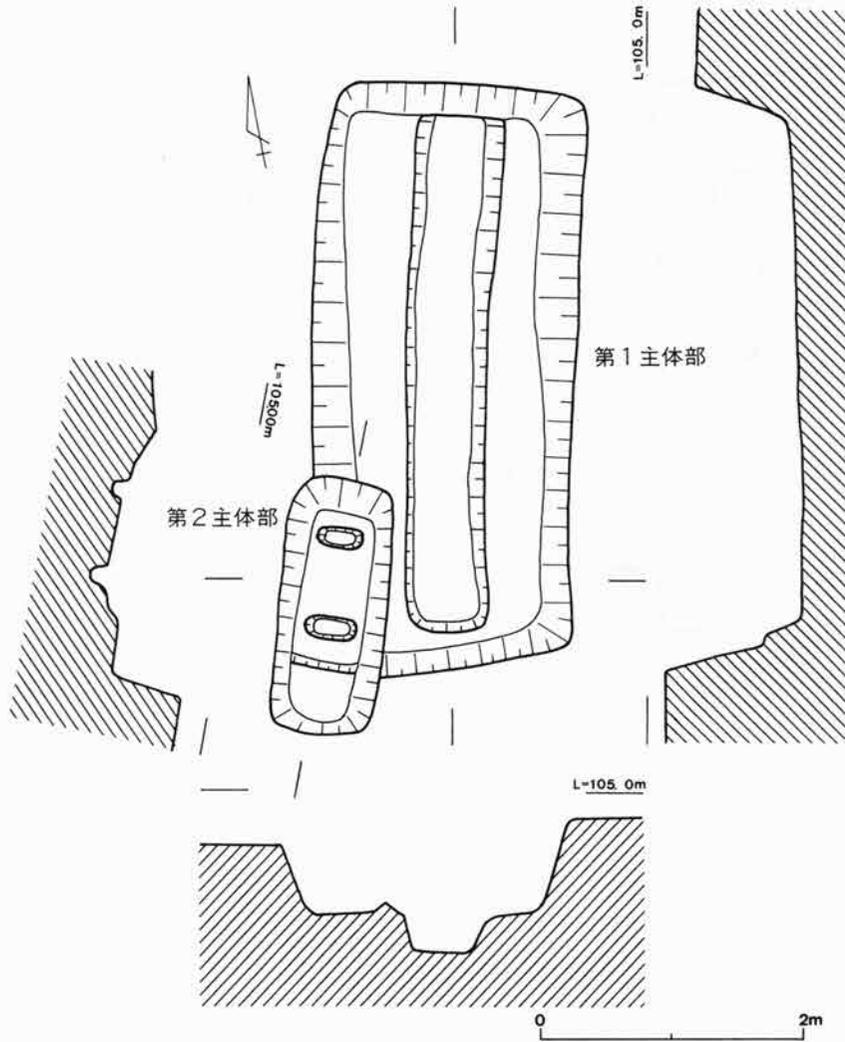
④37号墳(第2図) 35号・36号墳がある尾根の傾斜のゆるい部分が急に変わるところに位置している。北側は36号墳と溝によって区画されているが、東側は発掘対象地外のため溝の有無は不明である。

埋葬施設は、北側溝近くに土器棺と、その南に尾根に直交する埋葬主体部を検出した。

土器棺(第9図) 土器棺は、円形の墓壇の中に埋納されている。墓壇の直径は約0.6m、検出面からの深さは0.2mを測る。

主容器となる壺は、横位の状態で埋納され、壺の口縁部は、ほぼ東に向けられていた。他の個体の土師器の底部が蓋として転用されていた。

主体部(第10図) 主体部はその東半分が発掘対象地外であるため明確ではないが、平面



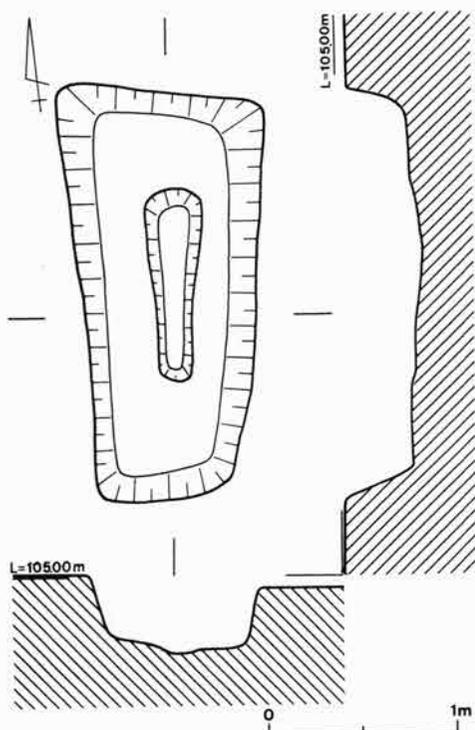
第7図 36号墳第1・第2主体部

形が隅丸長方形を呈するように地山を掘り込んでいると思われる。断面形は逆台形を呈している。現在確認長2.0m・短辺1.3m、検出面からの深さ0.5mである。

4. 出土遺物

土師器(第11図) 土師器は、埋葬主体、溝から出土した。これらは埋葬時期を特定できる数少ない資料である。

1は、36号墳の南溝肩から正位置の状態で作形のまま出土した直口壺である。体部は、いびつではあるが、縦に長い楕円形を呈しており、にぶく屈曲する頸部から口縁部が直線



第8図 36号墳第3主体部

的に外上方へのびている。外面はナデ調整が用いられている。内面は胴部から頸部にかけては、接合痕が見られる。底部には指頭圧痕が見られる。その上方からはナデが施され、肩部の内面には、ケズリによる調整が認められる。外面には黒斑が認められる。

2は、37号墳の土器棺の蓋として用いられていた土師器の底部である。外面の調整は、表面の風化のため不明確であるが、内面にはハケによる調整が認められる。内面に、黒色に変化した部分が認められることから、日常生活で用いられて破損した後に、底部のみが3の土師器壺の蓋として用いられたことが想定できる。

3は、37号墳土器棺の主容器として用いられていた、二重口縁を有する大形の壺である。倒卵形の体部を持ち、頸部は、短く屈曲し稜をなして口縁部に至る。口縁部は、直線的に垂直に上方へのび、端部には稜が認められる。外面の口縁部はナデ、頸部より下はハケの調整が施されている。内面は肩部にケズリ、それ以下にはハケ調整が認められる。

鉄器(第12図) いずれも34号墳第1主体部底部から出土したもので、剣と刀子がある。

1は剣で、切先を北に向けた状態で出土した。切先付近には、布が付着していた。付着していた布には、太い糸を用いた荒い目の布と、細い糸を用いた目の細かい布の2種類がある。それぞれ重なるように付着している。茎には、木質が残存しているが、茎の末端は多少欠損している。現存長57.3cm・最大幅3.5cm・最大厚0.6cmを測る。

2は、刀子で切先を南に向けて、刃部を西に向けた状態で出土した。切先部分は欠損しているが、茎部には木質が残存している。現存長11.0cm・最大幅1.5cm・茎の長さ2.8cm・最大厚0.3cmを測る。

壺(第13図) 確実に認識できる壺の個体数は8個体であるが、他に破片が存在する。しかし、1個体となるかは不明である。いずれも歯の部分は腐朽し残存しておらず、全面に漆の塗付されたムネの部分だけは、漆の膜が残存している。ムネの部分の長幅は非常に

よくそろっており、長さ1.5cm、幅1.8cm程に一定の規格性を持って作られていることがわかる。

丹後地域において、堅櫛が出土した例としては、加悦町小虫古墳群から18点^(注12)、丹後町産土山古墳から2点^(注13)、大宮町有明3号墳から3点^(注14)、弥栄町稲荷6号墳から2点^(注15)出土している。これらの出土例の中には、当古墳出土の小形の堅櫛以外に大形のもの、角状突起を持つものなどが含まれている。

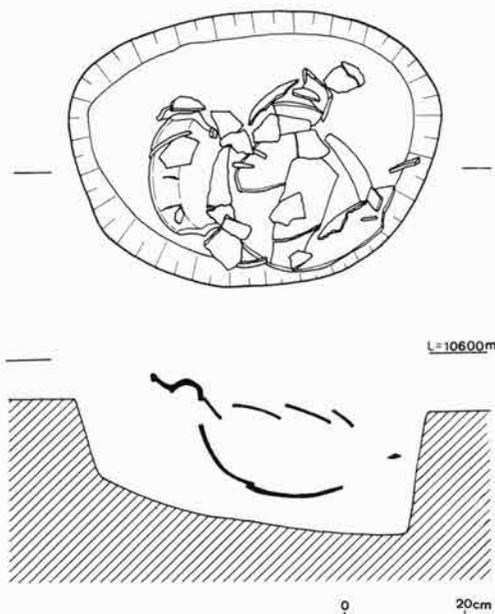
5. ま と め

スクモ塚古墳群の今回の調査では、4基の古墳が調査されたが、どの古墳も盛土をほとんど持たず、地山整形を行うもので、日本海側の弥生時代から続く台状墓の系統をひく古墳である。

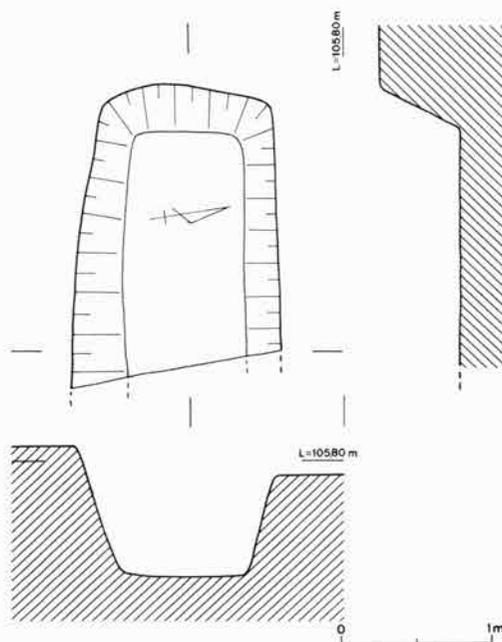
古墳築造の時期としては、丹後地域における土師器編年が確立していない現在では、位置付けは不明確であるが、周辺地域と比べると、37号墳出土の二重口縁壺は、4世紀末から5世紀の所産と考えられる。

古墳の築造順位は、34号墳と35号墳を区切る溝が、円墳である34号墳に回り込むように存在していることから、35号墳が34号墳に先行するものと考えられる。また、堅櫛は5世紀に盛行し^(注16)、6世紀後半に見られなくなるため、34号墳の築造は、それ以前と考えられる。

スクモ塚古墳群は、京都府教育委員



第9図 37号墳土器棺墓

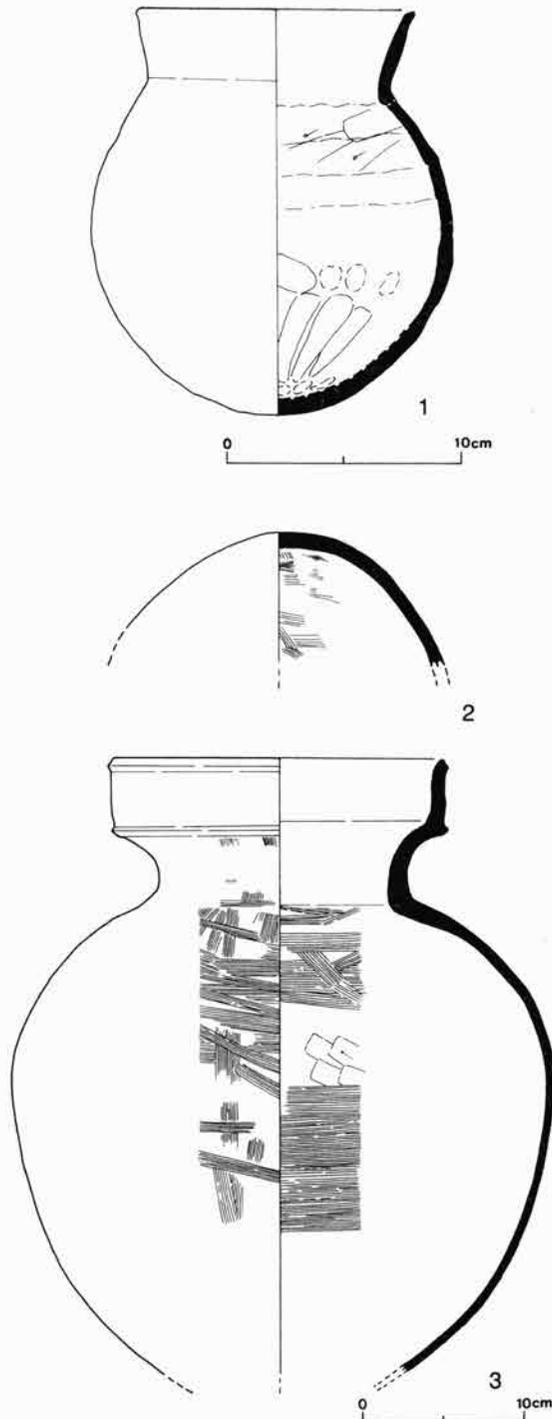


第10図 37号墳主体部

会によって昭和60年^(注17)、昭和62年^(注18)の2度にわたって調査された。昭和62年度の調査では今回調査した古墳と同じ尾根上に位置するスクモ塚28・29号墳が調査された。28号墳は、横穴式石室を埋葬主体としており、築造時期は出土遺物より6世紀末と考えられる。29号墳からは、2つの主体部が検出された。出土須恵器から、第1主体部は6世紀中頃、第2主体部は6世紀前半と考えられることから、古墳の築造時期は6世紀前半と思われる。

28・29号墳は、今回調査した34・35・36・37号墳とは同じ尾根上になっており、34・35・36・37号墳がほぼ5世紀代の古墳と考えられることから、大きくとらえると、同一尾根上においては、高所から古墳を作ることが、スクモ塚古墳群では認められた。

一方、埋葬主体部の方に目を転ずると、今回の4基の調査によって、11か所の埋葬主体部を検出した。その内1か所は土器棺を用いたもので、他の主体部は、平面形が隅丸長方形を呈する墓壇である。平面形が隅丸長方形を呈する土壇の中にも3つの形態が見られる。



第11図 出土遺物実測図(1)

① 2段に墓壙が掘られているもの。34号墳第1・第2主体部, 35号墳第2・第3主体部, 36号墳第1・第3主体部がこれにあたる。

② 墓壙の横断面が逆台形を呈するもの。35号墳の第1主体部, 37号墳の主体部がこれにあたる。

③ 墓壙の底部に長軸に直交するよう, 2本の平行な溝が認められるもの。36号墳第2主体部がこれにあたる。

このように一連の古墳において, 埋葬主体に違いが認められる。35号墳では, 1つの墳丘上に2段墓壙の主体部と断面が台形を呈する主体部が共存している。34号・36号墳の主体部の内, 古いと考えられる主体部は大形であり, 他の主体部と重複しているにもかかわらず, 35号墳では同規模の主体部が切り合うことなくつくられている。このことから, 35号墳の3つの主体部は極めて近い時期につくられたものと想定できるが, 墓壙の形態には差が見られる。

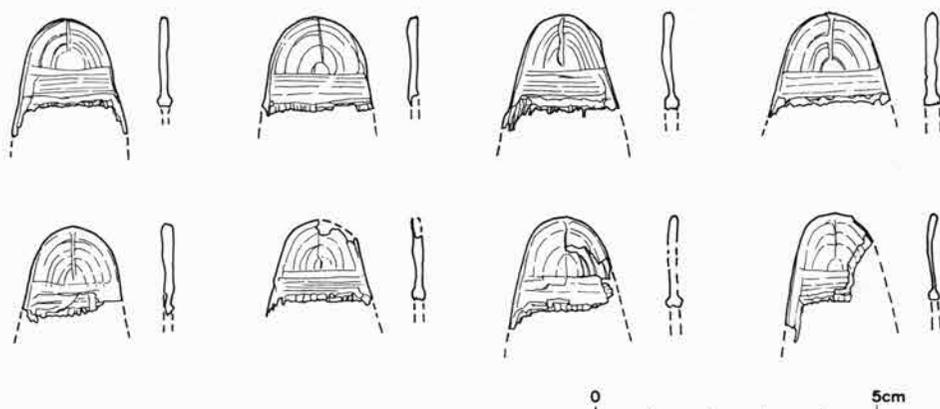
また, 34号墳第1主体部, 36号墳第1主体部の規模は他の主体部に比べ, 著しく大きい, それぞれの主体部のある墳丘自身は35号墳とは大きな差が存在しない。

このように, 墓壙の形態差及び, 墓壙と墳丘規模の関係には, 当該期の社会的な状況及び思想が, 変容を受けて物に反映していると考えられるが, 現象としての遺構・遺物の違いから変容された文化を解釈するにはまだ資料の蓄積が必要である。

土器棺について言えば, 国営農地開発に関する調査では, 弥栄町ゲンギョウの山古墳群の1号・2号土器棺, 同町上野古墳群土器棺があげられる。^(注19)ゲンギョウの山古墳群の土器棺は, スクモ塚37号墳のものと同じく二重の口縁を持つ土師器を主容器としたものである。ゲンギョウの山古墳群1号土器棺においては, 土師器の壺の頸部が蓋として用いられている。2号土器棺では, 土師器の胴部が蓋として用いられている。スクモ塚37号墳土器棺においても破損品が用いられていることから, 蓋には主容器ほどの注意は払われなかったものと



第12図 出土遺物実測図(2)



第13図 出土遺物実測図(3)

考えられる。違いとしては、ゲンギョウの山古墳群の土器棺が斜面に埋納されたのに対して、スクモ塚では墳頂部に埋納されていたことがあげられる。上野古墳群の土器棺は、時期の下るもので、甕を2つ連ねたものである。前述の土器棺とは、主容器や埋納の方法に違いが見られる。

以上のように、様々な様相が今回の発掘によって明らかになったが、遺物量が少ないため解釈による可能性の提示をしたのみにとどまった。しかしながら、今回の5世紀代の古墳の調査は、弥生時代から連綿と続く在地系の古墳と、網野銚子山古墳^(注20)、丹後町神明山古墳^(注21)といった日本海側最大級の前方後円墳との丹後地域におけるあり方を考える時、貴重な資料たり得ると考えられる。

(中川 和哉)

(2) 大谷古墳状隆起

1. 位置と環境

大谷古墳状隆起は、京都府竹野郡網野町大字島津小字大谷に所在する。網野町は、丹後半島に位置し日本海に面している。西は久美浜町、南は峰山町、弥栄町、東は丹後町に接している。町内中央には福田川が北流し、河口部に平野が広がっている。当古墳状隆起の位置する島津地区は弥栄町と接している。

網野町で最も古い遺跡は、縄文時代早期の宮の下遺跡である。特筆すべき遺跡としては日本海側最大の前方後円墳である網野銚子山古墳がある。本古墳状隆起と近接する古墳としては、埴輪や鉄製武具が出土した弥栄町ニゴレ古墳、同町遠所古墳群・宮の森古墳群・ゲンギョウの山古墳群があり、古墳の多くみられる地域である。

2. 調査経過

大谷古墳状隆起は、『網野町の遺跡』^(注22)によると、大谷城D地区と命名されており、5段の平坦面の存在が示されている。今回の調査では丹後に多い階段状の古墳とも考えられたので大谷古墳状隆起とした。遺跡の有無の確認のため、階段状を示す尾根上に幅1.5m・長さ55mの試掘トレンチを設定した。また、尾根頂部の平坦面に2m四方のトレンチを設定した。発掘調査の結果、表土下はすべて花崗岩の地山で、遺構・遺物は検出できなかった。調査面積は約75m²、昭和63年6月1日から同年7月25日まで調査に費した。

3. まとめ

階段状に見られた地形はいわゆる日本海側に見られる階段状の古墳や山城ではなく、丹後大震災等の地震による地形変化や近接する竹林の土入れによるものと考えられる。

(中川 和哉)



第14図 調査地位位置図(1/50,000)

(3) アバ田東1号墳

1. 位置と環境(第15図)

久美浜町は京都府の西北端に位置し、北は日本海に面し、それぞれ標高600m級の山を境として、東は竹野郡網野町・中郡峰山町、南に兵庫県出石郡出石町、西に同県豊岡市と接している。町内には東より佐濃谷川・川上谷川・久美谷川が山間部を縦断し、それぞれの開析・沖積作用により平野部を形成する。本調査地は、その内もっとも広い開析谷をもつ川上谷川の中流に合流する崩谷川によって開析された谷の奥に位置し、双龍環頭大刀出土で著名な湯舟坂2号墳の所在する伯耆谷の一つ北の谷になる。以下、川上谷川流域を中心として、本調査地を取り巻く歴史的環境について簡単に述べてみたい。

川上谷において縄文時代以前の遺跡は、上流域の畑において押型文土器の口縁が一点表採されたのみである^(注23)。町内においても有茎尖頭器(出土地不明)が久美浜高校に伝わるほか^(注24)、海岸部の函石浜・浦明遺跡で少量の土器片が採取されている。また、田村小学校には大井開拓地遺跡出土とされる縄文時代後期の土器片が多数所蔵されている^(注25)。

弥生時代に入ると丘陵縁辺部の台地上に集落が営まれる。川上谷では海士・橋爪・芦原・須田与一谷遺跡等が知られている。なかでも橋爪遺跡は昭和42年からの4次にわたる発掘調査により、弥生時代中期より古墳時代中期にいたる集落跡であったことが確認され、この地域における拠点集落であったことが推察される^(注26)。

古墳時代の川上谷には、前・中期のものとしては本調査地の対岸に島茶臼山古墳(2)・更

に600m程上流の低丘陵地には芦高神社古墳(3)が造営される。これらの古墳は、未調査のためその内容は明らかではないが、町内の前方後円墳は下流の岩ヶ鼻古墳をあわせて3基しか確認されておらず、川上谷川中・下流域に当時の地域の首長勢力の存在を想像することができる。また東方400mの谷の出口には、方墳である権現山古墳(4)がある。しかし先にあげた前方後円墳に対して、墳形、副葬品などの点で著しく異なっており、特にその四隅突出墓の可能性をも指摘される墳形は、隣接する但馬・山陰



第15図 調査地位置図(1/50,000)

地方との関連を想像させるものである。

後期古墳としては先にあげた湯舟坂2号墳^(注28)がまず注目される。その副葬品の量・質より、かなりの勢力を持った者の墓と思われる。またこの伯耆谷には、平野古墳など後期を中心とする総数130基余りの古墳がある。島茶臼山古墳・岩ヶ鼻古墳周辺の後期古墳の分布状況などから考えると、政治的中心が、川上谷川中・下流域より伯耆谷周辺に移ったことが推察できる。

奈良時代以降の遺跡については、ほとんど調査された例がなく、内容については不明な点が多い。ただ伯耆谷では、須恵器円面硯・転用硯・土師器カマドの出土が知られており、熊野郡衙の存在を指摘する意見がある。

以上、簡単であるが川上谷川を中心とする歴史的環境についてまとめてみた。その中で注目されることのひとつとして、古墳時代の川上谷川中・下流域の勢力と川上谷川上流域のそれとの関係があげられる。当調査地はその境界線に位置し、その勢力の推移の過程を考える上で重要である。

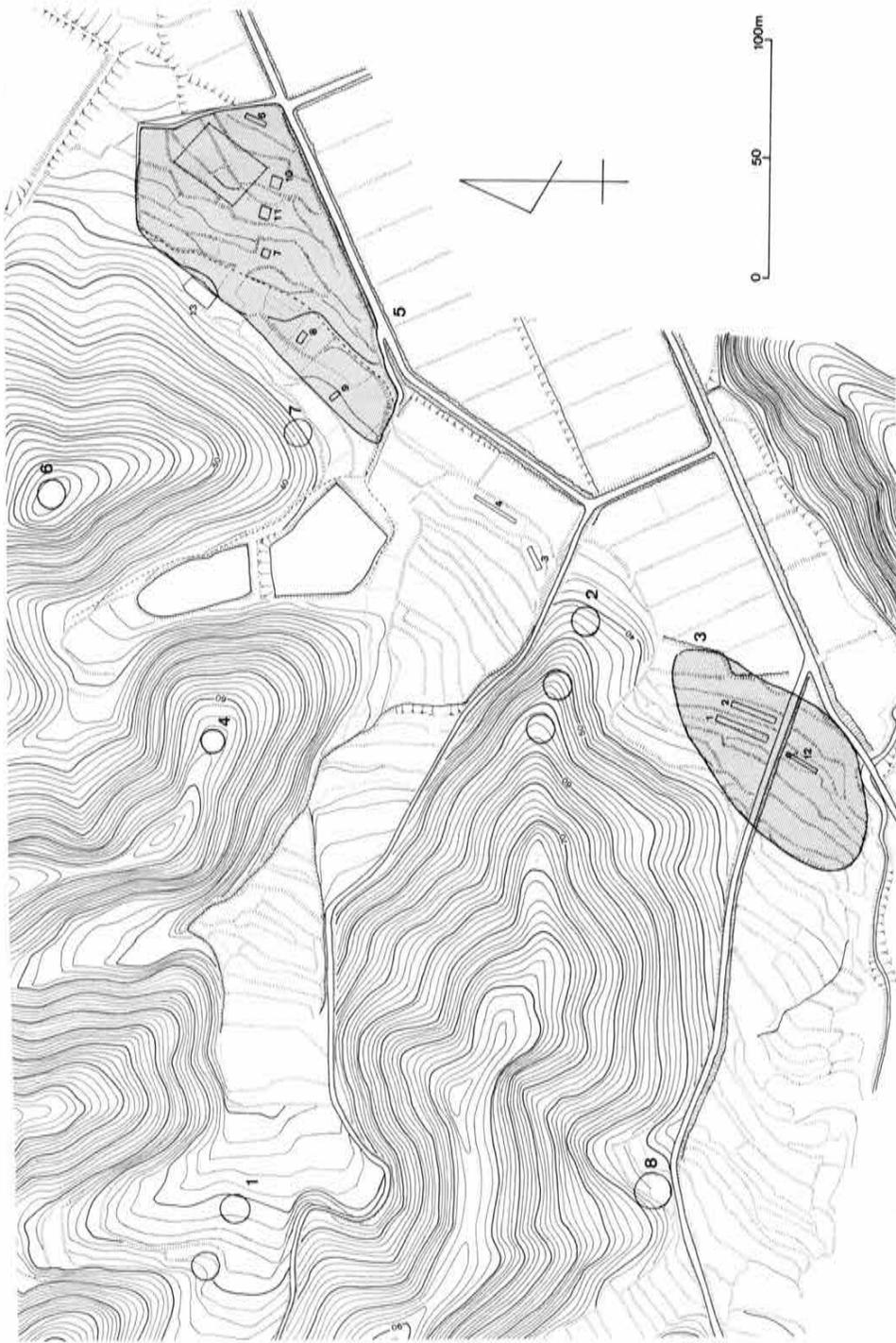
(東 高志・荒川 史)

2. 調査経過

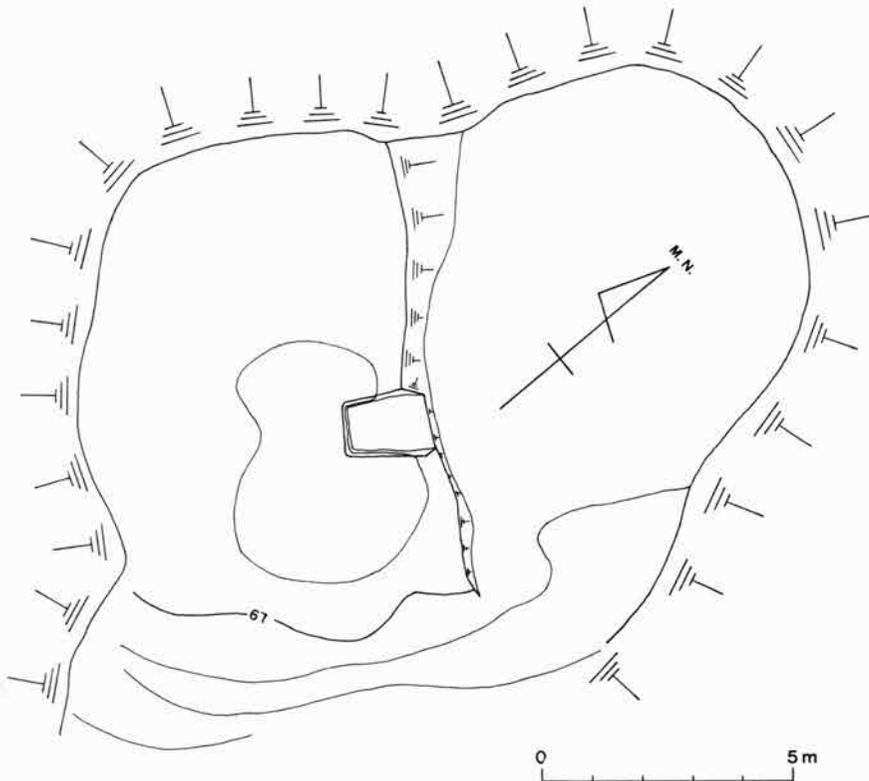
アバ田東1号墳は、昭和62年度のアバ田古墳群の調査の際の分布調査で発見された。この段階では尾根筋に直交する溝が確認できたのみであり、古墳ではない可能性も考えられた。このため、62年度中に確認調査を行ったところ、須恵器の甕と提瓶を検出した。そこ

付表3 新庄1団地内遺跡一覧表

番号	遺跡名称	種別	遺跡の概要	備考
1	アバ田古墳群	古墳	横穴式石室2基(古墳時代後期)	昭和62年度当調査研究センター調査
2	崩谷古墳群	古墳	横穴式石室2基・木棺直葬墳1基(古墳時代後期)	昭和62・63年度京都府教育委員会調査
3	クズレ谷遺跡	散布地	ピット, 須恵器(杯・甕・円面硯) 土師器(碗・甕)(古墳時代～鎌倉時代)	本概要
4	アバ田東1号墳	古墳	円墳, 須恵器(杯)(古墳時代後期)	〃
5	アサバラ遺跡	散布地	竪穴式住居跡・土坑・溝 土師器・須恵器(古墳時代～)	〃
6	アバ田東2号墳	古墳	円墳か	
7	アバ田東3号墳	古墳	横穴式石室(古墳時代後期)	本概要
8	崩谷4号墳	古墳	横穴式石室(古墳時代後期)	昭和63年度京都府教育委員会調査



第16図 新庄1団地内遺跡分布図



第17図 アバ田東1号墳丘測量図

で昭和63年度に本調査を行うこととなった。

新庄1団地の造成工事は62年度末から開始されており、アバ田東1号墳が存在する丘陵も工事が行われ、立木を排除していたが、埋葬施設は残存している可能性が考えられた。

そこで4月18日から調査を開始し、埋葬施設の確認を行った。しかし、埋葬施設及び周溝は遺存せず、古墳の内容を知ることはできなかった。

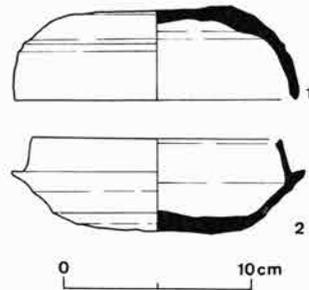
5月11日にすべての掘削作業を終了し、5月17日に関係者説明会を開いて調査を終了した。

3. 遺跡の概要

前述のように、この調査では古墳の概要を知ることはできなかった。また62年度では4m×4mのトレンチを設定して調査を行ったが、古墳かどうかの確認が主目的であったため、遺物を検出した段階で調査を終了し、埋めもどしを行っている。そのため、古墳の規模・埋葬施設の規模及び内容は不明である。旧状から推測すると、直径約10mの円墳で、

埋葬施設は木棺直葬であったと考えられる。

遺物(第18図)は、攪乱土の中から須恵器の杯身・杯蓋、土師器片が出土している。杯身・杯蓋はほぼ完形で、セットになると思われる。蓋の肩部の稜は退化し、沈線を巡らすことによって稜としている。身の口縁端部にはわずかに段を有する。これらの特徴から陶邑編年のTK10型式に併行する時期のものと思われる。



第18図 アバ田東1号墳遺物実測図

4. ま と め

今回の調査では古墳の詳細な内容は知り得なかったが、6世紀中ごろに築造された木棺直葬墳であることはわかった。新庄の谷に突出した丘陵は3か所あるが、その先端にはすべて木棺直葬墳がある。このうちその内容がわかるものは、昨年度京都府教育委員会によって調査された崩谷^(注29)2号墳がある。この古墳は副葬品が鉄刀1本であったため、築造時期は不明であるが、TK43型式の須恵器が出土している崩谷1号墳に先行すると考えられている。この1・2号墳の位置関係からみると、2号墳を意識して1号墳が築造されているのは明らかであり、大きく隔たった時期に築造されたとは考えられない。このことから、崩谷2号墳もアバ田東1号墳とほぼ同様の時期に築造されたと考えられる。新庄地区においては、6世紀中ごろまでは木棺直葬墳が丘陵先端に築造され、それに続く横穴式石室墳は、その古墳立地を受け継ぎ同じ丘陵上に築造される。そしてTK209型式の段階に入ると、他の地域と同様に斜面に横穴式石室を築造するようである。このことは丹後地域における墳墓の変遷過程の一例を示すものと思われる。(荒川 史)

(4) アサバラ遺跡

1. 調査経過

アサバラ遺跡は、京都府教育委員会の分布調査では確認されていなかった遺跡である。昭和62年度のアバ田古墳群の調査の際に周辺遺跡の分布調査を行ったところ、小字アサバラからクズレ谷にわたる地域で須恵器・土師器の散布が認められ、初めて遺跡の存在が明らかになった。このため62年度中に試掘調査を行い、遺跡の範囲及び性格を確認することとなった。

試掘調査は62年11月10日から、新庄遺跡として12か所のトレンチを設定して行った。その結果、クズレ谷地区ではピット・溝を検出し、古墳時代後期から鎌倉時代にいたる遺物が出土した。また、アサバラ地区では、竪穴式住居跡・ピット・溝等を検出し、古墳時代を中心とした遺物が出土した。クズレ谷地区とアサバラ地区の間にあるアバ田地区では、古墳時代中期の遺物の出土をみたが、遺構は検出されなかった。この調査結果から、クズレ谷地区とアサバラ地区では遺跡の性格が異なると判断し、新庄遺跡を改め、それぞれの地区名を遺跡名称にした。そして、顕著な遺構を検出したアサバラ遺跡については、昭和63年度に本調査を行うこととなった。

昭和63年度の調査は4月20日に開始した。62年度において竪穴式住居跡を検出した6トレンチを中心に、重機によって600㎡を掘削した。その結果、谷状の地形(SD01)・竪穴式住居跡(SH02)などを検出した。

このアサバラ遺跡の調査中に、造成工事はアサバラ地区にも一部かかったが、その際それまで確認されていなかったアバ田東3号墳・竪穴式住居跡(13トレンチ)が発見され、その調査も並行して行った。

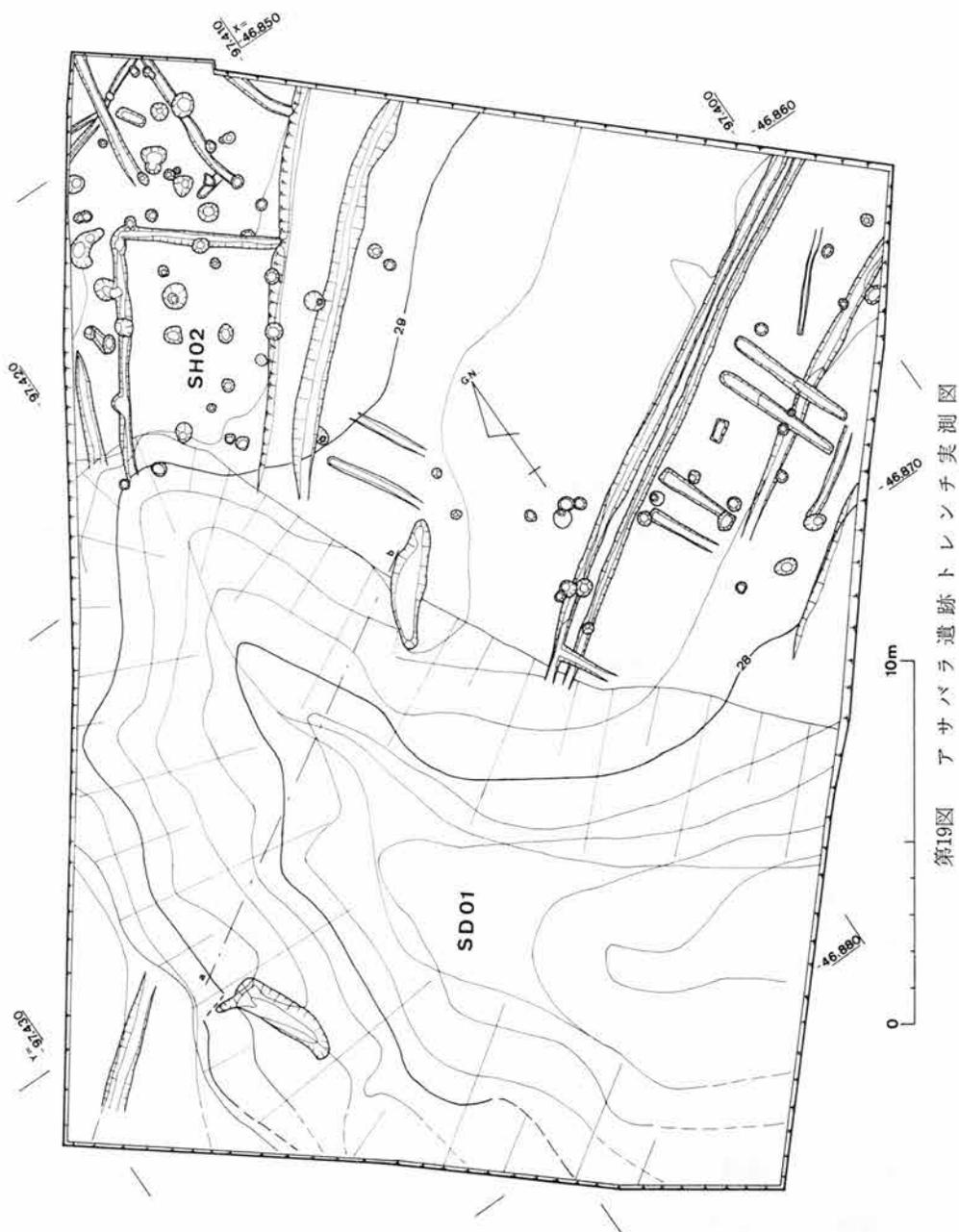
7月20日に関係者説明会を行い、この日をもって調査を終了した。

2. アサバラ遺跡

①遺構(第19～22図)

アサバラ遺跡は、分布調査で奈良時代と思われる須恵器を採集しており、調査前には奈良時代を中心とした遺跡であることが予想された。しかし調査の結果、竪穴式住居跡・溝・ピットを検出し、古墳時代後期を中心とした遺跡であることがわかった。

遺跡は、標高27～38mの南西に面した緩やかな斜面に営まれている。土層は、耕作土・茶褐色土(包含層)・黄褐色土(地山)であるが、畑の開墾によって部分的に地山まで削平さ

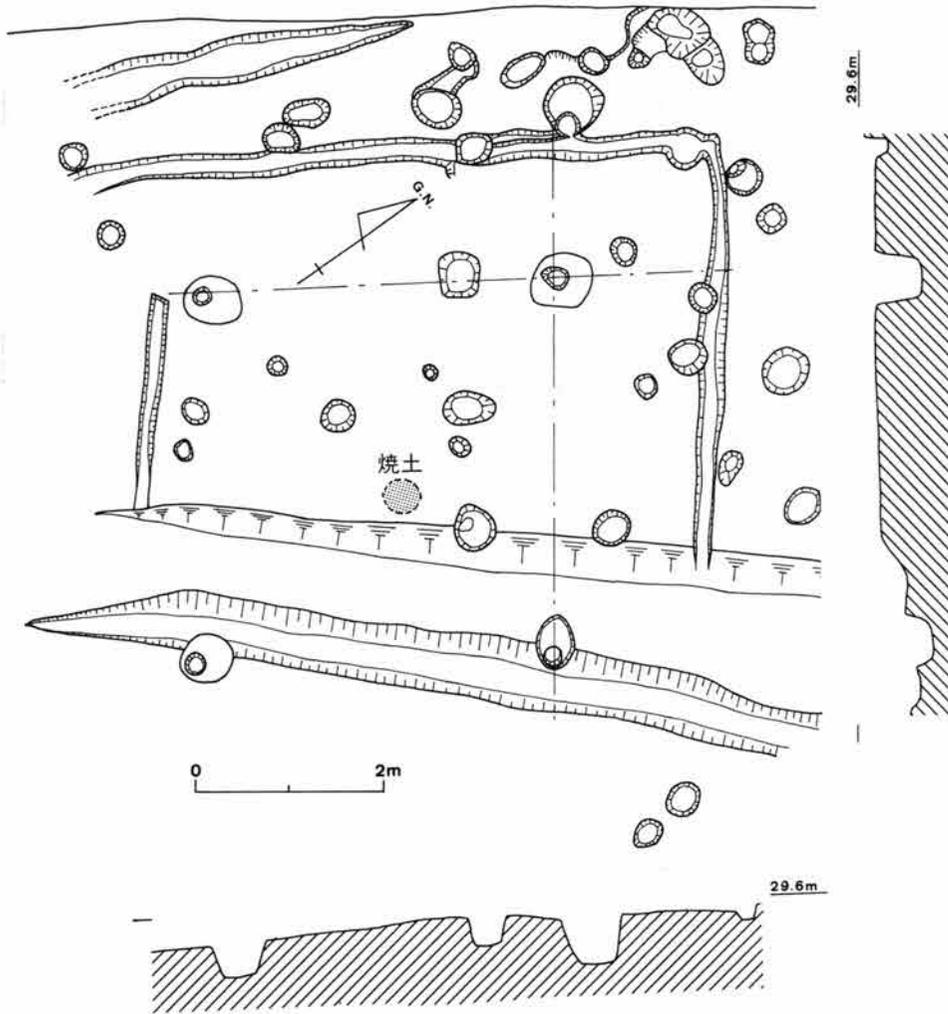


第19図 アサバラ遺跡トレンチ実測図

れていた。

竪穴式住居跡SH02(第19図・20)

トレンチ北隅で検出した方形の竪穴式住居跡である。住居の南東辺は畑の開墾によって削平されており、南西辺は溝SD01の埋土中に壁溝を掘っているため確認できなかった。

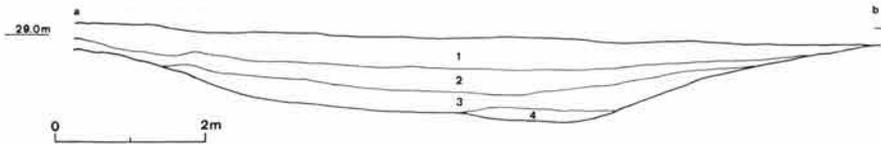


第20図 SH02 実測図

柱穴の位置などから判断すると、一辺7m前後の規模の住居跡と思われる。

主柱穴は4本で、直径50～60cmの円形・楕円形や隅丸方形の掘形を持つ。いずれも柱痕をよく残している。柱穴の埋土は、地山の黄褐色土に黒褐色土のブロックが混じったものである。住居のほぼ中央と思われる位置には焼土があり、炉が住居の中央にあったことがわかる。幅15～30cmの壁溝を持ち、最も残っている部分では溝の外側で深さ約25cmである。

住居跡内からは須恵器・土師器が出土している。細片が多いが、須恵器の杯身1点が壁溝の肩から出土している。この杯身が陶邑編年のTK47型式併行の時期のものと考えられ、5世紀末から6世紀初頭の時期の住居と考えられる。



第21図 SD01 断面図

溝SD01(第21図)

溝SD01は、トレンチ西半部を北から南に流れる谷状の溝である。計測できる最大幅は約17m・深さ約1mである。SD01の土層は、①黒褐色粘質土、②黒灰色粘質土、③暗灰色粘質土、④黒灰色粘質土である。遺物は①層からのみ出土しており、②層以下はまったく出土していない。SH02は、この②層に壁溝を掘り込んでおり、②・③・④層が埋まり、SD01がやや窪んでいた段階にSH02が造られている。

①層から出土している遺物には、須恵器・土師器・砥石などがある。これらの遺物には古墳時代から平安時代までの時期のものを含んでおり、①層がかなり長い期間にわたって埋まったことがわかる。

竪穴式住居跡SH03(第22図)

13トレンチで検出した住居跡である。北西の一边を残しほとんどをSH04に切られているため全容は知り得ないが、一辺4mの方形の竪穴式住居跡と考えられる。幅20～30cmの壁溝を持つ。住居跡内からは、土師器の細片が出土しているが、時期を知りうる資料は出土していない。

竪穴式住居跡SH04(第22図)

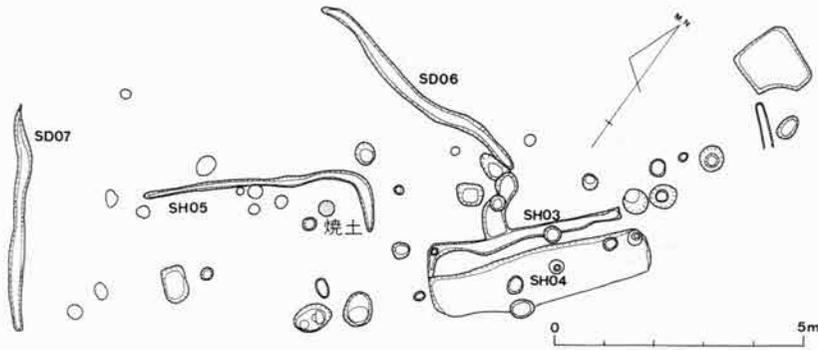
13トレンチで検出した住居跡で、SH03の南東部にある。この住居跡も、南東半が斜面にかかっており、一部を検出したにすぎない。一辺4.5mの方形の住居で、壁溝は持たない。出土遺物には土師器があるが、SH03同様細片が多く、時期は不明である。

竪穴式住居跡SH05(第22図)

13トレンチで検出した、SH03・04の西方にある住居跡である。鉤形に曲がる溝を検出したのみであるが、溝の屈曲部で焼土を検出したため竪穴式住居跡とした。一辺4.6m以上の方形の住居である。出土遺物はない。

溝SD06・07(第22図)

幅約30cmの溝で、本来は2本が繋がっていた。SD07の南東部は斜面となっており、溝の続きを検出できなかった。「前方後方形」ともいえる溝であるが、性格については不明である。



第22図 13トレンチ実測図

②遺物(第23・24図)

アサバラ遺跡から出土した遺物には、須恵器・土師器・砥石等がある。そのほとんどがSD01第①層から出土している。

SH02出土の土器(第23図1・2)

SH02から出土した遺物には須恵器・土師器があるが、今回図示し得たのは須恵器・土師器それぞれ1点のみである。

1は須恵器杯身である。ほぼ直立する口縁を持ち、口縁端部は段を有する。底部には単位の細かいヘラケズリを有する。

2は土師器の高杯の脚部である。大きく外反する脚で、外面にはヘラミガキを持つ。

SD01出土の須恵器(第23図3～16)

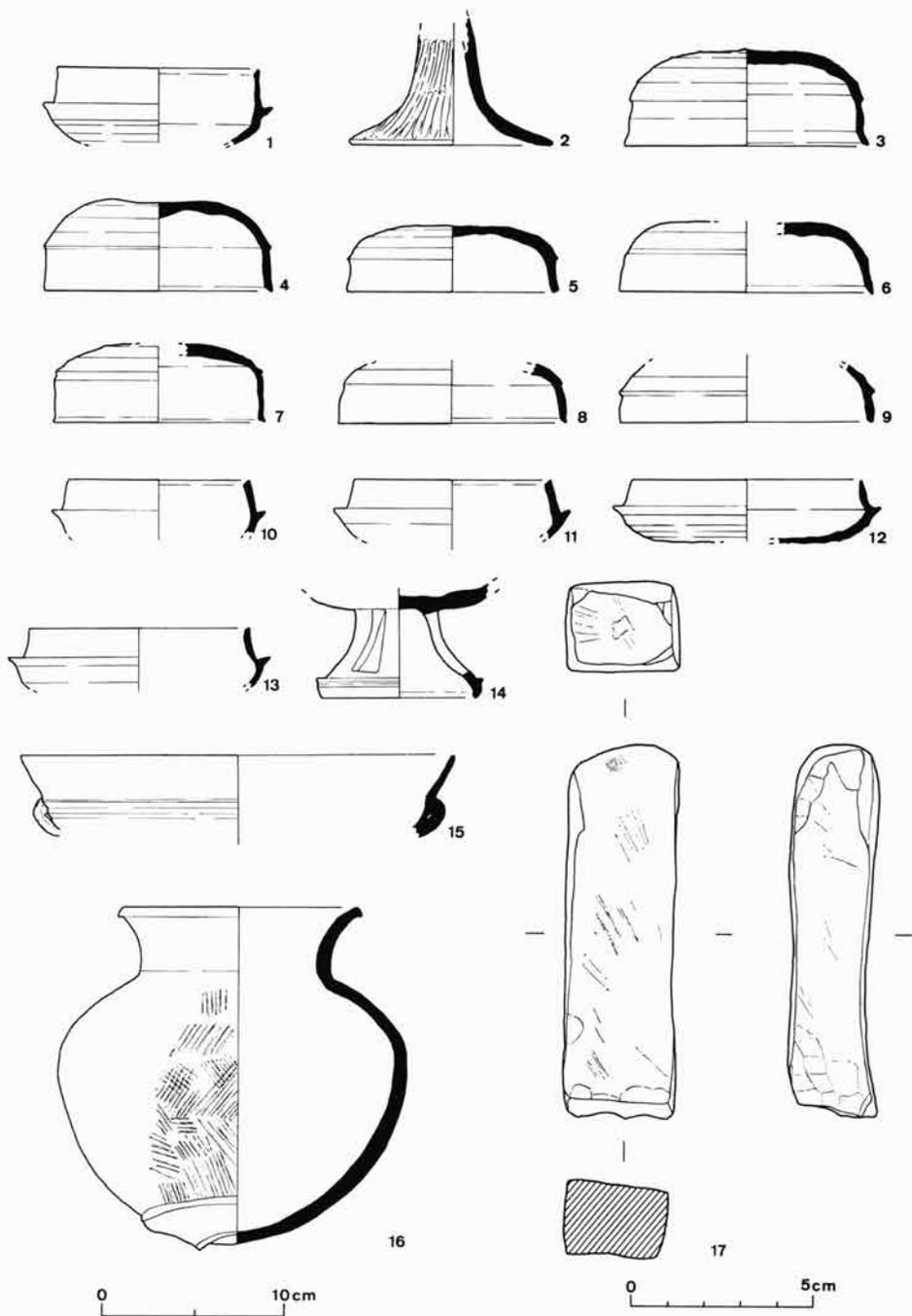
SD01から出土した須恵器には、杯蓋・杯身・高杯・甕がある。

杯蓋は口縁端部の形態では、凹面が見られるもの、段を有するものがある。天井部と口縁を界する稜は、短く突出するものと沈線によって稜を表現しているものがある。天井部の調整では、ヘラケズリを3分の2以上行っているものと2分の1程度のものがある。

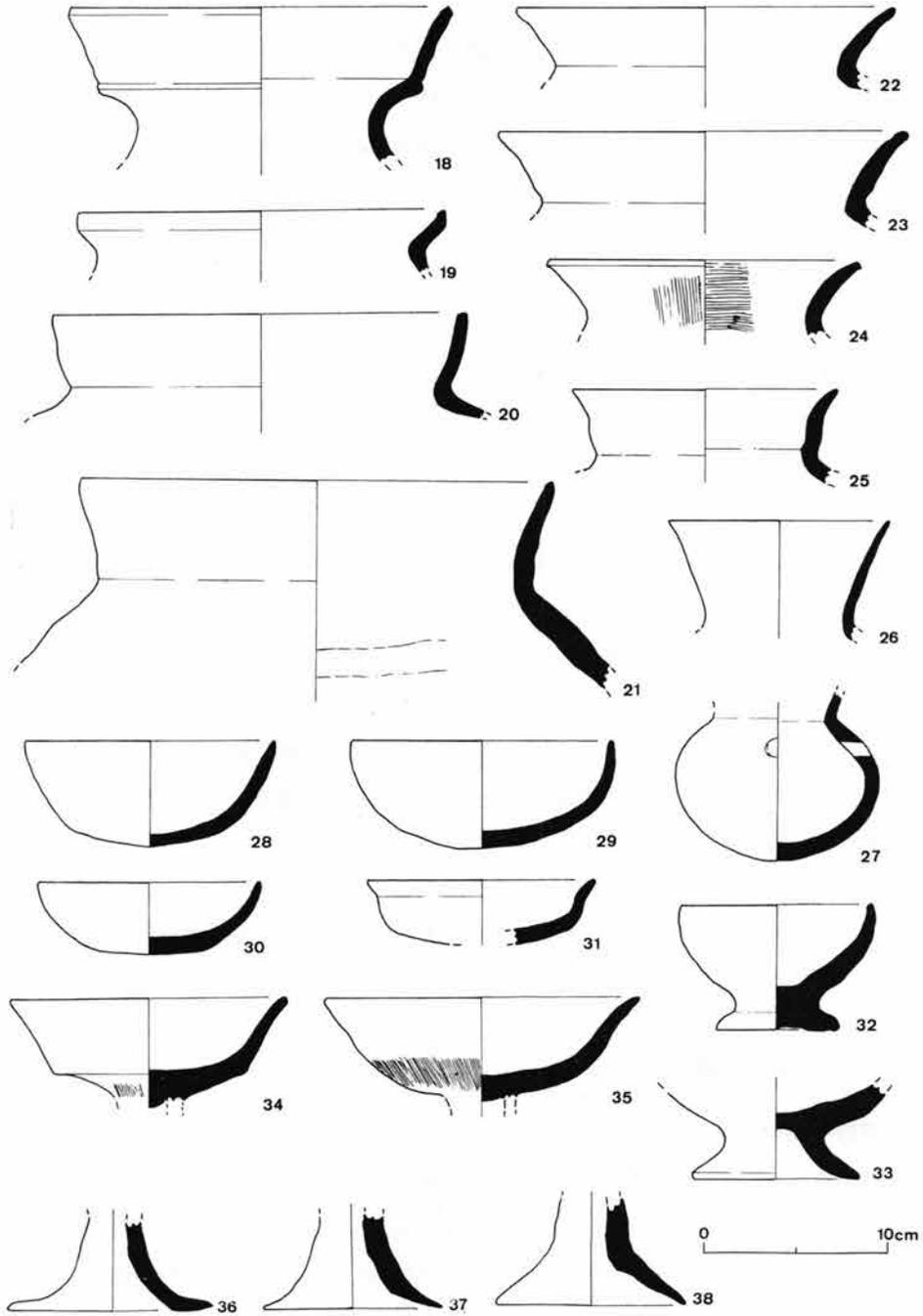
杯身では、口縁の立ち上がりはやや内傾しているものがほとんどである。口縁端部の形態は、段を持つものと持たないものがある。

高杯は2点を図示している。14は「ハ」の字形に開く脚部である。透しは台形のものが3方にあく。15は無蓋高杯の杯部である。ゆるやかに外方に開く口縁をもち、体部外面に2条の突帯を持つ。おそらく2か所に断面円形の把手が貼り付けられていたと思われる。

甕は1点を図示した。ゆるやかに外反する口縁を持つ。体部外面は平行タキを交互に方向を変えて施す。体部内面は同心円文の当て具痕をナデ消している。甕を何点か重ねて焼成しており、底部に口縁が熔着する。



第23図 アサバラ遺跡出土遺物実測図(1)



第24図 アサバラ遺跡出土遺物実測図(2)

SD01出土の土師器(第24図)

SD01出土の土師器には、壺・甕・椀・高杯がある。

壺には大型壺・小型直口壺などがある。18は大型壺で、いわゆる二重口縁壺である。頸部から大きく外反し、上方に屈曲する口縁部を持つ。26・27は直口壺と思われる。26は口縁部で、外上方にまっすぐのびる。27は球形の体部で、体部上半に孔をひとつ穿つ。

甕には大型甕・中型甕・小型甕の各種がある。20・21は大型甕である。20は内湾ぎみに上方にのびる口縁を持つ。21はわずかに外反し、外上方にのびる口縁を持つ。体部内面には粘土紐の接合痕を残す。19・22・23は中型甕である。19は「く」の字状の頸部を持ち、口縁端部はわずかに上方に屈曲させる。22・23は外反ぎみに開く口縁を持つ。24・25は小型甕である。24は外反ぎみに開く口縁を持つ。口縁外面には縦ハケ、内面には横ハケを施す。25は頸部から外傾し、わずかに屈曲させ、やや外反ぎみに上方にのびる口縁を持つ。

椀には、底部から内湾して上方にのびる口縁を持つものと、口縁端部を外方に折り曲げたものがある。また台付のものもある。

高杯は、土師器の中でも出土量が多いが、図示し得たものは少ない。34は、杯底部は外方にのび、その先端に粘土をたして口縁を作る。そのため外面に鋭い稜がつく。口縁端部はわずかに外反する。脚との接合部の周囲にはハケを施す。35は内湾して上方にのびる口縁を持ち、口縁端部はわずかに外反する。36・37・38は脚部である。36は外反して開き、脚端部で屈曲し横方向に開く。37は外反して開く脚である。38は脚半ばまで下方にのび、そこで屈曲して外方に広がる。33は、短く外反ぎみに広がる脚を持つ高杯である。

SD01出土の砥石(第23図17)

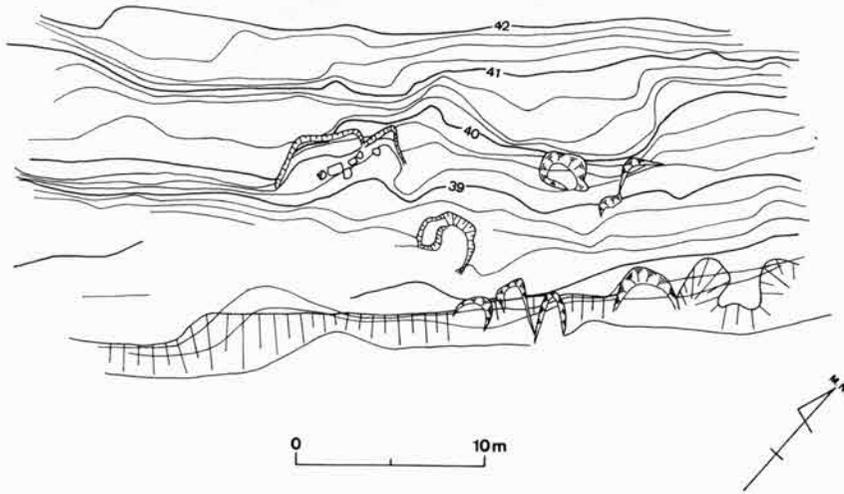
SD01からは2点の砥石が出土しているが、ここでは1点のみを図示した。定形化した砥石で、一部に形を整えるための加工痕が見られる。もう1点の砥石は自然石の平らな面を利用している。

3. アバ田東3号墳

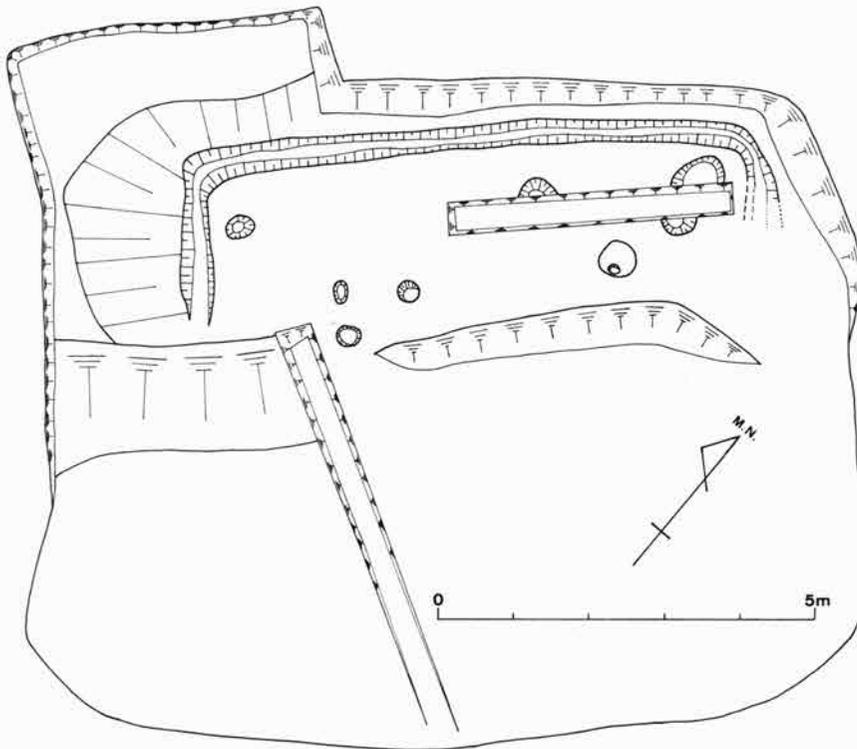
①遺構(第25・26図)

アバ田東3号墳は、造成工事に伴い樹木の根起こしを重機で行った際に石材が露出し、発見された古墳である。その段階では石材が1列並んでいると考えられ、また須恵器を数点採集できた。調査の結果、石材の並びには規則性は見られず、畑の開墾か植林によって石室はすでに破壊されていたことがわかった。

墳丘については、周溝が遺存している可能性が考えられ、断ち割りを入れた。その結果、一部で溝を確認したため石材を除去したところ、方形にめぐる溝を検出し竪穴式住居跡が



第25図 アバ田東3号墳周辺地形測量図



第26図 アバ田東3号墳下層住居跡実測図

下層に存在することがわかった。一辺7.7mの方形の住居で、斜面に造られているため山側を削って平坦面を造っている。斜面側では溝を検出できなかった。幅約30cmの壁溝をめぐる。遺物は、壁溝内から磨製蛤刃石斧が出土しており、弥生時代の住居の可能性はある。

②遺物(第27図)

出土した遺物には、須恵器・土師器・磨製石斧がある。

須恵器には杯蓋・甕・壺

がある。杯蓋は丸い天井部を持ち、ヘラケズリは天井部の2分の1に施す。口縁端部にはわずかに凹面が残る。壺は粗雑な作りである。口縁中位に1条、頸部に2条の沈線を回転台を使用せず串状の工具によって施す。その沈線の間には連続三角文を、やはり回転台を使用せずに施している。底部のヘラケズリは1条だけ施す。

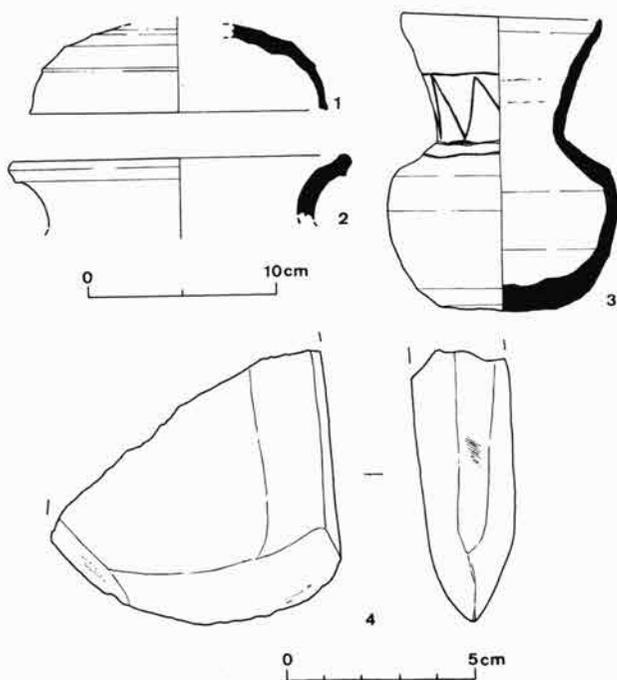
磨製蛤刃石斧は刃部のみが残存する。石材は斑れい岩である。

4. クズレ谷遺跡

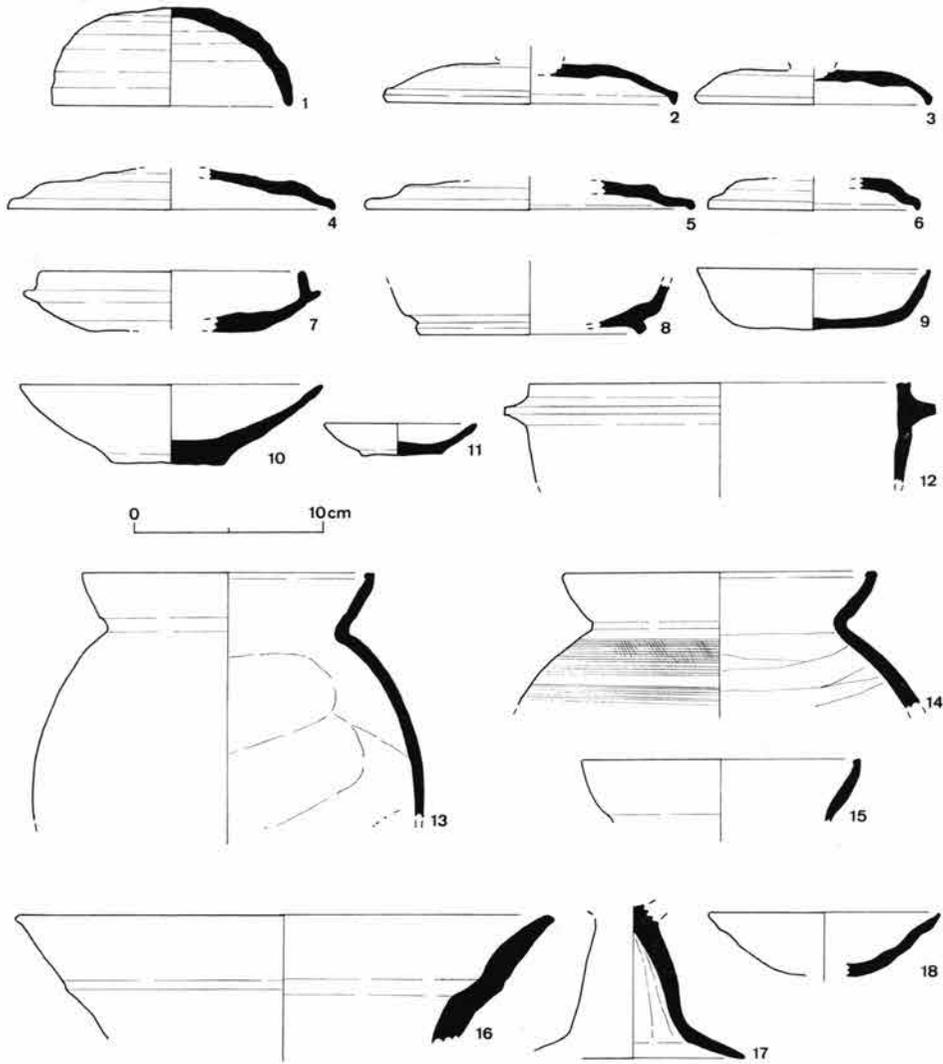
クズレ谷遺跡は、昭和62年度にトレンチ3か所を設定して調査を行った。その際自然流路と思われる溝やピットを検出したが、それぞれのピットが対応せず、建物は設定できなかった。

このトレンチでは、古墳時代後期から中世にいたる遺物が出土している。出土遺物には須恵器・土師器・黒色土器がある(第28図)。

須恵器には杯蓋・杯身がある。1は蓋と身が逆転する以前の杯蓋である。2～6は蓋内面のかえりの消失以降のものである。2・3は口縁端部のナデがあまり強くなく、天井部から口縁部にやや内湾ぎみにいたる。4～6は強いナデを施し、口縁端部に段を有する。7は蓋と身が逆転する以前の杯身である。8は高台を持つ杯身である。9は高台を持たな



第27図 アバ田東3号墳出土遺物実測図



第28図 クズレ谷遺跡出土遺物実測図

い杯身で、口縁端部に段を持つ。また、細片のため図示できなかったが、円面硯と思われる破片も出土している。

土師器は皿・羽釜などがある。11は土師皿で口径8.2cmを測り、外底面には糸切り痕が残る。12は羽釜で、口径23cmを測る。

10は黒色土器で、口径16cmを測る。外底面に糸切り痕が残る。

13～18は、クズレ谷遺跡のトレンチからさらに谷の奥の地区で工事中に出土した土器である。現地を確認したところ黒灰色土の包含層が認められ、ここから主に布留式期の土器が出土している。排水溝の工事であったため調査はできなかったが、断面観察では遺構は

確認できなかった。

5. ま と め

今回のアサバラ遺跡の調査で検出した遺構は、竪穴式住居跡5基・溝等である。竪穴式住居跡は大規模な群をなさず、緩斜面に散在する状況で検出している。時期を推定できる住居は、SH02とアバ田東3号墳下層住居がある。SH02から出土した須恵器は、陶邑編年のTK23型式と考えられ、5世紀後半の年代が与えられよう。SD01出土の遺物もこれを前後する時期以降のものと考えられ、アサバラの緩斜面の利用が5世紀後半から始まったものと考えられる。アバ田東3号墳下層住居出土の磨製石斧の存在は、弥生時代の遺構の存在を示唆するものであるが、住居内から土師器と思われる素焼きの土器も出土しており、3号墳下層住居を弥生時代のものとする確証は得られなかった。クズレ谷遺跡の調査では、谷の奥に布留式土器の段階の遺跡が、谷の入り口に古墳時代後期から中世にいたる時期の遺跡があることがわかった。

新庄地区の調査は、昭和62年度から2年にわたって行ってきたが、この間の調査によって新庄地区の遺跡の概要が明らかになってきた。現在のところ、新庄地区では古墳時代から中世に至る遺跡が知られている。そして、それらの遺跡の時期による立地の変遷を追うことができる。

新庄地区は、本谷と小さな2つの支谷に分けられる。布留式期にはこの支谷の奥に小さな集落を営み始める。これはクズレ谷遺跡、及びアバ田古墳群の調査の際に出土した土器によって知ることができる。5世紀後半から6世紀にはアサバラの緩斜面に集落を営む。おそらく耕作技術の進歩により支谷全体を可耕地とすることができたため、谷の入り口に集落を移したものである。しかし、この集落も大規模なものではなく、数件の単位が散在していたのであろう。この段階に谷に突出している丘陵上に木棺直葬の古墳が造営される。6世紀後半から7世紀の集落については不明な点が多いが、本谷の水田で蓋の内面にかえりを持つ須恵器の杯が採集できることから、本谷の中の高台にまで集落の範囲が広がっていたと思われる。8世紀に入ると、現在の新庄の集落付近からも須恵器が採集されており、本谷の入り口まで集落が広がってくると思われる。

川上谷には、島・芦原など「水」に関する地名が多く残っており、伝承では谷の奥まで海が入り込んでいたとされている。おそらく川上谷本谷は川の氾濫などで大部分が低湿地化していたものと思われる。そうすると人々の生活の場は、伯耆谷や新庄などの支谷に限られてくる。その支谷の耕地化の度合いが遺跡の立地を決定するのであろう。新庄の遺跡立地の変遷は、一つのモデルパターンとして捉えられるものと考えられる。(荒川 史)

(5) 鳥取城跡

1. 位置と環境(第29図)

鳥取城跡は、熊野郡久美浜町大字浦明小字鳥取に所在する。標高50mあまりの山上の平坦地には土塁・石列が遺存しており、そこから標高20m付近に至る斜面に、郭状の小さな平坦地が数段認められる。これらの施設が古くから鳥取城として認識されていたが、昨年度調査研究センターが行った試掘調査^(注30)の結果、標高15～20mの広い段丘上にも城に関係するとみられる遺構の存在することが判明した。この段丘の北側の段丘上には日光寺古墳^(注31)、南西側の段丘上には弥生時代～鎌倉時代の複合遺跡である日光寺遺跡^(注32)、南西約500mの段丘上には、弥生時代中期の竪穴式住居跡等を検出した浦明遺跡^(注33)等があり、久美浜湾沿いに発達した海岸段丘上を中心に遺跡が密集して分布している。

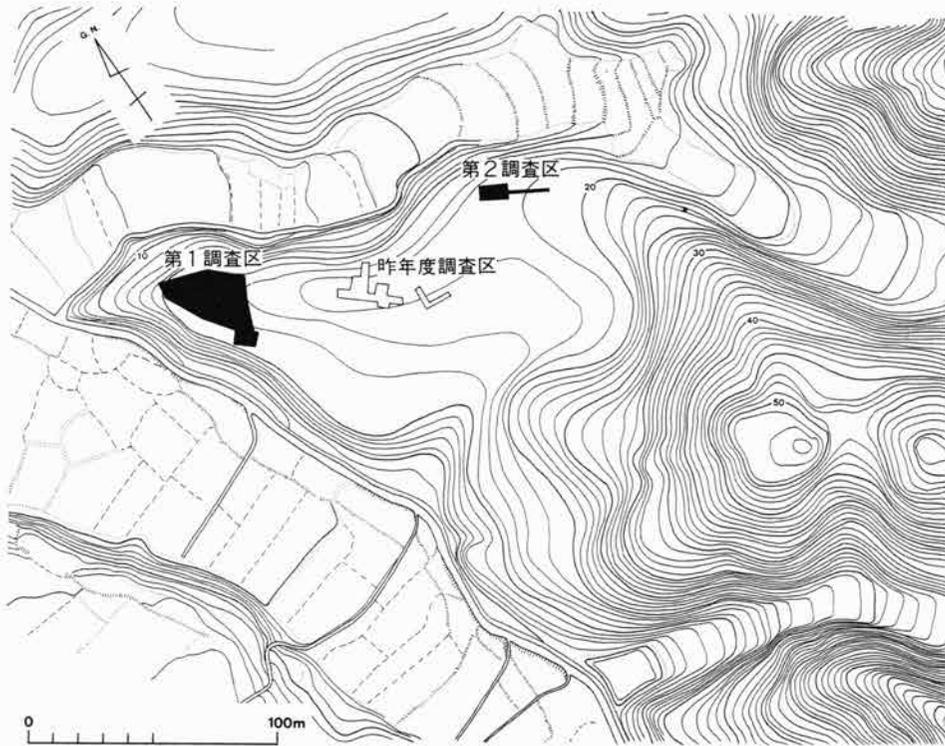
2. 調査経過

調査予定地は、段丘の先端部分と北辺の2か所にあり、それぞれ第1調査区、第2調査区とした。調査は4月21日より、第1調査区の立木伐採作業を開始し、まず段丘面の北縁に沿う形でトレンチを設定した。このトレンチでピット・溝を検出したため、南側に拡張し、約230㎡を人力で掘削した。その後、第1調査区を南東側に拡張した。拡張した面積は約370㎡に及ぶ。その後、遺構が調査区外へ続いていた部分を若干、人力掘削によって再拡張した。また、旧石器の出土する可能性が出てきたため、地山と考えていた明灰黄色砂質土層の一部を掘削した。第2調査区は5月12日より、第1調査区と併行して立木伐採、トレンチ掘削を行い、土塁状の盛土が認められた部分を拡張した。すべての現場作業は8月6日に終了した。



第29図 調査地位置図

- | | |
|----------|----------|
| 1. 鳥取城跡 | 2. 函石浜遺跡 |
| 3. 日光寺古墳 | 4. 小丸山古墳 |
| 5. 日光寺遺跡 | 6. 長良城跡 |
| 7. 浦明遺跡 | |



第30図 調査区位置図

3. 遺 構

①第1調査区

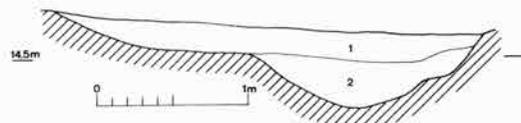
第1調査区では、後述する南隅拡張部の一部を除いて、厚さ約20~40cmの表土直下に明灰黄色砂質土層が現れた。検出した遺構には、ピット・溝・土坑がある。

各時期ごとの概要は以下のとおりである。

<中世>

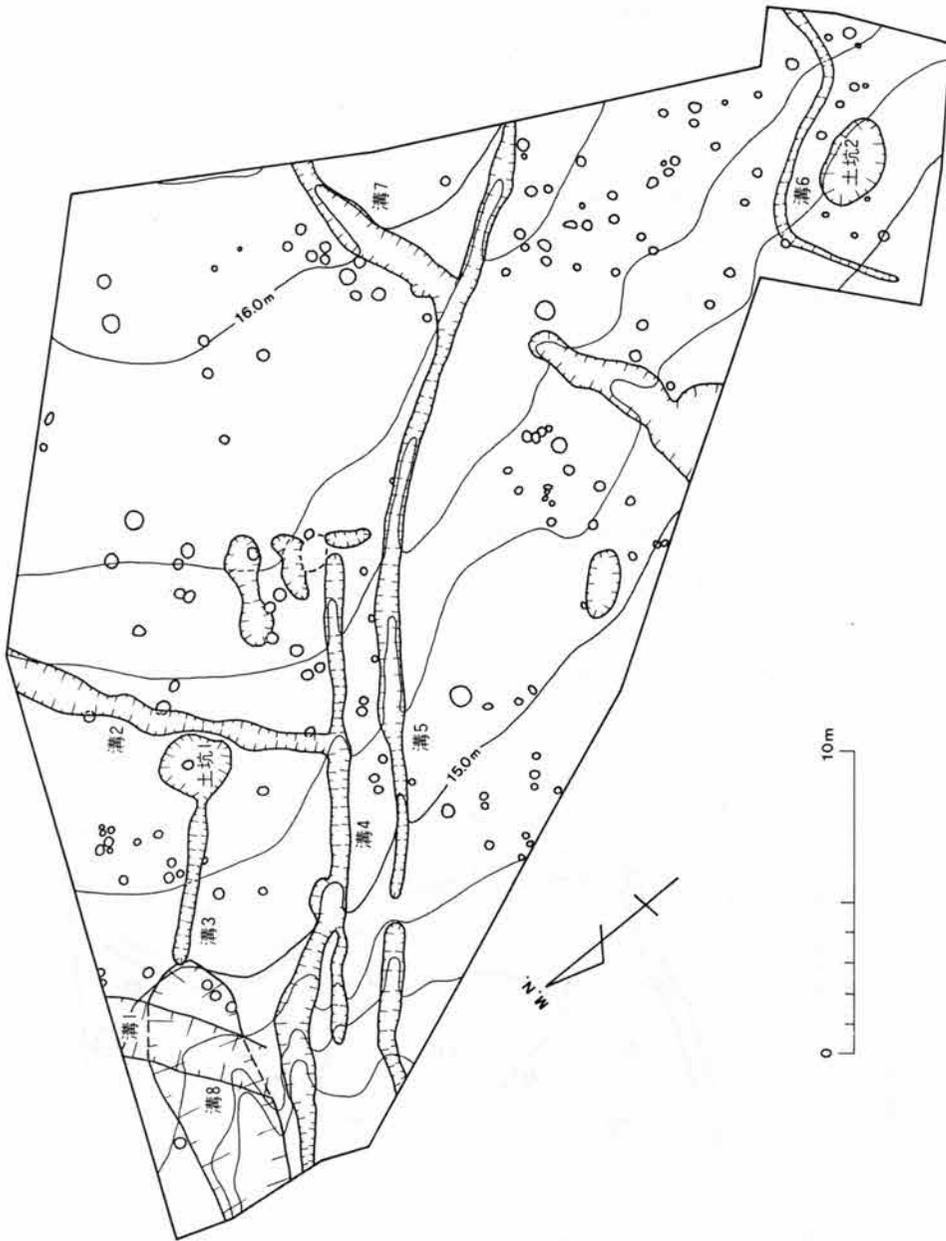
土坑1 2.2m×2.0mの方形プランを呈し、深さは約20cmを測る。底面はほぼ平坦である。須恵器の小片が出土した。

溝3 土坑1の西コーナーから北西にのびる溝で、幅20~30cm・深さ15cmを測る。両端の比高差は約10cmで北西に向かってゆるく傾斜している。土師皿と青磁碗が出土した。



第31図 溝8断面図

1. 暗灰黄色粘質土 2. 暗黒灰色粘質土



第32図 第1調査区遺構実測図

溝8 溝3からやや方向を変えて西北西にのびる溝で、最大幅3mを測る。両端の比高差は1.35mを測り、急な傾斜を示す。埋土は上下2層に分かれ、下層から茶臼片が出土した。土坑1・溝3・溝8は一連の遺構であり、その埋没年代は15世紀代と考えられる。

溝1・2・4・5・7 それぞれ互いに直交するような形で検出された浅い溝である。時期を決定できる遺物は出土していないが、溝1は、溝8の埋没後に掘られていることから、

15世紀以降のものであることは確実である。これらの溝を排水、並びに平坦地を区画する機能をもつ溝とし、溝4と溝5の間の空間を道路と想定することができるが、より新しい時代の溝である可能性も否定できない。

<古墳時代>

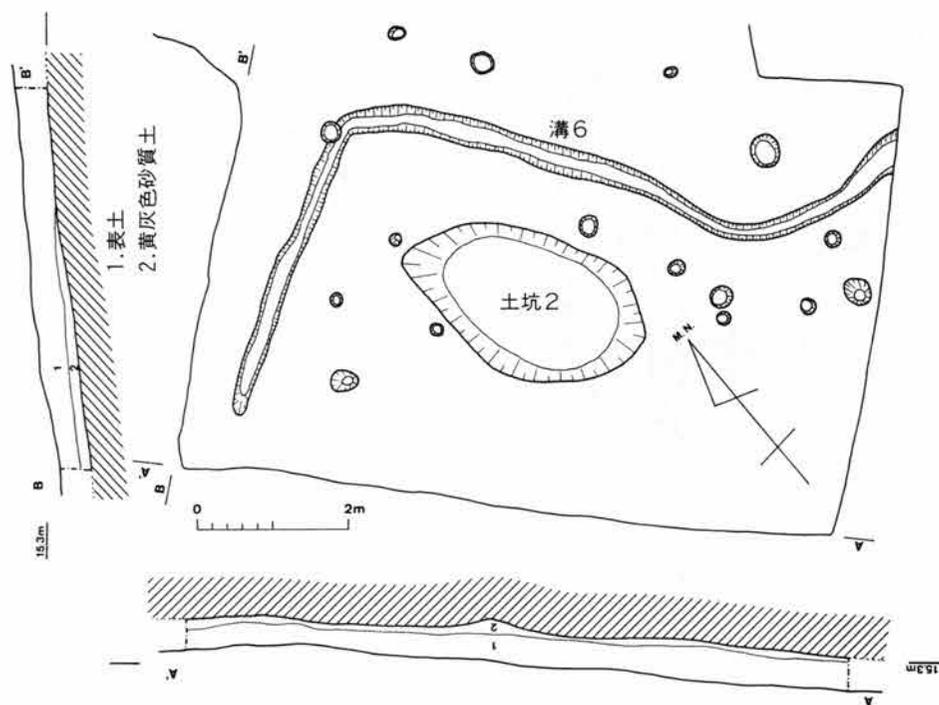
ピット119 直径70cm・深さ40cmを測り、平面プランは円形を呈する。埋土中より土師器竈、石製埴塼、銅滓が出土した。

この他、古墳時代の遺物が出土したピットがあるが、建物等は復原できない。

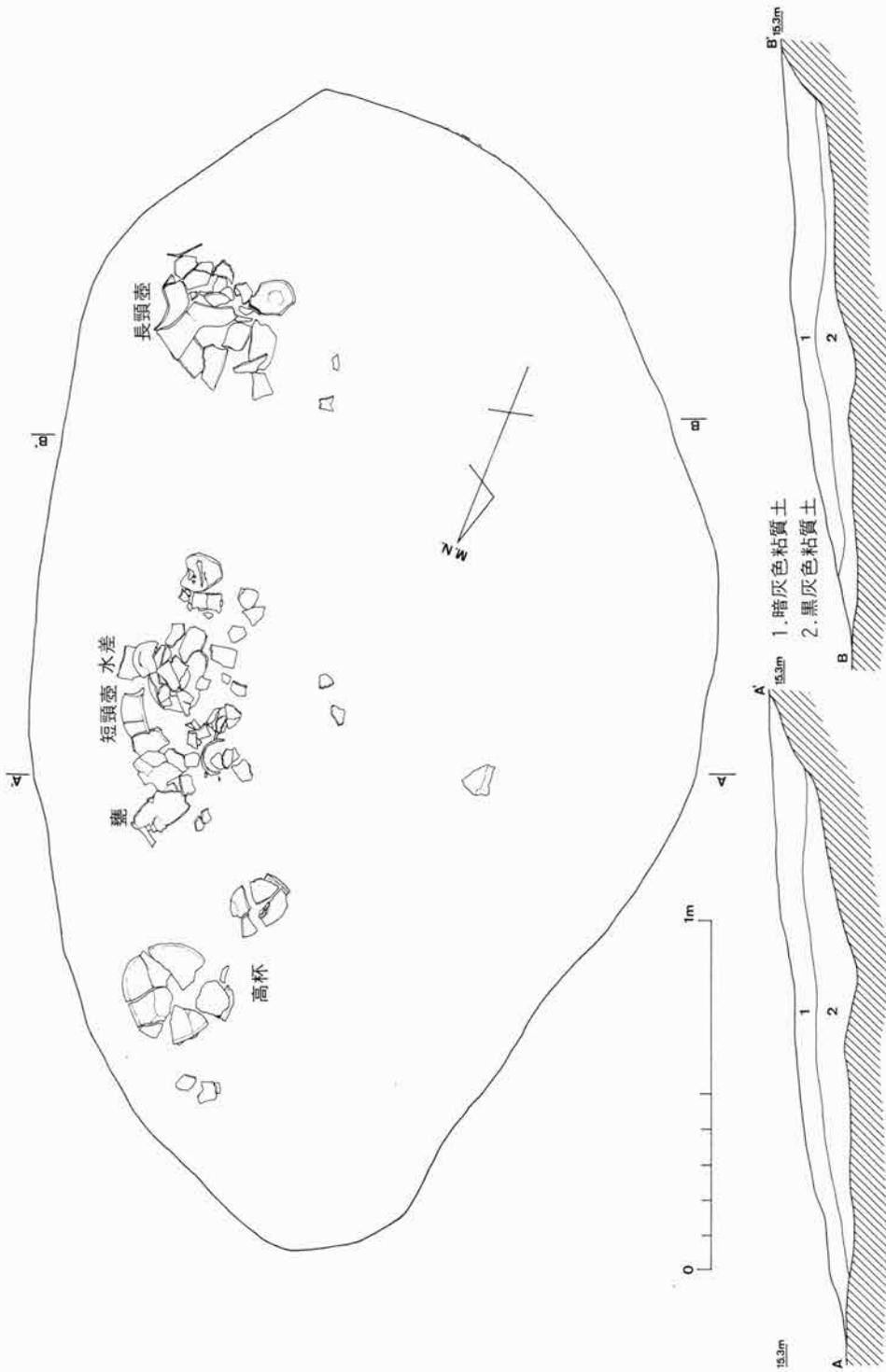
<弥生時代>

溝6 調査区の南隅で検出し、これを追いかける形で調査区を拡張した。幅20~40cm・深さ10~15cmを測り、断面はU字形を呈する。出土遺物より、中期末~後期初頭の埋没と考えられる。

土坑2 長径3.4m・短径1.9m・深さ20cmを測る浅い窪地状の土坑である。土坑の北東縁に沿って、高杯・甕・短頸壺・水差し・長頸壺が各1個体出土した。土器はいずれも口縁部を北東側(尾根側)に向けて倒れた状態で出土し、ほぼ原位置を保っている。土器の配置は、中央に甕・短頸壺・水差しを並べ、その両側に高杯・長頸壺をやや離して配して



第33図 第1調査区南隅拡張部遺構実測図



第34図 土坑2遺物出土状況実測図

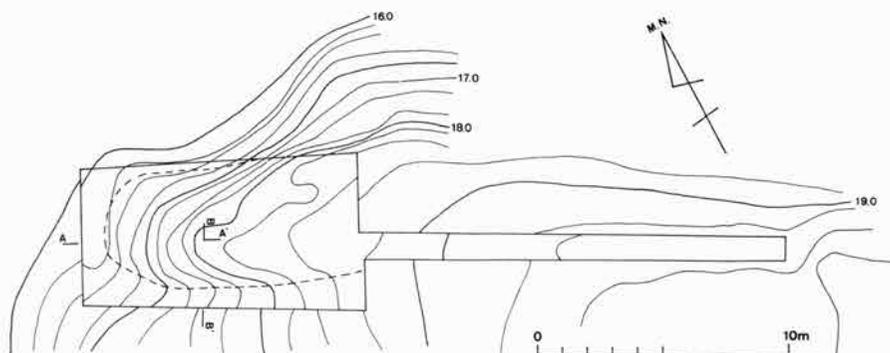
いる。土器の外面に朱が塗られた痕跡が認められ、何らかの祭祀の目的をもってここに置かれたことは明白である。埋土の観察によると、これらの土器は埋置されたのではなく、倒れた後に埋没していったことがわかる。中期末～後期初頭の時期が考えられる。

この他、弥生土器が出土したピットがあるが、建物等は復原できない。

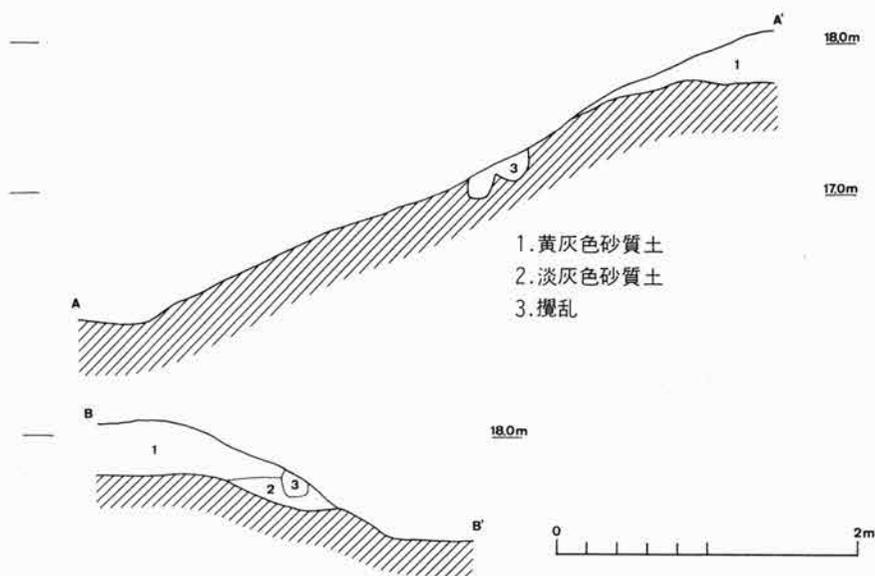
なお、溝6・土坑2を検出した南隅拡張部の南西側(谷側)約半分には、地山の上に黄灰色砂質土層があり、2つの遺構の一部は、この土層上面で検出された。

②第2調査区

第2調査区は原地形に認められる土塁状の高まりの中軸線に沿ってトレンチを設けたが、ピット等は検出されなかった。しかし、西端部では盛土が認められたため、拡張の後、断



第35図 第2調査区平面図



第36図 第2調査区断面図

ち割りを行った。盛土は約30cm程度しかなく、土塁状の高まりの大半は、地山を削り出して造られていることが判明した。盛土を行った時代を特定できる遺物は出土しなかった。盛土の量が少なく、盛土が大量に流出した痕跡もみられないことから、当初から大規模な地形の改変はなされなかったものと考えられる。

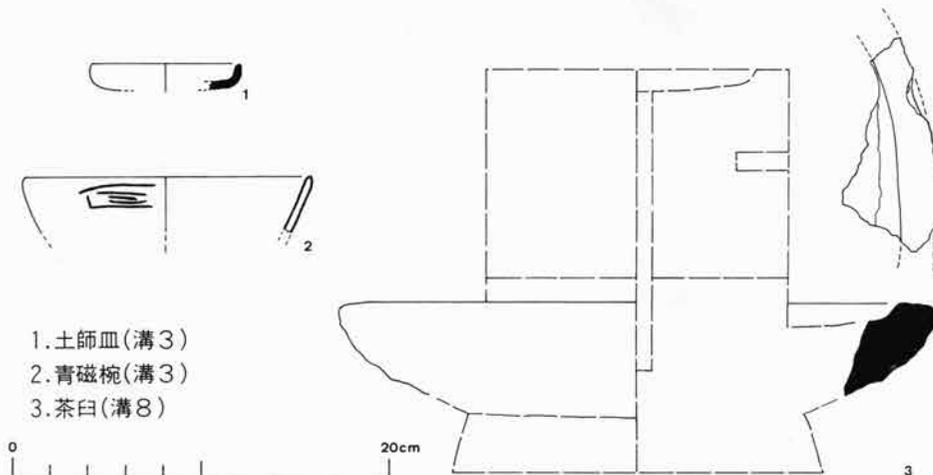
4. 遺物

①中世の遺物(第37図)

溝3出土の土師皿と青磁椀、溝8出土の茶臼が図示できるのみである。土師皿は口径7.8cmに復原でき、淡灰茶色を呈する。青磁椀は口縁部外面に雷文帯を持つもので、復原口径15.2cmを測る。胎土は乳白色を呈し、青灰色が斑状に混じる。釉薬はやや青色を帯びた緑色に発色している。14世紀末～15世紀初頭頃のものと考えられる。茶臼は、下臼の受けの部分が出土した。凝灰岩製で、礫を多く含んでいる。口縁端面と内面は磨いて平滑にしている。外面はタタキにより造り出している。茶臼としては粗製である。

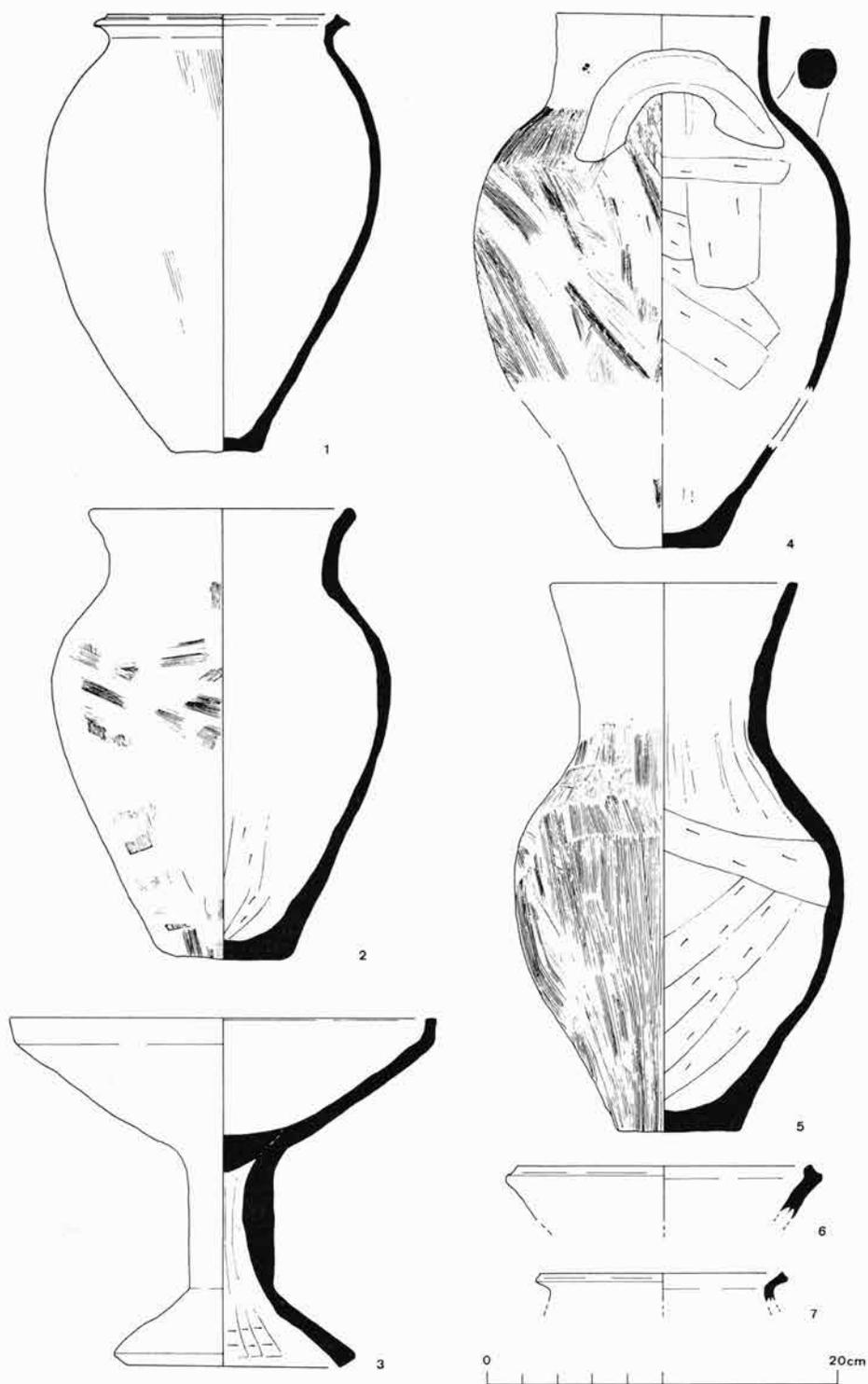
②土坑2出土遺物(第38図)

1は甕で、復原口径13.2cm・器高25.0cmを測る。口縁部はゆるやかに外反し、端部は上方と外方につまみ出されている。口縁外端面に1条の沈線が巡る。調整は外面が縦方向の荒いハケ調整で、内面はヘラケズリを施す。底部と沈線の一部に赤色顔料が残る。胎土は砂粒を含み、やや粗い。色調は淡灰茶色を呈する。2は短頸壺である。口径14.8cm・器高25.5cmを測る。口縁部はやや外反しながら短く立ち上がり、端部は丸くおさめる。体部外面はハケ調整、内面はヘラケズリを施す。胎土は砂粒を多く含む。色調は暗橙茶色



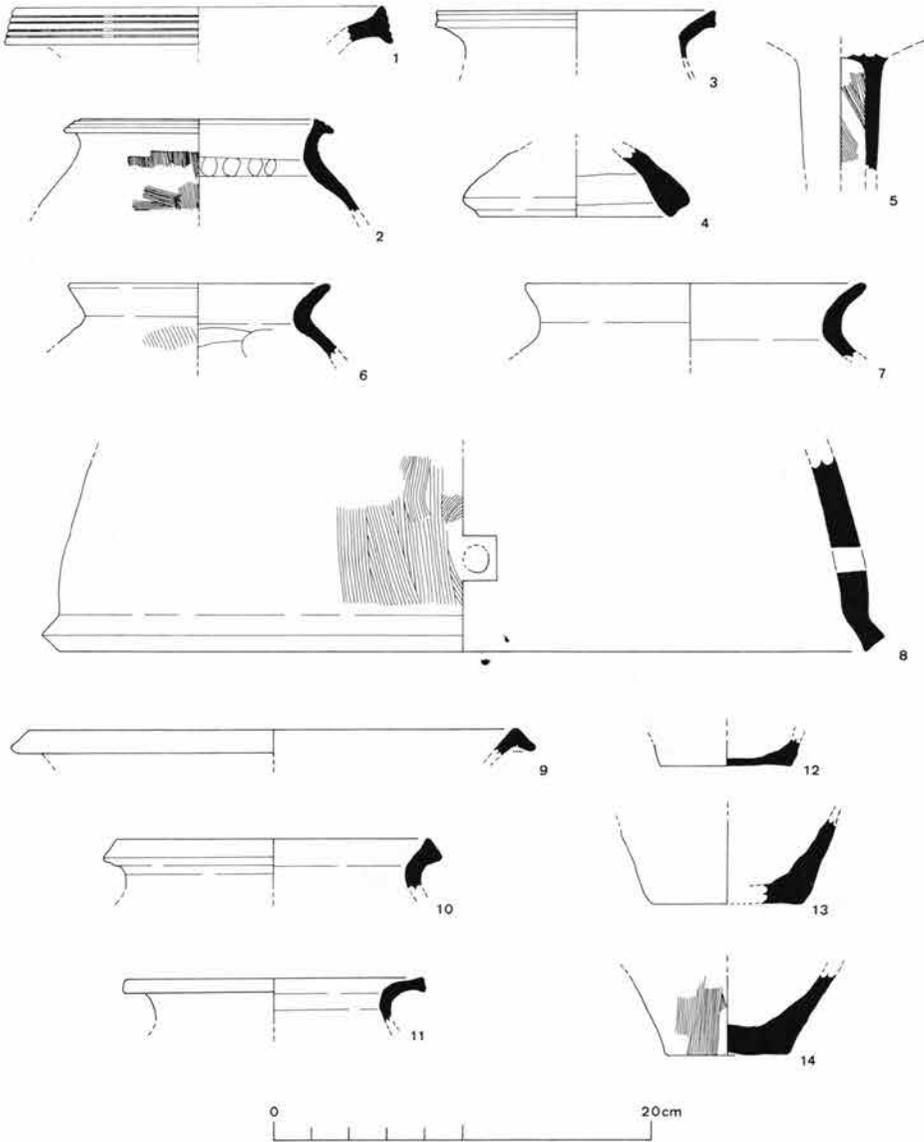
1.土師皿(溝3)
2.青磁椀(溝3)
3.茶臼(溝8)

第37図 鳥取城跡中世土器・石製品実測図



第38図 鳥取城跡土坑2出土土器実測図

である。3は高杯で、大きく開く杯部を持ち、端部は上方に短く立ち上がる。杯の底部は円板を充填している。円筒状の脚柱部は内面にしぼり痕がみられる。脚台部は直線的に開き、端面は平坦におさめる。脚台部の内面はヘラケズリを施し、他はナデ調整を施す。外面の一部に赤色顔料が残る。ほぼ完形で、口径24.4cm・器高20.0cmを測る。胎土はやや粗く、色調は淡灰黄色を呈する。4は水差し、あるいは把手付壺である。体部と底部が接合しないが、同一個体であることは確実で、口径12.1cmを測り、器高は30cm程度に復原



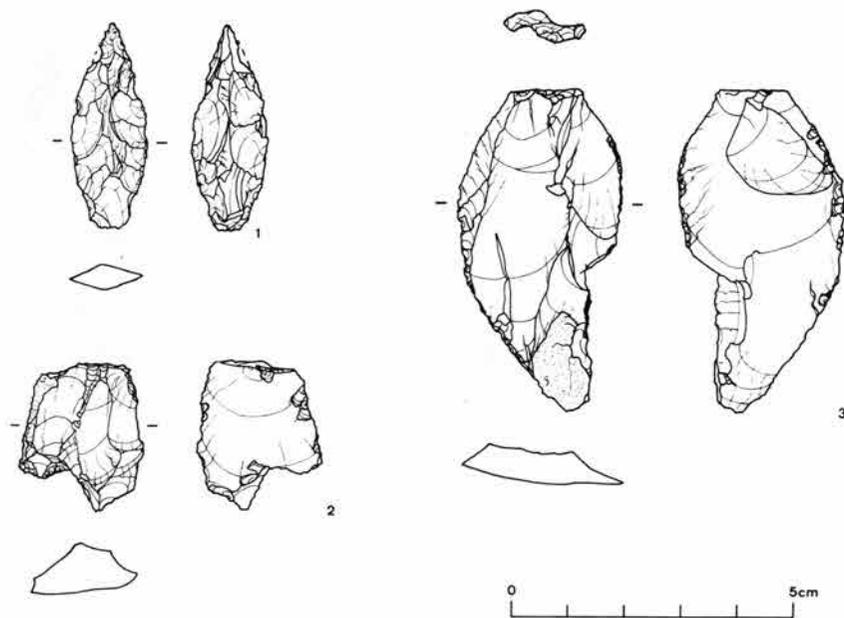
第39図 鳥取城跡出土土器実測図

できよう。口縁部は上方にまっすぐ立ち上がる。口縁部内外面は横ナデ調整，体部外面はハケ調整，体部内面はヘラケズリを施す。外面の一部に赤色顔料が残る。胎土はやや粗く，色調は淡灰黄色を呈する。5は長頸壺である。ゆるやかに外上方に開く口縁部は，端部を丸くおさめる。頸部内面には，しぼり痕がみられる。調整・胎土・色調とも4の水差しと同様である。6は壺の口縁部，7は甕の口縁部である。1～5は土坑内に並べて置かれていた土器で，大宮町大谷古墳下層の弥生時代墳墓(大谷遺跡^(注34))出土の土器と極めて類似している。弥生時代中期末～後期初頭に位置づけられるものと考えられる。

③その他の遺構に伴う土器(第39図)

1～4は，溝6出土の弥生土器である。1・2は壺の口縁部で，端面にはそれぞれ，4条と3条の浅い沈線を施す。1の外面には赤色顔料が塗られている。1・2ともに胎土はやや粗く，色調は1が暗褐色～淡茶褐色，2が淡灰黄色を呈する。3は壺か甕の口縁部で，胎土はやや粗い。4は高杯の脚台部で，外端面に1条の凹線を巡らせる。外面はナデ，内面はヘラケズリを施す。胎土はやや粗く，淡橙灰色を呈する。

5は，ピット6出土の弥生土器高杯の脚柱部である。内面を縦方向のハケメで調整している。胎土は他の弥生土器に比べてよく，色調は乳白色を呈する。6・7は，ピット150出土の土師器甕である。6は体部外面にハケ調整，内面にヘラケズリを施す。7は摩滅により調整は不明である。8は，ピット119出土の土師器で，竈の底部であろうと思われる。



第40図 鳥取城跡出土土器実測図

端部は短く外に屈曲し、平坦な端面を持って終わる。底から約4cm上位に、直径約1.5cm程度の円形に復原できる焼成前穿孔がある。外面は粗いハケ調整、内面にも弱いハケ調整が施される。胎土には直径2~3mmの多量の石英粒を混ぜている。

④遺構に伴わない土器(第39図)

9~13は表土中より出土した弥生土器である。いずれも小破片で残りは極めて悪い。14は、南隅拡張部の黄灰色砂質土層から出土した弥生土器の底部で、外面は縦方向のハケ調整が施される。

⑤石器

1はササカイト製の石鏃で、表土中より出土した。長さ3.6cm・幅1.3cm・厚さ0.5cmを測る。石材も悪く、技法も稚拙な粗製品である。弥生時代中期のものであろう。

2は加工痕のある剥片で、石材は鉄石英である。叉状の抉りのある部分に細かな加工痕が見られ、石器であろうと思われる。法量は長さ2.6cm・幅2.2cm・長さ0.9cmを測る。表土から出土した。旧石器時代の所産である可能性がある。

3は玉髓製のスクレイパーである。縦長剥片を素材とし、両側縁を細かく調整している。長さ5.7cm・幅2.9cm・厚さ0.6cmを測る。溝1掘削後、溝1の底面を精査中に発見した。地山と考えていた明灰黄色砂質土層からの出土である。

5. ま と め

鳥取城は、丹後守護一色氏の部将栗田内膳正の居城で、天正10(1582)年、細川藤孝の部将松井康之の軍勢に破れて落城したものと考えられている。昨年度の試掘調査で、13世紀代の墓とみられる土坑を切って、掘立柱建物跡が検出されており、今回の調査では、15世紀代に埋没した土坑1・溝3・溝8や、平坦地を区画する溝が検出された。これにより、この広い平坦地に中世の遺構が広がっていることが確認された。しかし、第1調査区では城郭の一部と認められるような人工の防御施設は検出されず、第2調査区でも地形の改変はごく小規模であったと考えられる。したがって、段丘の北と南西の低湿地が自然の堀の役割を果たすとしても、この段丘面上の平坦地をも城郭の一部とみなすことは無理があるように思われる。しかし、青磁碗や茶臼が出土したことは、この地に喫茶の習慣を持つ階層の人が住んでいたことを示している。当時、相当な貴重品であった茶臼を保有していたのは在地の豪族もしくはその家臣団の中でも有力な者であろう。このような豪族の居館や家臣団の屋敷地がこの平坦地の上に存在したことが想定されるが、今回の調査では、その建物等の遺構を確認することはできなかった。

また、今回の調査で、昨年度の試掘調査結果からは予想もされなかった弥生時代の遺構、

遺物が検出された。特に、土坑2から出土した弥生土器は、5つの器種がセットとして、同時に置かれたものと考えられ、この地方の弥生土器の組成を知ることのできる資料として重要である。次に土坑2の性格であるが、土器に朱が塗られていることから、祭祀に関わる土坑であることは確実であろうが、土坑の形状からみて墓壙とは考えられない。土坑の長軸、短軸の方向が、溝6の方向と一致し、また、出土遺物からみても、溝6と土坑2が併存していた可能性があることから、両者一体で祭祀空間を形成していたものとも見ることができよう。しかし現状では類例がなく、今後委ねたい。

さらに、今回の調査では、旧石器時代のスクレイパー等が出土した。これまで丹後地方で最も古いとされていた3例の有茎尖頭器よりも遡る資料であるという点ばかりでなく、縦長剥片を素材とする技法から、中部・東日本との技術的交流が考えられる点で注目される。なお、第1調査区内で、2m×2mのグリッドを3か所設けて、明灰黄色砂質土を掘削したが、旧石器は出土しなかった。

(森島 康雄)

注1 増田孝彦・三好博喜・鶴島三寿「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
 増田孝彦・森 正・荒川 史他「国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

注2 調査参加者(順不同・敬称略)

東部地区 吉岡英一郎・横井川博之・三好勝寛・藤田明弘・山本克則・藤原康生・稲岡淳之・下ノ村実・福山 誠・山崎 誠・笠原勝彦・三木英樹・中鼻新吾・井本有二・津金崇樹・岩崎浩一・赤川真弘・大西智也・黒田憲一・松井政子・三井小百合・千葉智子・松浦万弓・戸根説子・山野美奈子・坂井 晶・橋ますえ・田中由美・田中 正・高原与作・山副 同・坪倉勇一・上田忠志・吉岡 博・林栄三郎・川戸利雄・松田正行・吉村 保・山副武志・松村 仁・平林秀夫・吉岡 茂・森岡良策・吉岡富雄・山副登美夫・吉岡武彦・藤原忠雄・行待守夫・深田志郎・平林志げ子・平林好子・平林直美・林 初江・谷口勝江・小谷由利子・藤原恵子・森本須都子・後藤嘉一郎

西部地区 小笠原順子・川岸恵理・川勝 修・山上智功・増田朱美・日生下民夫・小林浩司・東 高志・上田浩司・原 美代・杉本 智・山口たか・松岡しげ・稲葉みね子・松田秋江・吉岡千春・岡野三代・辻田松枝・田中誠一・山添圭三・西山辰王・西山ミツ・松田きぬ江・田中照夫・田中正省・高谷君枝・西山久枝・岡辻 京・松本修一・岡田桂子・中野繁春・平林一馬・野村たつ子・谷口国夫・山口辰男・岡下昌隆・武田敏枝・小西不二子・吉谷米二郎・竹野内久二・小森誠一郎・小森トミ江・森口敏治・秋田義和・中西 博・小国歌子・辻本睦子・西垣隆男・早田直明・三川郁男・足立加代・内垣良雄・小国 勉・小国美好・辻本司郎・田中 種・野村三枝・早田鶴子・早田睦子・中野光兼・中野孜子・野村信夫・足立正直・和田啓美・石田多美枝・安川貴代美・安田由美子・中川啓子・岩田典子・松宮やす江

注3 岡田晃治他「国営農地開発事業関係遺跡昭和62年度発掘調査概要〔2〕スクモ塚古墳群Ⅱ」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1988)』京都府教育委員会) 1988

注4 岡田晃治「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要〔4〕スクモ塚古墳群」(『埋蔵文

- 化財発掘調査概報(1987)』京都府教育委員会) 1987
- 注5 増田孝彦・佐伯英樹「国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡(3)新ヶ尾東古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注6 増田孝彦「7. 遠所古墳群(1号墳)」(『京都府埋蔵文化財情報』第26号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注7 三好博喜「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡(2)桃山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注8 長谷川達「国営農地開発事業関係遺跡昭和62年度発掘調査概要〔3〕名木山38号墳」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1988)』京都府教育委員会) 1988
- 注9 平良泰久「丹後地域昭和56年度分布調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1982)』京都府教育委員会) 1982
- 注10 岡田晃治「国営農地開発事業関係遺跡昭和62年度発掘調査概要〔4〕下上野遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1988)』京都府教育委員会) 1988
- 注11 京都府教育委員会「上野古墳群」(現地説明会資料) 1988
- 注12 佐藤晃一他「小虫山古墳群—調査の概要—」(『加悦町文化財調査概要』3 加悦町教育委員会) 1985
- 注13 梅原末治「竹野郡竹野産土山古墳の調査」(『京都府史蹟名勝天然紀年物調査報告』第21冊 京都府) 1931
- 注14 増田孝彦・鶴島三寿「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要(1)有明古墳群・横穴群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注15 森 正他「国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要(2)普甲古墳群・稲荷古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注16 亀田 博「堅櫛」(『末永先生米壽記念献呈論文集』末永先生米壽記念会) 1985
- 注17 注4に同じ
- 注18 注3に同じ
- 注19 三好博喜「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要(4)ゲンギョウの山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注20 林 和廣・三浦 到「網野町の遺跡(埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書)」(『京都府網野町文化財調査報告』第4集 網野町教育委員会) 1986
- 注21 梅原末治「神明山古墳」(『京都府史蹟勝地調査報告』1 京都府) 1919
- 注22 注20に同じ
- 注23 山内陽詳「畑塚古墳群」(京都府久美浜町文化財調査報告書第10集 久美浜町教育委員会) 1988
- 注24 坪倉利正・釋 龍雄「京都府奥丹後地方の有舌尖頭器」(『古代文化』24-9 古代学協会) 1972
- 注25 久美浜中学校生徒大江稔弘君の教示による
- 注26 高橋美久二「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1968
石井清司他「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981
戸原和人他「橋爪遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
細川康晴「橋爪遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第27冊 (財)京都府埋蔵文

- 化財調査研究センター) 1988
- 注27 久保哲正他『権現山古墳発掘調査概報』(京都府久美浜町文化財調査報告第9集 久美浜町教育委員会) 1984
- 注28 奥村清一郎他『湯舟坂2号墳』(京都府久美浜町文化財調査報告第7集 久美浜町教育委員会) 1983
- 注29 岡田晃治他「国営農地開発事業関係遺跡昭和62年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1988)』京都府教育委員会) 1988
- 注30 注1に同じ
- 注31 岡田晃治他「国営農地開発事業関係遺跡昭和62年度発掘調査概要〔7〕日光寺古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1988)』京都府教育委員会) 1988
- 注32 森島康雄「日光寺遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第31号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注33 関西考古学研究者連合「京都府久美浜町浦明遺跡調査報告書1」(『関西考古学資料集』1) 1973
- 松井忠春『浦明遺跡』(京都府久美浜町文化財調査報告書第3集 久美浜町教育委員会) 1980
- 注34 奥村清一郎他『大谷古墳』(大宮町文化財調査報告第4集 大宮町教育委員会) 1987

2. 北谷城跡・西八田城跡試掘調査概要

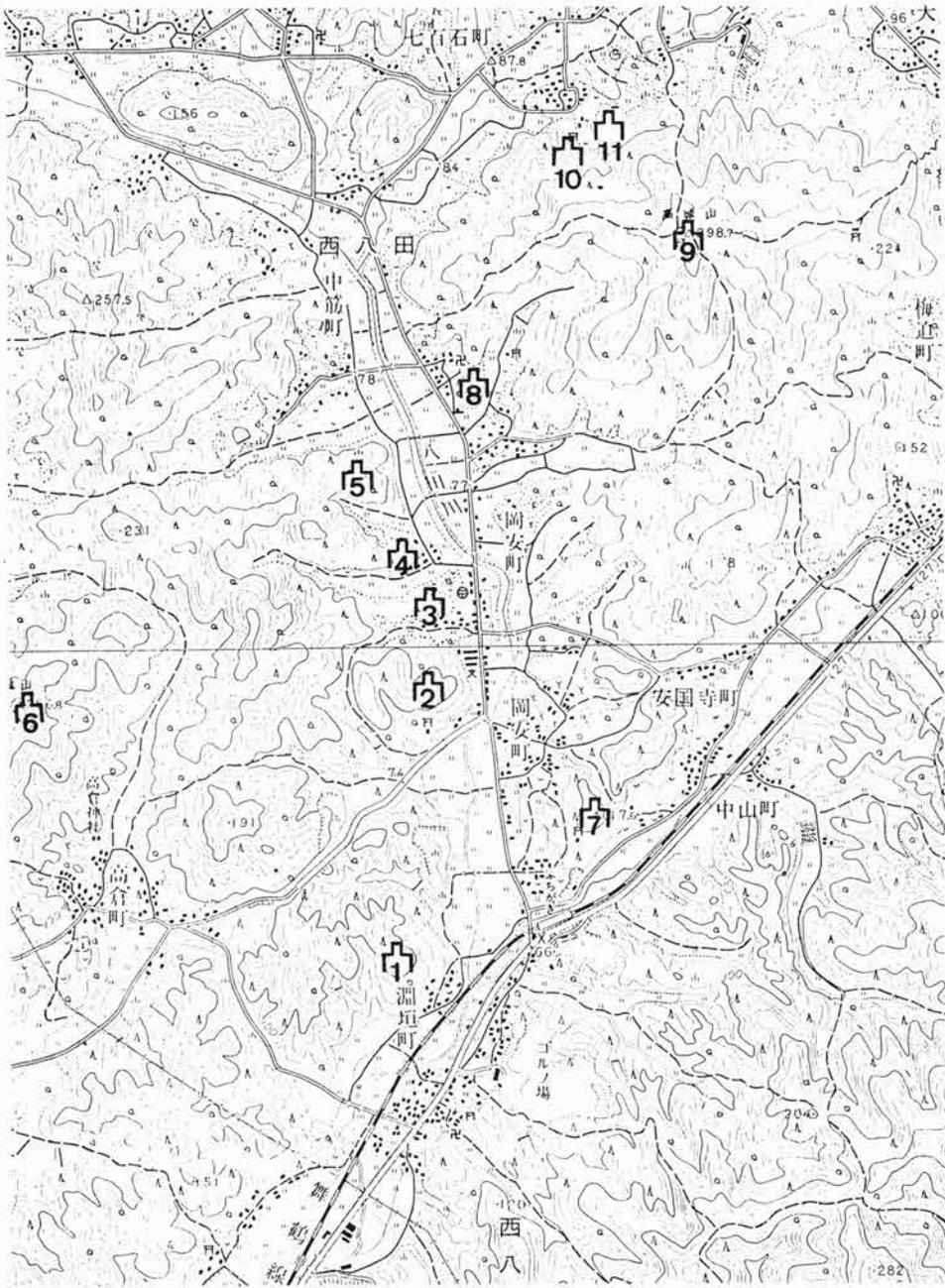
1. はじめに

綾部市内では、60か所余りの城跡が確認されている。このうち、発掘調査が行われたのは、八津合町の上林城跡^(注1)、七百石町の平山城跡・平山東城跡^(注2)、豊里町の福垣城跡^(注3)である。また、物部町の浅根山城跡^(注4)の測量調査が行われている。上林城跡では、山頂部の本丸跡から石垣や半地下式礎石建物跡などが、周辺の郭跡からは3条の堅堀などが検出されている。平山城跡では14条の堅堀や礎石建物跡が、平山東城跡でも建物跡などが検出されている。また、福垣城跡からは、礎石建物跡や横堀などが検出されている。いずれも、戦国時代の城跡で、輸入磁器なども出土している。

北谷城跡・西八田城跡は、由良川の支流である八田川の中流域に位置する。両城跡とも、八田川西岸の丘陵上に位置する山城跡である。北谷城跡は、京都府綾部市淵垣町北谷にある。八田川に面した丘陵頂部には、「コ」字形に土塁で囲まれた本丸とみられる平坦地があり、この平坦地の南および南東には、麓に向かって段々状に郭とみられる小平坦地が続く。また、本丸とみられる平坦地の背後には、尾根の稜線を断ち切る大規模な堀切がある。今回の調査地は、この堀切部分から北側にかなり離れた場所であり、城跡に関する遺構・遺物の有無を確認するために調査を行った。西八田城跡は、京都府綾部市岡安町にあり、北谷城跡の北側約850mの丘陵上に位置する。今回の調査は、丘陵頂部や周辺の小平坦地について、城跡に関する遺構・遺物の有無を確認するために実施した。

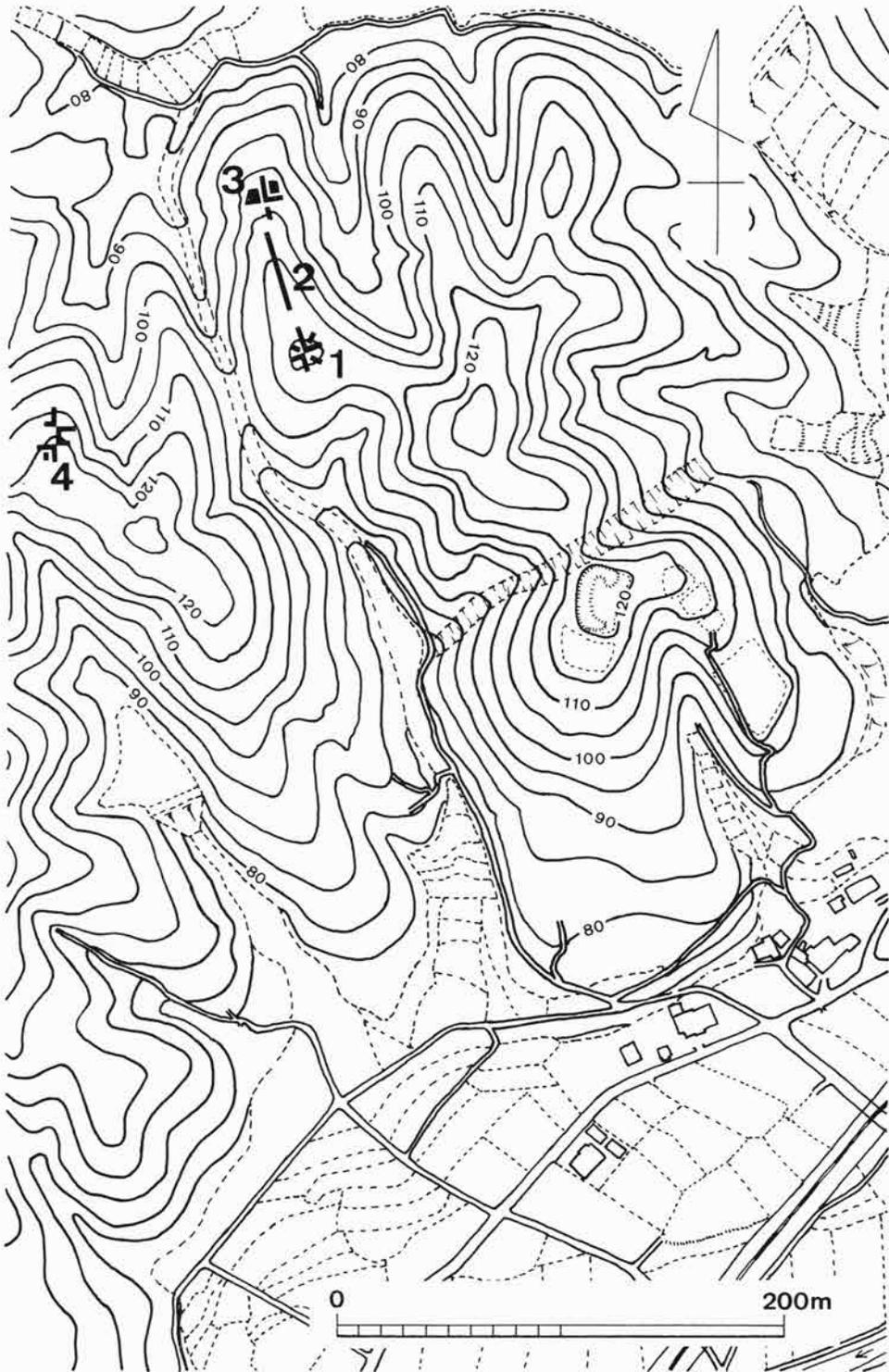
この両城跡の調査は、綾部工業団地造成事業に伴うものであり、当調査研究センターが京都府企業局の依頼を受けて実施した。調査に係る経費は、京都府企業局が全額負担した。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係係長水谷寿克・主任調査員引原茂治が担当して実施した。現地調査については、調査地点の確認や樹木伐採を昭和63年11月1日から開始し、12月1日から掘削に着手した。北谷城跡の掘削は12月22日に、西八田城跡の掘削は平成元年1月10日に終了した。その後、実測等を行い、平成元年1月27日に機材を撤収して、現地調査を終了した。調査面積は700m²である。

現地調査にあたっては、多くの地元の方々や学生諸君に協力していただいた^(注5)。また、依頼者の京都府企業局をはじめ、京都府教育委員会・京都府綾部工業団地建設事務所・綾部市教育委員会・綾部市立西八田小学校・淵垣町自治会・岡安町自治会などの関係諸機関からもご協力いただいた。なお、綾部市教育委員会技師中村孝行氏からは、格別のご協力・ご教示があったことを特記して感謝したい。



第41図 城跡位置図 (1/25,000)

- | | | | |
|---------|----------|-----------|----------|
| 1. 北谷城跡 | 2. 西八田城跡 | 3. 岡安城跡 | 4. 岡安北城跡 |
| 5. 姫城跡 | 6. 高倉城跡 | 7. 中山城跡 | 8. 嶋間城跡 |
| 9. 高城城跡 | 10. 平山城跡 | 11. 平山東城跡 | |



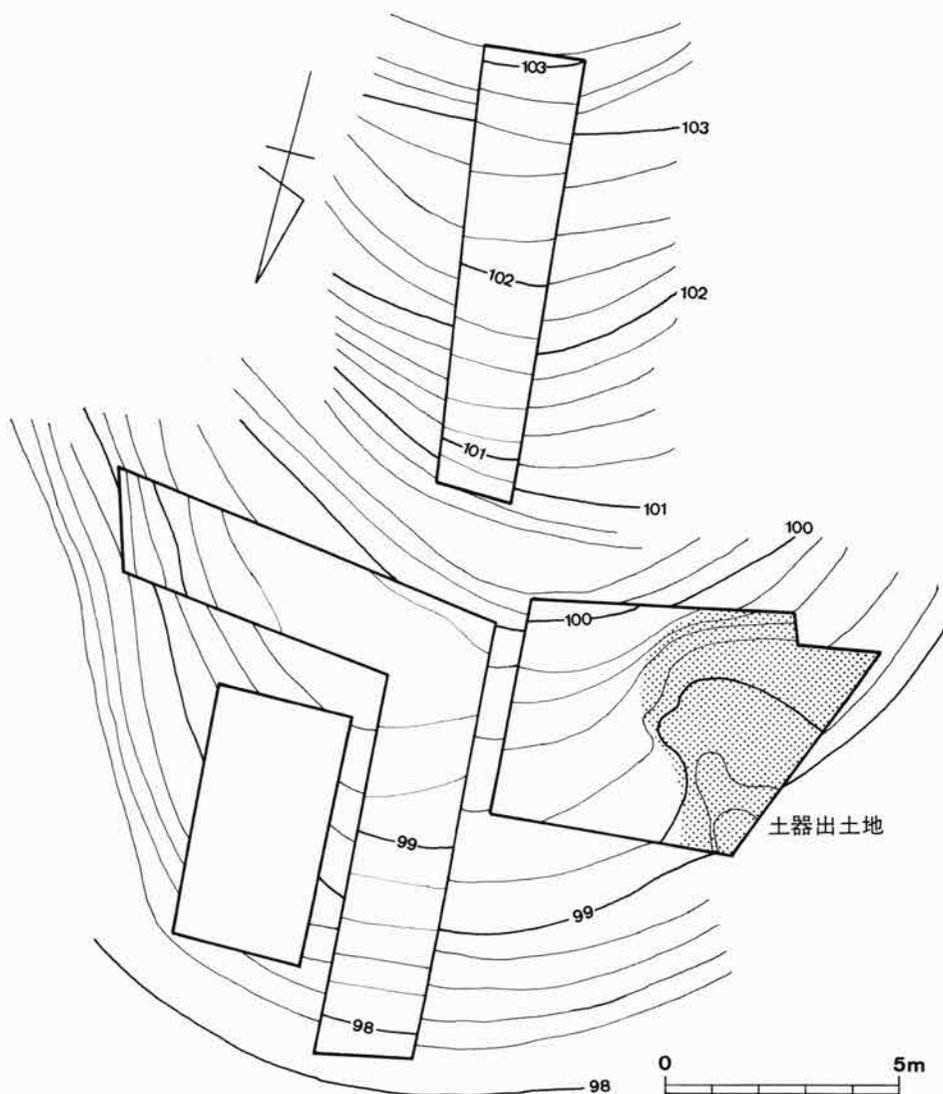
第42図 北谷城跡調査地位置図

2. 北谷城跡

北谷城跡については、遺構・遺物の存在する可能性が考えられる支丘陵頂部や小平坦地4か所について調査した。仮に1～4地区とする。

(1) 1地区

支丘陵の頂部にあたる。古墳状の隆起部がみとめられ、その部分を調査対象とした。トレンチを設定して掘削を行ったが、表土である腐植土の直下は地山であり、遺構・遺物と

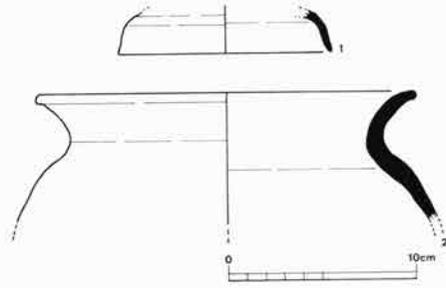


第43図 北谷城跡 3地区地形図

もに存在しなかった。

(2) 2地区

1地区から北側にのびる尾根の稜部である。わずかに段々状になった地形がみられる。尾根の稜線に平行してトレンチを設定して掘削を行ったが、表土である腐植土の直下は地山である。表土下に灰黄色土がわずかに認められる部分もあったが、地形の



第44図 北谷城跡3地区出土遺物実測図

わずかなくぼみ部分にたまったものとみられる。遺構・遺物は存在しなかった。

(3) 3地区

2地区北側の支丘陵端部にあたり、小平坦地状の地形をなす。試掘の結果、須恵器片・土師器片が出土した。遺構が存在するとみられたため、遺物が出土した箇所の周辺を拡張して掘削したが、顕著な遺構は存在しなかった。遺物は、上方から流出して地形のくぼみに堆積した土中に含まれている状態であった。出土遺物からみて、かつては古墳などがあった可能性があるが、細い尾根地形でもあり、すでに流出して残存していないとみられる。

出土した土器片は、須恵器は杯蓋の小片が1片のみで、その他はすべて土師器片である。土師器の器種としては、甕・高杯などがあるが、図示できるものは少ない。

須恵器杯蓋1は、小片のため詳細は不明であるが、小形化しており、稜線もみられない。陶器編年のTK209からTK217形式の間に位置付けられるものとみられ、7世紀初頭前後のものと思われる。土師器甕2は、表面が剥落しており調整は不明である。体部内面上半部は、横方向のヘラ削りがなされているものとみられる。

(4) 4地区

1～3地区がある丘陵から細い谷をへだてた西側の別丘陵に位置する。丘陵頂部から北方向にのびる尾根稜線上に2段に小平坦地状地形がみられる。トレンチを設定して掘削したが、表土の腐植土直下が地山であり、遺構・遺物は存在しなかった。

3. 西八田城跡

西八田城跡は、全域が開発される予定で、城であれば本丸にあたる丘陵頂部や、派生する尾根上の郭の可能性のある小平坦地など、3か所を調査した。仮に1～3地区とする。

(1) 1地区

頂部に平坦地があるが、土塁などはみられない。頂部から尾根に沿ってほぼ西側30mの地点に、人工的に掘り切られた部分があり、頂部からこの掘切部にかけてトレンチを設定



第45図 西八田城跡調査地位置図

し、掘削した。頂部については、表土の腐植土下が地山であり、遺構・遺物は存在しなかった。

頂部と堀切部のほぼ中間にあたるところで、蛇行気味に尾根を横切る溝を検出した。この溝は、幅約50~80cm・深さ約30cmである。地山の岩盤を掘り込んで作られている。この溝からは、遺物は出土していない。

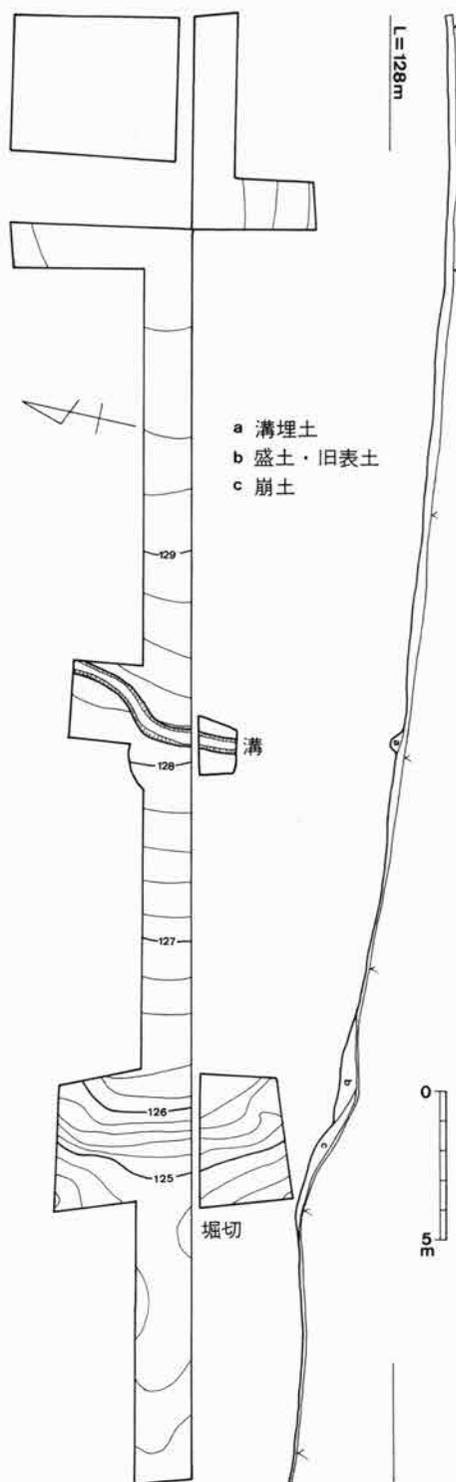
堀切部については、掘削前には頂部側の東側肩部がわずかに平坦になっている程度で、顕著な土塁状の盛り上がりなどはみられなかった。断ち割りによる層序観察から、東側肩部には、地山上に旧表土とみられる層があり、その上に層厚約40cmの盛土とみられる層の堆積をみとめた。また、旧表土面から地山にかけて約1.4m掘り込んでいる。このような状況からみて、堀切の廃土を東側に土塁状に盛り上げていたものとも推定できる。なお、この堀切部からは、遺物が出土していない。

(2) 2地区

1地区北側の丘陵斜面にある小平坦地である。トレンチを設定して掘削したが、表土である腐植土直下は、赤褐色土の地山であり、遺構・遺物は出土しなかった。

(3) 3地区

1地区東側の丘陵斜面にある平坦地である。この地点は、現在、東麓にある綾部市立西八田小学校の公園となっている。戦前戦中には遙拝所であったとのことである。トレンチを2か所に設定して掘削したが、上記のような事由で削平された部分や盛土



第46図 西八田城跡1地区地形図

して平坦地を拡張した部分もあり、遺構・遺物ともに出土しなかった。

4. 小 結

北谷城跡については、先に記したとおり、調査地の南側に大規模な堀切を伴う城跡とみられる場所がある。この堀切から調査地までの丘陵部には、明確に城跡の遺構とみられるものはない。今回の調査地においても、城跡に関係するとみられる遺構・遺物は検出していない。このような状況からみて、北谷城跡の範囲は堀切部までであり、その堀切以北には及んでいないものとみられる。

西八田城跡については、丘陵頂部付近で溝と堀切を検出したものの、遺物が出土していないため、それらの時期・性格については不明である。このように、溝や堀切が城跡に伴う遺構と断定できないので、西八田城跡そのものについても、城跡であるか否かについては不明である。仮に城跡としても、調査地の状況などからみて、今回検出した溝と堀切以外には、遺構は残存していないものとみられる。 (引原 茂治)

- 注1 中村孝行ほか「上林城跡」(『綾部市文化財調査報告』第7集 綾部市教育委員会) 1980
中村孝行「上林城跡第3次発掘調査概報」(『綾部市文化財発掘調査報告』第8集 綾部市教育委員会) 1981
- 注2 藤原敏見ほか「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
黒坪一樹・鍋田 勇ほか「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第31冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注3 注2に同じ
- 注4 注1に同じ
- 注5 佐竹尊樹・藤田順基・品田俊治・田鶴谷京・片山勇雄・井田愛治郎・井田通枝・梅原かず江・今井助雄・今井和二郎・安野正夫・白木 茂・大槻和子・白木琴枝・大槻與三郎・繁尾善昭・白木良夫・稲葉逸郎・岡村 勇・藤山義信・今井とめ・四方章一・塩尻 武・谷 光治・四方勇・室木昇太郎・小村敏夫・四方金治・四方正直・木戸 勝・四方 晋・由良秀樹・福島俊太・渡辺節子・藤山留美・仲井美香子・吉崎直美・西田博紀・川見晋也

付記 今回調査した両城跡は、当初、澗垣城跡・岡安城跡という名称を用いていたが、『京都府遺跡地図』第2分冊〔第2版〕(京都府教育委員会 1987)の記載と異なることが判明したので、今後の混乱をさけるため、同地図に準じて、北谷城跡・西八田城跡と名称を変更した。

3. 青野西遺跡第4次発掘調査概要

1. はじめに

青野西遺跡は、綾部市街地の北側、由良川の南岸に位置する。今回の調査地は、京都府綾部市青野町上フケにあり、青野西遺跡の北端付近にあたる。

青野西遺跡の東側には、由良川中流域における代表的な集落遺跡として知られる青野遺跡がある。青野遺跡では、これまで13次にわたる調査が行われ、弥生時代中期から奈良時代頃にかけての複合集落遺跡であることが確認されている。青野遺跡では、弥生時代後期を中心とする時期と7世紀頃を中心とする時期に多数の住居が造られている。この間の古墳時代については、住居の密度が減少する。

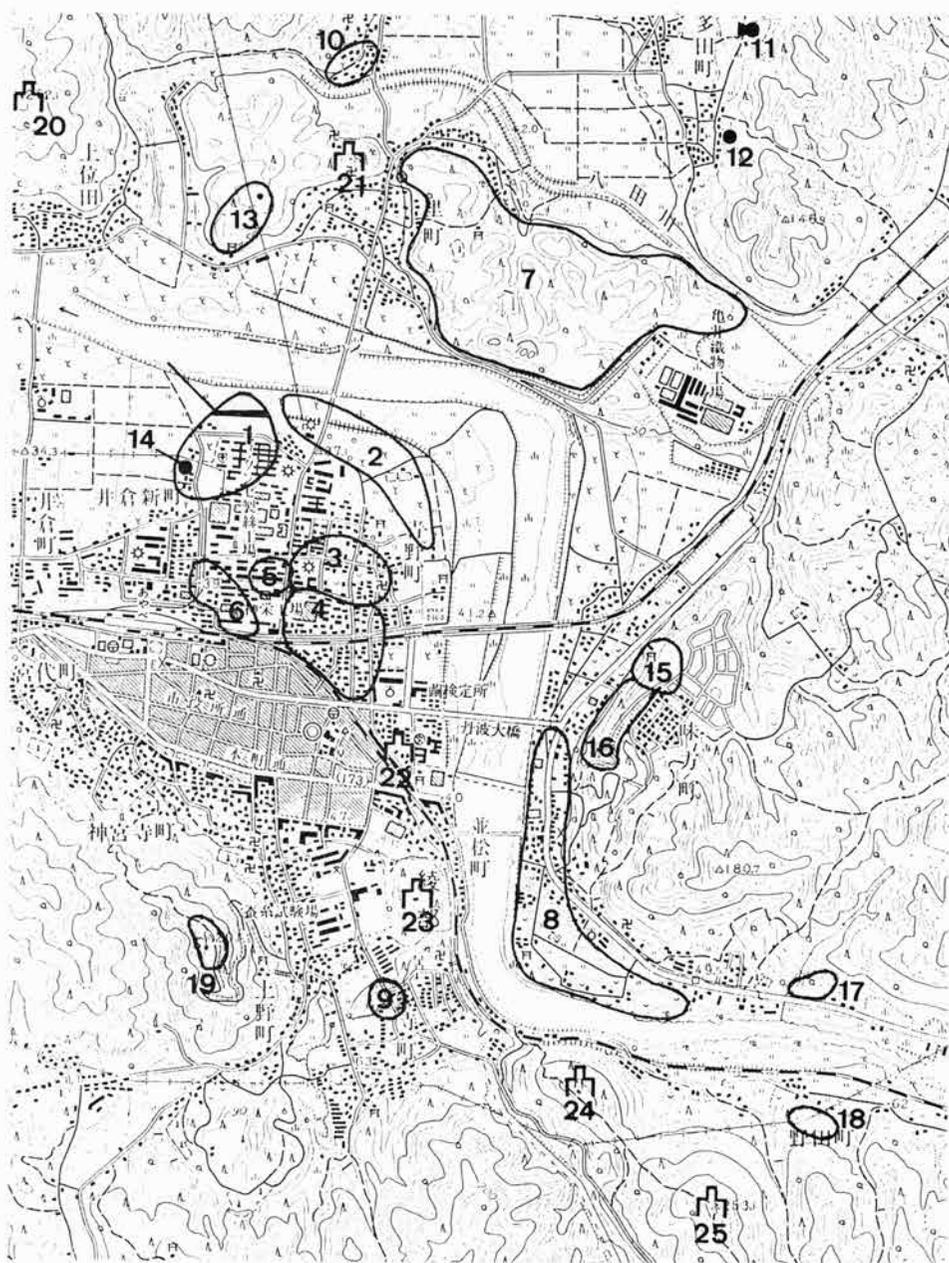
昭和57年度に、青野遺跡第8次調査が行われ、その一環として、青野遺跡西端部が試掘調査された。この試掘により、由良川旧河道と、その西側に竪穴式住居跡群が検出された。この由良川旧河道西側の竪穴式住居跡群は、青野遺跡とは立地が異なると考えられ、新たに「青野西遺跡」と名付けられた。

翌昭和58年度に、青野西遺跡第1次調査^(注1)が実施された。第1次の調査地は、今回の調査地の北側に隣接しており、弥生時代末から古墳時代前期にかけての竪穴式住居跡15基と平安時代の溝などが検出されている。昭和62・63年度には、第2・3次^(注2)の調査が行われている。調査地は、今回の調査地の南西側約130mに位置し、古墳時代初期から前期にかけての竪穴式住居跡や前方後方形の周溝をもつ墳墓、古墳時代後期の前方後円墳と考えられる痕跡などが検出されている。

今回の調査は、中丹広域農道建設工事に伴うもので、京都府中丹土地改良事務所の依頼を受けて実施した。発掘調査に係る経費は、京都府中丹土地改良事務所が全額負担した。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係係長水谷寿克・主任調査員引原茂治が担当して実施した。現地調査は、昭和63年5月20日から着手し、同年10月22日に終了した。調査面積は、1,500㎡である。なお、終了日の10月22日には現地説明会を開催し、80名あまりの一般市民の方々や関係者などが参加された。

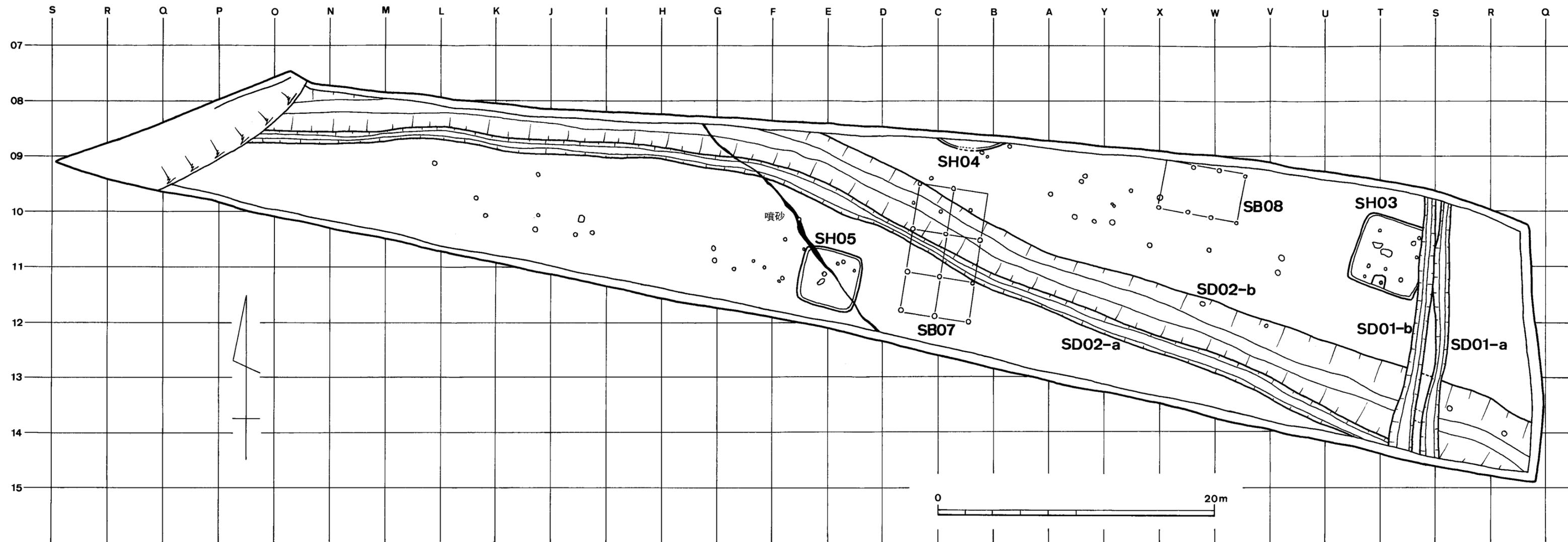
調査地の地区割については、綾部市教育委員会が従来から使用しているものを踏襲した。

調査にあたっては、多くの地元有志の方々や学生諸君に協力していただいた^(注3)。また、依頼者である京都府中丹土地改良事務所をはじめ、京都府教育委員会や綾部市教育委員会などの関係諸機関からもご協力いただいた。なお、綾部市教育委員会技師中村孝行氏・同技師補近沢豊明氏からは、格別のご協力・ご教示があったことを特記して感謝したい。

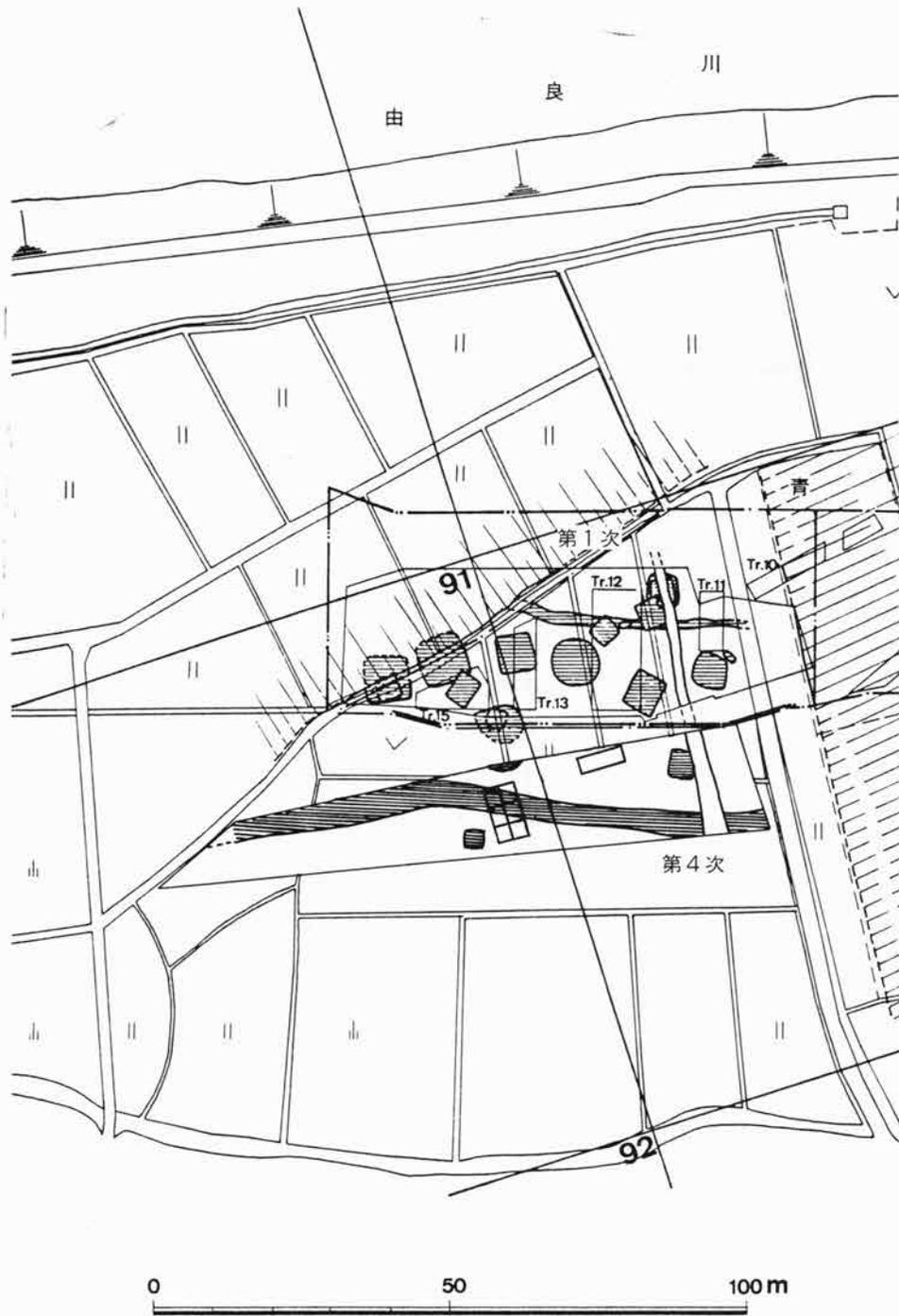


第47図 周辺遺跡分布図

- | | | | |
|------------|------------|--------------|------------|
| 1. 青野西遺跡 | 2. 青野遺跡 | 3. 青野南遺跡 | 4. 綾中遺跡 |
| 5. 西町北大坪遺跡 | 6. 西町遺跡 | 7. 久田山遺跡・古墳群 | 10. 散布地 |
| 8. 味方遺跡 | 9. 農屋敷遺跡 | 11. 城跡古墳 | 12. キツネ塚古墳 |
| 13. 里古墳群 | 14. 青野大塚古墳 | 15. 齊神社古墳群 | 16. 平古墳群 |
| 17. 平林古墳群 | 18. 野田古墳群 | 19. 藤山経塚群 | 20. 位田城跡 |
| 21. 仏南寺城跡 | 22. 綾部陣屋跡 | 23. 綾部城跡 | 24. 野田城跡 |
| 25. 白ヶ城跡 | | | |



第48図 調査地平面図



第49図 第1・4次調査地位置図

2. 検出遺構

今回の調査で検出した遺構は、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝状遺構などである。そのほか、建物としてはまともでないが、柱穴とみられるピットも多数検出している。時期的には、古墳時代初期から前期にかけての頃のもの、平安時代のものに大別される。遺構の分布状況は、まばらである。

基本的な層序は、最上層が耕作土で、その下に橙黄色の床土層がある。この床土の下に遺構のベースとなる黄灰色土混じりの茶褐色土層がある。この茶褐色土の上部には、土中の金属成分が凝固しており、これを除去しなければ、遺構は検出できない。

(1) 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構としては、竪穴式住居跡3基・溝状遺構2条がある。竪穴式住居跡は、平面が円形のもものが1基、方形のもものが2基である。溝状遺構は、新旧2条の溝が重なって並行しているため、遺構番号は同一のものを用い、新の方をa・旧の方をbとする。

a. 竪穴式住居跡SH03

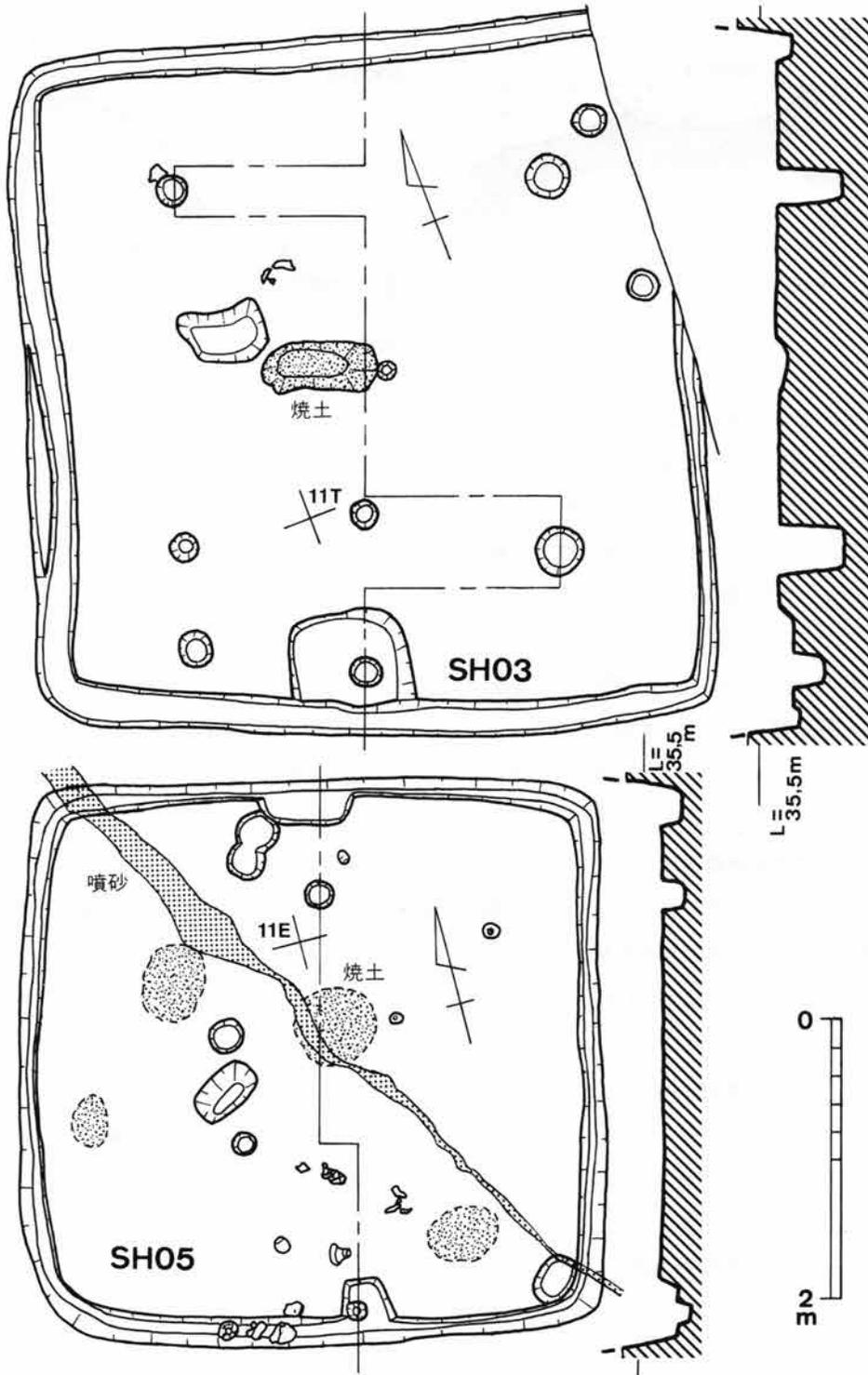
調査地東側に位置する。一辺約4.8mの方形住居跡である。東辺および北東隅部を溝状遺構SD02に切られている。残存壁高は約30cmである。周囲に幅約25cm・深さ約10cmの周壁溝をめぐる。南辺中央部に方形掘形内をさらに円形に掘りくぼめた特殊ピットを持つ。床面には、柱穴とみられるピットが4か所にみられる。ほぼ中央部に焼土の入った小土坑があるが、土坑内面には火を受けた形跡はみられない。埋土から、古墳時代前期頃とみられる土器が出土しており、その頃の住居跡とみられる。

b. 竪穴式住居跡SH04

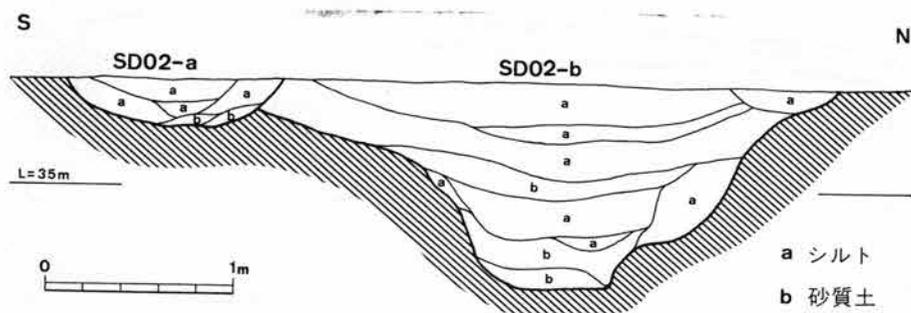
調査地のほぼ中央北側に位置する。部分的な検出であり、規模は不明である。円形の平面形をもつものとみられる。周囲に幅約15cm・深さ約10cmの周壁溝がめぐる。柱穴などは検出していない。残存壁高は約20cmである。埋土からは少量の土器小片が出土したのみで、確実に伴う遺物がなく、時期などは不明である。なお、この住居跡は、位置的に、第1次調査地の「14号住居跡」の一部ともみられ、直径10m前後の大形住居跡の可能性もある。

c. 竪穴式住居跡SH05

調査地のほぼ中央南寄りに位置する。一辺約4mの方形住居跡である。残存壁高は約20cmである。周囲に幅約20cm・深さ約15cmの周壁溝をめぐる。南辺中央部に小規模な特殊ピット、北辺中央に浅い長方形土坑を持つ。床面にはピットがあるが、柱穴となるものは不明である。住居跡内には、床面が焼けている箇所や焼土が堆積する箇所が4か所にあり、炉跡とみられる。住居跡内からは、古墳時代前期頃とみられる土器が出土しており、その頃の住居跡とみられる。



第50図 竪穴式住居跡実測図



第51図 溝状遺構SD02断面図

d. 溝状遺構SD02

調査地をやや蛇行気味に東西方向に横切る溝状遺構である。2条の溝状遺構が重なって並行している。そのうちの1条は、幅約3.2m・深さ約1.2mのSD02-bで、検出長は約94mである。もう1条は、SD02-bの南肩部を切り込んだ状態で並行するSD02-aで、幅約1.1m・深さ約30cmの浅い溝状遺構である。このような状態から、前者が後者に先行するものとみられる。

SD02-bの底部には砂が堆積しており、その中から、胴部に凸帯をもつ台付長頸壺や口縁に擬横線文をめぐらす甕などが出土した。古墳時代初期前後のものとみられる。埋土上方からは、それより新しい傾向の土器も出土している。SD02-aからは、古墳時代前期頃のものとみられる土器が出土している。

(2) 平安時代の遺構

平安時代の遺構としては、掘立柱建物跡2棟・溝状遺構2条がある。この溝状遺構は、第1次調査でも延長部分が検出されている。新旧2条の溝状遺構が一部重なりながら並行しているので、遺構番号は同一のものをを用い、新の方をa・旧の方をbとする。この他、建物としてはまとまらないが、柱穴とみられるピット多数を検出している。

a. 掘立柱建物跡SB07

調査地のほぼ中央で検出した。南北方向3間・東西方向2間の南北棟の建物跡である。北東隅の柱穴はない。柱間は、南北方向が約3m・東西方向が約2.4mで、全体として約9m×4.8mの建物跡である。南東隅の柱穴内から、糸切り高台をもつ土器碗が出土した。

b. 掘立柱建物跡SB08

調査地東寄りで検出した。南北方向1間・東西方向3間の東西棟の建物跡である。北西隅の柱穴については、精査前に設けた排水溝にかかるため、検出していない。柱間は、南北方向が約3.6m・東西方向が約1.8mで、全体として約3.6m×4.8mの建物跡である。

c. 溝状遺構SD01

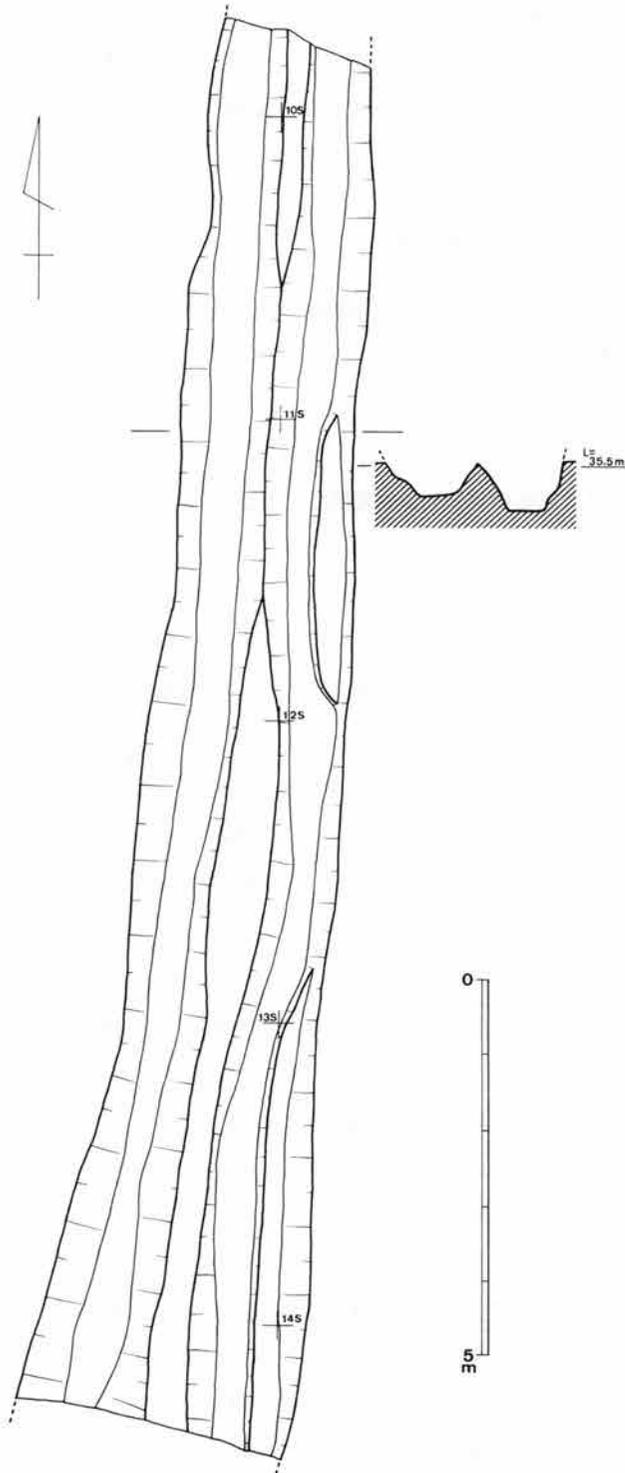
調査地東端部付近で検出した。調査地を南北に縦断する溝状遺構である。竖穴式住居跡SH03を切って、幅約1m・深さ約40cmの溝状遺構SD01-bがあり、その東側に並行して、幅約1m・深さ約60cmの溝状遺構SD01-aがある。これらの溝状遺構は、今回の調査地では明確な前後関係がわからなかったが、第1次調査の結果を参照すれば、前者が先行する。

SD01-bからは、確実に伴う遺物が出土していない。SD01-aからは、底部や、埋土に含まれる焼土中から、糸切り高台をもつ土師器椀・黒色土器椀・鉄滓の付着したふいごの羽口などが出土している。

これらの溝状遺構は、方向的にもほぼ並行しており、ほぼ同時期のものとみられる。

(3) 噴砂

調査地ほぼ中央付近で検出した。調査地内を北西から南東方向にのびる。検出長は約20mである。最大幅



第52図 溝状遺構 SD01 実測図

は約55cmである。

この噴砂は、古墳時代前期頃の竪穴式住居跡SH05を埋土とともに断ち割っているが、平安時代の柱穴とみられるピットが切り込んでいる。したがって、この間に発生した地震によって形成されたものとみられる。

3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、古墳時代初期前後から前期頃にかけての土器と、平安時代頃とみられる土器が主たるものである。このほか、土錘や石器が少量出土している。

なお、個々の遺物の十分な検討は行えておらず、また、隣接する第1次調査地から出土した遺物との対象なども充分にはできていないので、その概要を記すにとどめる。

(1) 溝状遺構SD02-b底部出土土器(第53図)

甕1～4は、屈曲して斜め上方に立ち上がる口縁端部の外面に擬横線文を施している。体部外面は、ハケ目調整される。体部内面上部には、横方向のヘラ削りがみられる。

甕5～8は、「く」の字状に外反する口縁をもち、口縁端部が上下に張り出す。体部外面は、縦方向のハケ目調整がなされる。体部内面は、上半部に横方向、下半部に縦方向のヘラ削り調整が施される。

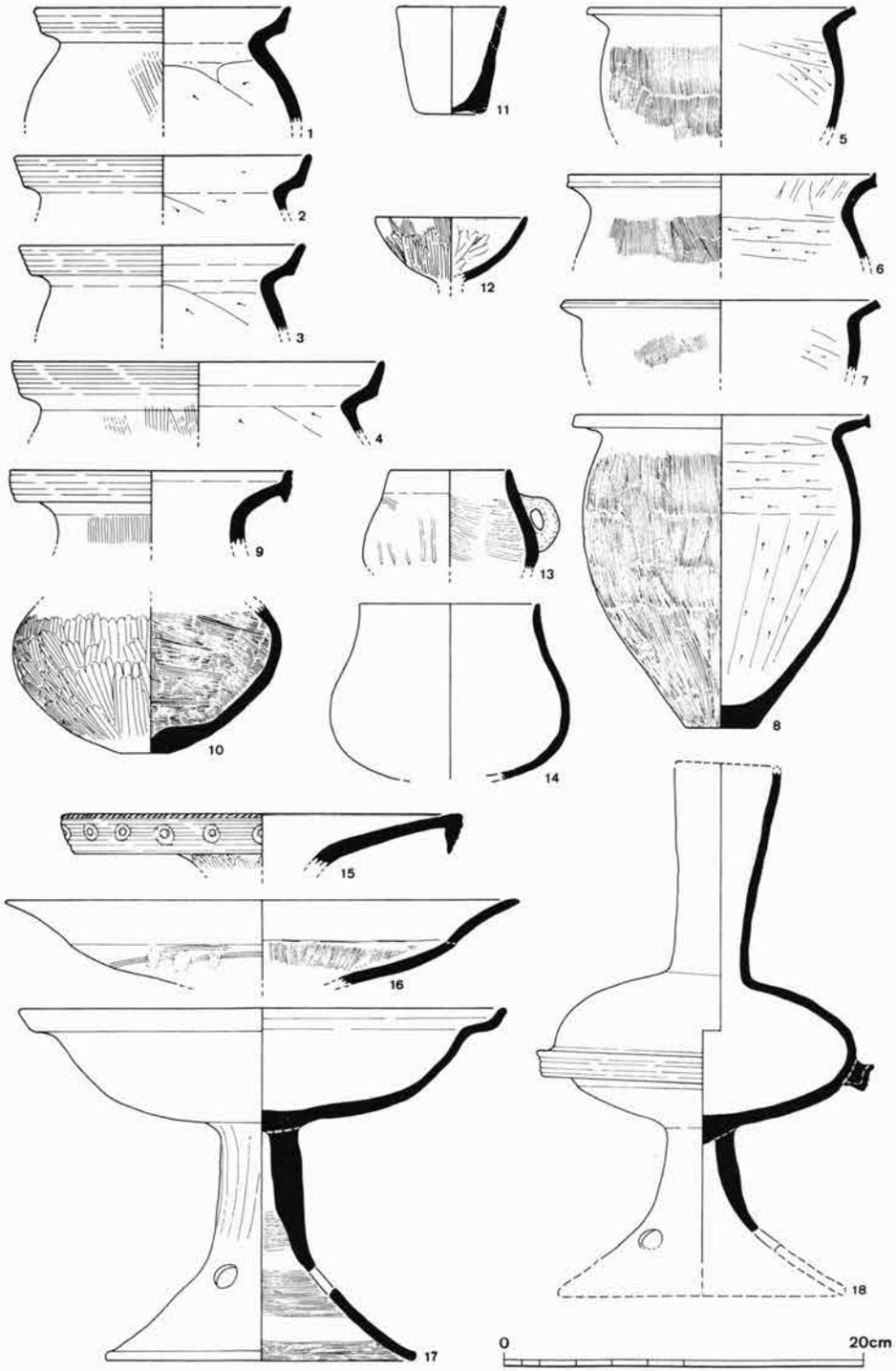
壺9は、口縁端部外面に擬横線文を施す。頸部外面には縦方向のハケ目調整がみられる。壺10は、長頸壺の体部とみられる。外面はていねいなヘラ磨き調整、内面は横方向のハケ目調整で仕上げられる。底部は若干の平面をもつ。

台付鉢12は、内湾気味に丸く立ち上がる体部をもつ。内外面ともヘラ磨き調整で仕上げられる。台付鉢13は、口縁がすぼまり気味の体部をもつ。環状の把手が付く。体部外面はヘラ磨き調整される。体部内面にはハケ目が残る。台付鉢14は、すぼまり気味の口縁をもつ。器表が荒れており、明確ではないが、ヘラ磨き調整されているものとみられる。

器台15は、垂下する口縁端部外面に擬横線文を施し、その上に竹管文を施した円形貼文を配する。上端部には、刺突列点文を施す。また、上面端部には2条の沈線をめぐらす。体部外面は、ヘラ磨き調整される。

高杯16は、外反する口縁部をもつ。内面にはハケ目がみられ、外面もハケ目がわずかに残る。高杯17は、受け口状の口縁部をもつ。杯部外面上半部はヘラ磨きされているものとみられる。下半部はヘラ削りの後ナデ調整されているものとみられる。脚部には円形の透しが三方にあり、内面にはハケ目がみられる。

台付長頸壺18は、扁平な胴部に細長い口頸部をもつ。最大胴径部の下方に、擬横線文を施した凸帯を貼り付ける。器表はやや荒れているが、ヘラ磨き調整されているものとみら



第53図 出土遺物実測図(1)

れる。脚部には、円形の透しを三方にもつものとみられる。

ミニチュア土器11は、いわゆるコップ形の手づくね土器である。内外面とも荒くナデ調整される。

以上の、溝状遺構SD02-b底部出土の土器は、明確に一括性をもつものとは言えない。総体的に、古墳時代初期を前後する頃に位置付けられるものとみられる。

(2) 溝状遺構SD02-b埋土出土土器(第54図19~24)

壺19は、二重口縁をもつ。器表は荒れており、調整は不明である。壺20は、口縁端部がやや下方へ張り出す。底部は欠失しており、形状は不明である。外面はハケ目調整、内面は荒いナデ調整である。

甕21は、「く」の字状に屈曲する口縁をもつ。体部外面は縦方向のハケ目調整、内面は、頸部付近が横方向、それ以下に縦方向のヘラ削りがみられる。甕22は、「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部はやや外反気味に面をもって終る。体部外面は縦方向のハケ目調整、内面はヘラ削り調整である。甕23は、ゆるやかに外反する口縁をもつ。体部外面は縦方向のハケ目調整、内面はヘラ削り調整である。

不明土器24は、渦巻状のスタンプ文が施される。凸帯をもっており、スタンプ文は、この凸帯と肩部とみられる位置に施される。手焙り形土器の可能性もある。

以上が、溝状遺構SD02-b埋土出土の土器の一部であるが、埋土上部から出土した壺19がSD02の埋没した時期を示すものとみられ、古墳時代前期頃のものであろう。不明土器24は、スタンプ文をもつ土器であり、当地域では注目すべき遺物である。

(3) 溝状遺構SD02-a出土土器(第54図25・26)

25は、高杯の杯部とみられる。内湾気味に丸く立ち上がる。器表が荒れており、調整は不明である。26は壺の口縁部とみられる。斜め上方に直線的に立ち上がる。これらの土器は小片であり、明確な時期は不明であるが、ほぼ古墳時代前期頃ともみられる。

(4) 耕土・床土出土土器(第54図27~33)

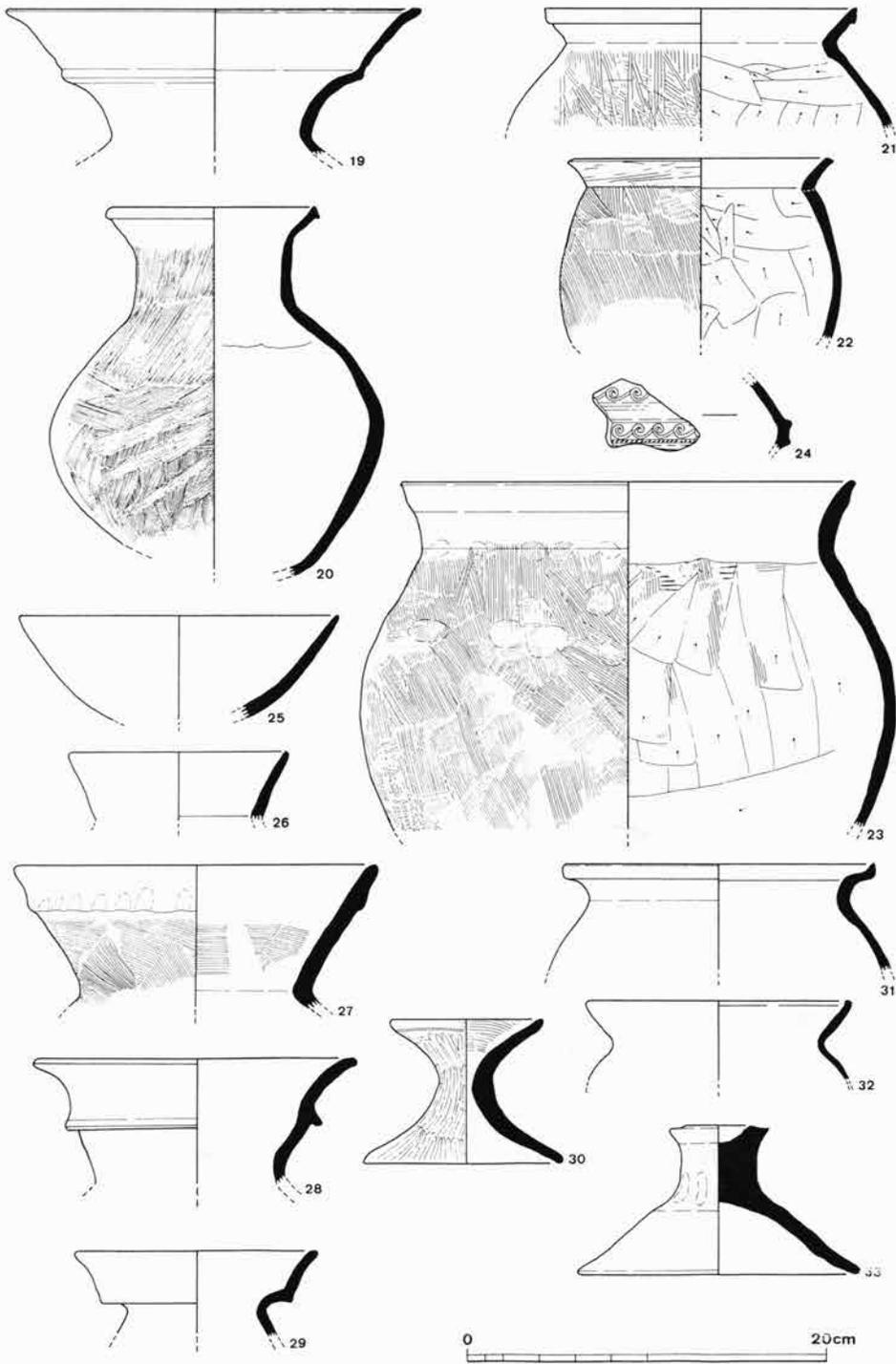
壺27は、口縁端部外面の貼り付け部分が欠落したものとみられる。頸部内外面にハケ目調整がみられる。壺28・29は、二重口縁をもつ。

甕31は、口縁端部を上方につまみ上げる。甕32は、いわゆる布留式甕である。器表が荒れており、調整は不明である。器胎は薄手である。

器台30は、外面がヘラ磨き調整、上面がハケ目調整である。蓋33は、上部を欠失している。ナデ調整される。

(5) 竪穴式住居跡SH05出土土器(第55図34~37)

ミニチュア土器34は、壺形のもので、口縁部を欠失している。卵形の胴部をもつ。底部



第54図 出土遺物実測図(2)

19~24: SD02-b, 25・26: SD02-a, 27~33: 耕土・床土

は丸味をもつ。ミニチュア土器35は、受け口状の口縁部をもつもので、壺形である。あるいは、二重口縁をもつ壺を模したものかもしれない。内面はハケ目調整である。外面は器表が荒れており詳細は不明であるが、タタキの痕跡とみられるものがある。底部は丸い。

鉢36は、底部に小孔をもつ。調整は、荒いナデである。器台37は、屈曲する口縁部をもつ。外面にハケ目がみられる。

以上の、堅穴式住居跡SH05出土の土器は、明確に時期決定できるものがないが、古墳時代前期頃に位置付けられるものであろう。

(6) 溝状遺構SD01-a出土土器(第55図44~51)

黒色土器碗44は、削り出しの輪状高台をもつ。内面および外面口縁部が黒色を呈する。内面は、密なヘラ磨き調整が施される。黒色土器碗45は、糸切り高台をもつ。内面および外面口縁部が黒色を呈する。内面には、密なヘラ磨き調整が施される。

土師器碗46~51は、糸切り高台をもつ。体部外面には、水挽き成形によるロクロ目が残る。内面は、ロクロ目をナデ消している。

以上の、溝状遺構SD01-a出土の土器のうちで、糸切り高台をもつ土師器碗は、篠窯跡群黒岩1号窯^(注4)出土の須恵器碗と非常に類似している。成形技法は、須恵器そのものである。黒岩1号窯は、10世紀中葉頃に位置付けられており、これらの土師器碗も、ほぼ同時期もしくははやおくれた頃のものともみられる。このほか、SD01-aからは、緑釉陶器片や灰釉陶器片も出土しているが、小片のため図示できない。

(7) 掘立柱建物跡SB07柱穴出土土器(第55図52)

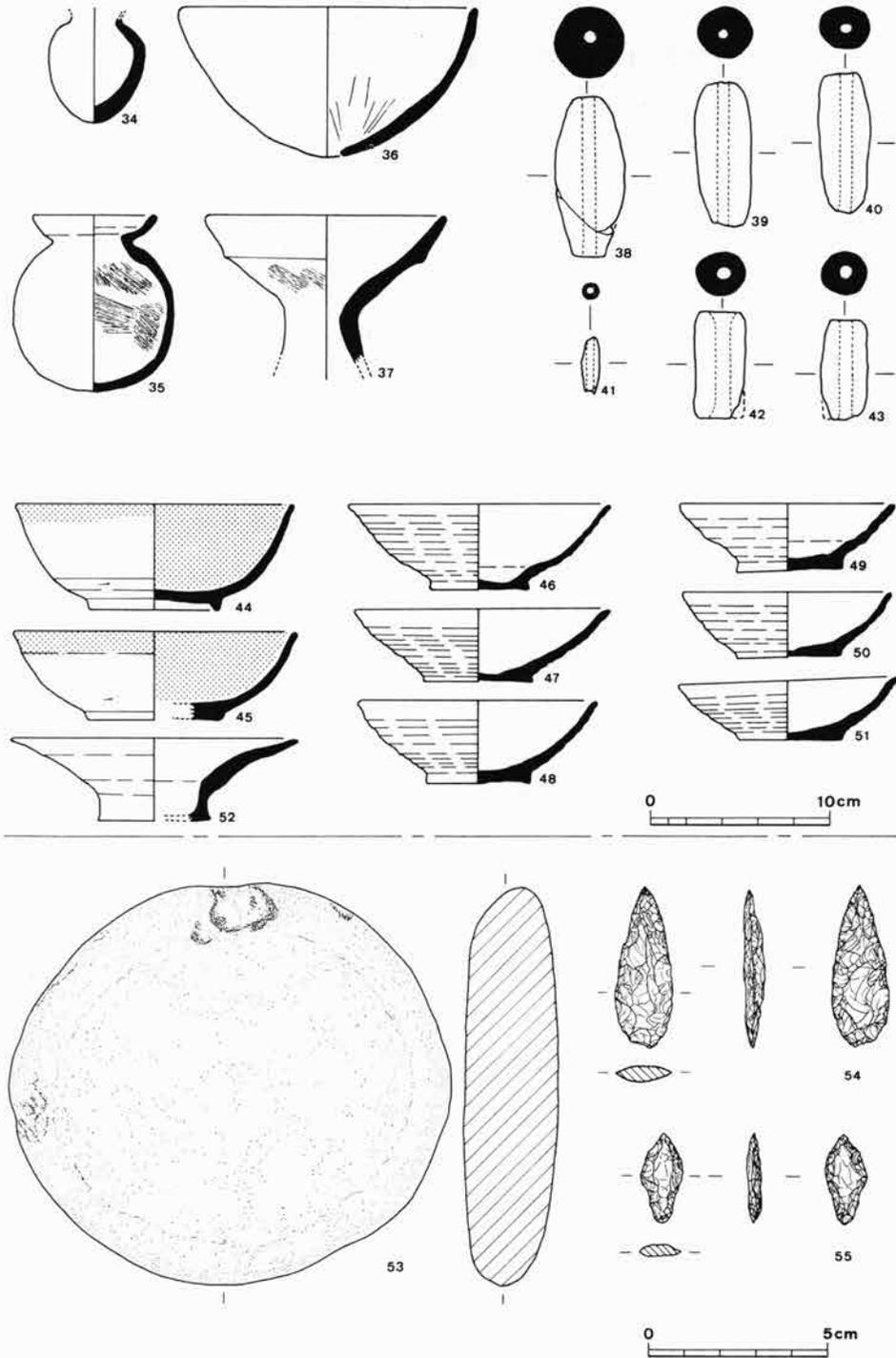
土師器碗52は、糸切り高台をもつ。体部は碗形ではなく外反する。ロクロ目はあまり明瞭ではないが、水挽き成形である。時期的には、SD01-a出土の土師器碗とほぼ同時期とみられる。

(8) 土錘(第55図38~43)

土錘38は、長さ8.9cm・直径3.9cmの大型のものである。紡錘形を呈しており、SD02-b埋土から出土した。土錘39は、長さ8.1cm・直径約3cmの大型のもので、SD02-b底部から出土した。土錘40は、長さ7.9cm・直径約3cmの大型のもので、SD02-b埋土から出土した。土錘41は、残存長2.2cm・直径1cmの小型のもので、SD01から出土した。土錘42は、長さ6cm・直径約2.7cmの中型のもので、円筒形を呈する。SH05から出土した。土錘43は、長さ5.6cm・直径約2.5cmの中型のもので、SD02から出土した。

(9) 石器(第55図44~46)

叩き石44は、直径約12cm・厚さ2.5cmの円形を呈する。石材は砂岩系とみられる。SD02-b底部から出土した。石鏃45は、長さ4.4cm・幅1.6cm・厚さ0.6cmの柳葉形を呈する



第55図 出土遺物実測図(3)

34~37 : SH05, 38~43 : 土錘, 44~51 : SD01-a, 52 : SB07, 53~55 : 石器

打製石鏃である。石材はサヌキトイドとみられる。耕土から出土した。石鏃46は、長さ2.5cm・幅1.2cm・厚さ0.4cmの小型の打製石鏃である。凸基有茎式のもので、石材はサヌキトイドとみられる。SD01埋土から出土した。

4. 小 結

今回の調査も含めた、これまでの青野西遺跡の発掘調査で検出された竪穴式住居跡は30基である。時期的には、弥生時代後期末頃から古墳時代前期頃までに限られる。青野遺跡では、この時期の住居跡は、ごくわずかである。広大な青野西遺跡の範囲のうちの、ごく限られた調査地ということを考えてすれば、この30基という数は、多い方といえよう。近辺の青野南遺跡や綾中遺跡においても、この時期の住居跡はほとんどない。

このように周辺にほとんど集落がない時期に、この青野西遺跡に集落が形成されたのかということについては、今後の調査成果に期待することとし、集落の廃絶については、第1次調査において、由良川の流路の変化によるものと推定されている。第1次調査で確認された、青野遺跡と青野西遺跡の間の由良川旧流路は、古墳時代中期頃に形成されたものとされる。これにより、第1次調査地や今回の調査地付近は洪水などの危険にさらされることになり、居住には適さなくなる。一方、やや高台である第2・3次調査地においては、庄内式併行期頃の竪穴式住居跡上に造られた、前方後方形の周溝をもつ墳墓が検出された。このほか、前方後円墳とみられる痕跡も確認されており、付近には青野大塚古墳もある。このように、古墳時代前期頃以降、居住域から墓域に変化していくことがうかがわれる。以上のように、由良川の流路の変化や居住域から墓域への変化などによって、青野西遺跡の集落が廃絶するものと推定される。

溝状遺構SD02-bは、今回検出した遺構のうちでは最も古いものとみられる。このSD02-bは、第1次調査で検出された「溝1」と方向がほぼ同じである。「溝1」は、幅1m・深さ50~70cmと規模は小さいが、第1次調査地内では最も古い遺構のうちに位置付けられている。同時期の遺構として「12号住居跡」があげられている。今回の調査地内では、SD02-bと同時期の遺構は存在しない。両溝間の距離は、約36mである。

第1次調査地の「溝1」「12号住居跡」ともに出土遺物がわずかであり、SD02-bと遺物によって同時期か否かを判断することは困難である。ただ、方向がほぼ同じという点から、同一計画性のもとに掘削されたとみることもできる。「溝1」と同時期とみられる住居跡は1基しか検出されておらず、これを集落とみなしてよいものかどうかは疑問であるが、この地に集落が形成された頃に集落を区切る溝として掘削された可能性も考えられる。

なお、「溝1」は早い段階で埋没したとされるが、SD02-bについては古墳時代前期頃ま

では存続したとみられ、埋没後すぐに、並行してSD02-aが掘削されたものとみられる。

溝状遺構SD01は、位置的に、第1次調査で検出された「溝3」の南側延長部分とみられる。この溝状遺構は掘り直しをされており、当初の溝の東側に新しい溝が設けられている。第1次調査でも指摘されているとおり、当初の溝の底部は南から北に向かって下降し、新しい溝の底部は北から南に向かって下降する。

また、この溝状遺構は、付近に残る条里地割の痕跡とみられる地割と方向がほぼ等しいため、条里地割を意識して掘られたものと推定されている。この溝状遺構と同時期とみられる掘立柱建物跡2棟についても、その棟方向が平行・直交するかたちで、方向が溝状遺構とそろっている。これら2棟の建物も、条里地割に規制されたものといえよう。

なお、SD01-aの底部から、鉄滓の付着したふいごの羽口が出土している。掘立柱建物跡の付近には、地面がわずかに赤色に焼けた部分があり、この建物の性格を考える上で、示唆的である。

^(注5) 噴砂は、震度5以上の地震によって発生するということである。綾部市内には、下八田地区に構造線があり、今回検出した噴砂は、その構造線の方向に直交する。第3次調査地でも、さらに規模の大きい噴砂が数か所検出されており、これは、構造線の延長方向にあたるということである。由良川流域では、舞鶴市の志高遺跡でも検出されている。

先にも述べたとおり、今回検出した噴砂は、古墳時代前期頃以降、平安時代中期頃までの間に発生した地震によって形成されたものとみられる。古記録に残っている丹波・丹後の地震は、8世紀初頭の大宝年間のもののみということである。時期的には、上記の期間内であり、今回検出した噴砂が大宝年間の地震によるものである可能性は考えられるが、断定するまでには至らない。

(引原 茂治)

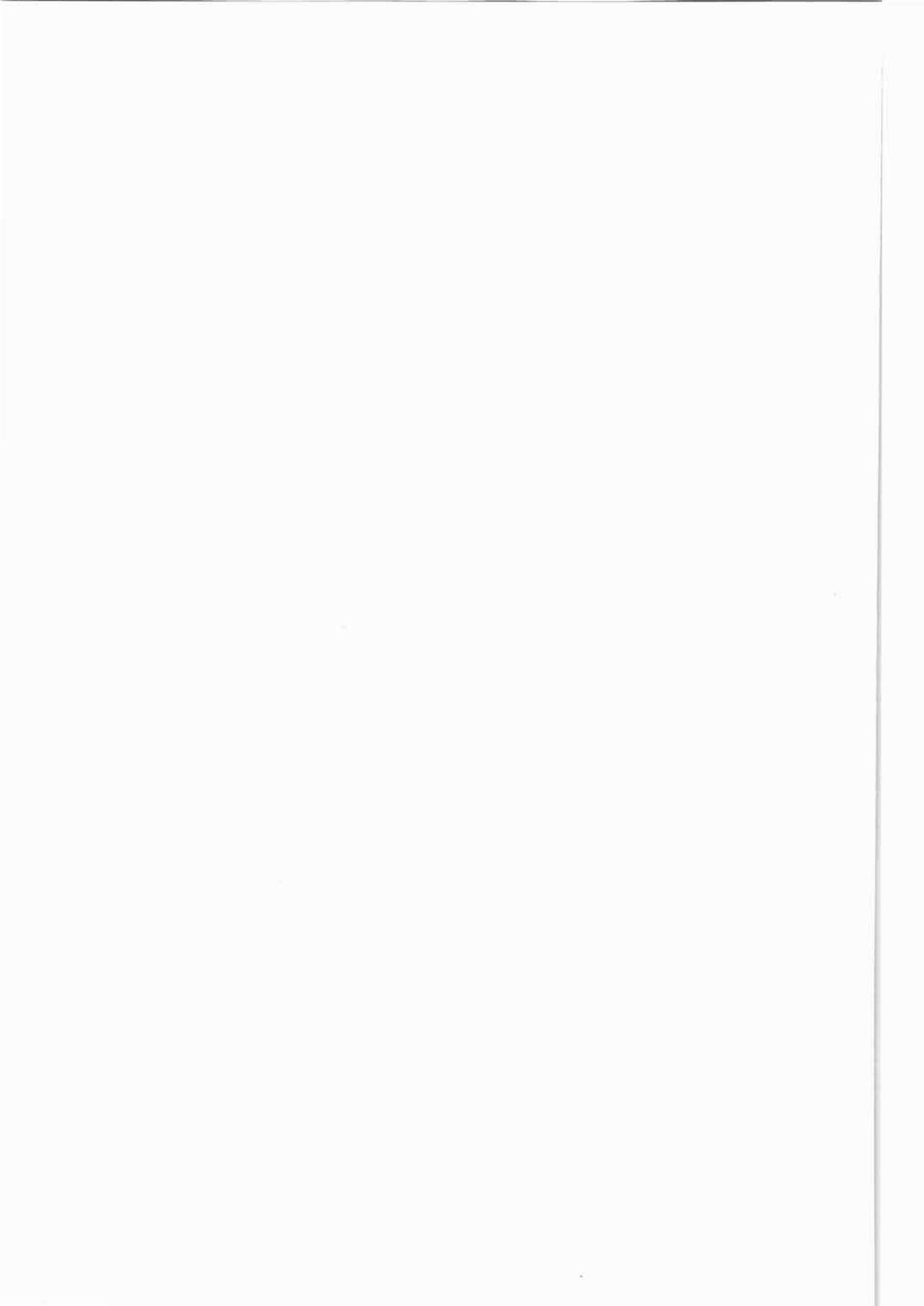
注1 小山雅人「青野西遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985

注2 綾部市教育委員会「青野西遺跡第3次発掘調査現地説明会資料」 1988
綾部市教育委員会近沢豊明氏の御教示による。

注3 川勝 修・佐竹尊樹・藤田順基・西田博紀・大槻智彦・柳本賢治・片山勇雄・塩見金男・井田愛治郎・井田通枝・森津五郎・井田三千枝・片山尚子・今井助雄・今井和二郎・安野正夫・白木 茂・大槻和子・白木琴枝・大槻與三郎・繁尾善昭・白木良夫・谷 光治・岡村 勇・藤山義信・今井とめ・四方章一・小村敏夫・四方金治・四方正直・木戸 勝・上原哲男・川勝秋夫・四方 晋・由良秀樹・福島俊太・大槻貴明・門 正明・村上典子・岡本美和子・荻野富沙子・牧野富子・藤山真理・渡辺節子・小林洋子・藤山留美・仲井美香子・吉崎直美・庄林真弓・松下道子

注4 岡崎研一ほか「篠窯跡群Ⅱ」(『京都府遺跡調査報告書』第11冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989

注5 噴砂については、通商産業省工業技術院地質調査所近畿・中部地域地質センター主任研究官寒川旭氏から御教示いただいた。



4. 長岡京跡右京第277・306次発掘調査概要

(7A N H K B - 3・4)

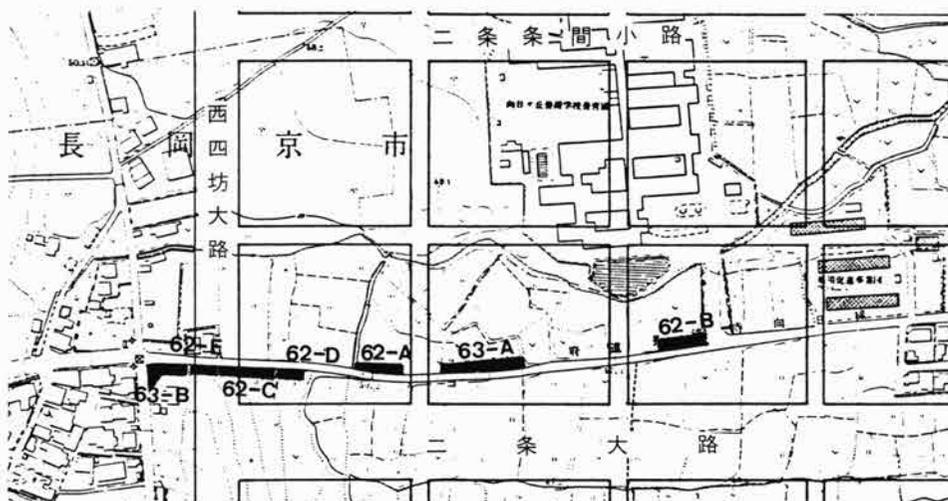
はじめに

今回の発掘調査は、昭和62・63年度に実施した府道長法寺一向日線の拡幅工事に伴って、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査地は、長岡京市粟生川久保ほかにあたり、長岡京跡右京二条四坊五・十二・十三町付近に推定されている(第56図)。

周辺では、右京第44・78・201・251・255次等の調査がなされており、縄文時代以降の各時代の遺構・遺物が確認されていて、長岡京関係以外の遺構・遺物の検出が期待された。

昭和62年度調査は、長岡京跡右京第277次調査にあたり、調査第2課調査第3係係長小山雅人、同調査員竹井治雄が9月9日から12月25日まで調査を担当した。調査面積は約600m²である。63年度は右京第306次調査にあたり、同小山雅人、調査員岩松保が調査を実施した。調査は6月1日から7月29日までを要した。調査面積は約365m²である。調査に関わる費用は、京都府土木建築部が負担した。

現地調査・整理作業には多くの方々の協力を得た。記して感謝の意に替える。^(注1)



第56図 右京第277・306次調査トレンチ配置図 (平城京型 1/2,500)

(1) 長岡京跡右京第277次 (7A N H K B-3)

1. 調査概要

調査地の周辺の地形は、標高42~45m、西から東へ下る緩斜面に営まれている水田地帯である。調査地は、ここを通る長法寺・向日線の道路沿いで、計5か所にトレンチを設定した。これらを、それぞれ調査順にA~Eトレンチと名付けた。

調査地内の基本的な土層は、上から耕作土・床土・淡褐色粘質土・褐色粘質土・黄褐色粘質土である。淡褐色粘質土は、旧耕作土(近世)で、厚さ0.2mを測る。褐色粘質土は、瓦器片・土師器片を含む中世層である。黄褐色粘質土は、段丘を形成する地山(無遺物層)である。検出遺構は、中世の層を排除した地表下0.3~0.4mにあった。

2. 検出遺構

Aトレンチ

建物跡SB27701 トレンチ中央部で検出した東西4間、南北1間以上の掘立柱建物跡である。柱間寸法は、東西2.4m(8尺)等間・南北1.5m(5尺)を測る。柱掘形は、一辺0.35~0.5mの隅丸方形を呈し、埋土は暗褐色粘質土である。遺物には須恵器の細片等がある。東端の柱穴の座標は、 $X = -118,028.3$ ・ $Y = -28,866.5$ 、方位は $N8^{\circ}34'W$ である。

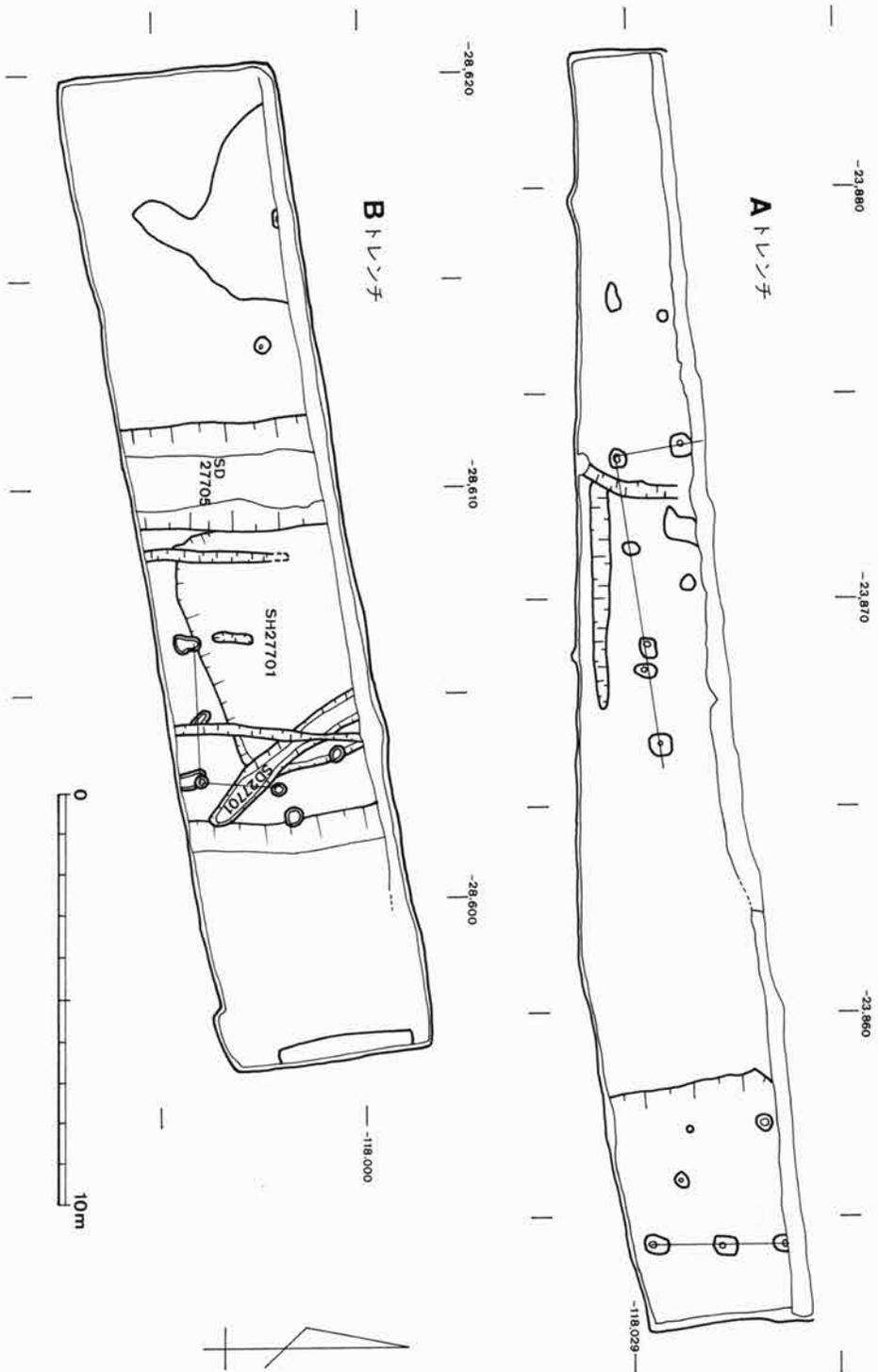
建物跡SB27702 トレンチ東端に南北2間分の掘立柱列を検出した。柱間寸法は、1.65m(5尺5寸)等間である。柱掘形は、一辺0.3~0.4m・深さ0.3mを測る隅丸方形を呈し、埋土は暗褐色土で、礫が多量に混入していた。遺物には土師器片がある。南端の柱穴の座標は、 $X = -118,028.6$ ・ $Y = -28,854.4$ 、方位は $N0^{\circ}17'E$ である。

Bトレンチ

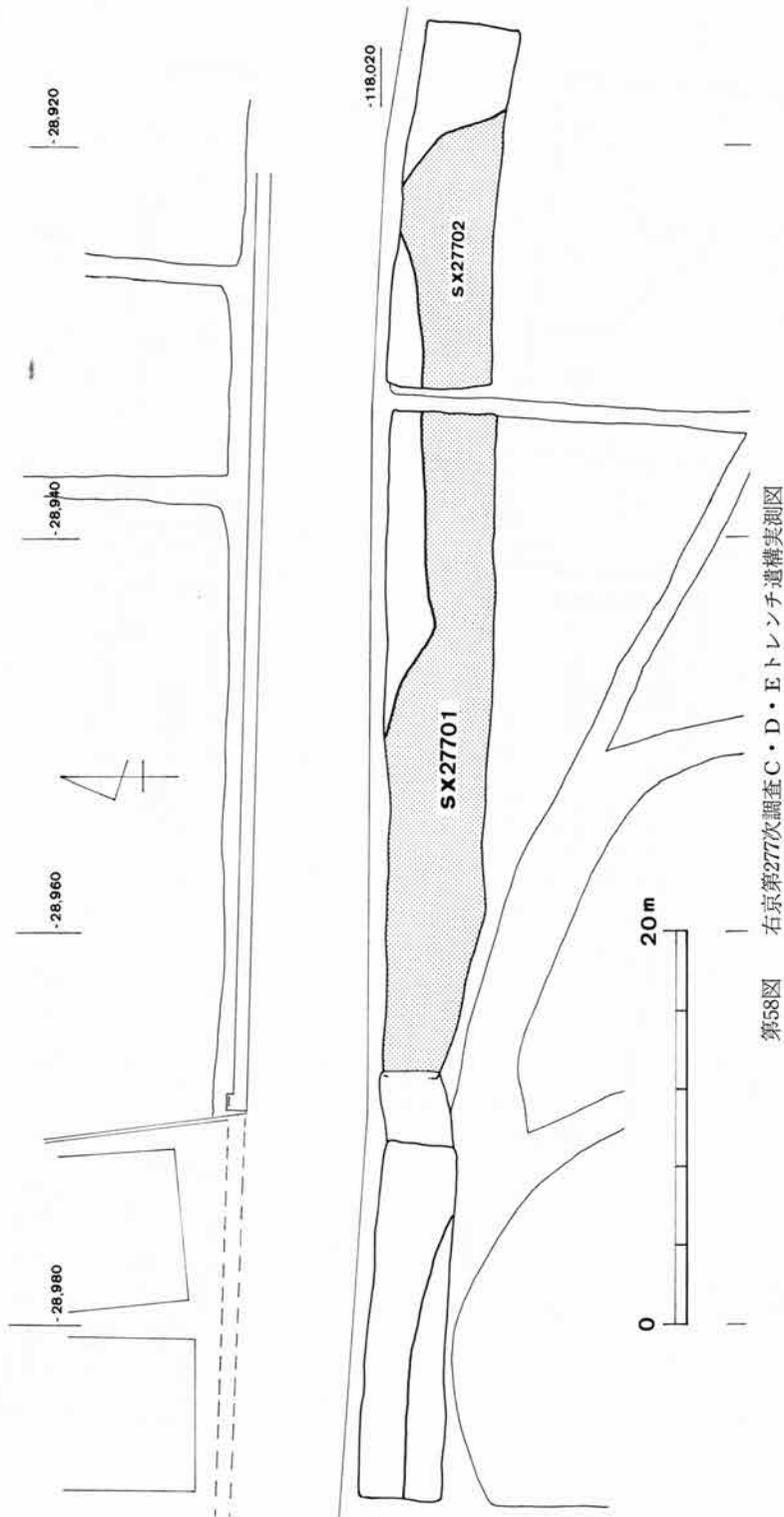
溝SD27705 トレンチ中央部やや西側で検出した幅2.5m・深さ0.7mを測る南北方向の素掘り溝である。断面は、椀状を呈し、堆積土は上層では茶褐色粘質土、下層では茶灰色砂質土に変わる。溝の底面では茶灰色の粘性土が溜まり、わずかに水が流れていた。遺物は、土師器皿・瓦器椀等である。溝の中心座標は、 $Y = -28,610.4$ 、方位は $N2^{\circ}40'W$ である。

素掘り溝A・B 旧耕作土の暗渠排水溝である。

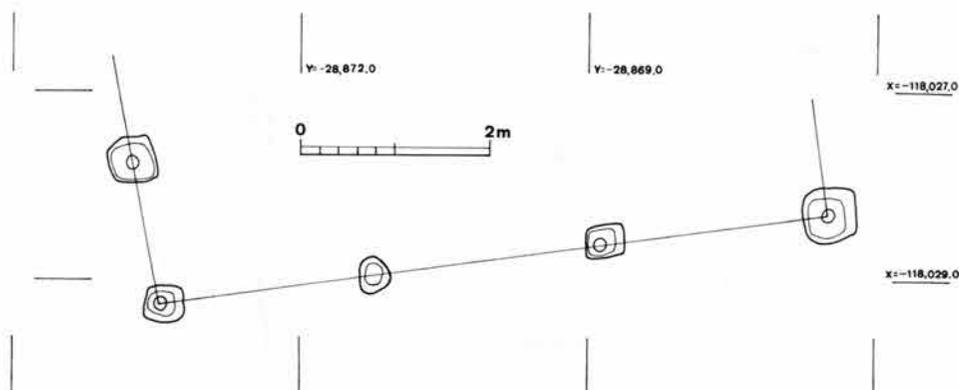
溝SD27701 竪穴式住居跡の上層で検出した幅0.4~0.5m・深さ0.3mを測る素掘り溝である。方位は、 $N40^{\circ}22'W$ と大きく振れている。溝のプランはやや曲線をなし、南端で途切れる。溝の断面は、椀状を呈し、堆積土は暗褐色泥土が固くしまっている。



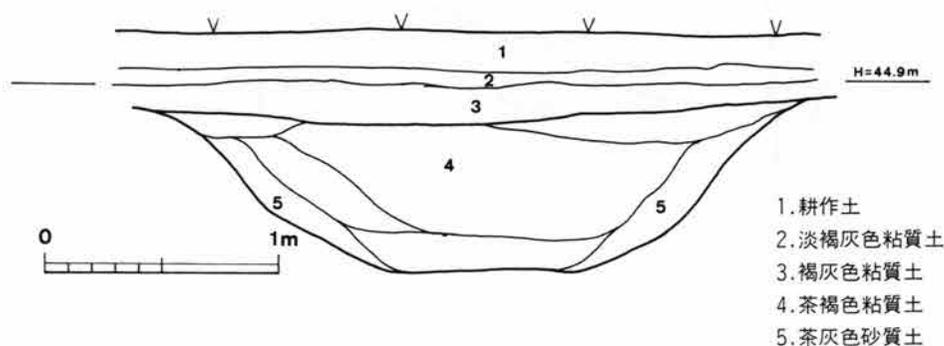
第57図 右京第277次調査A・Bトレンチ遺構実測図



第58図 右京第277次調査C・D・Eトレンチ遺構実測図



第59図 建物跡 SB27701 実測図



第60図 溝 SD27705 断面実測図

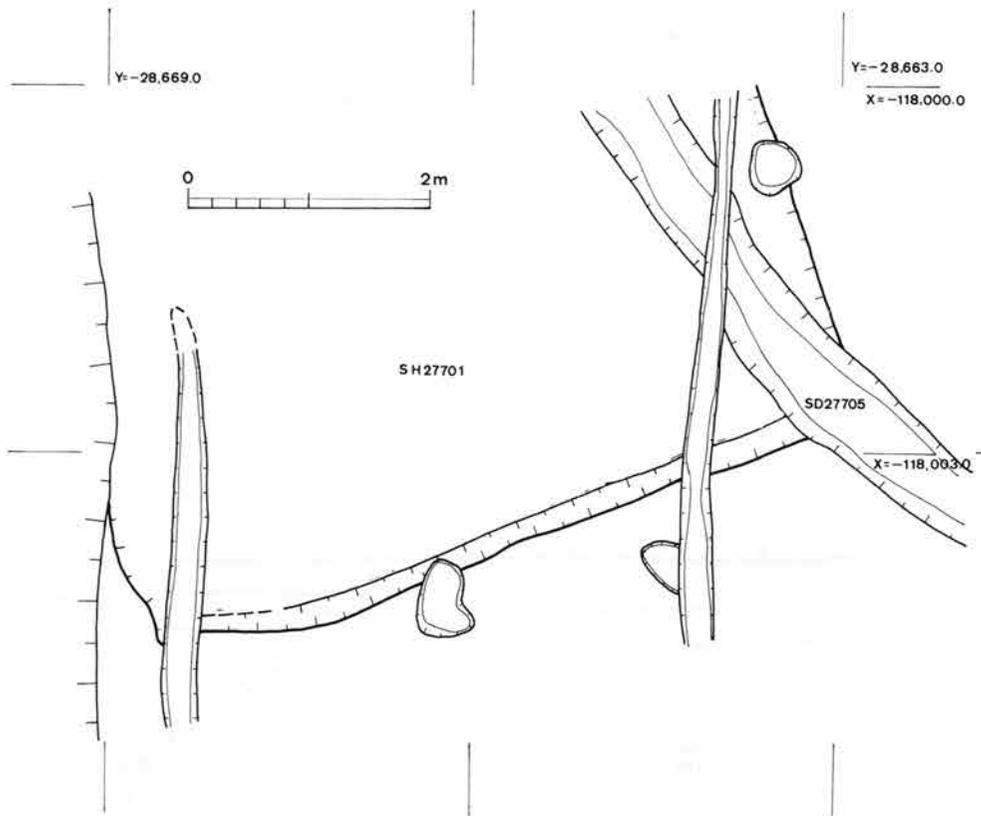
竪穴式住居跡SH27701 SD27701の下層で検出した弥生時代の竪穴式住居跡である。一辺5mの隅丸方形を呈し、南東、南西隅の一部を確認したが、柱穴はなかった。堆積土は、炭化物・焼土・砂礫等が混在する暗褐色粘質土である。方位は、N21°40'Wである。出土遺物は、弥生土器壺・甕・砥石等である。

C・Dトレンチ

SX27701 Cトレンチでは南側へ深く傾斜する谷状遺構を検出した。堆積土は、厚さ0.6m以上の褐色砂礫・砂層が互層をなしている。最下層には青灰色粘性土が0.2m堆積し、ある程度水が溜っていた可能性がある。

Dトレンチも谷状遺構が連続しているが、トレンチ中央部で南方向へ湾曲する。堆積状況や出土遺物の状態もDトレンチと変わらない。

C・DトレンチのSX27701は、谷状の旧地形に土砂流を堆積したものか、あるいは「ため池」であったか、今後の課題としたい。



第61図 竪穴式住居跡 SH27701 実測図

Eトレンチ

トレンチ北半部で旧耕作土が認められたほか、特に顕著な遺構はなかった。現府道長法寺向日線は、この旧耕作土上にあるので、近世かそれ以降に盛土で拡幅されたと考える。

3. 出土遺物

遺物には、弥生土器・須恵器・土師器・瓦器などがある。各トレンチから少量ではあるが、遺構の性格や時期を決める上で貴重な資料である。

SX27701(第62図 1～12・16～18)

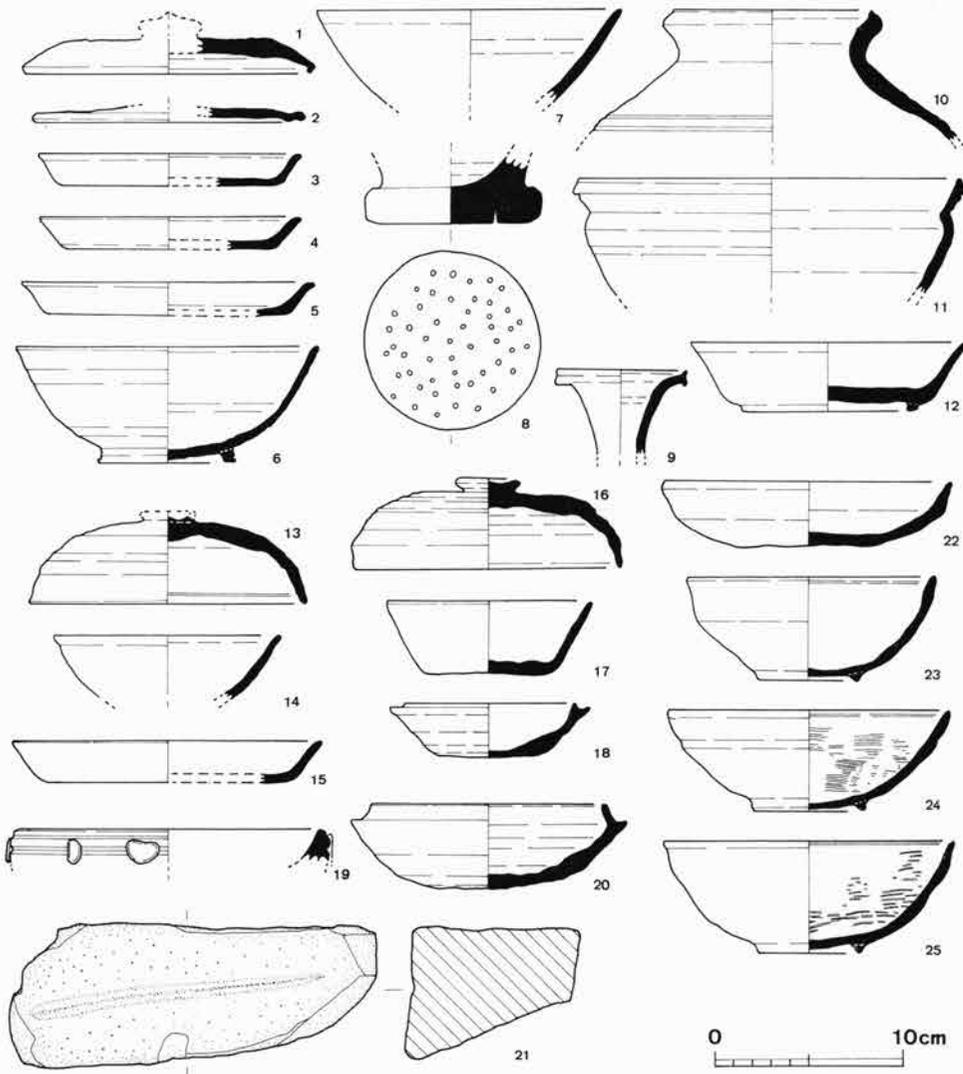
1・2は、須恵器杯蓋で、口径15.6cm, 14.8cmをそれぞれ測る。1は、紐のつく頂部から弧を描きながら縁部に至り、端部は下方に屈曲する。2は、器高が低く縁部が扁平である。3・4・5は、淡灰色を呈する須恵器皿である。6は、口径16.2cm・器高6.2cmを測る須恵器碗である。体部内外面にはロクロ回転の痕跡をよく残す。7は、褐色を呈する胎土に淡い緑釉を施した緑釉陶器碗である。8は、須恵器鉢である。底部は厚く、外面に多数の刺突痕がある。10は、須恵器壺である。11・12は、須恵器鉢・杯身である。

16は、口径14.2cmを測る須恵器高杯の蓋である。扁平な紐がつく頂部から斜め下方に屈曲し、縁部は下方に垂れる。17は、底部平底の須恵器杯身である。底部外面に粘土紐の痕跡を残す。18は、口径10.7cm・器高3.0cmを測る須恵器杯身である。受け部からの立ち上がりは小さい。底部外面は、ヘラオコシの痕跡をとどめる。

SD27705(第62図22~25)

22は、口径15.4cm・器高3.4cmの土師器の皿である。底部外面では、指押さえの痕跡を無造作に消している。体部は外反し、端部は上方に丸くおさまる。

23~25は、黒色を呈する瓦器碗である。23は、口径13.2cm、断面三角形の高台がつく。



第62図 右京第277次調査出土遺物実測図

24・25は、内外面の暗文が密で、高台はやや外に開いている。

竪穴式住居跡SH27701(第62図19・21)

19は、弥生土器壺か甕の口縁部である。口縁部外面には凹線文を施した後、不正円の浮文をつけている。21は、砥石である。材質は砂岩で、砥石面は全面が平坦でなめらかである。その中央部に細長い溝がある。使用痕であろう。

溝SD27701(第62図20)

20は、須恵器杯身である。口径14.8cm・器高4.5cmを測る。受け部からの立ち上がりは、やや内傾する。

Eトレンチ(第62図13～15)

13～15は、中世及び近世層から出土した土器である。13は、須恵器高杯の蓋である。頂部から大きく斜め下方に湾曲し、端部は下方に丸くおさまる。14は、須恵質の緑釉陶器である。15は、土師器皿である。

4. ま と め

竪穴式住居跡は1棟のみであるが、出土遺物から弥生時代のものであることがわかる。また、調査地の東方約200mの地点には弥生時代後期の今里遺跡があり、その広がりを考察する上で、貴重な資料と言えよう。

建物跡SB27701・02は、長岡京期か平安時代かは判然としないが、SB27702については、ほぼ真北方向を示すことから、長岡京期に比定してよからう。

溝SD27705は、非常に幅の広い濠の様相を呈する。13世紀の環濠集落の存在を窺わせる資料である。(竹井 治雄)

(2) 長岡京跡右京第306次(7A N H K B-4)

1. 調 査 概 要

62年度の調査は、右京二条四坊十二町と同十三町に推定される二地点にそれぞれにトレンチを設けて調査を行った。前者のトレンチをAトレンチ、後者をBトレンチとした。以下、各トレンチの概要を記す。

Aトレンチ(第63図)

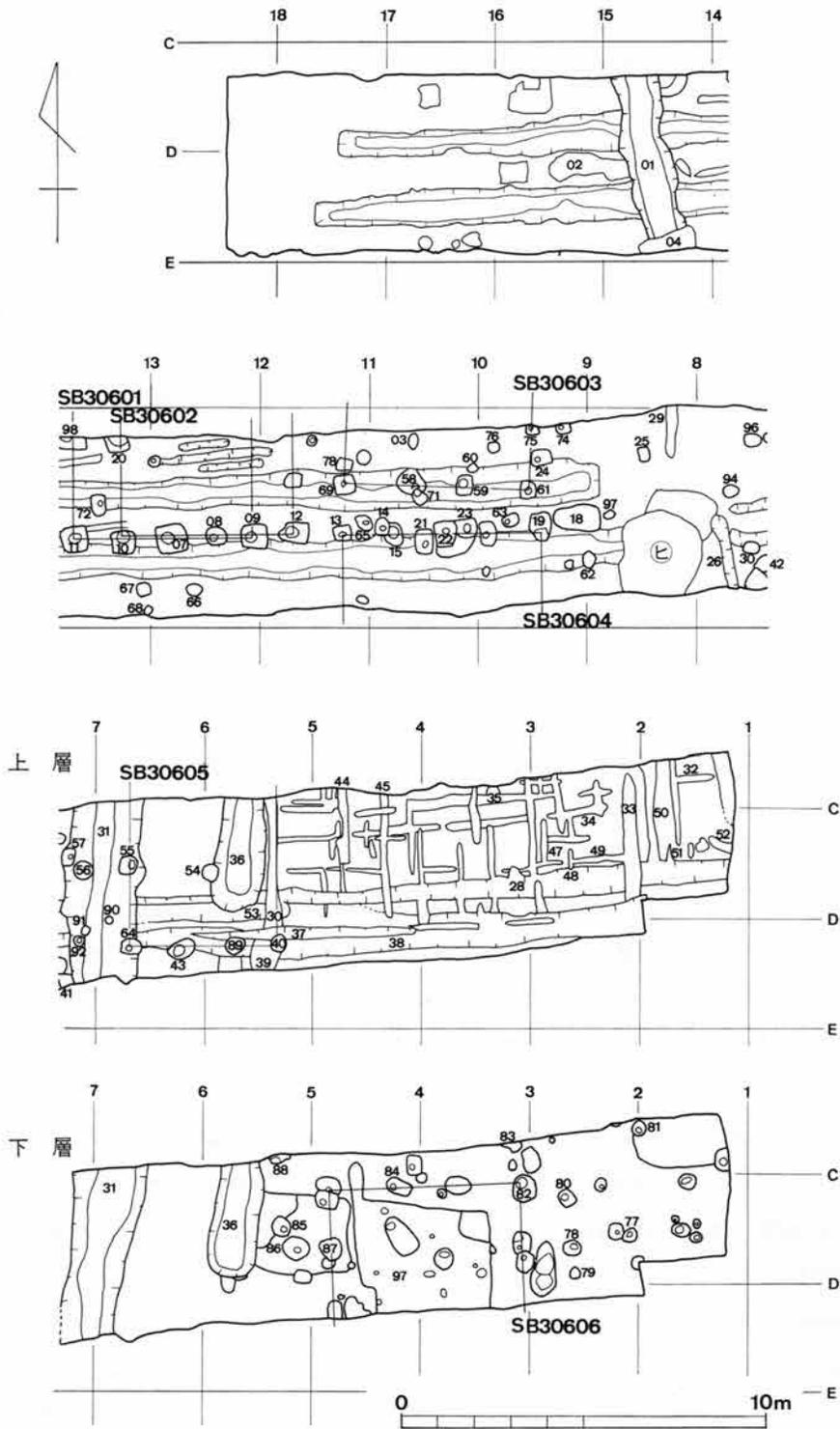
調査地は西から東へ緩やかに下る傾斜面に設けられた水田地にある。この周辺の水田は、西側の高い部分を削って東側の低い部分に盛土を行い、平坦地を造っている。このため、

西半(6ライン以西)は水田耕作土の直下が地山となるが、東半は造成の際の盛土がなされ、二面で調査を行った。上面では中世の素掘り溝、下面では柱穴群・溝・土坑・竪穴式住居跡(?)を検出している。隣接した右京第251次調査トレンチでは、SK25108等、弥生時代後期の遺構を確認しているが、今回は弥生土器の出土はみだが、遺構を確定することはできなかった。

調査地は5m×53m、約265m²である。調査地の地区割りは3m方眼で行い、地区の名称はその地区の東側の南北ラインで表示することとした。6ラインの国土座標はY=-28,785mで、CラインのX座標は-118,018mである。

調査地東半の上面で検出した素掘り溝は、南北・東西走る溝で、切り合い関係より基本的には南北の小溝が東西の小溝より後出する。これらの小溝の規模は、概ね、幅15cm・深さ10cmである。また、SD30628・37・38などの東西走る溝は、北半の溝よりその幅・深さが大きいことから、「地境溝」等の性格が推察される。これらの溝からの出土遺物は少なく、大部分は古墳時代後期の須恵器・土師器であるが、なかに数点、瓦器等の土器片(第72図33)が混じることから、中世の時期区分が与えられる。溝の形状と遺物が細片で角が摩耗していることから、耕作に伴う溝と判断する。

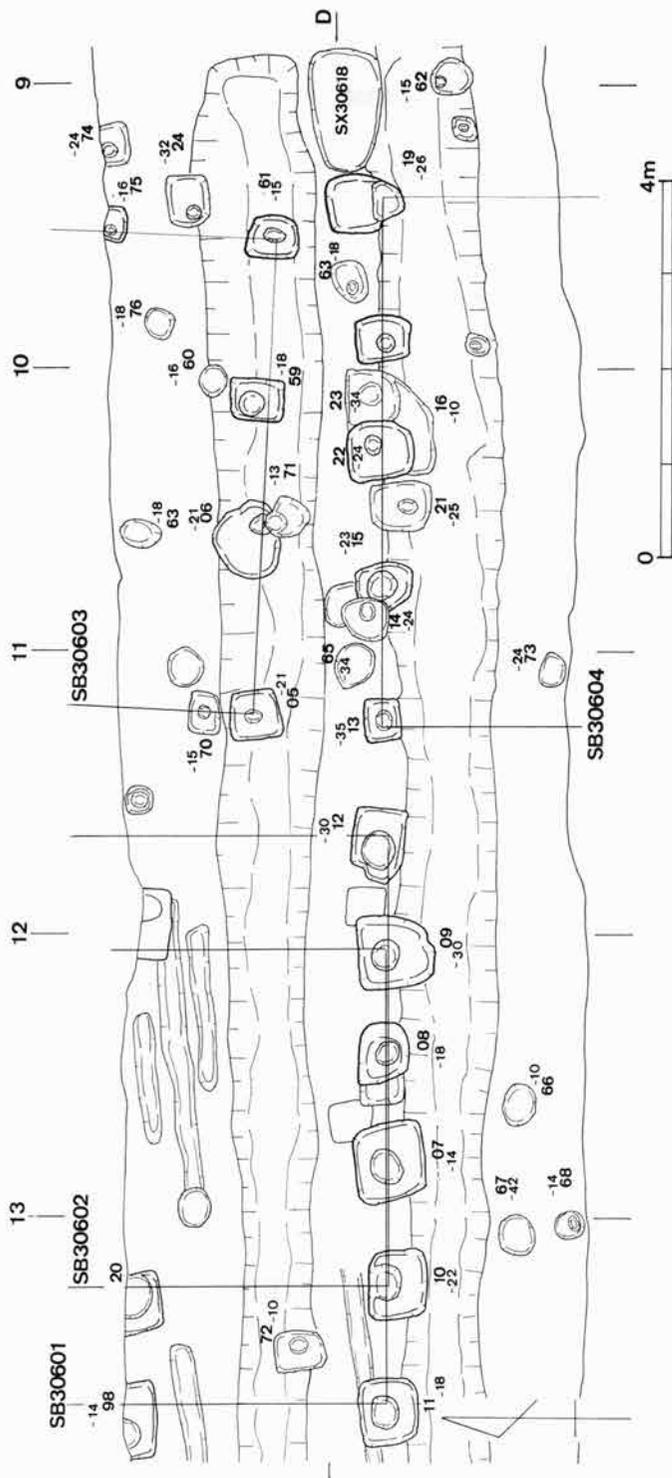
掘立柱建物跡は、調査地の南北幅が狭いため、その全体が確認できたものはないが、建物跡に復原できる柱穴列を6棟以上検出した。柱穴跡から出土した遺物は、古墳時代後期から8世紀後半頃のものがある。SB30601・02(第64図)は、ともに東西2間×南北1間以上の建物跡である。SB30601は、柱間は東西2.45m・南北2.8mを測る。建物の主軸はN0°40'Eである。SB30602は東西2.4m・南北2.8mの柱間をもち、主軸はSB30601と同じである。柱穴の切り合い関係は認められない。柵列かとも考えられたが、SK30620・98の柱穴を調査地の北端で検出したため、掘立柱建物跡と判断した。SB30601の柱穴からは第72図20・25の土器が出土している。SB30603(第64図)は東西3間×南北1間以上の規模をもち、柱間は東西1.7m、南北1.8m、主軸はN2°17'Eの掘立柱建物跡である。SB30604は東西4間(柱間1.83m)で、南にのびる柱穴跡は検出できなかった。N1°14'W。SB30605(第65図)は東西3間×南北2間以上の規模をもち、柱間は東西1.35m・南北2.05mである。主軸はN0°40'Wである。SD30631と重複して柱穴跡(SK30655・64)を検出した。これらの柱穴跡はSD30631の間層で検出したもので、淡褐色粘土層の上面より掘り込まれていた。SB30606(第66図)は東西3間×南北2間以上、柱間は東西1.8m・南北1.7mである。N1°18'Wの主軸をもち、第72図の22の土器が出土した。これらの建物跡はその方位が三重大別でき、SB30601・02・05は方位をほぼ真北にとり、SB30603はやや東に振れ、SB30604・06はやや西を向く。



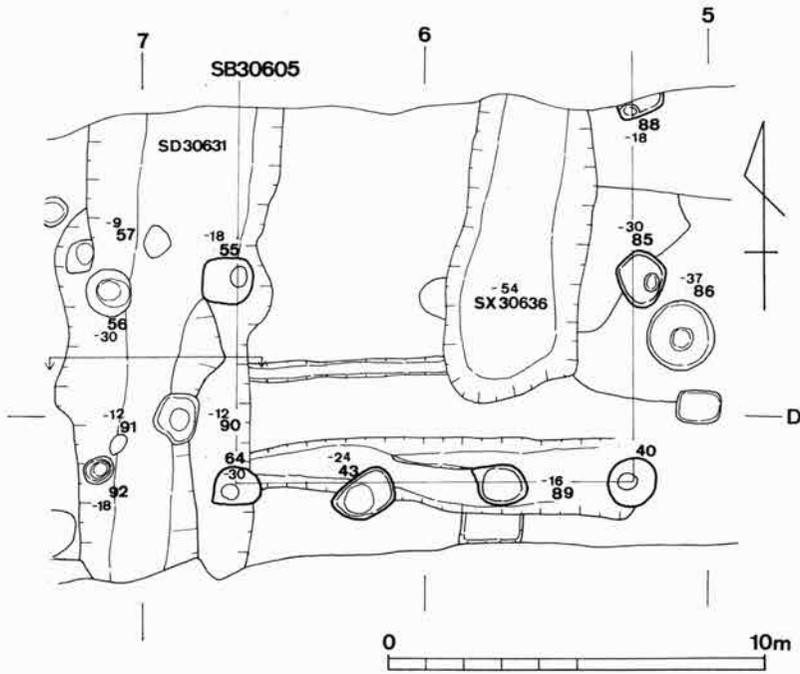
第63図 右京第306次調査Aトレンチ検出遺構配置図(番号は遺構番号)

SX30697は3・4地区で検出した竪穴式住居跡状の遺構である(第66・67図)。西辺に沿って後世の南北溝が穿たれていたが、平面では識別できなかった。当初、竪穴式住居に伴うカマド跡と考えたが、土層断面で切りあい関係を確認した。南北3.1m以上・東西3.2~3.45mの方形を呈し、検出高は約15cmを測る。底面では小ピット(径約10cm・深さ8cm)と船底状の土坑(0.7m×1.2m)を検出した。この土坑は中央部やや西北部で検出した。火を受けた痕跡は認められなかったが、少量の炭化物片が出土した。北東隅では80cm×80cm、深さ4cmの土坑が穿たれていた。土器などのまとまった出土はなかった。

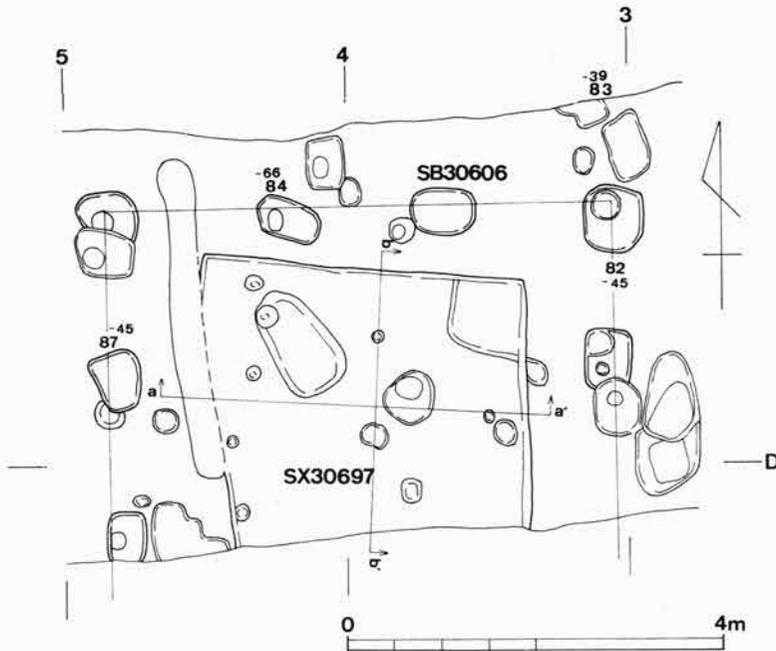
SD30601は14地区で検出した南北溝で、西に約10°偏って掘られている(第68・69図)。



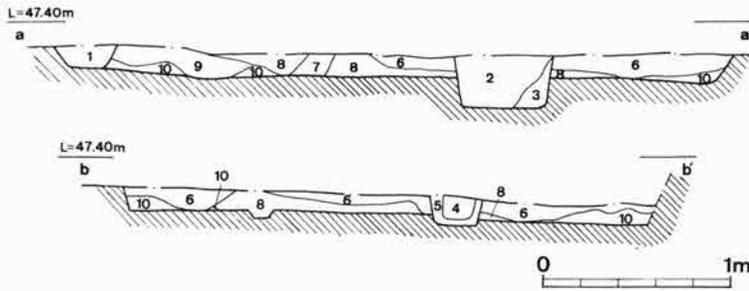
第64図 SB30601~04 平面実測図
(大字：遺構番号，小字：検出の深さ)



第65図 SB30605・SD30631 平面実測図
(大字：遺構番号，小字：検出の深さ)



第66図 SX30697・SB30606 平面実測図
(大字：遺構番号，小字：検出の深さ)



第67図 SX30697 土層断面実測図

1. 中世溝 2. 茶褐色粘質土 3. 暗茶褐色粘土SK30605 4. 暗茶褐色粘土 5. 灰色混茶褐色粘質土土坑 6. 茶褐色粘質土 7. 茶褐色粘土 8. 茶褐色砂礫混土(暗茶褐色斑混) 9. 茶褐色砂礫混土 10. 黄褐色砂礫混土

幅0.9~1.1m・深さ55cmで、第71図1~5の土器が出土している。SD30601より西側で検出した溝や土坑はすべて中世以降のもので、この溝より西側では柱穴が全く検出されないことから、掘立柱建物跡とはやや方位を異にするが、屋敷地の境界溝と判断する。

SD30631は7ライン近辺で検出した(第65・69図)。SD30601と異なり、やや東に振れる方位を持つ。SB30605の柱穴は、SD30631の埋土である淡褐色粘土層上面で検出した。すなわち、淡褐色粘土層を基準に、上層と下層でその掘削時期が異なる。SK30655等の検出面から、SB30605の廃絶後にSD30631上層溝が掘られたものといえる。上層溝・下層溝ともに古墳時代後期の土器が出土している。包含層や他の遺構に比して弥生時代後期の土器が多く出土した(第71図13~19)。幅2m・深さ65cmを測る。

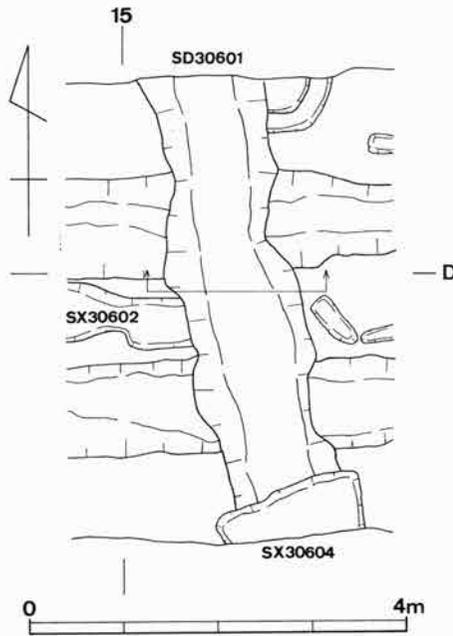
SX30636は5地区で検出した土坑である(第65図)。検出長3.1m・幅1.2m・深さ50cmで、溝底はU字形を呈する。第72図の30の土器が出土しており、掘立柱建物跡と大差ない時期のものと考えられる。

Bトレンチ(第70図)

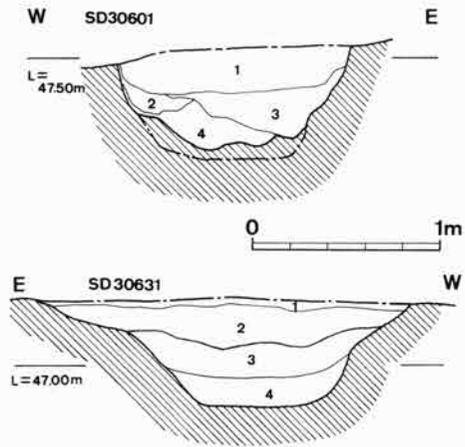
Bトレンチは、正確には推定長岡京の条坊外に位置している。約100m²にわたって調査を行ったが、平坦面とそこから東に下る傾斜地と土坑・溝を検出したに留まり、顕著な遺構は確認できなかった。また遺物の出土は数点のみであった。傾斜面は0.7mの高低差をもち、62年度のEトレンチで検出した「落ち込み」につづく傾斜面と考える。出土遺物より、江戸時代後期以降に造成されたものと判断する。

2. 出土遺物(第71~73図)

出土遺物は土器のみで、整理箱にして約6箱と量的に少ない。出土土器の時代は弥生時代後期から近世にいたるものがあり、多くは古墳時代後期と考えられる土器片である。

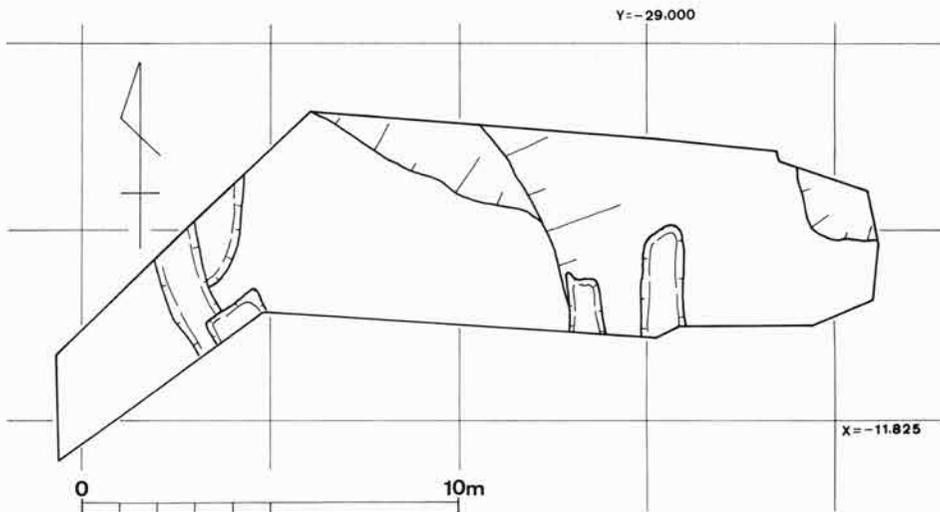


第68図 SD30601 平面実測図



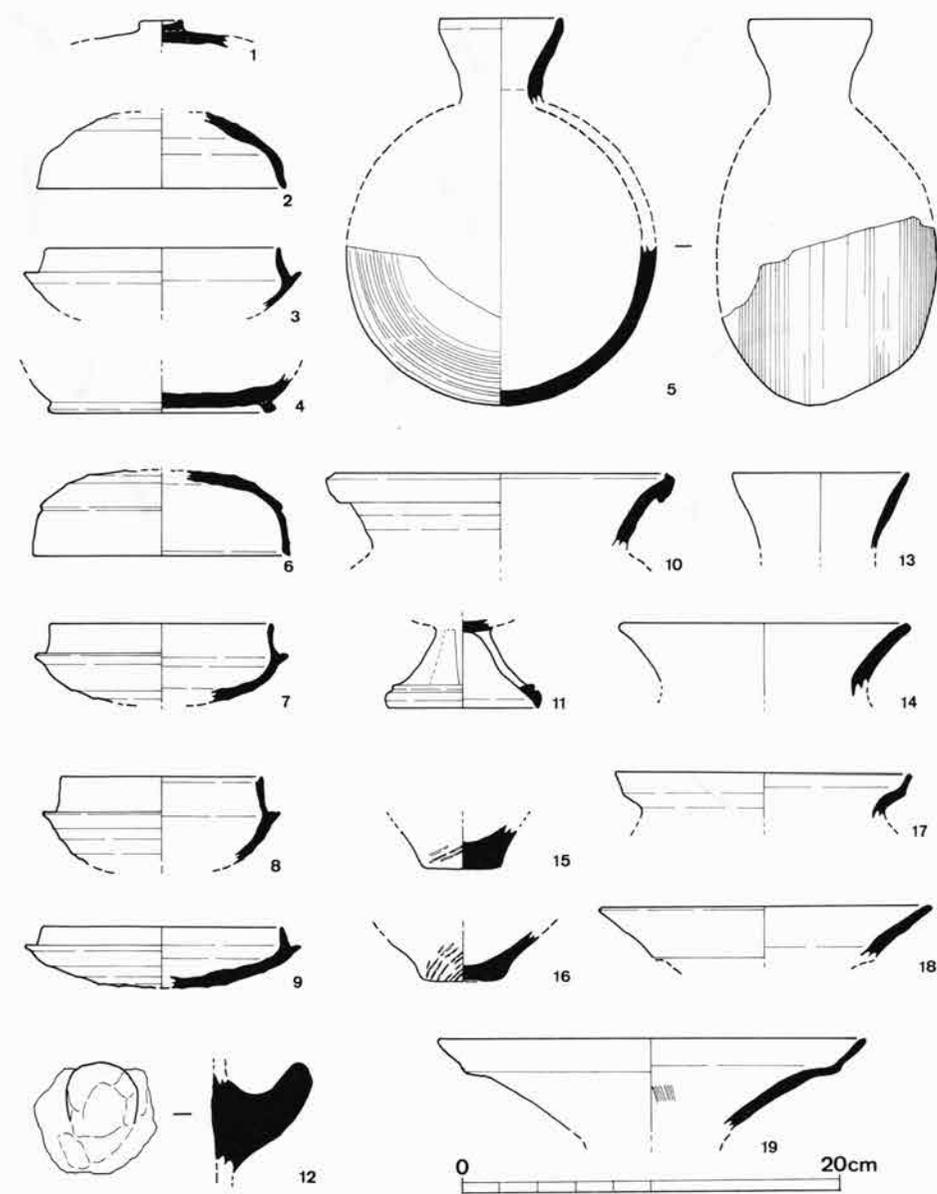
第69図 SD30601・SD30631土層断面実測図

- SD30601 : 1. 茶褐色混灰色砂質粘土
 2. 黄褐色混灰色砂質粘土
 3. 茶褐色混灰色粘土
 4. 灰色粘土(密)
- SD30631 : 1. 排水溝掘形
 2. 暗茶褐色粘土
 3. 淡褐色粘土
 4. 淡黄褐色粘土



第70図 右京第306次調査Bトレンチ検出遺構配置図

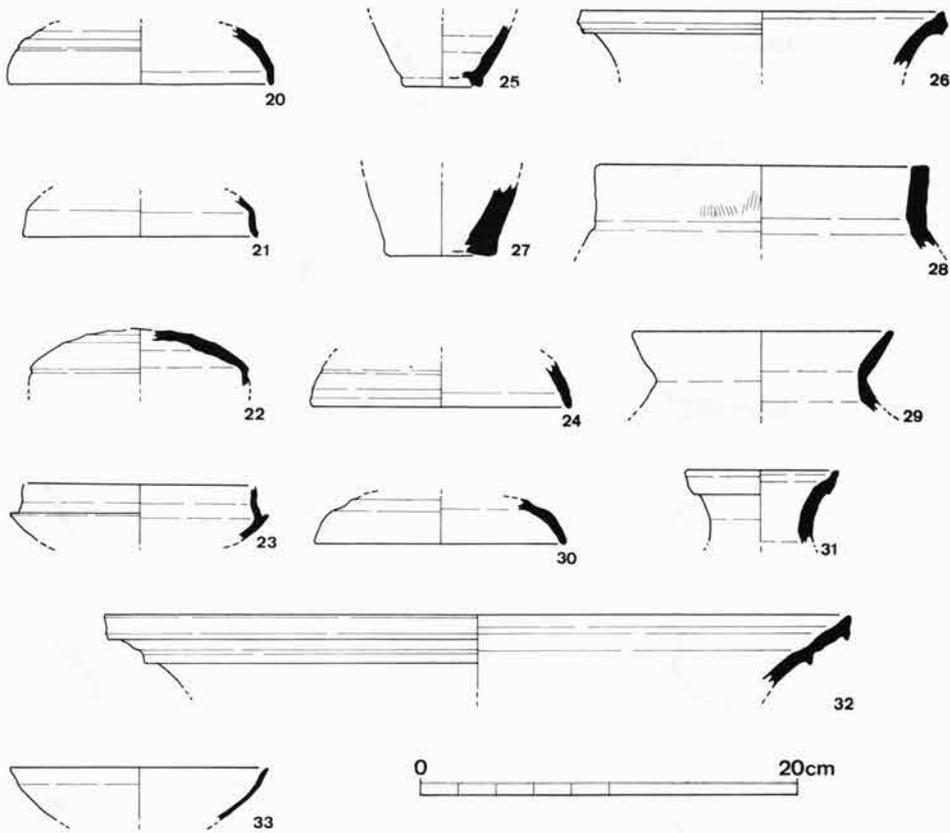
第71図はSD30601・31で出土した土器の実測図である。1～11は須恵器で、12～19は土師器・弥生土器である。1～5はSD30601より出土しているが、型式は中村編年のⅡ-3～Ⅲ-3と幅が認められる。6～19はSD30631から出土したもので、6～17は上層溝、18・19



第71図 右京第306次調査出土遺物実測図(1)Aトレンチ
 1～5：SD30601，6～17：SD30631上層，18・19：SD30631下層

は下層溝から出土した。下層溝からもこの他に須恵器・土師器の小片が出土している。

第72図は、柱穴を中心とした各遺構から出土した土器の実測図である。各柱穴からの土器の出土はあるが、細片が多く、図化するものは少ない。20・25はSB30601を構成する柱穴から出土した。25は高台を付す小壺で、高台外端面で接地する。Ⅳ-2・3段階に相

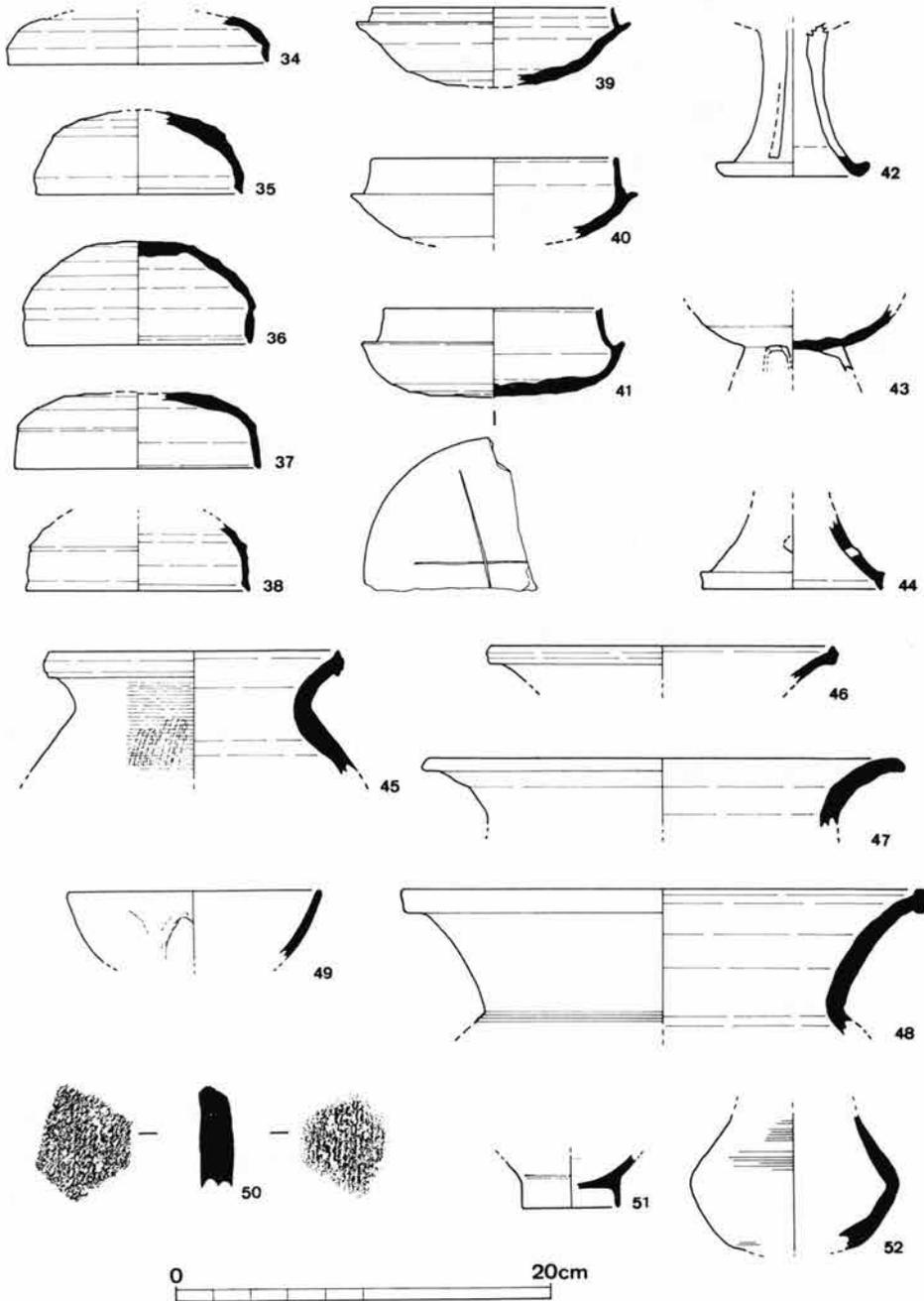


第72図 右京第306次調査出土遺物実測図(2)Aトレンチ

20 : SK30607, 21 : SK30614, 22 : SK30682, 23 : SK30655, 24 : SK30669,
 25 : SK30611, 26 : SK306119, 27 : SK30639, 28 : SK30662, 29 : SK306122,
 30 : SX30636, 31 : SD30628, 32・33 : SD30638

当する。21のSK30614は、SB30604の柱穴に切り勝っている。22・23は、それぞれSB30606・05の柱穴より出土した土器である。27は弥生土器の底部である。SB30605の柱穴を切るピットから出土した。30は、SX30636で出土した杯蓋である。31～33は、上面で検出した素掘り溝から出土した土器であるが、33の瓦器片がかろうじて図化し得た。

第73図34～49は水田床土や東半部の上面と下面の包含層から出土した遺物の実測図である。須恵器は概ね柱穴等の遺構から出土している土器と型式差は認められないが、一部38や41など、若干古いものがある。28は土師器の甕口縁である。41には杯底部にへラ記号が認められる。49は龍泉窯系の青磁で、水田床土より出土した。50～52はBトレンチより出土した土器で、傾斜面を検出する際に出土した。50は須恵質瓦片で、内外面とも布目痕が見られる。51は伊万里染め付けで、高台部のみを検出した。いわゆる「広東碗」で、18世紀中頃以降に盛行する器形である。52は生焼けの須恵器で、内外面とも暗灰色を呈する。



第73図 右京第306次調査出土遺物実測図(3)Aトレンチ・Bトレンチ
 34~49: Aトレンチ包含層出土, 50~52: Bトレンチ包含層出土

3. ま と め

今回の調査では南北に整然と並ぶ掘立柱建物跡を検出し、一定の調査成果を挙げる事ができた。掘立柱建物の柱穴から出土した土器は、古墳時代後期を中心にして8世紀後半のものがある。規則的に並ぶことから、建て替えはあるものの、同時期のものと判断される。時代の認定で問題となるのは、SK30611から出土した第72図25の土器の評価であろう。この時期の土器は、他の柱穴からは出土していない。この土器をSB30601の建築時期に近いものと考え、古墳時代後期の土器を混入物とするか、遺構の切り合いを見過したと捉えるかで、その時期が大きく異なってくる。調査の終了した現在では、それを現地で見学・確認することはすでにできない。ここでは、SK30611から出土した土器をこの建物群の時期に近接したものと考え、長岡京の条坊との関係を整理しておきたい。

国土座標の数値から、長岡京との関連をみておく。使用した条坊と計画線の値は、西四坊第二小路(Y=-28,843.54m)と二条大路(X=-118,062.84m)^(注2)である。なお、条坊の「振れ」及び、建物の振れは考慮に入れていない。建物の各列の柱穴の並びを各辺として計測した。各辺から基準線までの距離を想定尺数で割り戻した数値を想定造営尺として付表4に掲げた。

造営尺を0.295m(宮原の指摘する平城京における造営尺)と想定すると、これらの建物群は条坊の計画線から極めて計画的に配置されている。その際に基準として置かれたのは建物の中心線ではなく、柱列に求められよう。今回は調査範囲が狭いため、制約はあるが、一定の傾向は指摘できるのではないかと。

ついで、古墳時代後期の土器であるが、府道長法寺向日線の拡幅工事に伴う調査では、比較的多く出土している。今回のAトレンチに東接した右京第251次調査では、古墳時代後期の土坑等^(注3)を検出している。この周辺に古墳時代後期の集落が営まれていたことはまちがいない。七ツ塚古墳群は今回の調査地の南西約500mに位置しており、7基の古墳が東西一列に約30m間隔で並ぶ。6世紀代に順次築造された古墳群で、周濠から出土した遺物の年代観から、7世紀代を通じて墓として認識されていたと推定されている^(注4)。七ツ塚古墳群の被葬者と直接結び付く資料はないが、時代の重なり・位置的な関係から無視できないものとする。今後の詳細な検討と発掘調査に期待したい。(岩松 保)

付表4 建物一覽

(長さ単位 m)

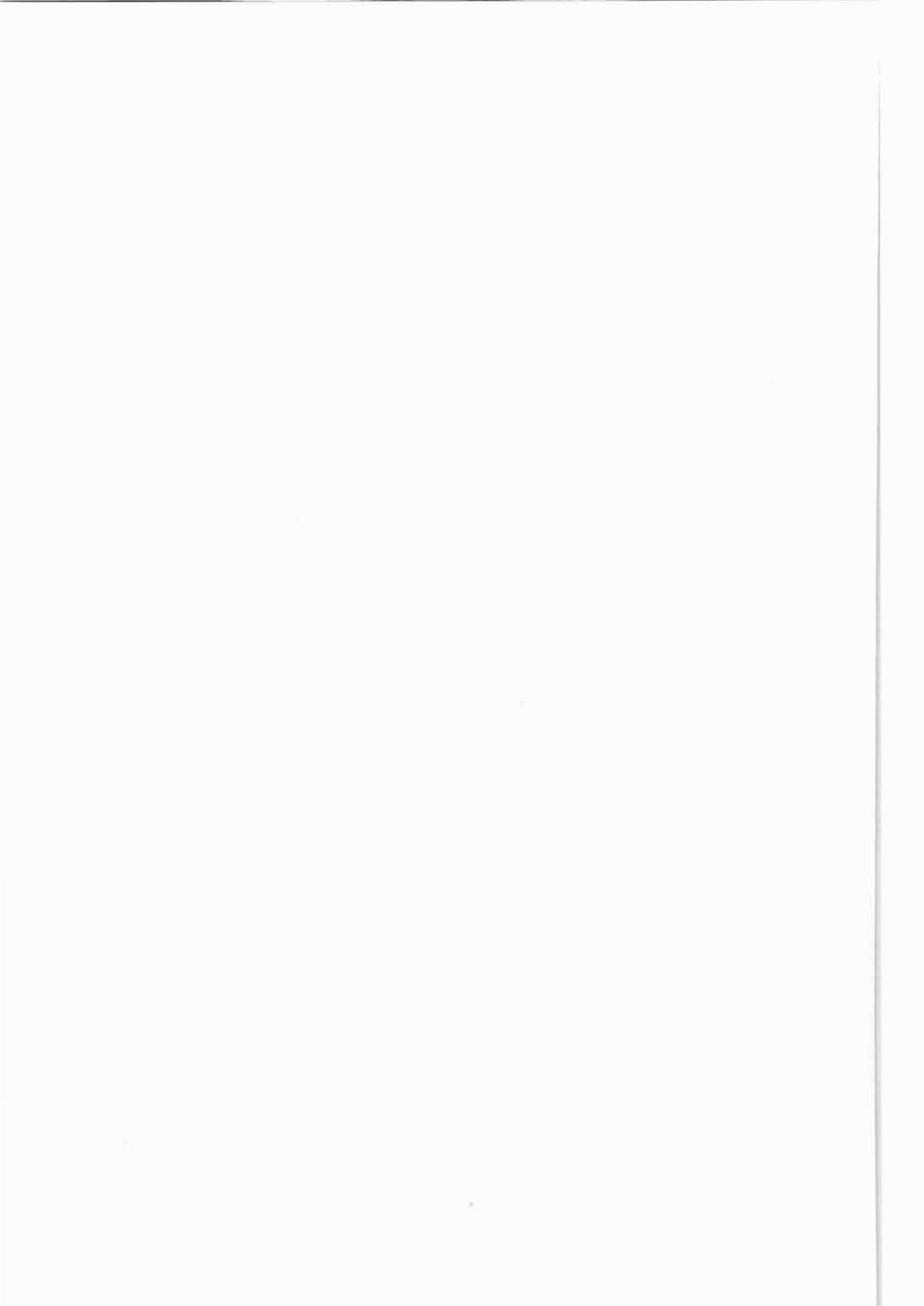
建物	辺	計画線	距離	想定尺数	想定一尺	振れ角
SB30601	西辺	-28,808.20	35.34	120	0.295	N0°40'E
	南辺	-118,015.60	47.24	160	0.295	
SB30602	西辺	-28,806.95	36.59	125	0.293	N0°40'E
	南辺	-118,015.60	47.24	160	0.295	
SB30603	西辺	-28,795.60	47.94	162.5	0.295	N2°17'E
	南辺	-118,017.10	45.74	155	0.295	
SB30604	北辺	-118,018.40	44.44	150	0.296	N1°14'W
SB30605	東辺	-28,783.00	60.54	205	0.295	N0°40'W
	南辺	-118,015.70	47.14	160	0.295	
SB30606	西辺	-28,781.60	61.94	210	0.295	N1°18'W
	北辺	-118,012.30	50.54	170	0.297	

注1 福富 仁・飛田浩一・渡辺定敏・藤原章子・阿部律代・山本弥生・峯 弥生・足立美佐江・中島恵美子・丸谷はま子

注2 宮原晋一「長岡京における造営規範についての覚え書き」(『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会編) 1986

注3 石尾政信「長岡京跡右京第251次・255次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

注4 原 秀樹「長法寺七ツ塚古墳群第1次調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第17冊 長岡京市教育委員会) 1986



5. 長岡京跡左京第202次発掘調査概要

(7ANFNT-5地区)

1. はじめに

今回の調査は、京都府教育委員会の依頼を受けて、京都府立向陽高校体育振興施設の建設に先立ち実施したものである。所在地は京都府向日市上植野町西大田である。調査対象地は、長岡京跡左京四条二坊八町にあたり、推定三条大路南側溝の検出が予想されるため、ここを中心に遺構・遺物などの資料を得ることを目的とした。調査期間は昭和63年8月8日から同年9月30日までである。

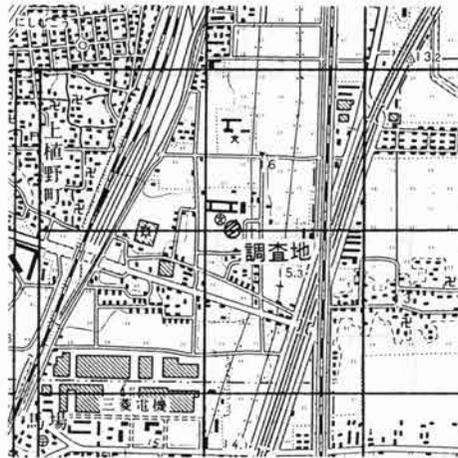
調査を担当したのは、当調査研究センター調査第2課調査第3係係長小山雅人、同調査員竹井治雄であるが、現地での調査については主に竹井が担当して実施した。調査にあたっては、向日市教育委員会をはじめ関係諸機関に協力していただいた。現地作業に際しては、学校関係者の御配慮をいただき、また、調査補助員、整理員、作業員の御協力があったことを記して感謝したい。なお、調査に係る経費は、京都府教育委員会が負担した。

2. 調査経過

調査地は、グラウンドの東辺にあたり、以前この北側で当調査研究センターが調査を行い三条大路北側溝を検出している。この北側溝より南へ12mの位置に南側溝が予想されるため、トレンチを北へ4m拡張した。その結果、トレンチ北西部分が張り出すかたちとなった。

調査は、トレンチの範囲を白線引きした後、重機による掘削を開始した。掘削はグラウンド盛土・旧耕作土・床土・淡褐色粘質土を排出し、地表下1.6mまで掘り下げた。以下の土層及び遺構については手掘りによって実施した。その面積は約270m²である。

調査地内の基本的な土層は、上位からグラウンド盛土、旧耕作土、床土、淡褐色

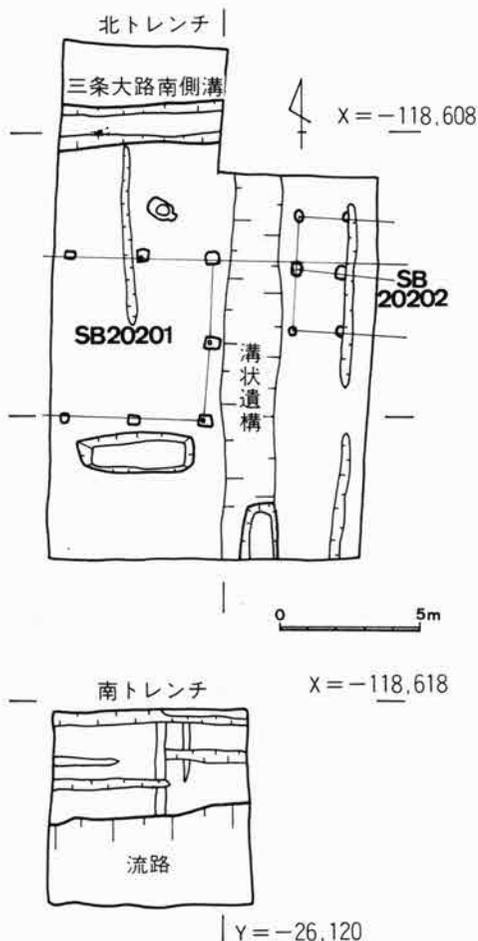


第74図 調査地位置図 (1/25,000)

粘質土，灰褐色粘質土，黄灰色粘質土，青灰色粘性土，灰色砂である。淡褐色粘質土は厚さ0.2mを測り，近世の水田土壌であろう。灰褐色粘質土は厚さ0.2mで瓦器を含む中世層である。黄灰色粘質土は，炭化物，焼土，木片，土器類を多く含んでおり，長岡京期以後の平安時代に限られる堆積層である。青灰色粘性土は砂層がブロック状に入るところもあるが，遺物を確認することができず地山かどうか判断できない。また，長岡京期の遺構の基盤層である灰色砂は，微砂で水分が多く含まれ，湧水の原因である。遺物は全くない。

3. 検出遺構

今回の調査の結果，三条大路南側溝が予想どおり検出できた。また，町内の性格を考察する上での建物跡・土坑・遺物など貴重な資料を得ることができた。以下，主要な遺構について記述する。



第75図 トレンチ配置図

建物跡SB20201 トレンチ中央部西側で検出した桁行2間以上・梁間2間の東西棟掘立柱建物跡である。柱間寸法は，梁間が2.84m(9尺5寸)・2.7m(9尺)，桁行2.55m(8尺5寸)・2.7m(9尺)と不ぞろいである。棟持柱(P-2)はやや東へずれている。柱掘形は隅丸方形を呈し，一辺0.4~0.6m・深さ0.3~0.5mを測る。埋土は茶褐色粘質土で，直径0.15~0.2mの柱根が柱穴P-1・2・3・4に残存していた。柱穴内の遺物には，土師器皿の破片がある。柱穴P-1の座標は，X = -118,618.5・Y = -26,120.7，方位はN1°38'Eである。

建物跡SB20202 トレンチの東北部で検出した東西1.8m(6尺)・南北2.1m(7尺)を測る。柱掘形は隅丸方形を呈し，一辺0.3mとやや小ぶりである。埋土は淡茶褐色粘質土(砂質混じり)で直径0.1mの柱あたりを確認した。南西隅の座標は，X = -118,615.0，Y = -26,117.6，

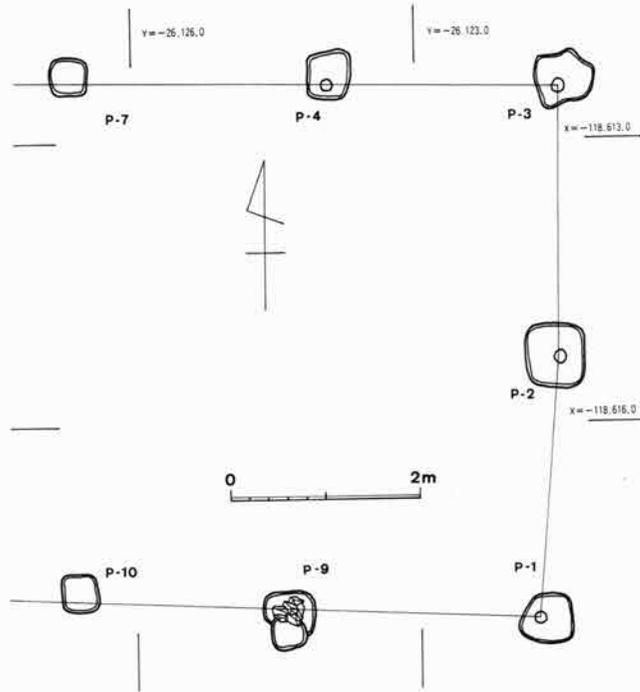
方位は $N0^{\circ}20'E$ である。

溝SD20201 トレンチ
北側拡張区で検出した幅
1.4~1.5m・深さ0.4m
を測る東西方向の素掘り
溝である。断面は碗状を
呈し、堆積土は、上層で
は暗灰褐色粘質土、下層
では青灰色粘砂質土であ
る。出土遺物は、須恵器
・土師器・木製品・漆の
付着した土器等である
が、これらの多くは上層
からのものである。以上の
堆積状況から、流れは
認められるものの、最終
的な埋没は人為的になさ

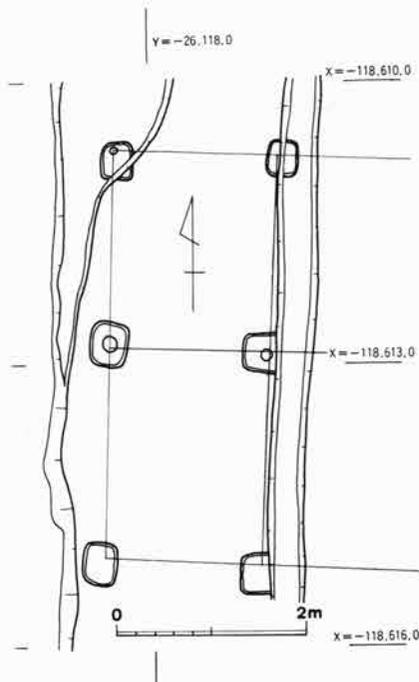
れたと思われる。溝の心座標は、 $X = -118,607.8$ ，方位は $N1^{\circ}03'W$ である。

溝中には、側板が溝に平行してほぼ垂直に杭1本で固定しており、溝幅を狭くしている。側板は、長さ1.0m・幅0.2m・厚さ2cmを測る。この設置には、溝を掘った後、杭を打ち側板を立て、青灰色粘性土で裏込めを行うという方法を用いている。この側板は、大路から町内に入るための「小橋」の一部であると思われる。側板の座標は、 $X = -118,608.0$ ， $Y = -26,124.0$ である。

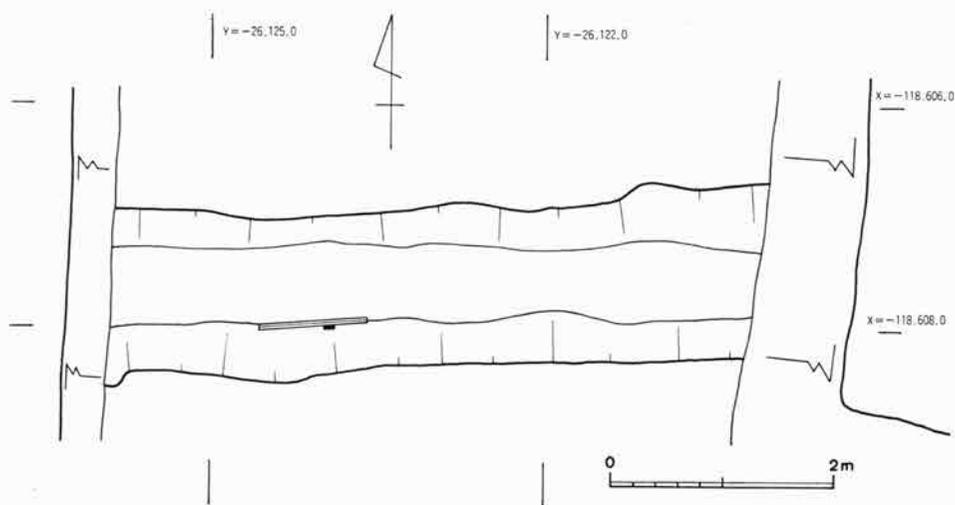
溝状遺構SX20203 建物跡SB20201とSB20202を区切る。幅1.8~2.0m・深さ0.1mを測る落ち込み状の遺構である。断面は浅い皿状を呈し、堆積土は黄灰色土の中に炭化物・焼土・



第76図 建物跡 SB20201



第77図 建物跡 SB20202



第78図 溝 SD20201 実測図

おびただしい土器類等の遺物があった。この遺構の性格は、先述の両建物跡を区画するものである。心座標は、 $Y = -26,118.8$ 、方位は $N2^{\circ}20'E$ である。

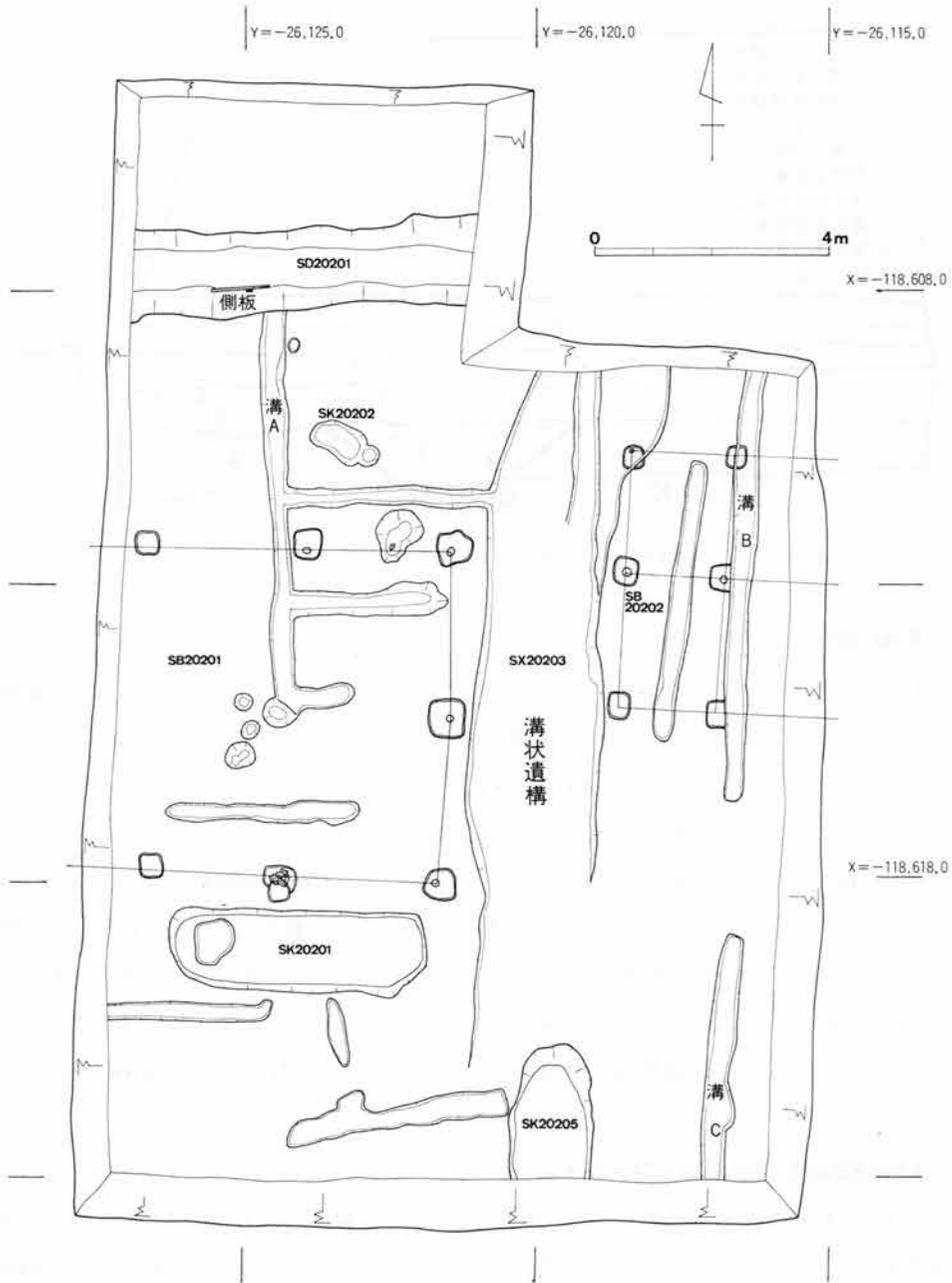
土坑SK20201 建物SB20201の南側で接するように平行して検出した隅丸長方形の土坑である。長辺 $4.0m$ ・短辺 $1.4m$ ・深さ $0.2\sim 0.25m$ を測る。土坑内の西端には不正円の小さいピットがある。堆積土は暗褐色粘性土である。遺物には須恵器、土師器、杯、漆の付着した壺等がある。

土坑SK20202 SB20201の北側で検出した長辺 $0.8m$ ・短辺 $0.3m$ ・深さ $0.3m$ を測る隅丸方形の土坑である。土坑の南東辺には直径 $0.2m$ のピットがとり付く。堆積土は主に黄灰色土であるが青灰色粘性土が混じる。遺物は少ないが、焼土、炭化物、木くずが混在している。

土坑SK20205 トレンチ南端でSX20203の下層より検出した長辺 $2m$ 以上、幅 $1.4m$ 、 $0.15m$ を測る隅丸方形の土坑である。堆積土は暗褐色粘性土である。この土坑は、規模、形態、堆積土等がSK20201に酷似している。

溝A・B・C トレンチの縦横に走る幅 $0.3\sim 0.4m$ の素掘り溝である。堆積土は青灰色粘砂質土である。これら素掘り溝はSB20201、SK20201等長岡京期の遺構を切り込んでいるが、後述する流路に切られていることから平安時代であると考えられる。

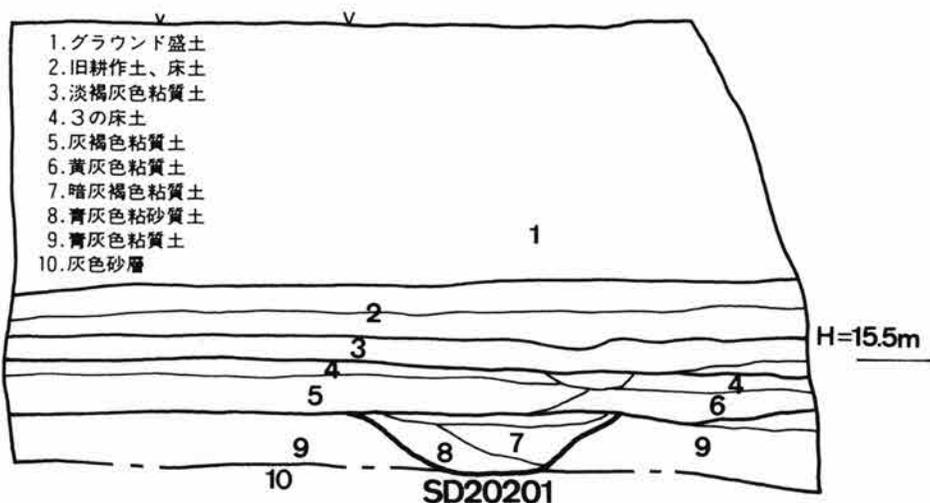
流路 南トレンチの南半部で東西に走る河川跡である。深さは $0.8m$ 以上で、茶褐色砂礫砂層が全面に堆積している。遺物には、須恵器細片が出土しているがトレンチ北半部の素掘り溝を切り込んでいることから、平安時代以後と推定する。そして、この流路は、長岡京跡左京第81次調査を参照すれば、旧小畑川の支流の一部であろうと思われる。



第79図 遺構実測図

4. 出土遺物

遺物には瓦類，土器類，木製品等があり，墨書土器，漆の付着した土器などは，当遺跡の性格を考える上で貴重な資料である。以下，遺構，土層毎に記述する。



第80図 東壁断面実測図 (S=1/40)

溝SD20201(第81図1~20)

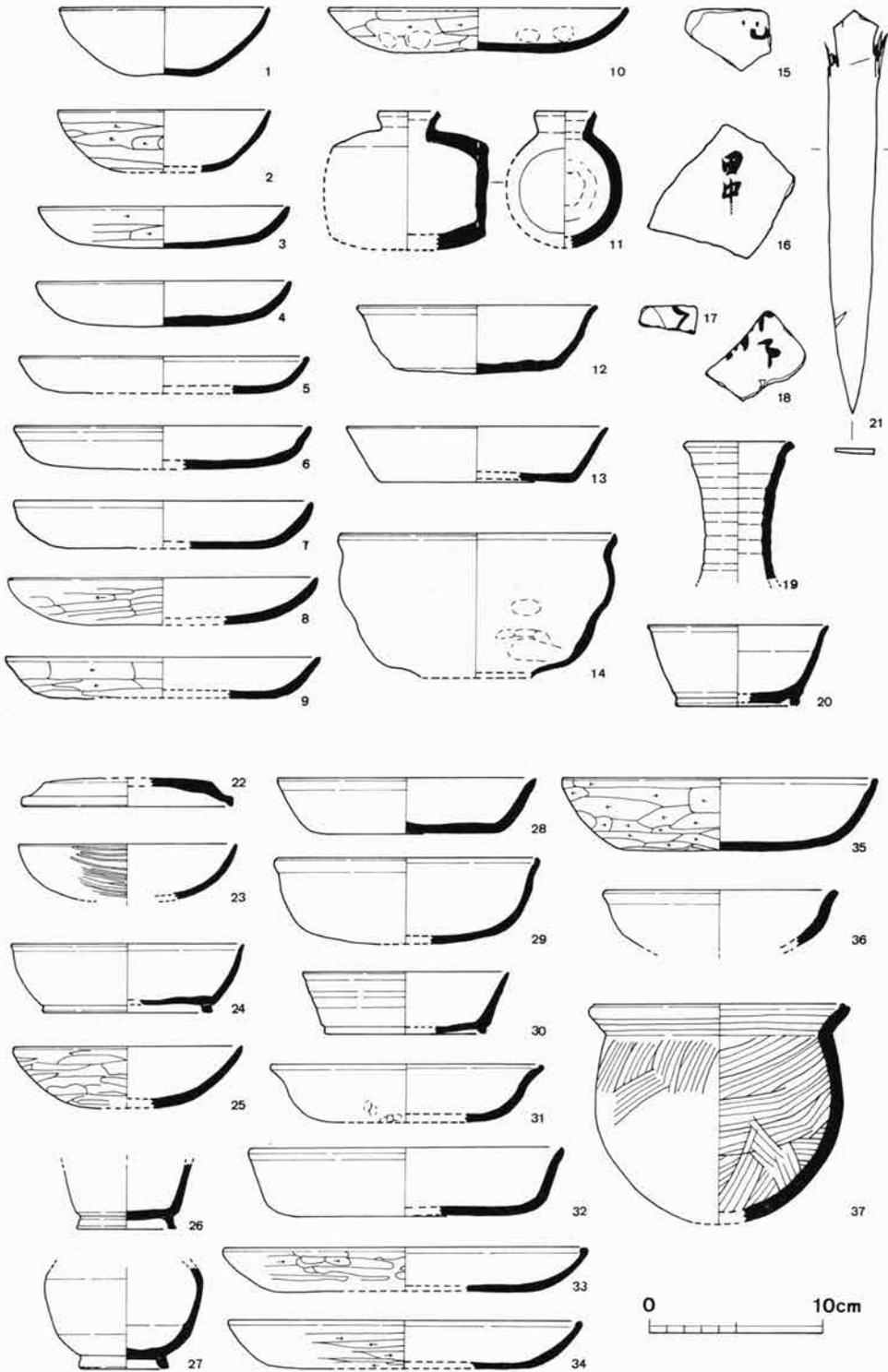
1~10は体部，底部とも外面をヘラ削りで仕上げる土師器である。1・2は口径12cm前後の碗である。3~10は，杯身で，端部を内側に肥厚するもの(5)，体部が外反するもの(6)，体部が内湾するもの(3・4・7・8・10)があり様々である。11は須恵質のミニチュア倭型の瓶である。両側面は片面が平坦であるが，反対側はふくらみを持つ。12・13は，須恵器の杯身である。底部は高台の付かない平底である。14は土師器鉢で，体部外面は指押さえ，内面は下部に指押さえを残し，上部をナデによる調整を施す。15~18は，土師器杯身の底部外面に書かれた墨書である。16は「田中」と読めるが他は不明である。20は，口径10.4cm・器高4.6cmを測る須恵器杯身である。高台の付く底部から体部は角度のある直線的に立ち上がり，口縁部はやや外反して丸くおさまる。21は長さ23.2cmの斎串である。

土坑SK20201(第81図23・24・26・27)

23は口径12.6cm，土師器碗である。体部は内湾し，口縁端部は上方に丸くおさまる。体部外面はヘラみがき，内面はていねいなナデ仕上げを行う。24は口径13.4cm・器高4.0cm，須恵器杯身である。26・27は須恵器壺である。26の内面には漆が付着している。

土坑SK20202(第81図35・36)

35・36は土師器杯身である。35は口径18.3cm・器高4.2cmを測る。外面全体にヘラ削りを施す。36は口径13.6cm，内面には漆が付着している。



第81図 出土遺物実測図(1)

建物SB20201・02(第81図31～34・37)

柱穴P-2には、土師器碗(29)、土師器杯身(31・32)がある。29は外面へラ磨き、31は底部、体部外面を削り調整、口縁部は外反し端部は上方に肥厚する。32は外面を全面へラ削り。P-3には土師器杯身(33)がある。P-6には土師器杯身(34)があり、外面へラ削りを施す。37は口径15.0cm、土師器甕である。体部は丸く内傾し、「く」の字状に口縁は外傾する。端部はややくぼみ、内側に肥厚する。体部内外面とも刷目を施すが、内面は粗い。

溝状遺構SX20203(第81図39～56・66)

39～41は土師器碗である。体部外面はへラ削り、内面はていねいなナデによる調整を施す。42～45は土師器杯身である。口径14.8～15.6cm、器高2.8～3.5cmを測る。42・43は端部が内側に肥厚する。46・47・56は土師器皿である。体部は斜上方に直線的にのびるもの(47)、外反するもの(46・56)があり、外面はへラ削りを施す。

48・49・57は須恵器杯蓋である。48・49は、口径17.4cm・18.3cmを測り、縁部は扁平に屈曲し、端部は下方に丸くおさまる。57は口径12.1cm、端部は下方におさまる。50～52は須恵器皿である。口径は19.5cm・19.2cm・15.0cmを測る。体部は直線的に斜上方にのび端部は平坦面をもつもの(50・52)、丸いもの(51)がある。50の内面は漆を混ぜ合せた墨が全面に付着している。55・58～60は須恵器杯身である。

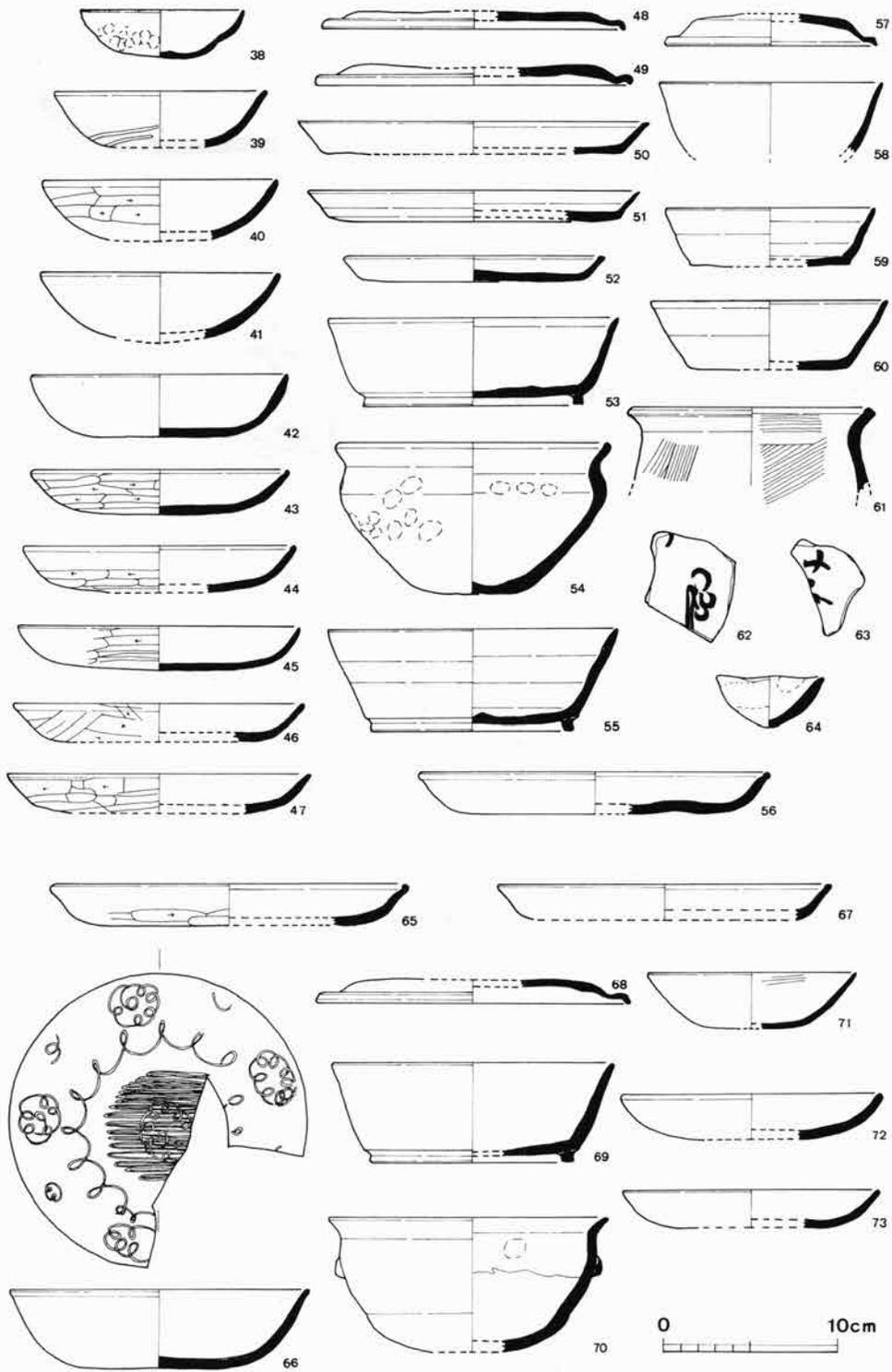
54は口径15.8cm・器高8.7cmを測る鉢である。底部は小さい平底で、体部はほぼ直線的に斜上方に立ち上がり、「く」の字状の口縁から端部が内側に肥厚する。体部外面には煤が付着している。61は土師器甕である。

62・63は土師器皿の底部外面に描かれた墨書である。62は人物の耳であろう。66は黒色土師器碗である。色調は、内面と口縁部外面は黒色、体部・底部外面は茶褐色を呈する。見込みには鋸歯状の暗文の上に螺旋状の暗文を施し、さらに周辺には、5個の螺旋状の暗文を配している。外面には全面に横方向のへラ磨きが施されている。

黄灰色粘質土層(第81図65・67～71、第83図)

65・67は土師皿である。体部はやや外反しながら斜上方に立ち上がり、端部は内側に肥厚する。70は口径16.0cm・器高7.7cmを測る土師器鉢である。底部は小さい平底で、体部はほぼ直線的に斜上方に立ち上がり、口縁部は「く」の字状を呈し、端部は細くおさまる。体部外面は指押さえの痕跡を残し、「耳」が2個とり付く。いわゆる人面土器のたぐいである。この器の内面には漆が全面に厚く付着している。71は土師器碗である。72・73は土師器皿である。

第83図は土師器皿である。底部外面には、体を休めている鳥が描かれている。鳥は鳳凰であろうか。



第82図 出土遺物実測図(2)

5. ま と め

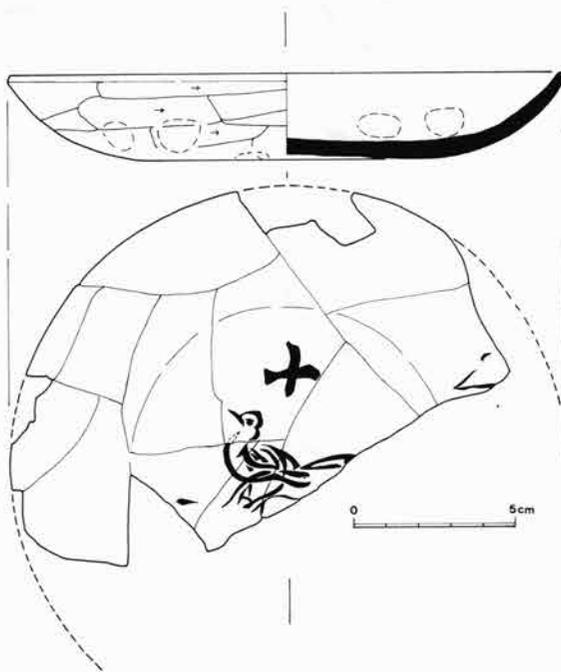
今回の調査では、長岡京期、平安時代、中世の遺構が検出された。以下、要点を記述し、遺跡の性格の一端に触れてみたい。

長岡京期の遺構として、溝SD20201、掘立柱建物跡SB20201・SB20202、土坑SK20201・SK20202・SK20205、溝状遺構SX20203などが存在する。

溝SD20201の位置は、既報告の溝SD0252、SD0254との心々距離が約12m(4丈)であることから、三条大路南側溝に比定して誤まりはない。溝中の側板は、

溝幅を狭くし、その上に板を横たわせると、道路と町内との進入路としての「小橋」の一部であろうと推測できる。この溝に区画された町内には、SB20201、SB20202等小規模な掘立柱建物跡が建ち並ぶ。しかも、SB20201では、町割の3/9町にあたり、計画性に富んだものとして興味深い。SB20201とSB20202の間にあるSX20203は、雨水の排水用として自然にでき上がったかもしれない。土坑SK20201・02・05、SD20201や長岡京廃絶に伴って整地された土層から、多量の土器が出土した中に漆の付着した杯、鉢が目立つことに注目したい。ただ一点、土師皿に漆塗りを施した破片があった。まさに、漆を扱った職人が住んでいたものと想像する。

(竹井治雄)



第83図 墨書土器実測図

6. 山崎遺跡(山城国府跡第18次)発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて、中央自動車道西宮線改築工事に伴って実施した。所在地は、京都府乙訓郡大山崎町竜光20-3他である。調査地は、古代・中世において川港として栄えた山崎津、山城国府の推定地内である。また、旧石器時代の遺物の散布地である山崎遺跡の範囲内でもある。

調査を担当したのは、当調査研究センター調査第2課調査第3係係長小山雅人、調査員竹井治雄であるが、現地調査については主に竹井が担当して実施した。調査にあたっては、大山崎町教育委員会をはじめ関係諸機関にご協力いただき、現地作業に際しては調査補助員・整理員・作業員の協力のあったことを記して感謝したい。なお、調査に係る経費は、日本道路公団大阪建設局が負担した。

2. 調査経過

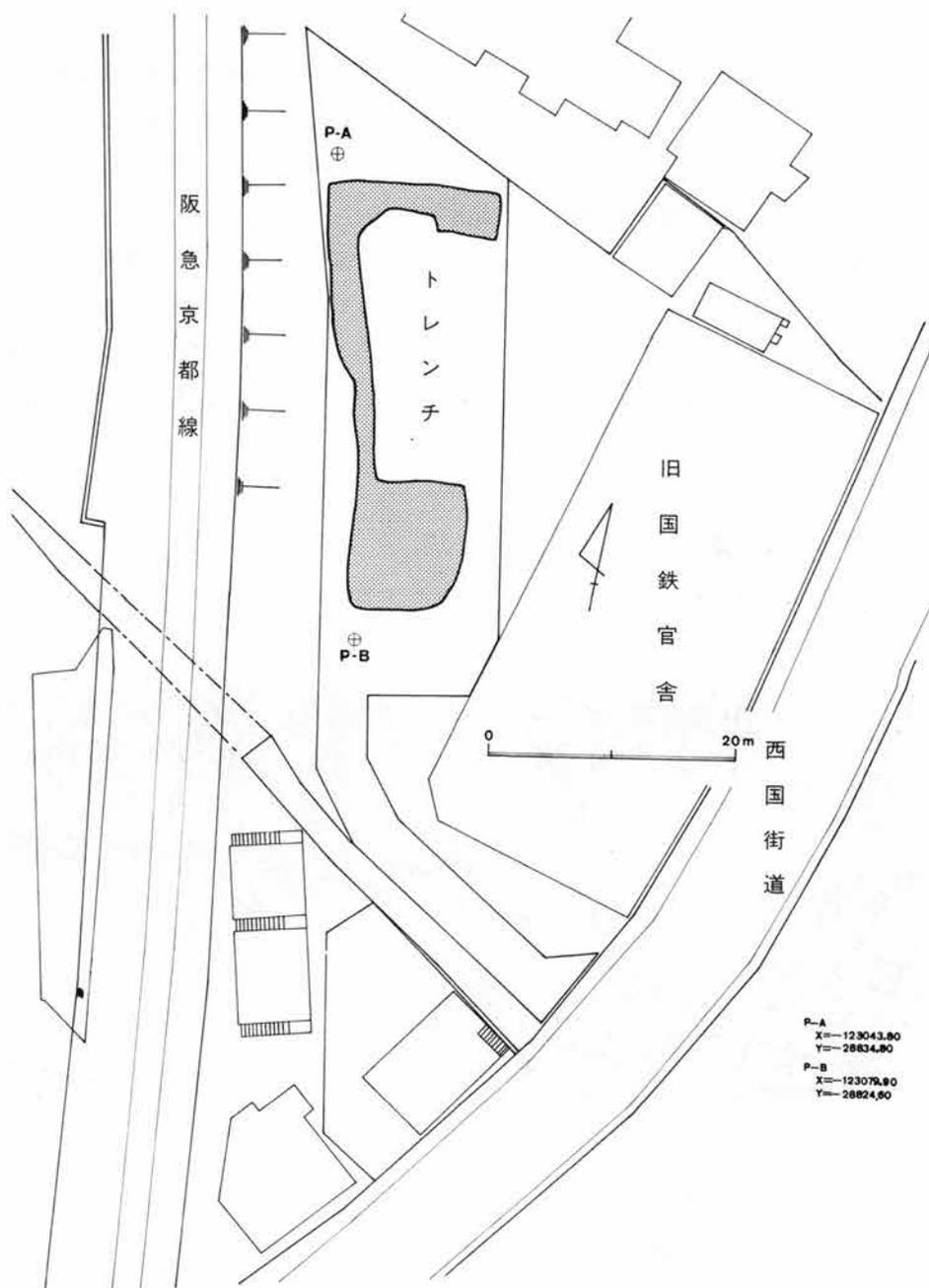
調査地は、天王山の麓の西国街道沿いに位置し、阪急電車の軌道や旧国鉄官舎跡地であ



第84図 調査地位置図(1/10,000)

ることから、遺跡の有無については予想しがたいところであった。そのため、トレンチ設定は対象地の北側から幅1mの布掘りで土層を観察する方法を採った。

調査地の基本的な土層は、上位から表土、茶灰色粘質土、褐灰色粘質土、暗灰褐色土、



第85図 トレンチ配置図

黄褐色土の順である。茶灰色粘質土は比較的固くしまっており、染付磁器片等を含む近世層である。褐灰色粘質土は厚さ0.2mを測り、旧耕作土の様相を呈している。暗灰褐色粘質土は、0.2～0.3mを測り、中世の遺物が多く含まれ整地層と考えられる。検出された遺構は、各時代の土層を切り込み、数時期に分けることができる。

3. 検出遺構

調査の結果、鎌倉時代～江戸時代の建物跡、井戸、土坑等の遺構を検出し、青磁、白磁碗をはじめ、土師器、瓦器等の日常雑器も多数出土した。

井戸・石組の井戸(井戸Ⅰ)と素掘りの井戸(井戸Ⅱ)の2基を検出した。この両者は重複しており、井戸Ⅰの方が新しい。

井戸Ⅰ 近世の茶灰色粘質土を掘り込んで作られている。掘形は一辺2mの隅丸方形を呈し、深さは1.5m以上である。井戸側は、人頭大の石、巨礫を用いた木口積の石組で、全体に荒々しい造作である。石組の内法は0.95m・深さは1.0m以上である。底部は確認できなかった。井戸内には青灰色泥土が厚く堆積し、長い間、口の開いていた状態が続いて野井戸として利用されていたと思われる。遺物は染付、土師器、陶器、棧瓦が出土した。

井戸Ⅱ 井戸Ⅰと重複しており、先行する素掘りの井戸である。掘形は直径2mの円形を呈し、深さは3m以上で、垂直に掘られている。井戸内には茶褐色土、砂礫、灰色粘土等が混在し、短期間のうちに人為的に廃絶されたものと推測する。遺物としては、近世初頭の陶器、土師器、貝殻等が出土した。

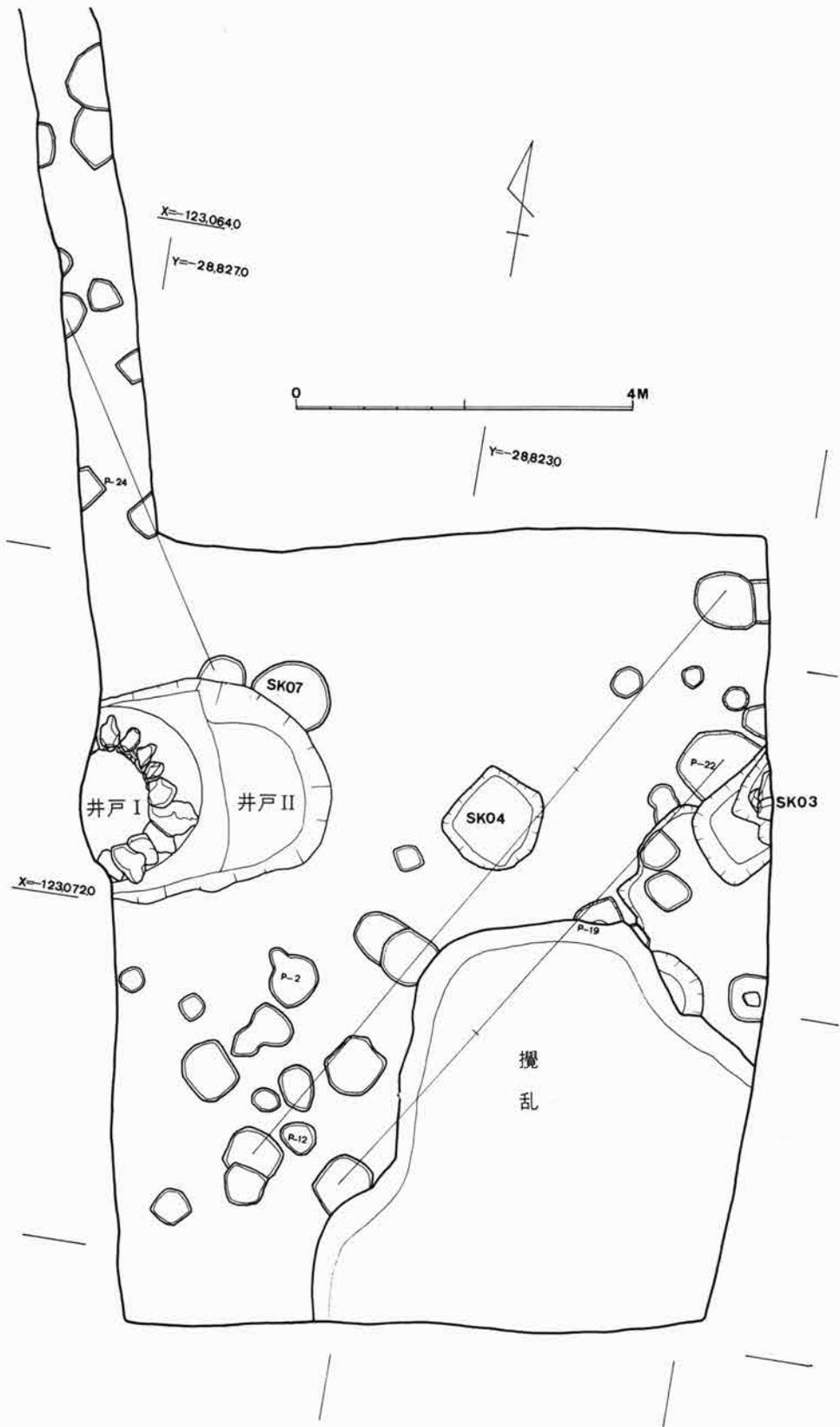
建物A・B・Cはすべて掘立柱建物跡であるが、調査面積が狭いため、例えば家屋、柵列といった固有のものとして決め手に欠く。この遺構の年代については、出土遺物から中世のものである。

建物A 3間分を検出した。柱間寸法は2.1m等間である。柱掘形は隅丸方形を呈し、一辺0.5mを測る。柱穴の埋土は暗褐色土をベースに茶褐色土、炭化物が混入している。遺物には土師器類がある。建物の方位はN34°01'Eである。

建物B 3間分を検出した。建物Aとほぼ平行に並ぶ。方位はN31°29'Eである。柱間寸法は2.9m等間である。柱掘形は隅丸方形を呈し、一辺0.4～0.5mを測る。柱穴の埋土は茶褐色土である。出土遺物は土師器皿等がある。

建物C 2間分を検出した。柱間寸法は2.1m・2.4mと等間ではない。柱掘形は隅丸方形を呈し、一辺0.3mを測る。柱穴の埋土は暗茶褐色土である。方位はN32°25'Wである。

土坑SK03 トレンチ東端で検出した隅丸方形の土坑である。長軸1.2m以上・短軸1.0m・深さ0.4mを測る。断面は逆台形を呈し、堆積土は暗灰褐色泥土、茶褐色土である。



第86図 遺構実測図

土坑の中央部に拳大から人頭大の自然石が積み重ねた状態で出土した。土坑の上面には黄灰色土が厚さ5cmほど堆積し、整地層であるかもしれない。遺物は土師器皿が最も多く、瓦器椀、青磁もある。土壙墓の可能性が高い。

土坑SK04 トレンチ中央部で検出した隅丸正方形の土坑である。一辺1.0m・深さ0.2mを測る。断面は皿状を呈し、堆積土は固くしまった茶褐色土である。遺物には、土師器皿、黒色土器がある。

土坑SK07 井戸Ⅱによって欠損する円形の土坑である。直径0.95m・深さ0.5mを測る。断面は直立する円筒形を呈し、底部は少し丸味がある。堆積土は上層で暗褐色粘質土、下層で茶褐色粘質土である。底部中央には直径0.2mの自然石が据え付けられ、さらに1個の自然石が重ねてある。これはSK03に似た状況を示し、土壙墓であると推測する。

4. 出土遺物

遺物には、土師器、瓦器、陶器、磁器等、土器類が大半を占める。これらは、中世及び近世のものが多く、遺構の時代を決める上で重要な資料である。

井戸Ⅰ(第87図1～7, 第88図)

5は青磁椀である。見込み及び底部外面、高台の内側は無釉である。釉葉は淡緑色を呈し、削り出し高台が付く。5以外はすべて土師器皿である。1は口縁部で厚みを増し、端部は直上にのびる。2～4は体部が大きく外反し、3・4は内面にハケによる調整痕を残す。6・7は口径7cm前後の小形の皿である。底部から内湾ぎみに立ち上がり、丸底風に見える。第88図は、18世紀中頃の染付の蓋である。口径29cm・器高6.5cmを測る。天井部には、川か湖に臨む家屋、橋、岩、松が描かれている。縁辺部には蓮華文を3個配し、全周に唐草文が巡っている。この絵柄をみると、中国風の寺院あるいは別荘を想起させる。

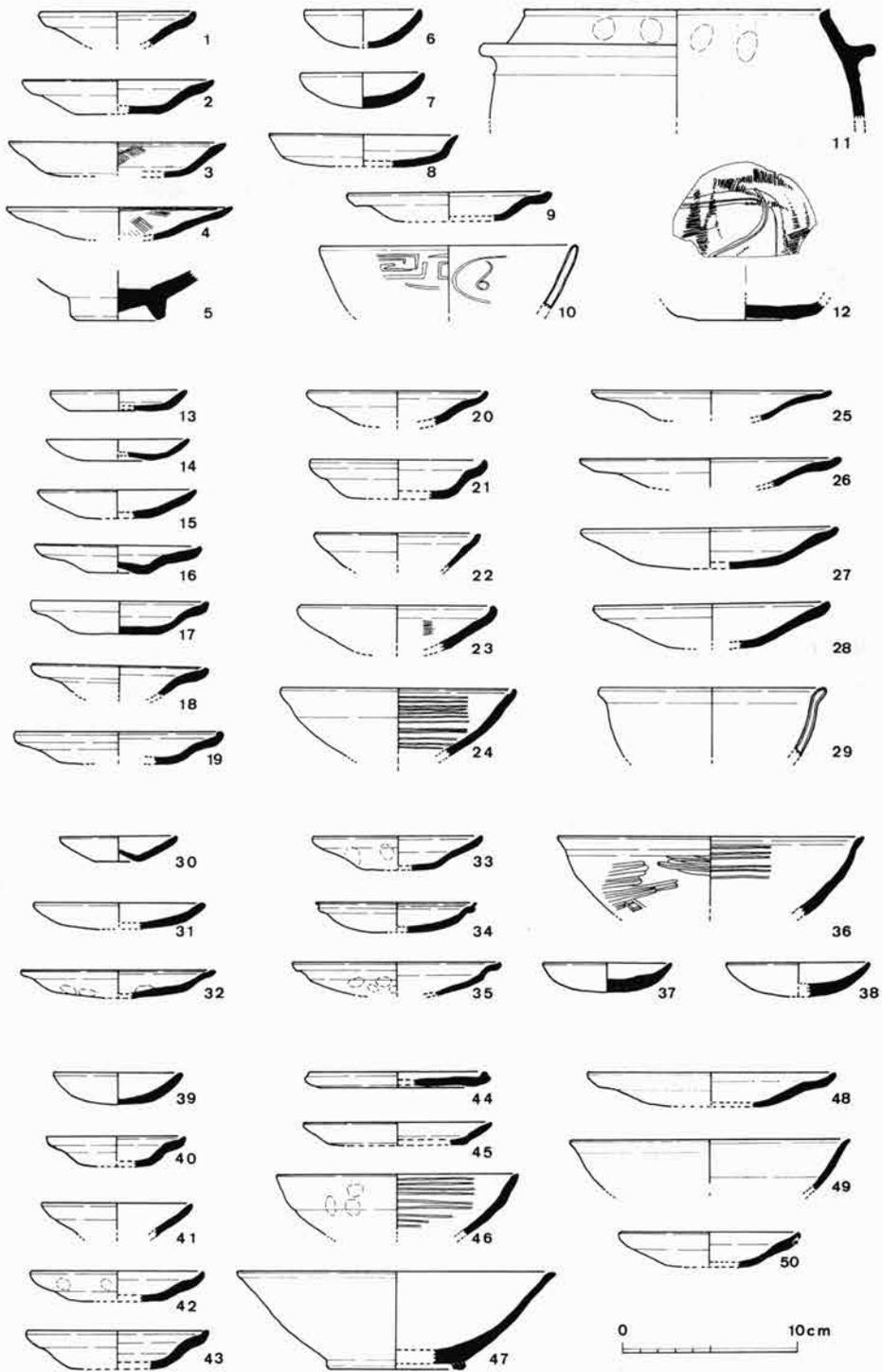
井戸Ⅱ(第87図8～12)

8・9は土師器皿である。10は口縁外面に雷文が描かれている唐津系の陶器である。11は、土師質の羽釜である。羽部分は水平にとり付くが幅が小さい。12は平底の青磁皿である。見込みに櫛状の文様が施され、底部外面は無釉である。

土坑SK03(第87図13～29)

24・29を除く土器類はすべて土師器皿である。13～16の端部は斜上方に丸くおさまり、17～23は直上にのびて丸くおさまる。口縁端部には部分的に炭化物(煤)の付着が認められ、燈明皿として利用されたことがわかる。25～28は口径15cm前後を測り、底部外面以外は、ていねいなナデ調整で仕上げる。

24は口径13.5cmを測る瓦器椀である。口縁端部の内面には明瞭な沈線が施されている。

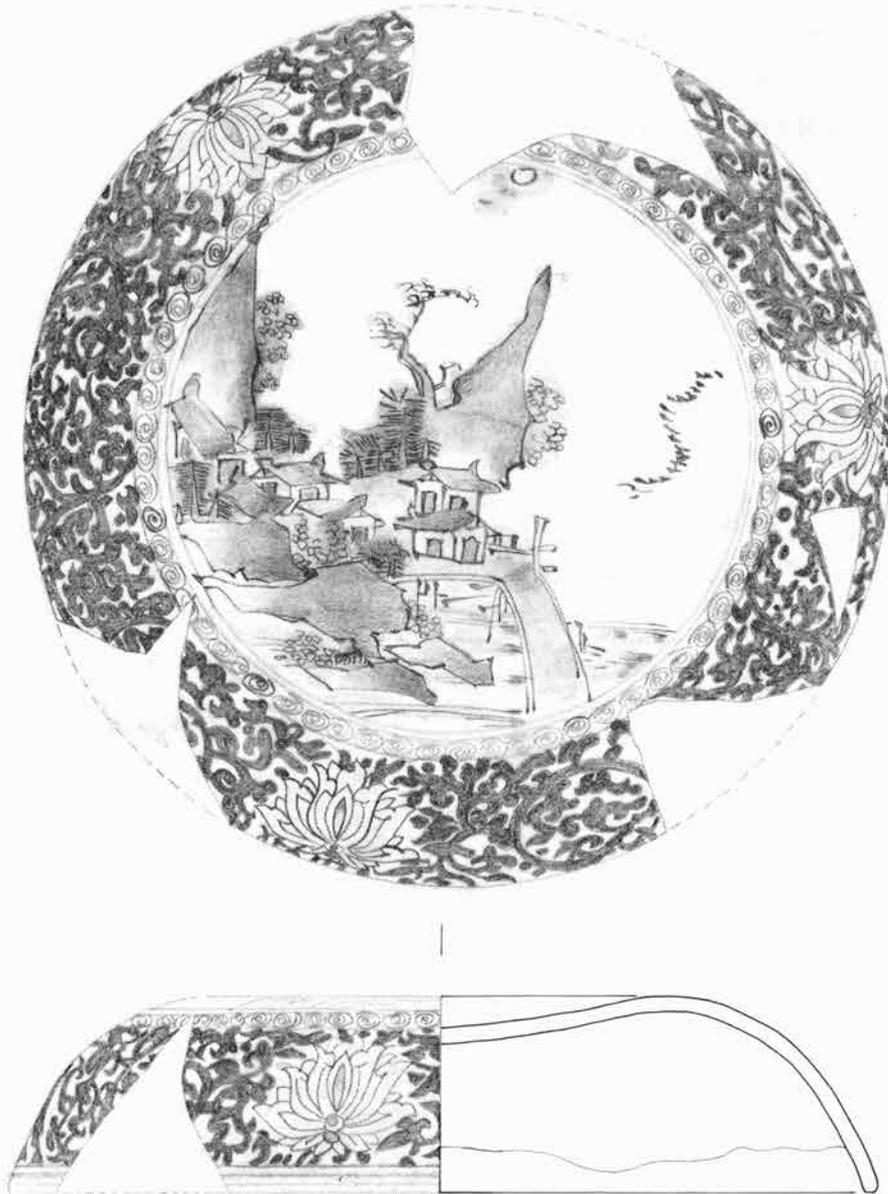


第87図 出土遺物実測図

暗文は、内面は比較的密であるが、外面は指押さえの後、口縁部を横ナデで仕上げる。29は青磁碗である。口縁部は大きく外反し丸くおさめる。内外面とも淡緑色を呈し、ていねいな調整で仕上げる。

柱穴群(第87図30~36)

30は柱穴P-19出土の底部がくぼむ土師器皿である。31はP-24出土の土師器皿である。



第88図 染付蓋実測図(2/5)

32・34はP-2出土の土師器皿で、32の口縁部は外反する。33はP-22出土の土師器皿、35はP-12出土の土師器皿で、口縁部は大きく外反し端部は直上に丸くおさめる。36はP-2出土の黒色土器である。内外面とも黒色を呈し、暗文は横方向に緻密に施されている。

土坑SK01・04・07(第87図39～49)

41・44・46はSK01出土の遺物である。44は土師器皿であるが、底部から口縁部が屈曲し小さく立ち上がる。46は瓦器碗である。内面にはかなり粗い間隔で暗文が施されている。

39・49はSK04出土の土器である。39は土師器皿、49は緑釉陶器碗である。

40・45・48はSK07出土の土師器皿である。

茶灰色粘質土層(第87図37・38・42・43・47・50)

47以外はすべて土師器皿である。37・38は口径8cm前後の小形品で、体部は内湾気味に立ち上がる。42・43・50の体部は外反し、端部は直上におさまる。

47は須恵器碗である。底部には逆台形の高台が付く。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は外側に丸くおさまる。外面はロクロナデの痕跡を残し、内面は不規則な細い暗文が施される。

5. ま と め

本調査では、当該地は推定山城国府跡の範囲内であるが、ほとんどが中・近世の遺構・遺物の検出であった。この遺構には、多数の掘立柱建物跡の柱穴を確認したが、その形態や規模を確定できない。しかし、14・15世紀頃の当該地は西国街道沿いにおいて、人物の往来、商業等が盛んであったことは、出土遺物の質・量から十分に想像することができる。

(竹井治雄)

7. 京奈バイパス関係遺跡 (小田垣内遺跡)

昭和63年度発掘調査概要

1. はじめに

本報告は、昭和63年度における京奈バイパス道路建設に伴う発掘調査の概要である。今回の調査地は、京都府綴喜郡田辺町普賢寺小字小田垣内に所在する^{おだがいと}小田垣内遺跡である。中世の城館跡として周知されていたが、この地に上記道路が建設されることになり、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて発掘調査を実施した。

現地調査は、昭和63年8月17日から平成元年3月17日まで実施した。担当は、調査第2課調査第3係係長小山雅人と同調査員伊野近富である。調査面積は、当初約500㎡であったが、調査が進展するに従って全面が遺跡であることが判明したため、結局、約2,600㎡を調査することになった。

調査中は田辺町教育委員会を始め、関係諸機関に大変お世話になった。また、調査補助員や整理員、作業員に多大な労苦をかけた。記して感謝したい。なお、発掘調査にかかる費用は全額日本道路公団大阪建設局が負担した。

今回の概要は、現地調査を年度末まで行った関係上、遺物や遺構について詳細な整理がついていないため、その成果の一部を紹介するに止め、詳細については来年度報告したい。

2. 調査概要

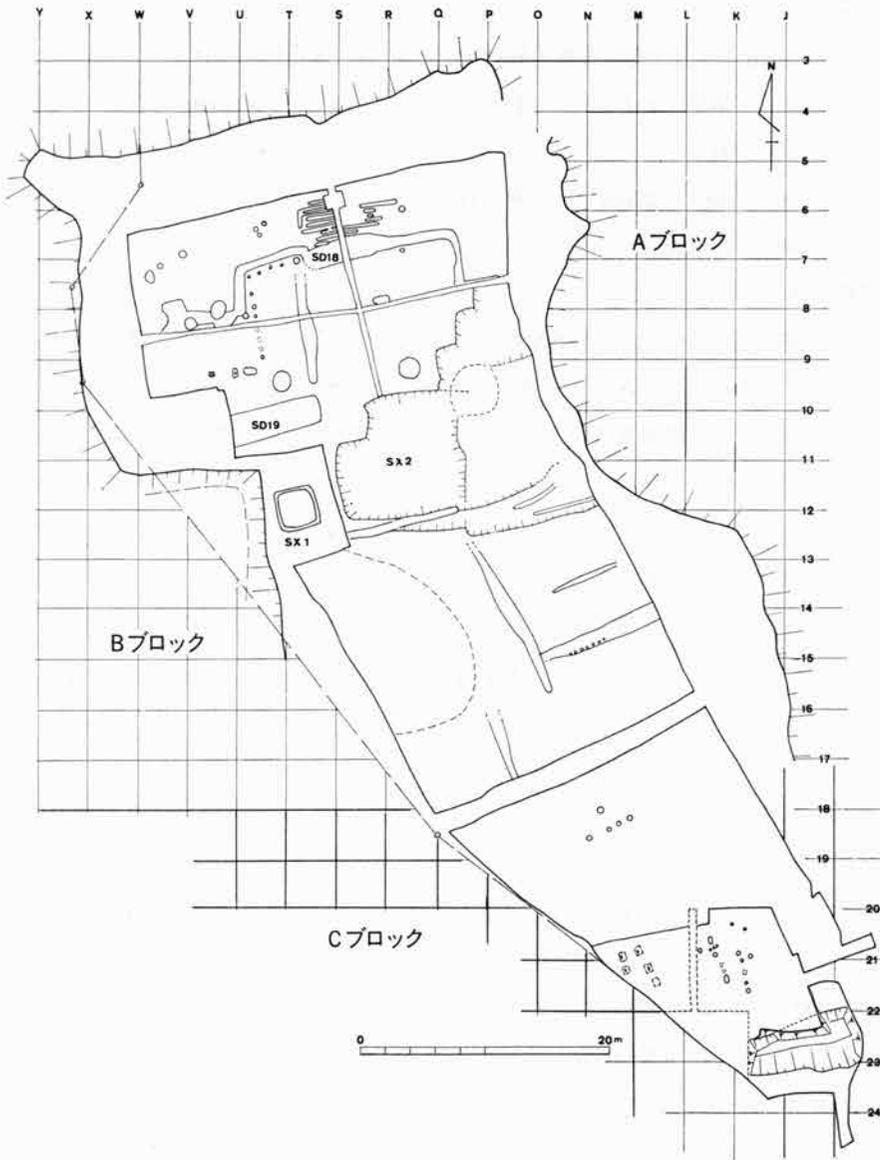
小田垣内遺跡の発掘前の状況は山林であった。地上観察によって、平坦地(郭)と土塁・空堀をもつ中世の城館跡と推定されていた。



第89図 調査地位位置図 (1/50,000)



第90図 地形測量図



第91図 遺構平面図

今回の地上観察でも、東側谷部に土塁と空堀があり、西側の丘陵腹部にも土塁があり、これが東西の範囲となる。北端は急斜面に成形されており、南端には土塁と空堀があって、結局、城館の範囲は南北約100m・東西約100mと考えることができる。

調査は草刈りを行った後、全体の平板測量をすることから始めた。調査の都合上、3つの平坦地を北からA・B・Cブロックと呼称し、谷部をDブロックと呼ぶことにする。

Aブロック

表土下約40cmで地山である黄褐色砂礫層となった。地山は場所によって変化しており南にいくに従って粘質土層となる。遺構としては、北端に高さ30cmの細長い平坦面を設けていたことが判明した。土塁の代用としたようである。中央部に「コ」の字形の溝SD18を設け、その南側に径20cmの柱穴を配置していた。柱穴の埋土には少し焼土が混じっており、桃山時代の遺物(唐津焼)が埋没していた。

Bブロック

北端には堀もしくは池であろうSX02が東西方向に長く検出できた。これは複雑な遺構で、東部は北へ張り出してAブロックの中央まであった。なお、西部は一段深くなっており、最下層の粘土からは平安時代末期から鎌倉時代にかけての遺物が出土した。中・上層からは江戸時代の伊万里椀片などが出土した。この西方には一辺2.3mの方形土壇があり、周りに幅0.3mの溝もあった(SX01)。池ないし堀(SX02)とは重複せず、意図的に掘り残しており、強い関連を認めることができる。

このブロックの中央から南部は緩傾斜地となっており、遺構としては数条の溝と若干の柱穴があるだけである。なお、西部は自然地形が低かったようで、戦国時代に埋め立てられ、緩傾斜地に改変されていた。

なお、このブロックの東端は谷側に張り出しており、普賢寺谷を臨むことができる。そこに土塁もしくは土壇を造っていた。

Cブロック

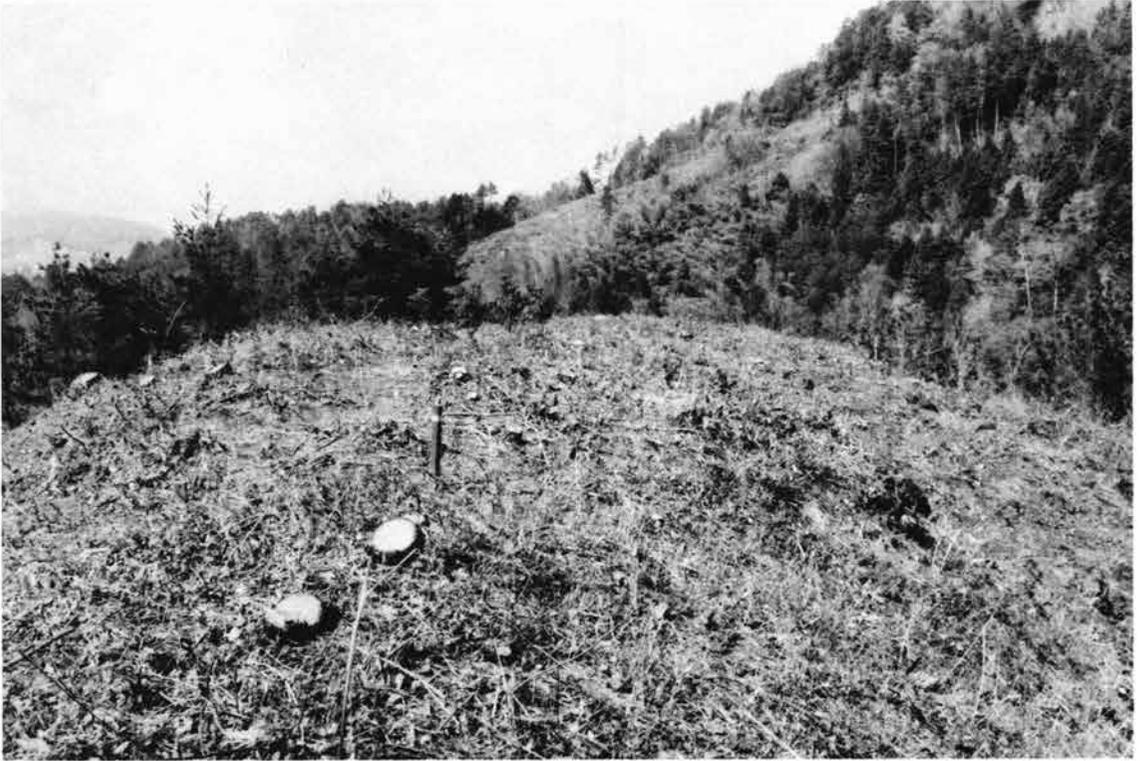
北半部は緩傾斜地で、若干のピットを検出することができた。南半部のほとんどは土塁のあった地帯で、その南に沿って堀を設けていた。土塁は、推定の高さ2.6mで、幅7mある。堀(SD07)の断面は中央部で「V」の字状を呈し、東端では逆台形を呈していた。

調査の進行に伴い、土塁の中に石造物が埋め込まれていたことが判明した。また、火葬骨を入れた蔵骨器も出土した。結局、土塁が築かれる前は高さ0.5m以上の土壇があり、そこに石仏を立て、その周辺に火葬骨を埋めた墓地であることが判明した。蔵骨器は瓦器羽釜3点以上、同かなえ1点、同鉢(?)1点、須恵器壺1点、土師器羽釜2点などがあった。また、蔵骨器を持たないものも10か所以上を検出した。また、石仏を7体以上検出し、その内4体は往時と同様立ったままであった。出土遺物から鎌倉時代後期から戦国時代(14~16世紀)まで存続したことが知られる。そして、もっとも新しい遺物が15世紀末~16世紀初めなので、その頃に墓地を廃止し、新しく土塁を造ったことになる。

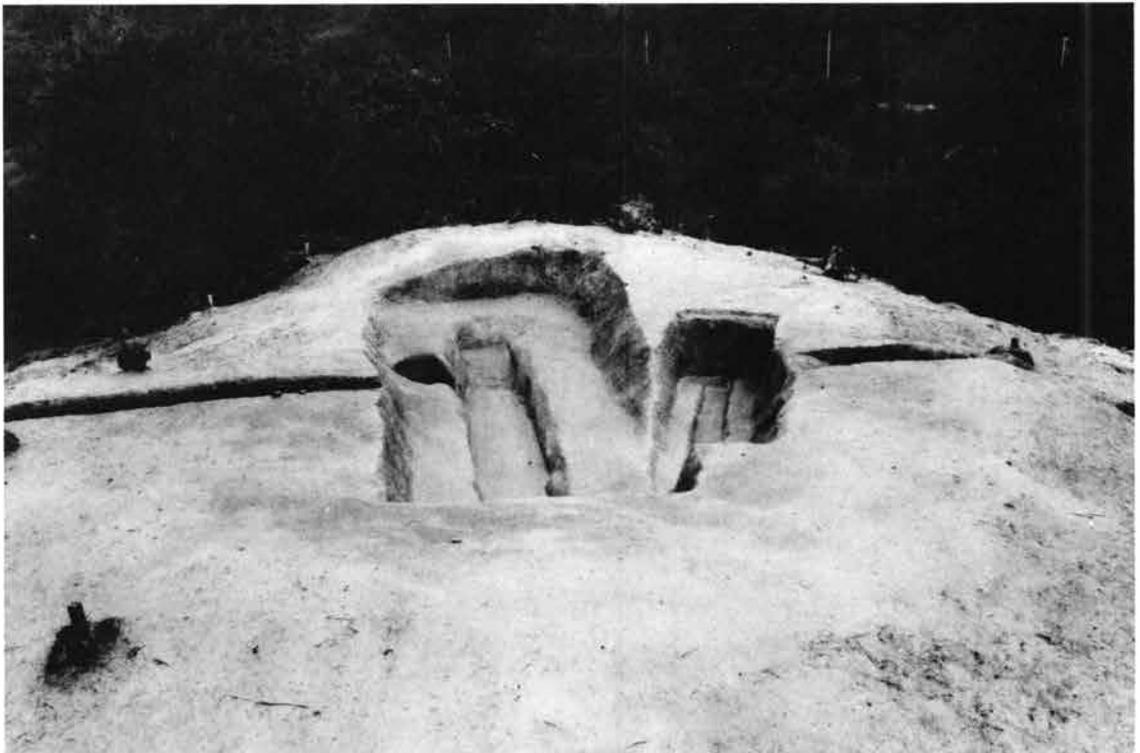
(伊野近富)

圖 版

図版第1 スクモ塚古墳群



(1) 調査前全景 (南から)



(2) スクモ塚34号墳調査後 (南から)

図版第2 スクモ塚古墳群



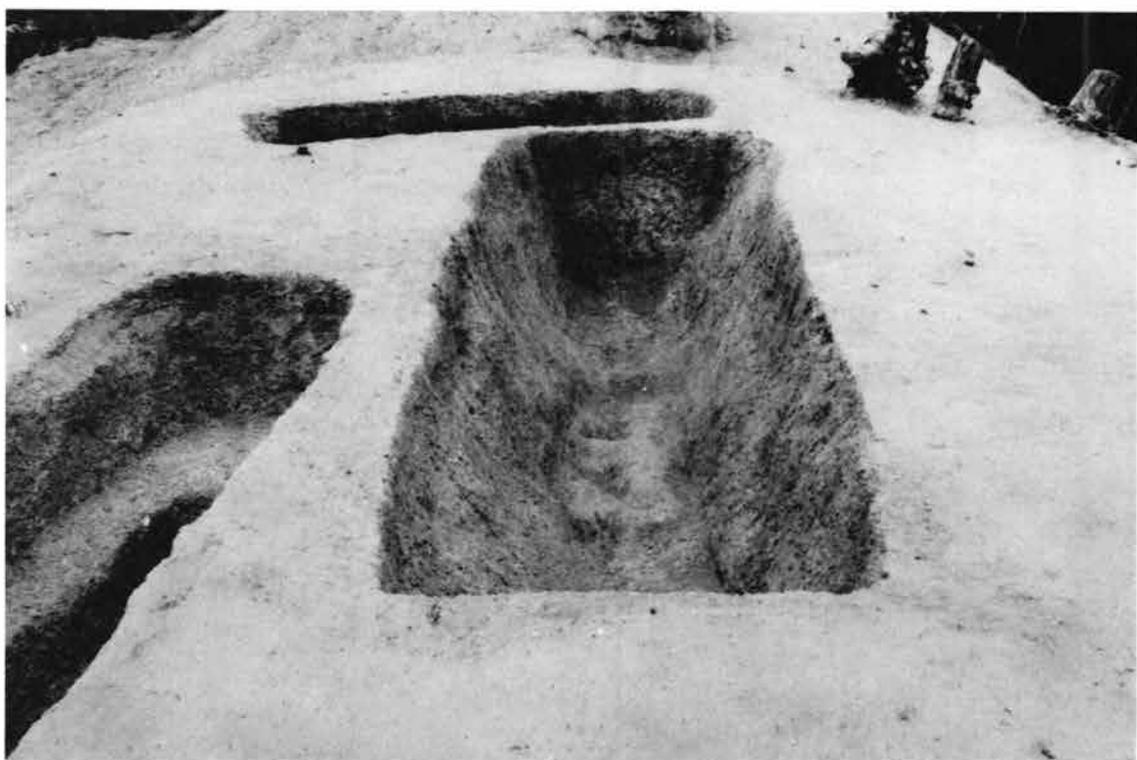
(1) スクモ塚34号墳第1主体部（北から）



(2) スクモ塚34号墳第2主体部（南から）



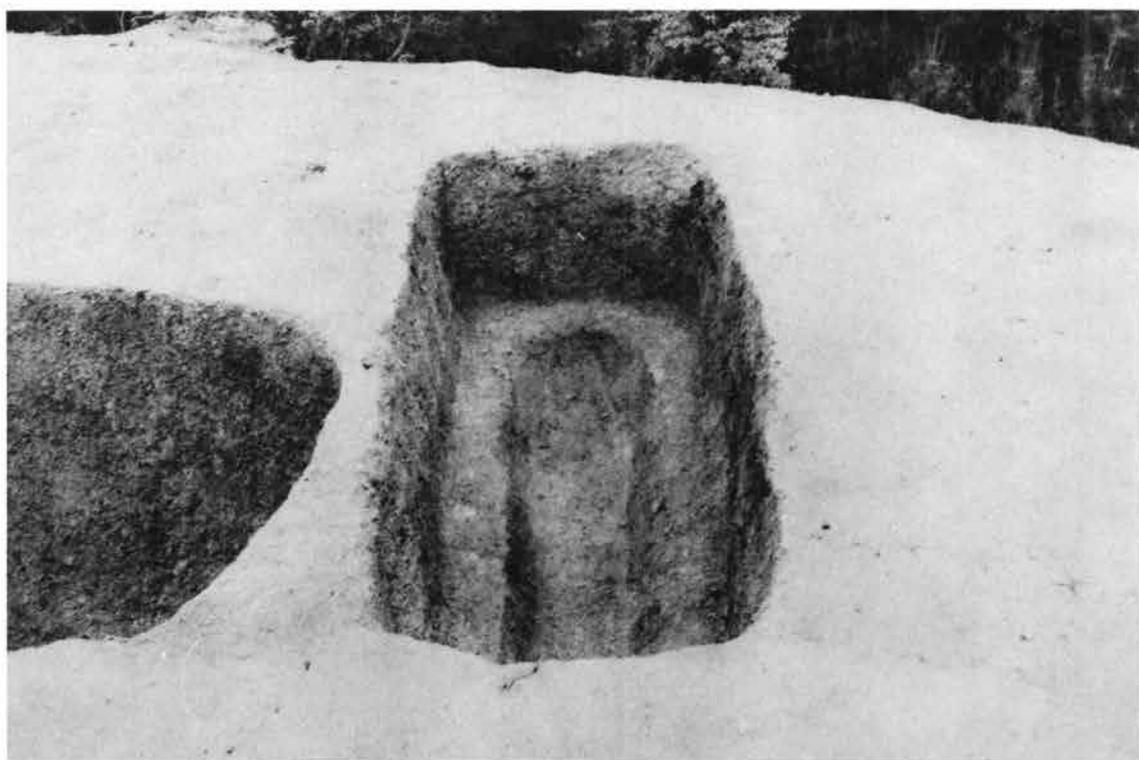
(1) スクモ塚35号墳調査後（南から）



(2) スクモ塚35号墳第1主体部（北から）



(1) スクモ塚35号墳第2主体部（南から）



(2) スクモ塚35号墳第3主体部（西から）



(1) スクモ塚36号墳調査後（北から）



(2) スクモ塚36号墳土器出土状況（南から）



(1) スクモ塚36・37号墳調査後（北から）



(2) スクモ塚37号墳土器棺（北から）



出土遺物



(1) 調査前全景（東から）



(2) 完掘状況（東南から）



(1) アバ田東1号墳遠景(西から)



(2) アバ田東1号墳全景(北東から)



(1) アサバラ遺跡・クズレ谷遺跡遠景（南西から）



(2) アサバラ遺跡全景（南東から）



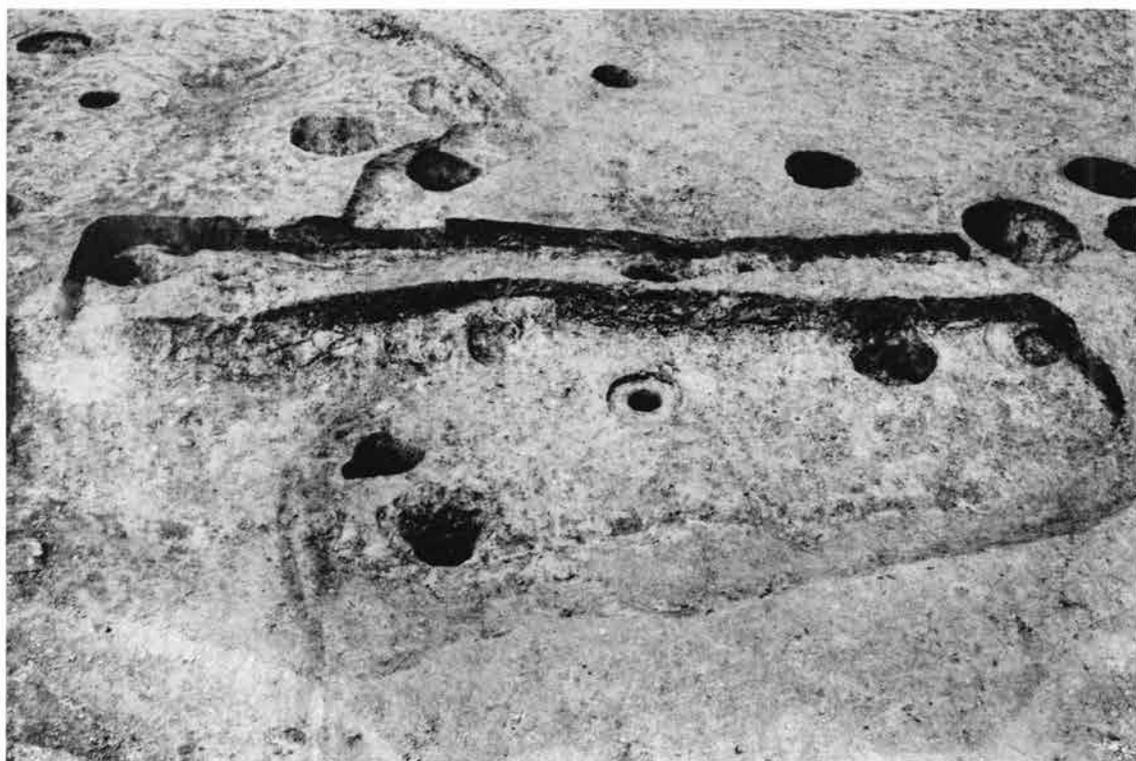
(1) アサバラ遺跡主要部全景 (南東から)



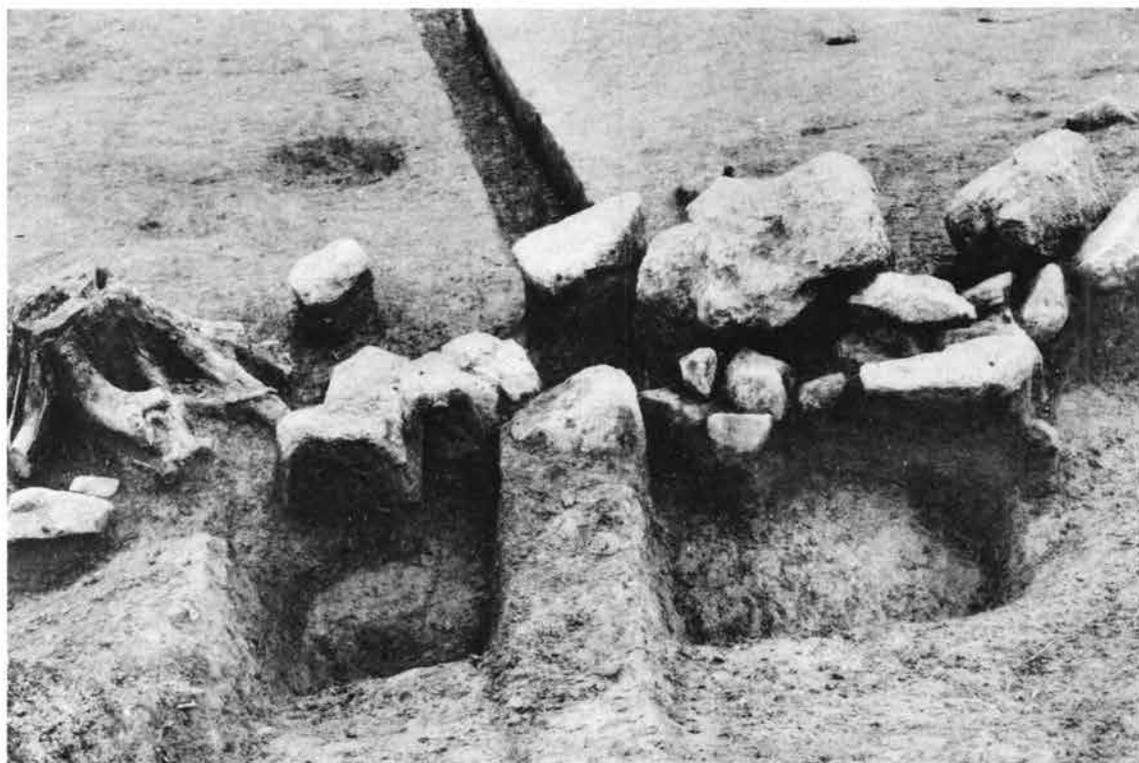
(2) アサバラ遺跡 S H02 (南東から)



(1) 13トレンチ全景 (北東から)



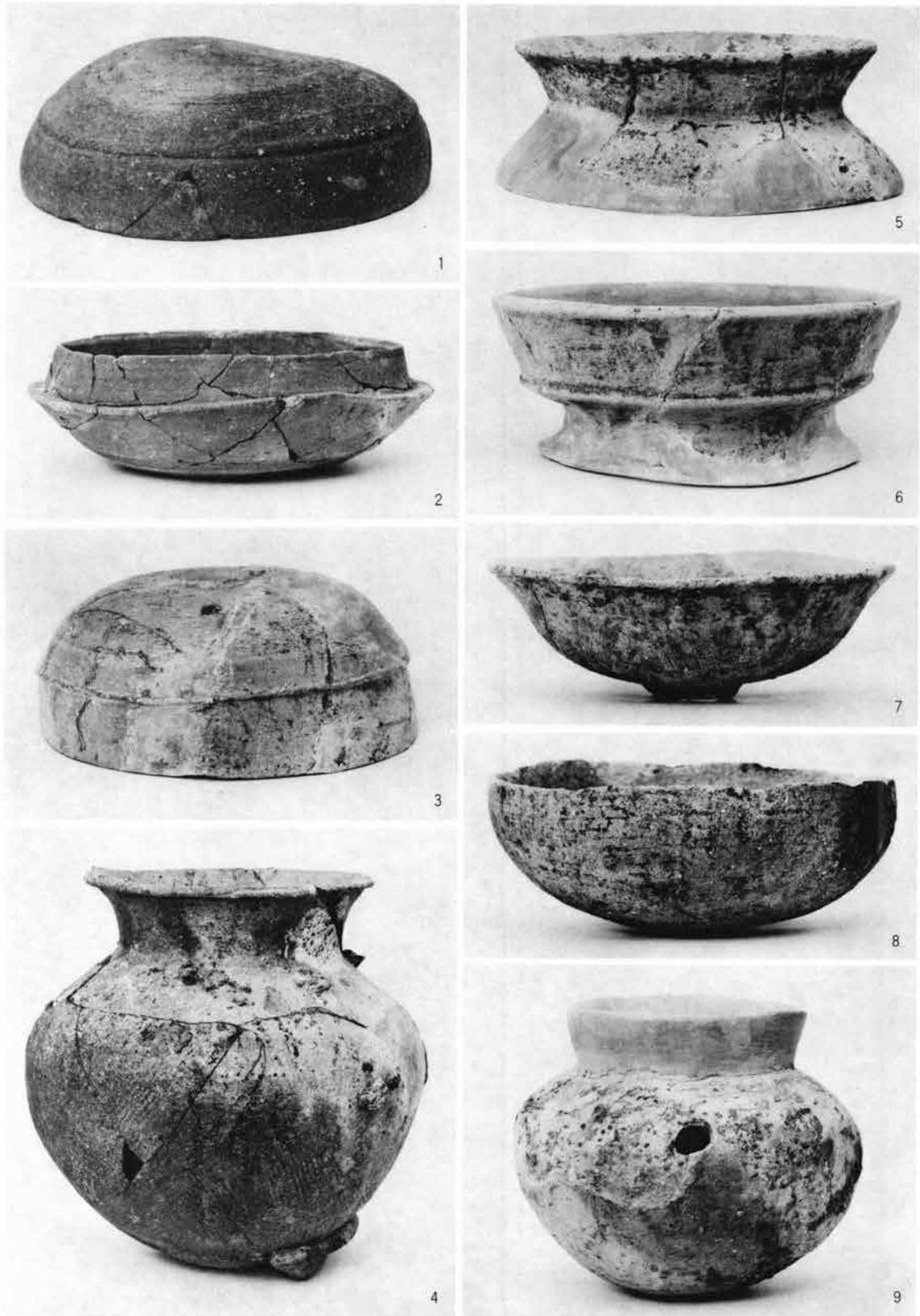
(2) SH03・SH04 (南東から)



(1) アバ田東3号墳石材検出状況（北西から）



(2) アバ田東3号墳下層住居跡（南西から）



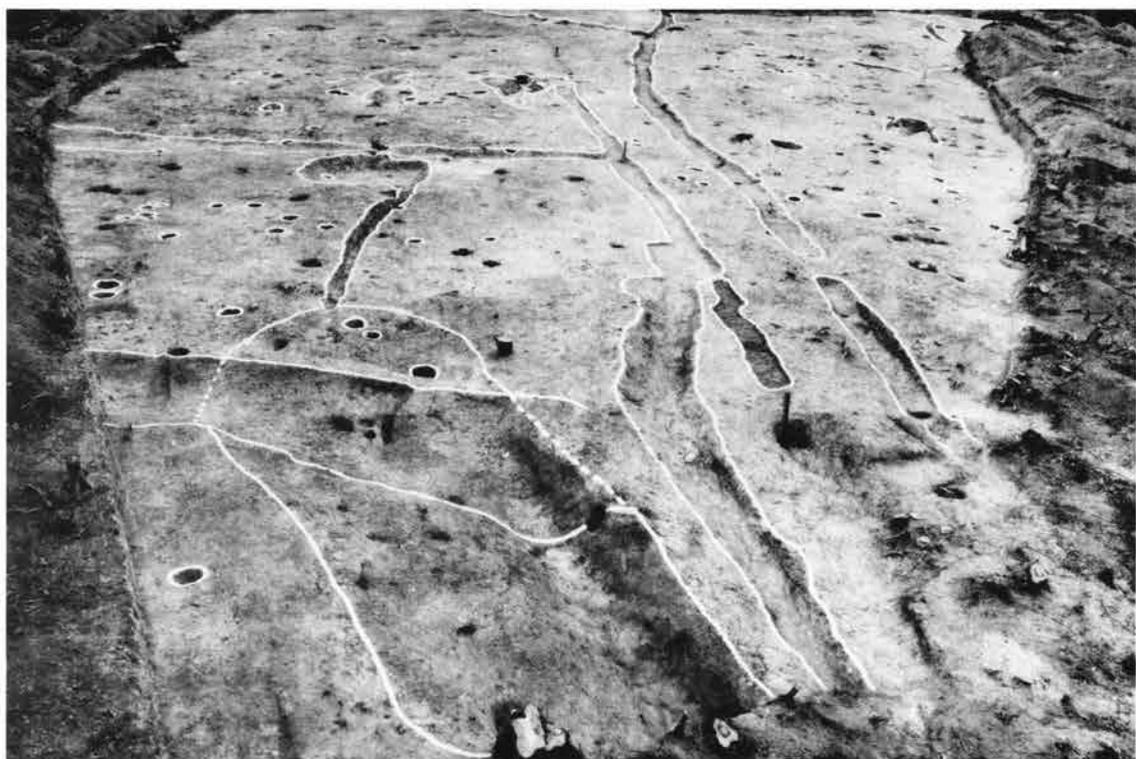
出土遺物(1) 1・2 アバ田東1号墳, 3~9 アサバラ遺跡



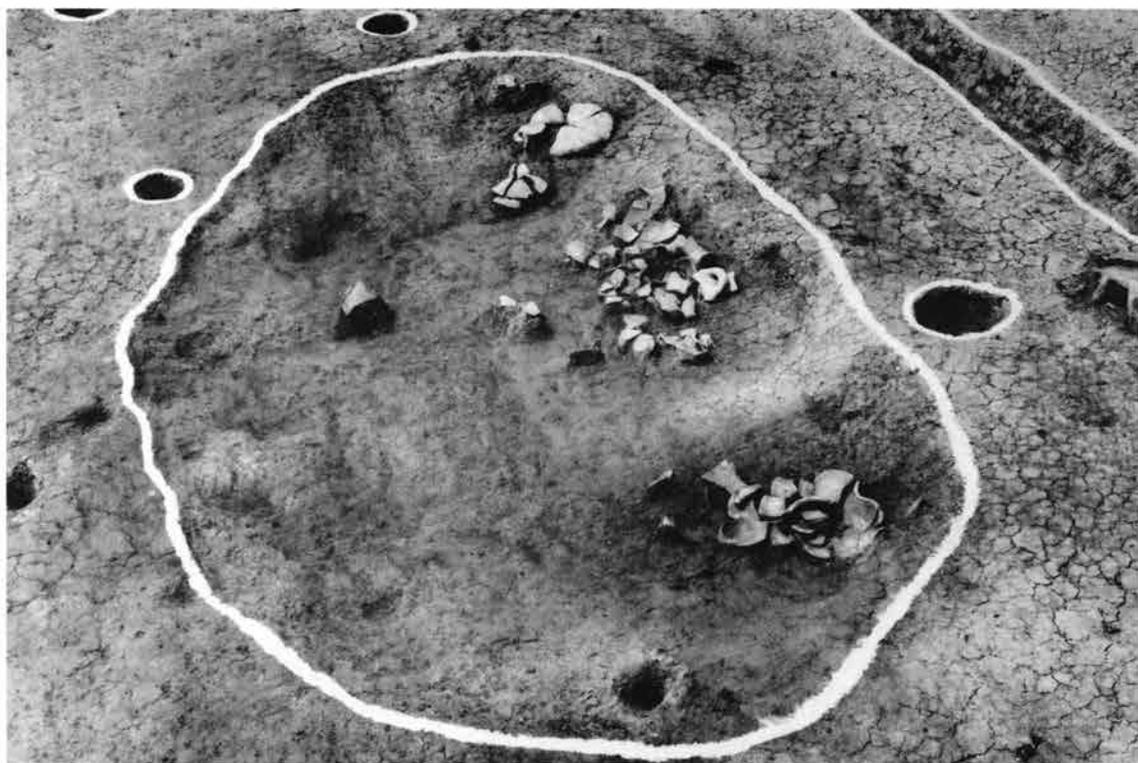
出土遺物(2) 1・2・10 アバ田東3号墳
3~5・7 クズレ谷遺跡
6・8・9 アサバラ遺跡



(1) 調査地遠景（西から）



(2) 第1調査区全景（北西から）



(1) 土坑2全景(南東から)



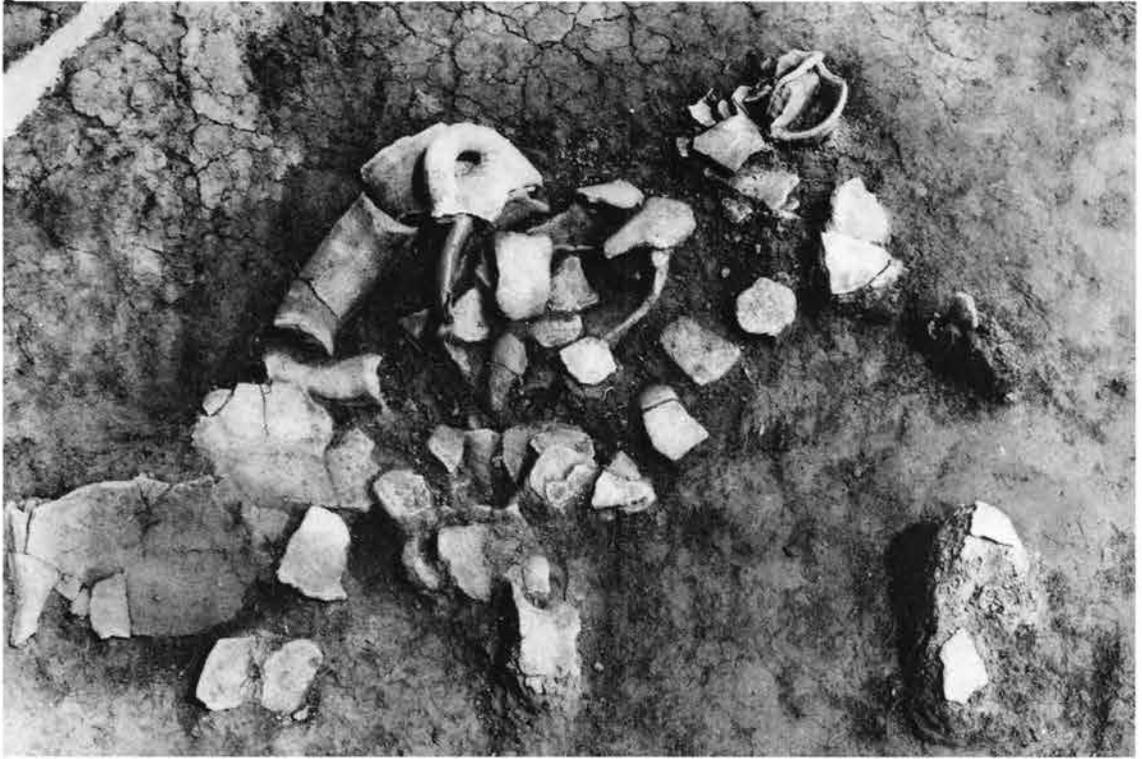
(2) 土坑2遺物出土状況(1)



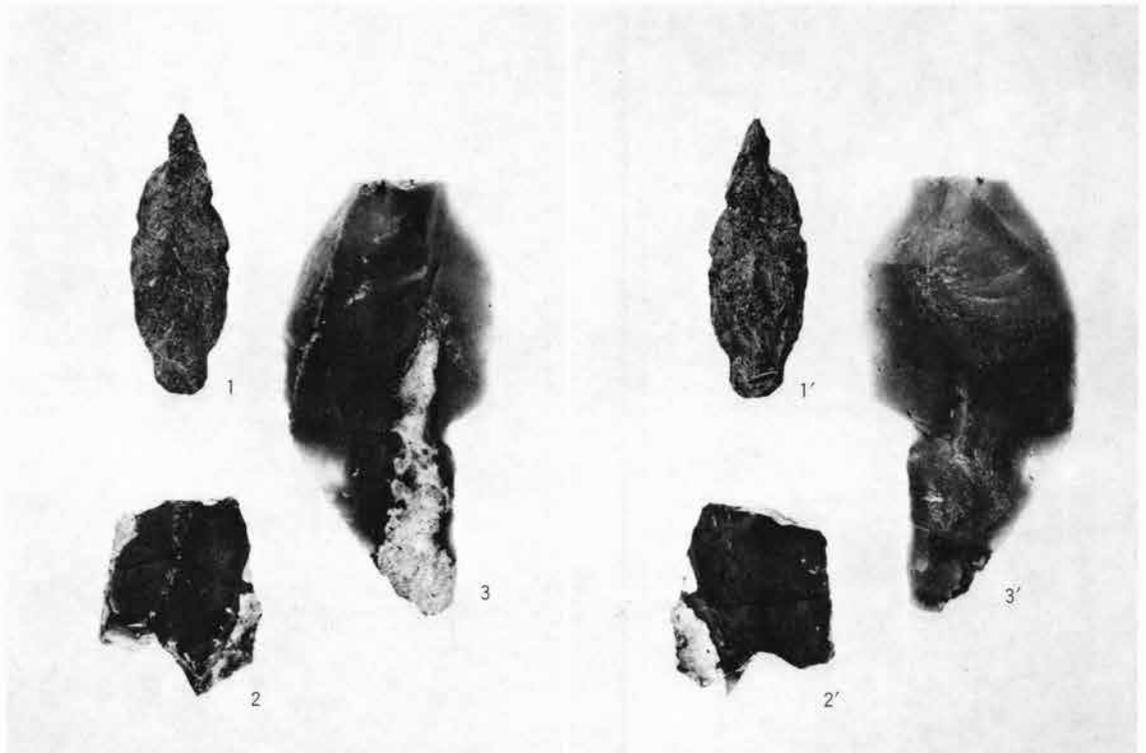
(1) 第2調査区全景 (北西から)



(2) 第2調査区盛土断面 (南西から)



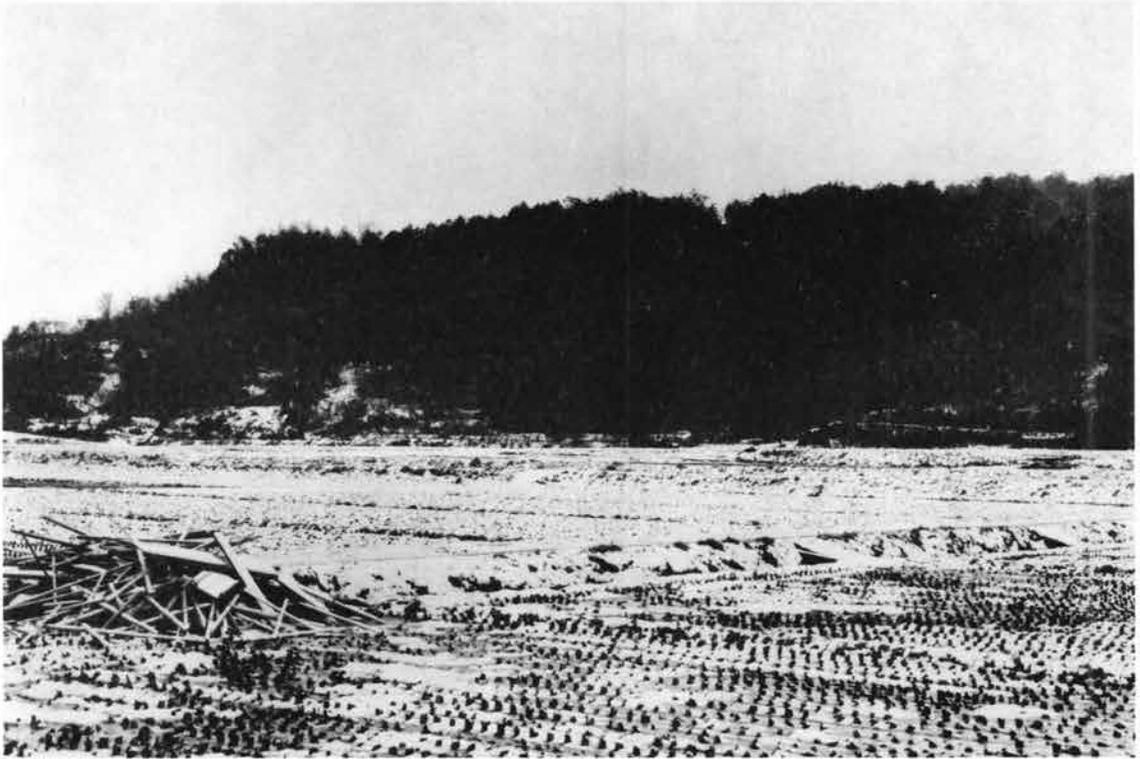
(1) 土坑2遺物出土状況(2)



(2) 出土石器



土坑2出土土器



(1) 北谷城跡遠景（東から）



(2) 西八田城跡遠景（南から）



(1) 北谷城跡3地区調査前近景（南西から）



(2) 北谷城跡3地区土器出土地点（北から）



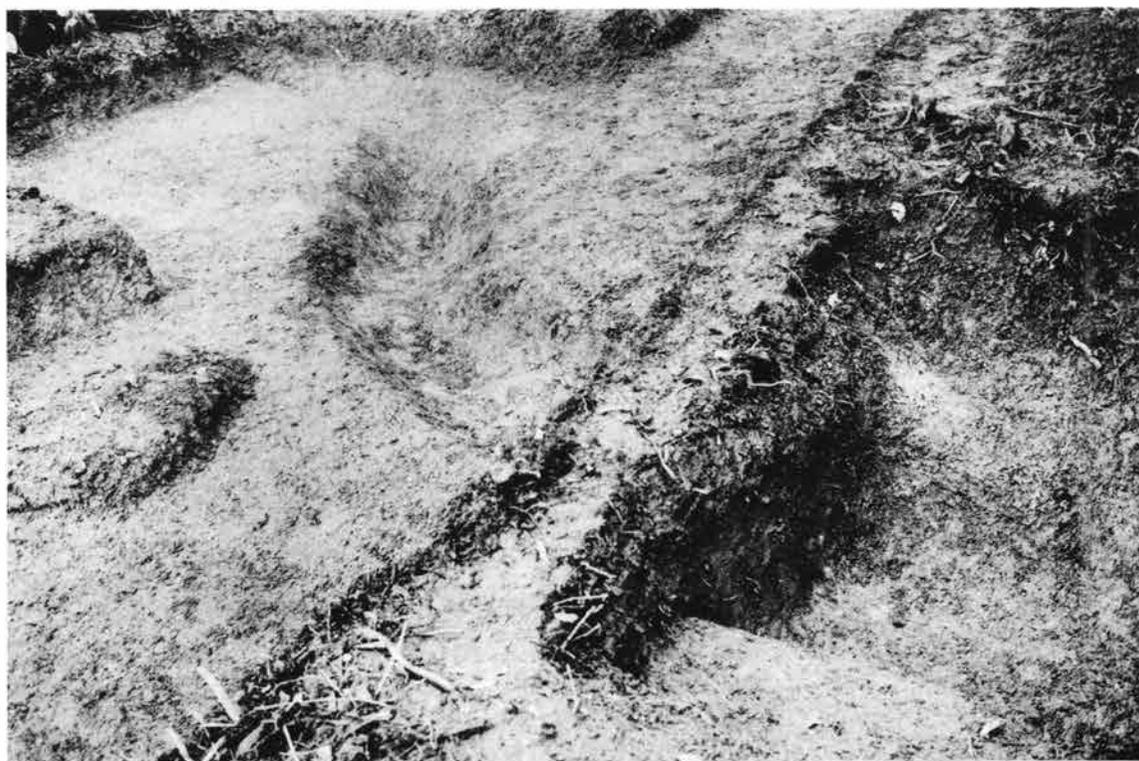
(1) 西八田城跡1地区頂部調査前近景（南東から）



(2) 西八田城跡1地区頂部調査状況（東から）



(1) 西八田城跡1地区頂部西側調査前近景（東から）



(2) 西八田城跡1地区溝（南西から）



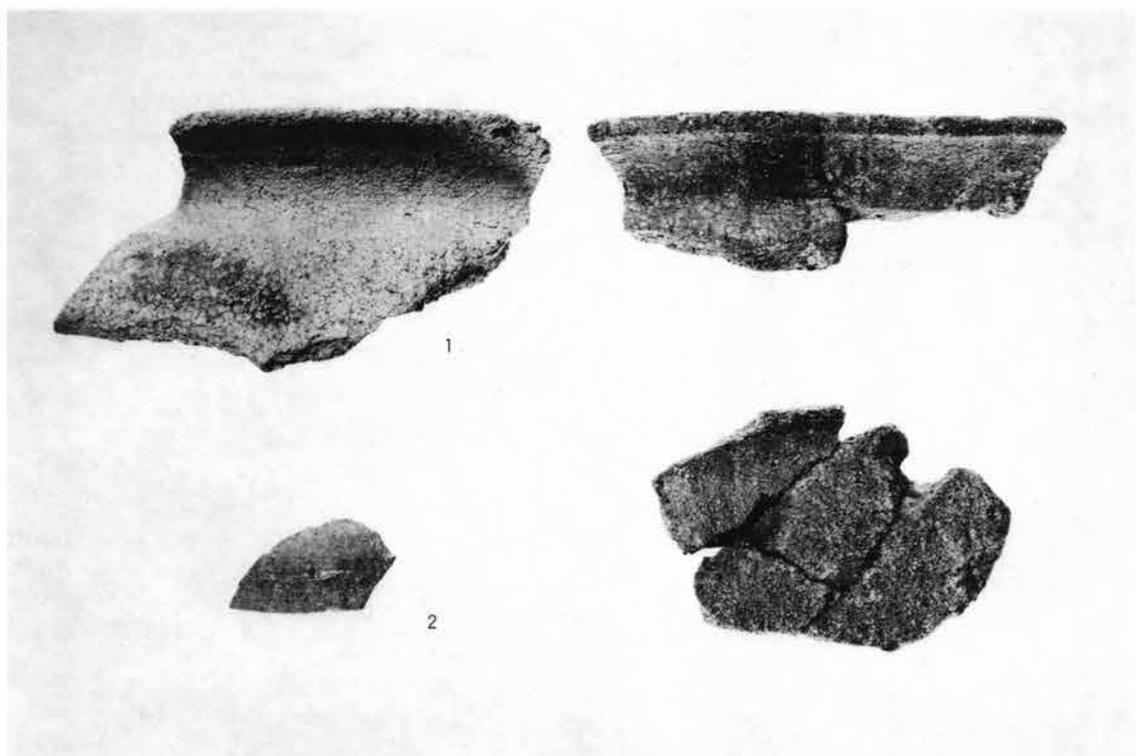
(1) 西八田城跡1地区堀切調査前近景(東から)



(2) 西八田城跡1地区堀切全景(西から)



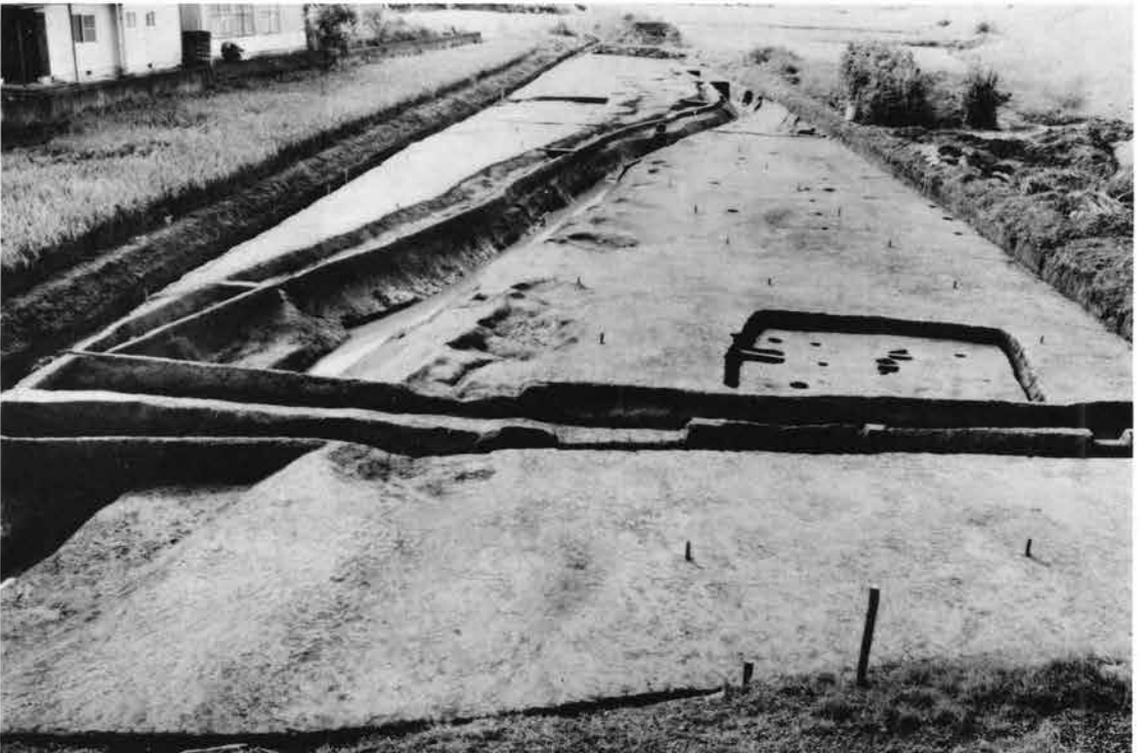
(1) 西八田城跡1地区堀切東肩部断面(北東から)



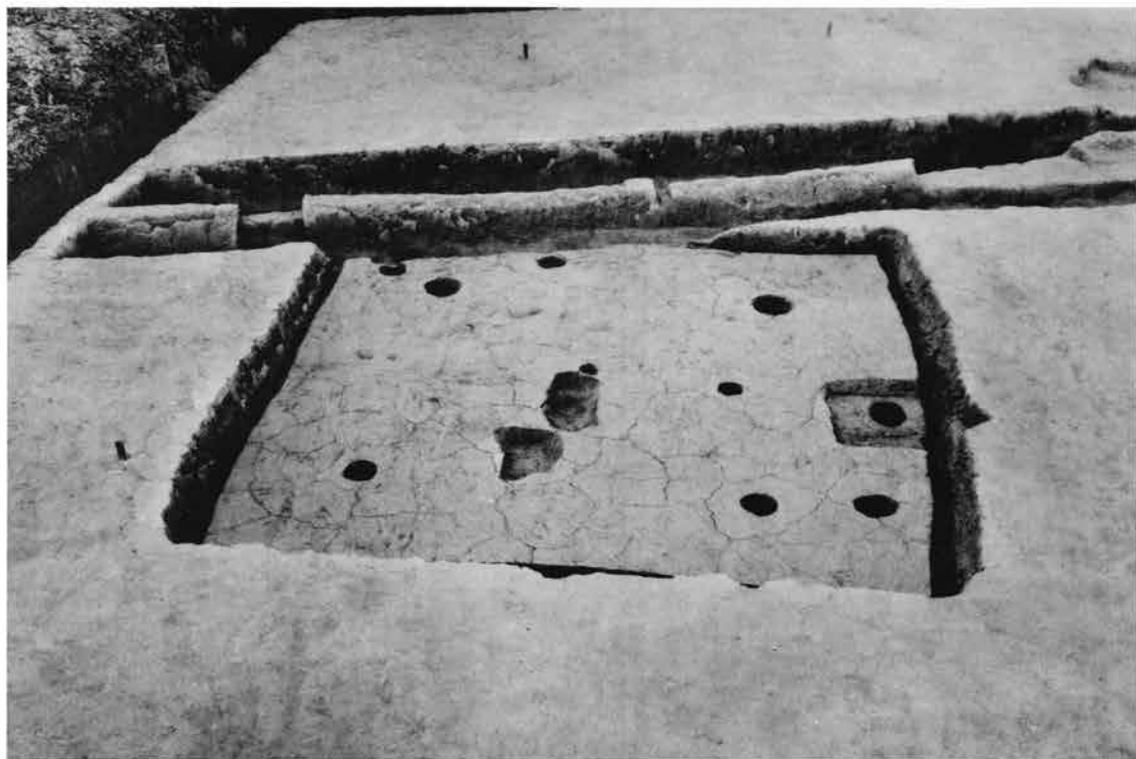
(2) 北谷城跡3地区出土遺物



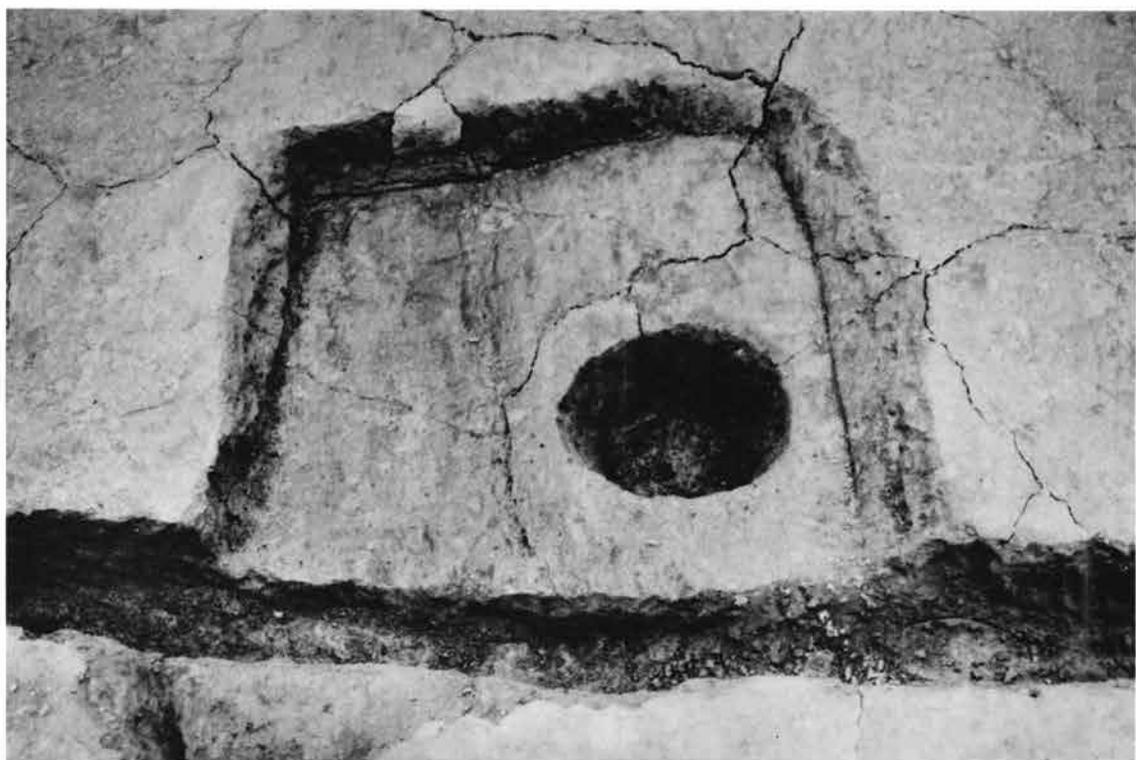
(1) 調査前全景（北東から）



(2) 調査地全景（東から）



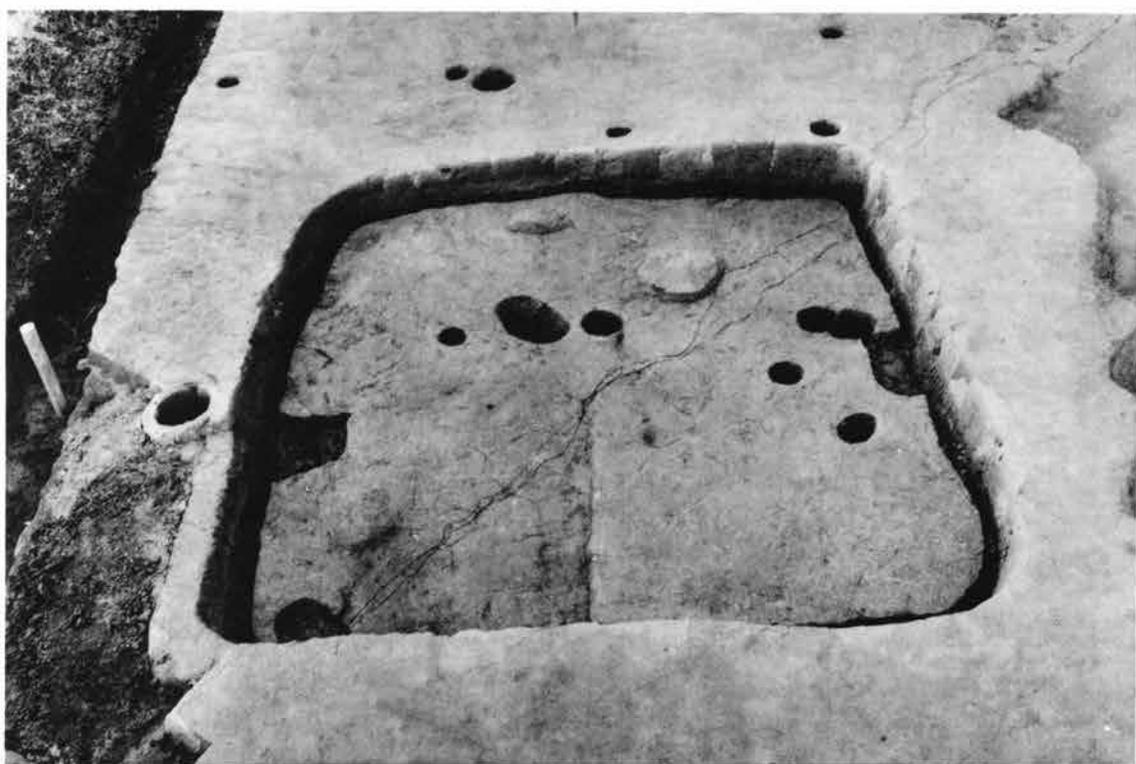
(1) 竪穴式住居跡 S H03 (西から)



(2) 竪穴式住居跡 S H03特殊ピット (南から)



(1) 竪穴式住居跡 S H04 (南東から)



(2) 竪穴式住居跡 S H05 (東から)



(1) 竪穴式住居跡 S H05遺物出土状況(1)



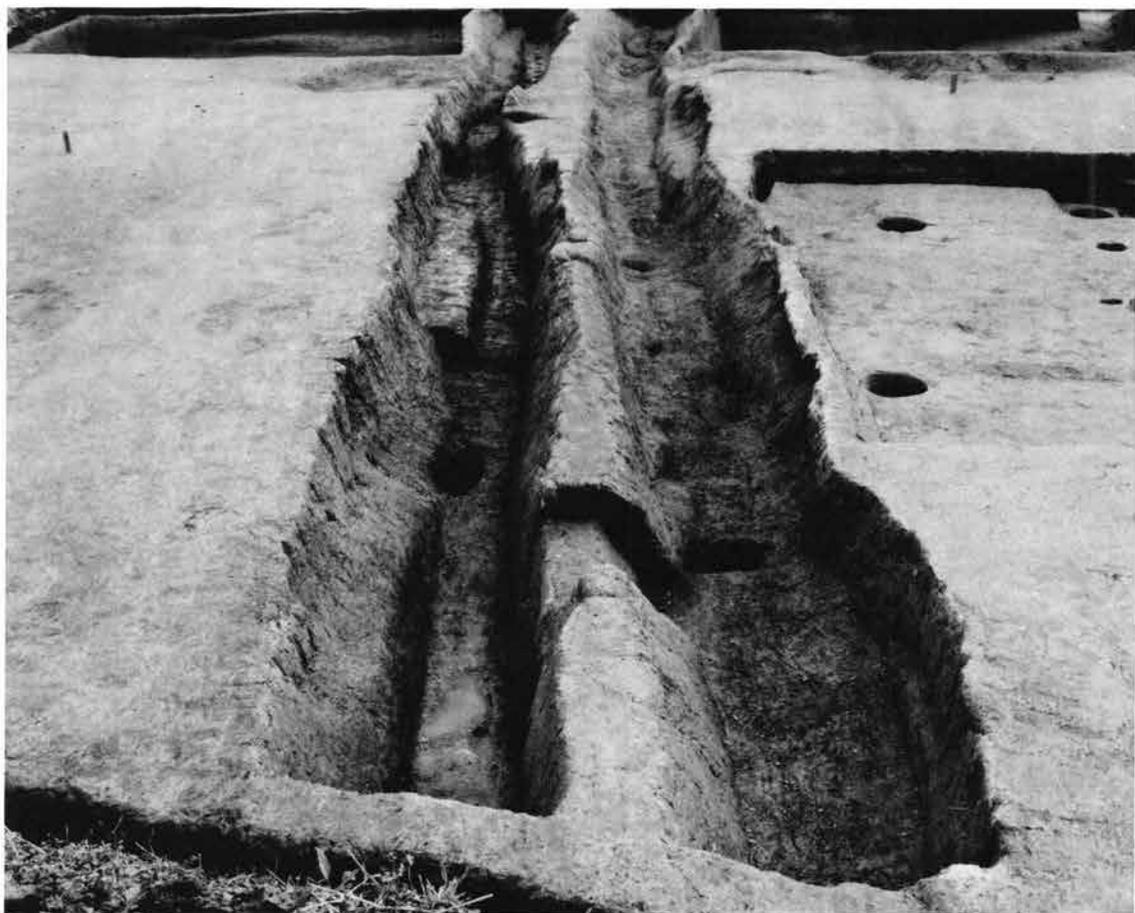
(2) 竪穴式住居跡 S H05遺物出土状況(2)



(1) 掘立柱建物跡 S B07 (北東から)



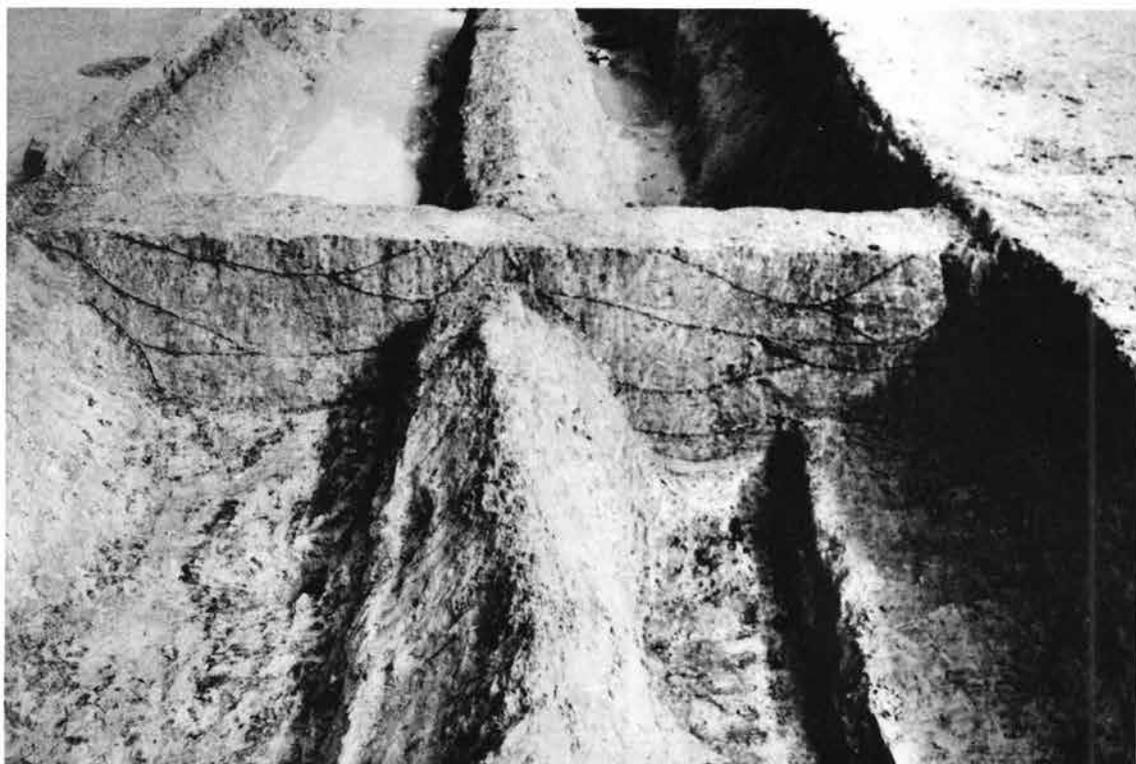
(2) 掘立柱建物跡 S B08 (東から)



(1) 溝 S D01 (北から)



(2) 溝 S D01遺物出土状況 (東から)



(1) 溝 S D01断面 (南から)



(2) 溝 S D02 (東から)



(1) 溝 S D02遺物出土状況(1)



(2) 溝 S D02遺物出土状況(2)



(1) 溝 S D02B断面 (北東から)



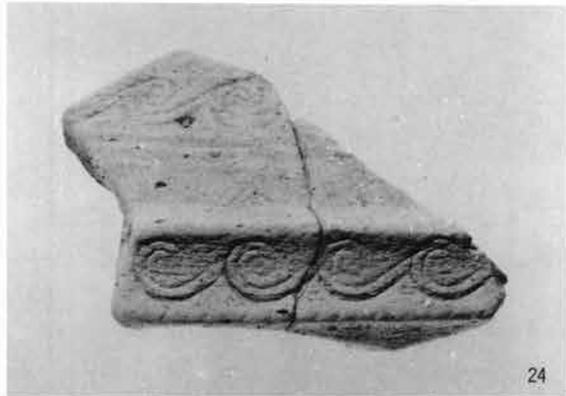
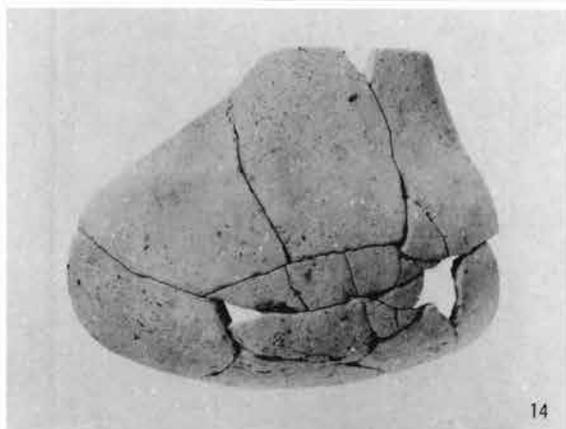
(2) 溝 S D02A断面 (東から)



(1) 噴砂検出状況 (S D02B南側)



(2) 噴砂・ピット検出状況

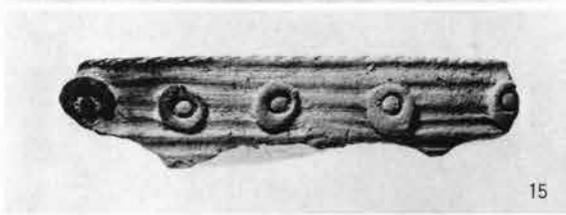




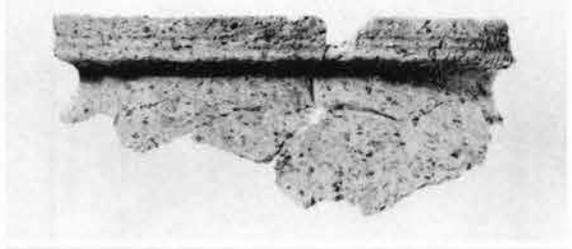
20



11



15



13



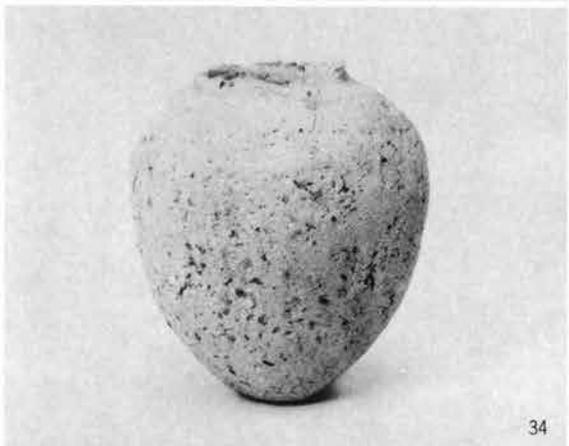
30

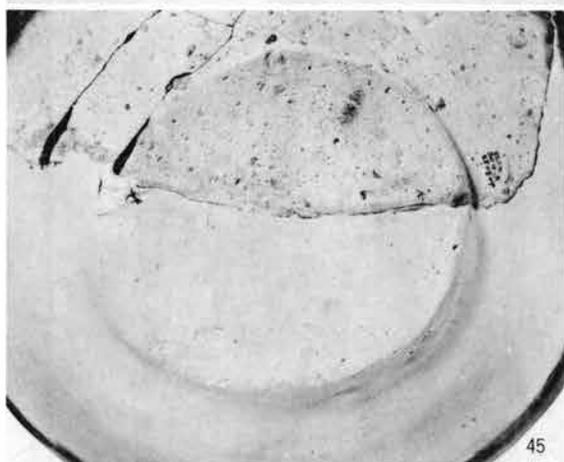


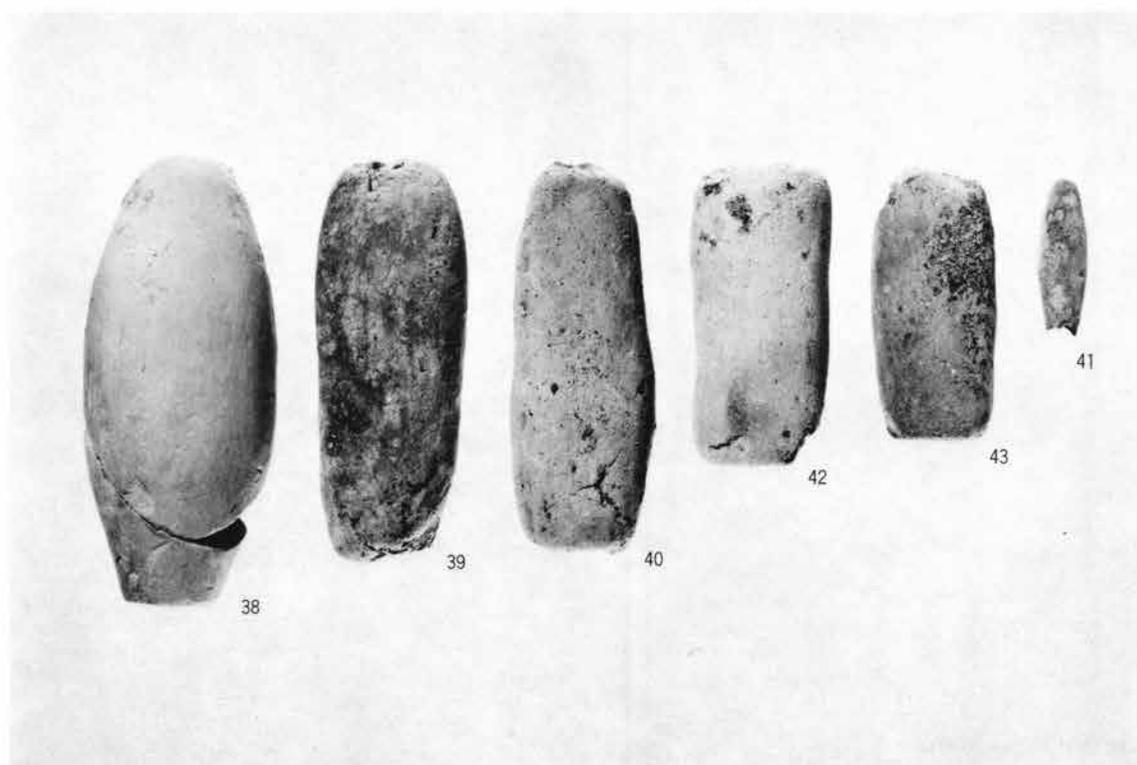
33



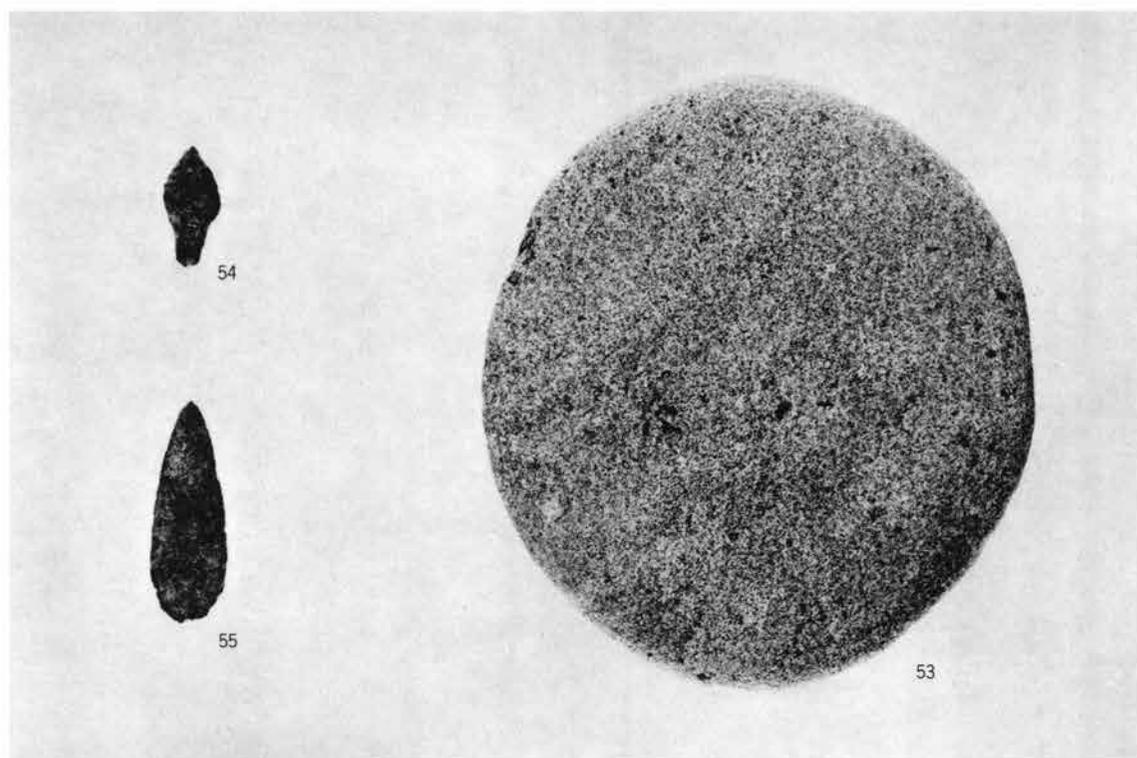
9



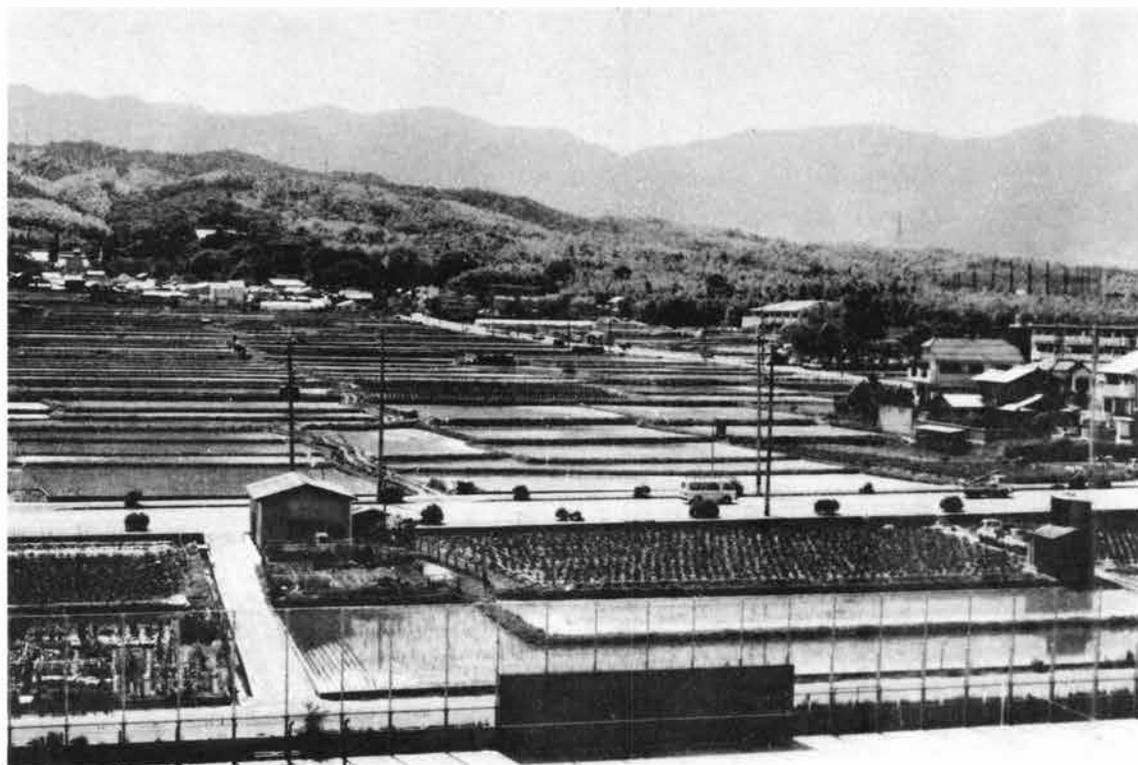




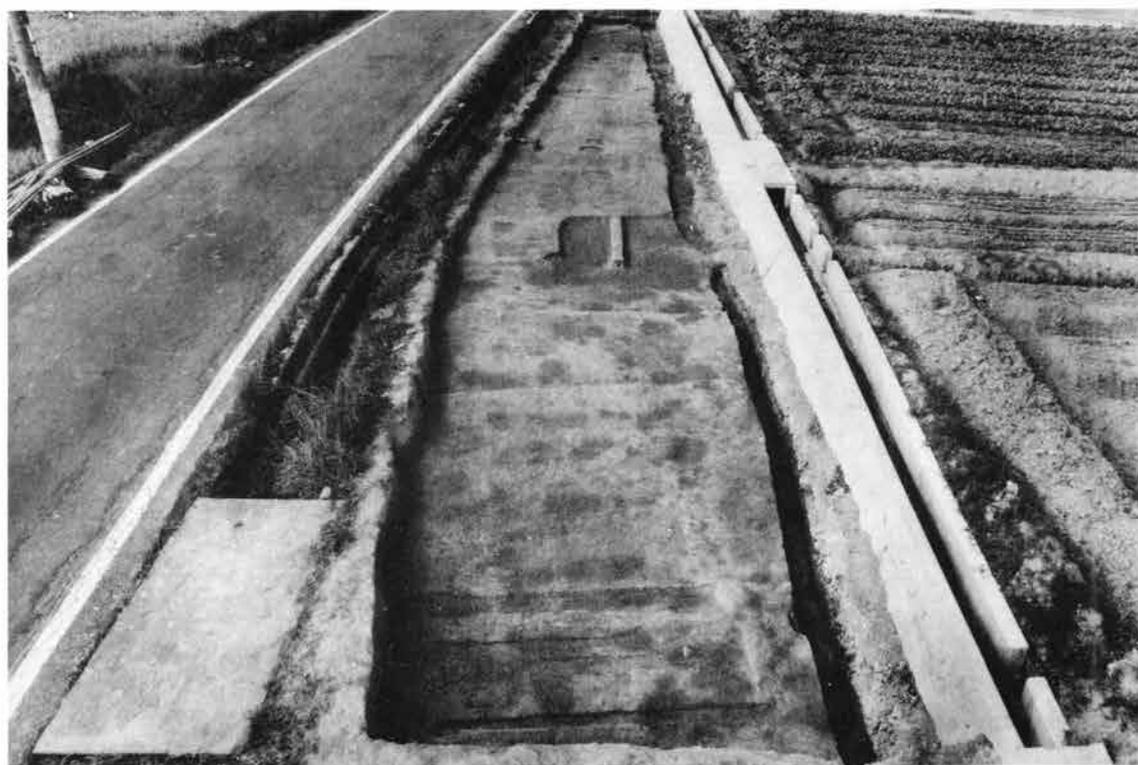
(1) 出土遺物 5 (土錘)



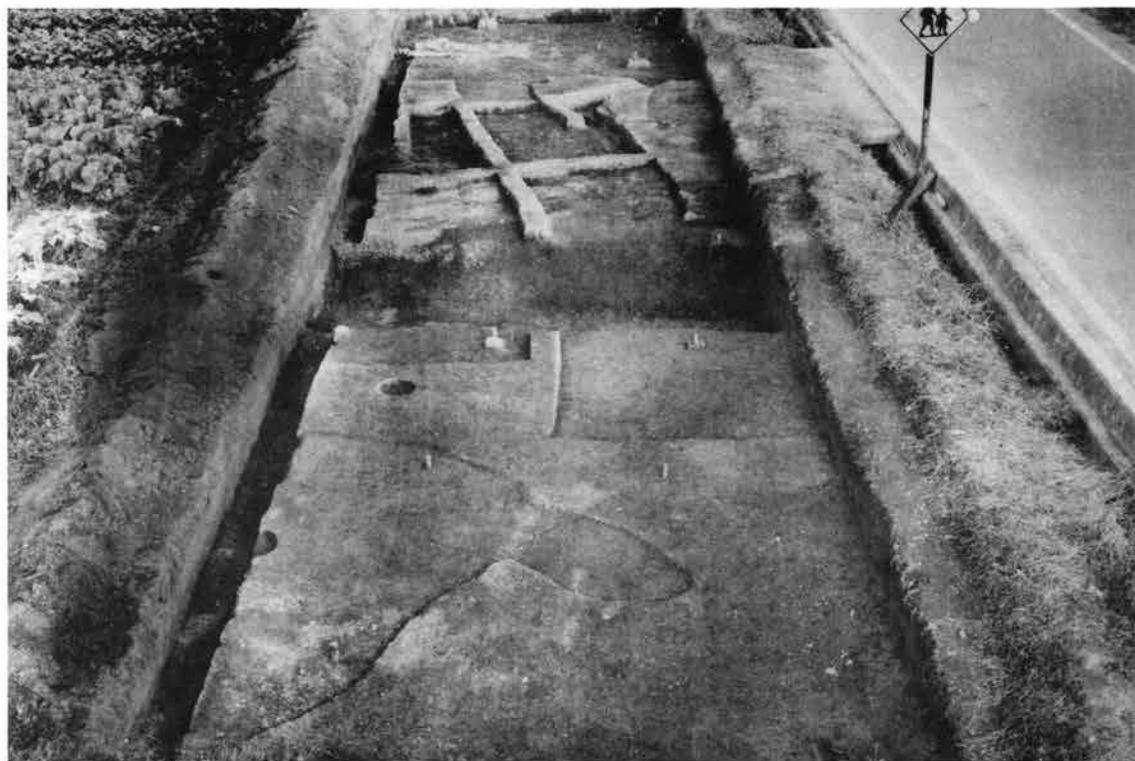
(2) 出土遺物 6 (石器)



(1) 調査地遠景(東南東から)



(2) Aトレンチ全景(東から)



(1) Bトレンチ全景(西から)



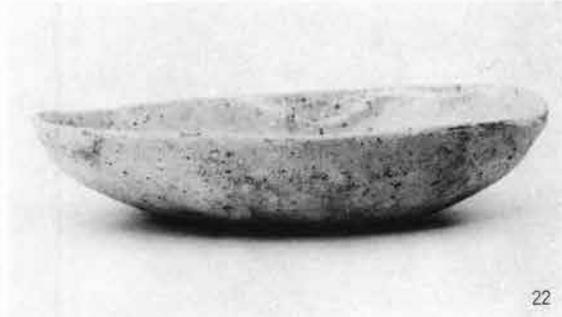
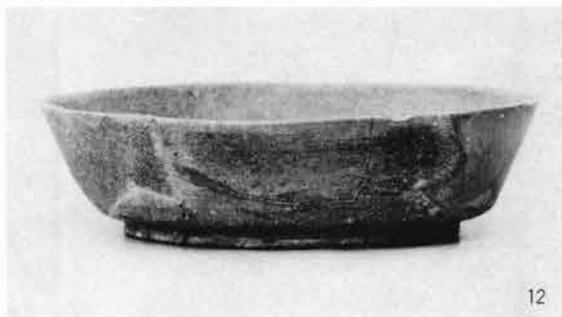
(2) Cトレンチ全景(西から)



(2) Eトレンチ全景(東から)



(1) Dトレンチ全景(西から)

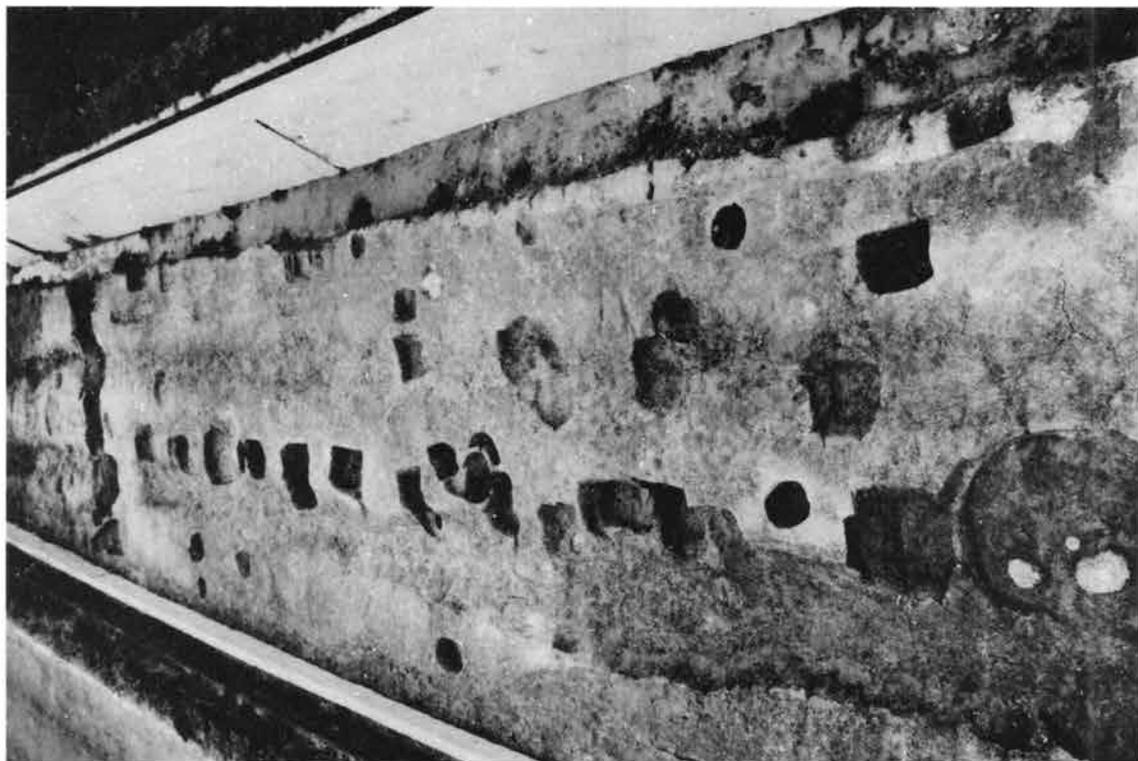




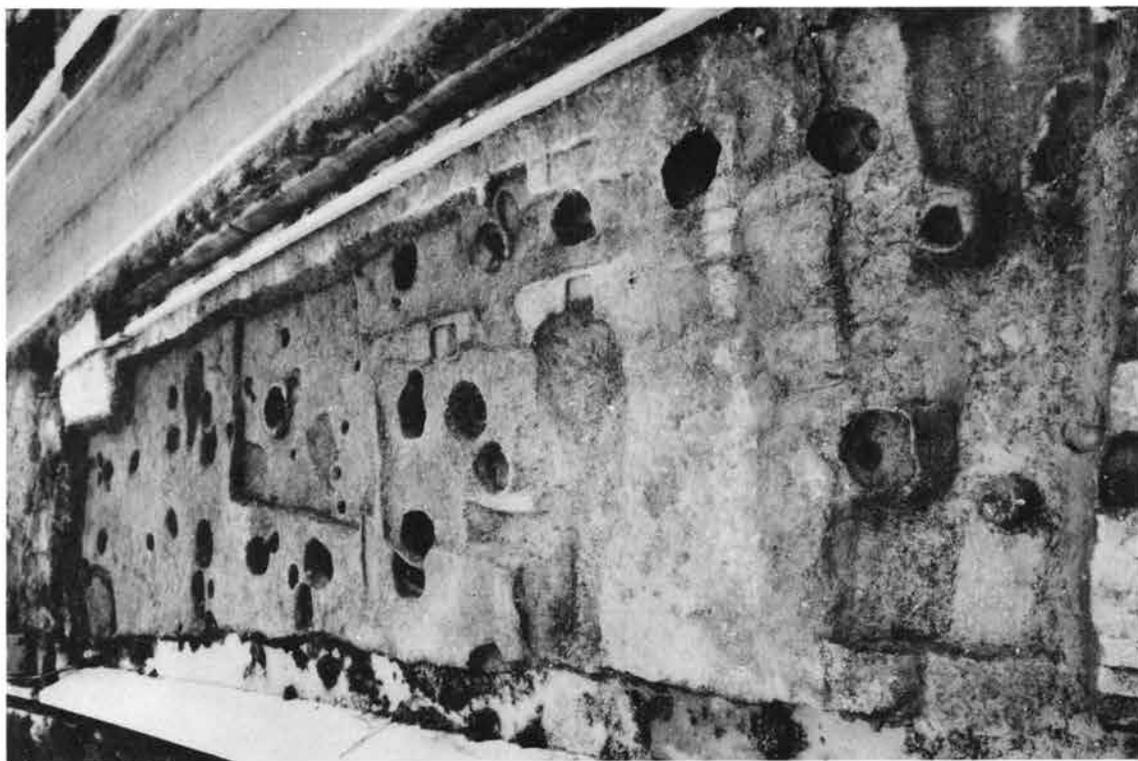
(1) Aトレンチ上層検出遺構全景(東から)



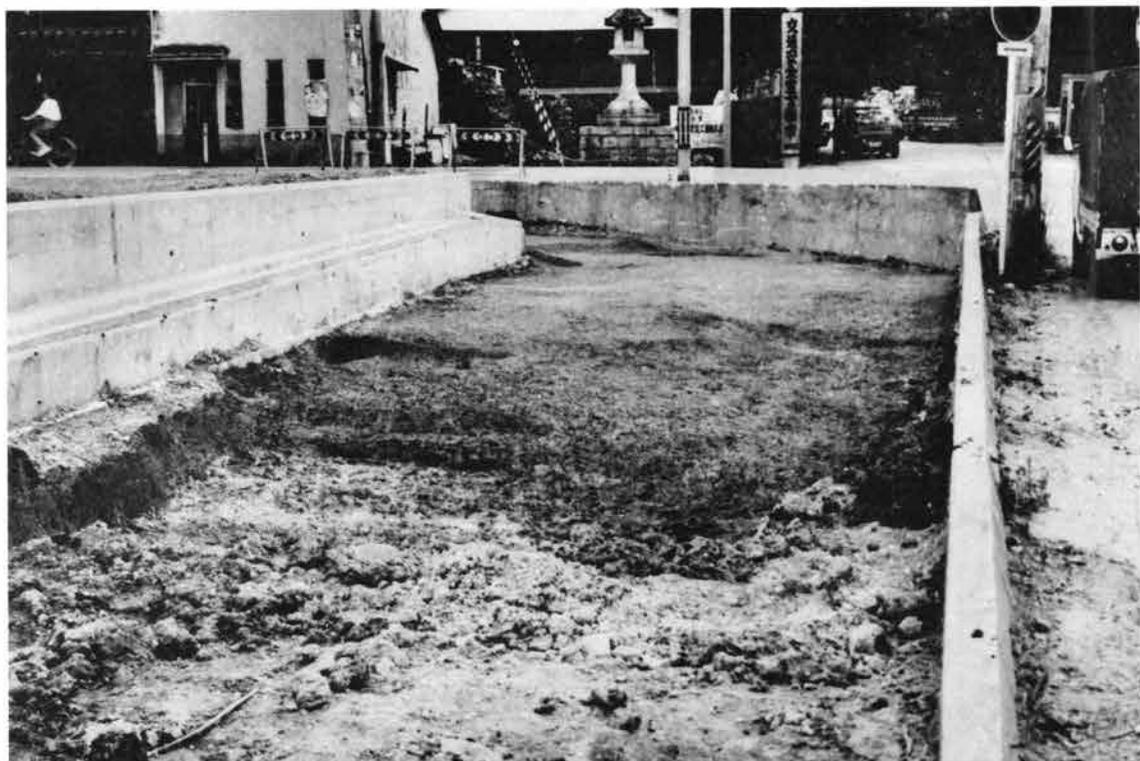
(2) Aトレンチ下層検出遺構全景(東から)



(2) Aトレンチ東半検出遺構(東から)



(1) Aトレンチ西下半層検出遺構(西から)



(1) Bトレンチ全景(東から)



(2) Bトレンチ検出遺構(南から)



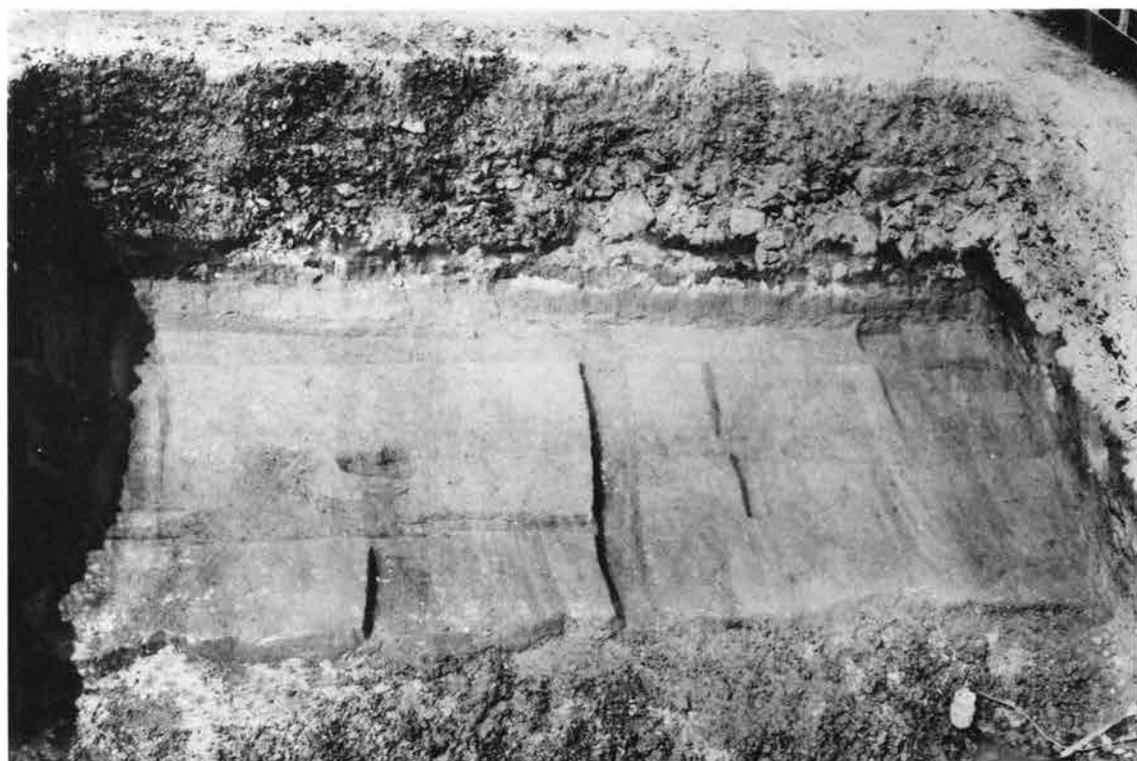
(1) 調査前風景(北から)



(2) トレンチ全体(南から)



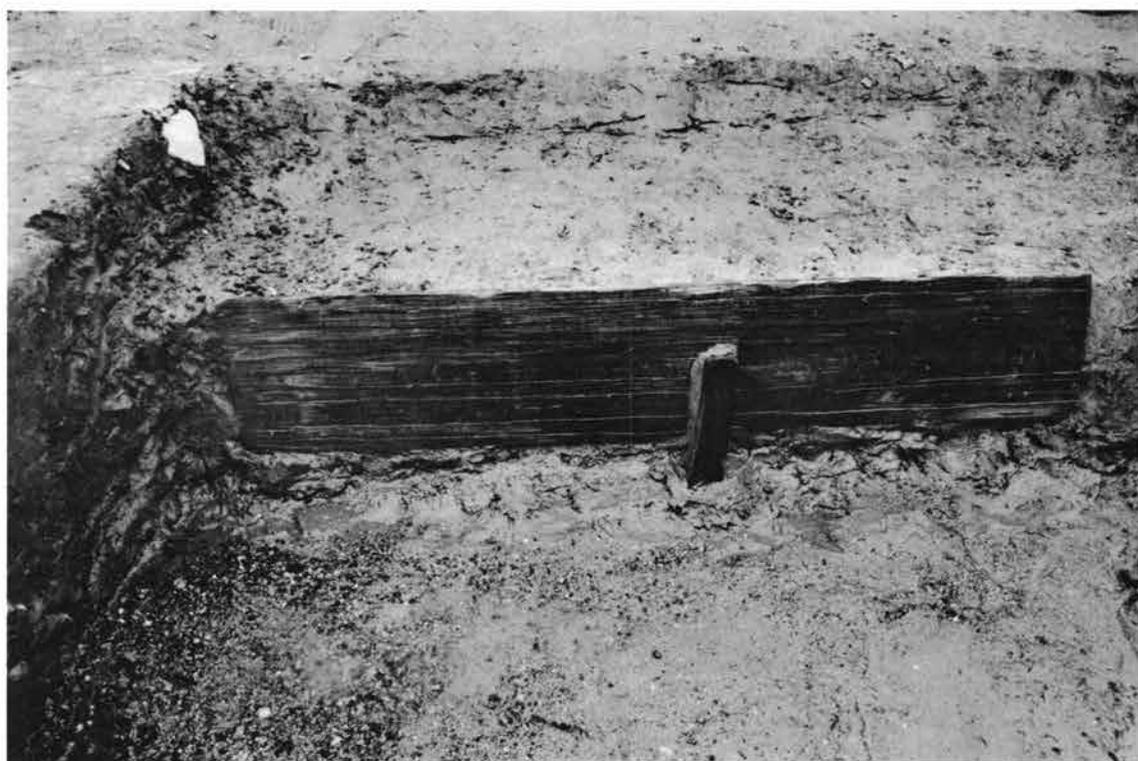
(1) 北トレンチ全景(南から)



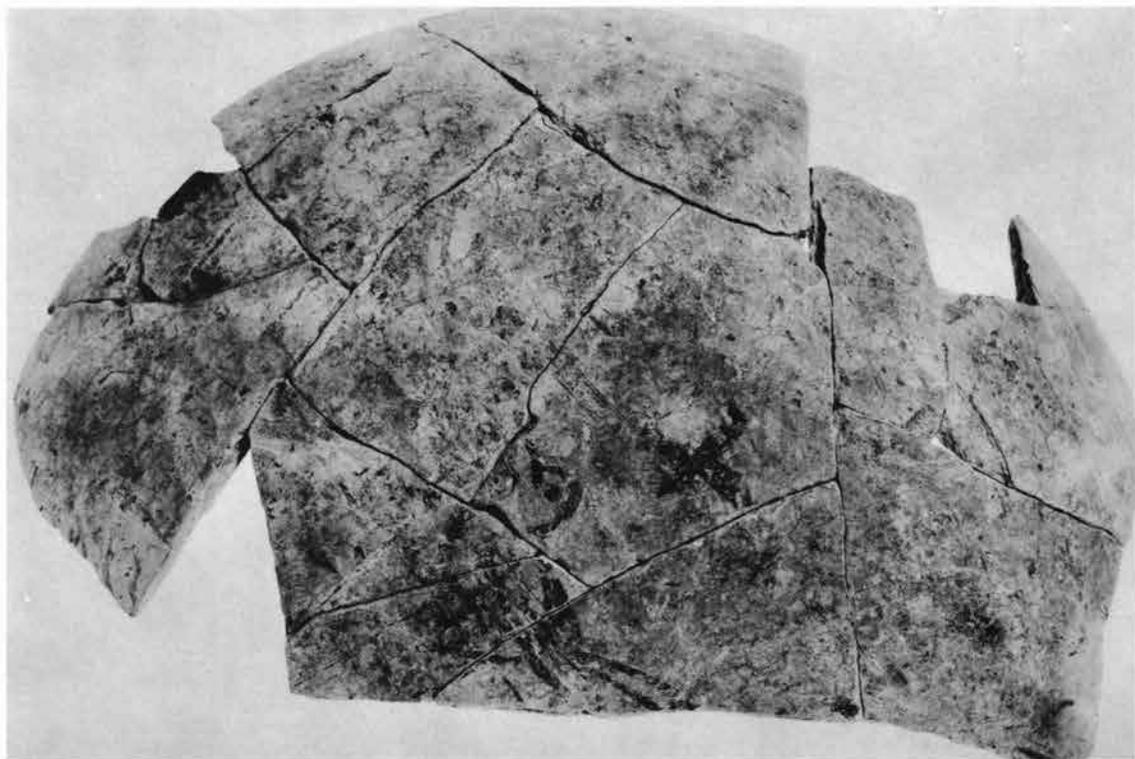
(2) 南トレンチ(南から)



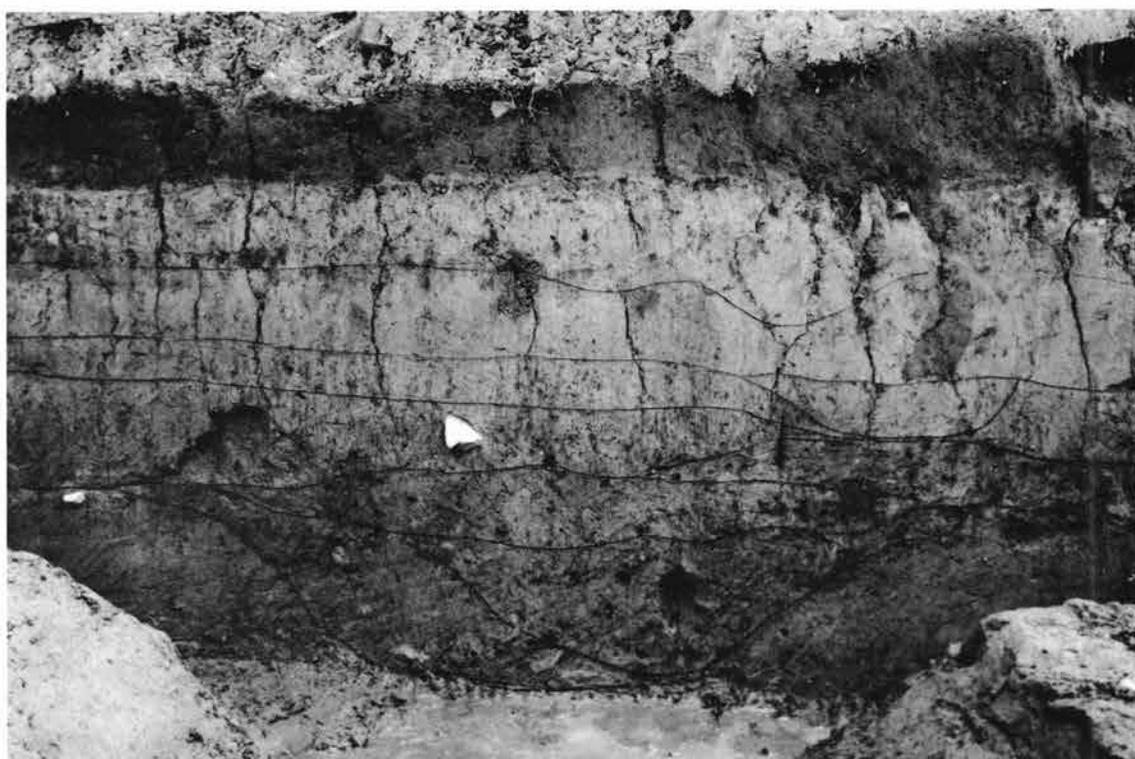
(1) 溝 S D 20201出土状況(東から)



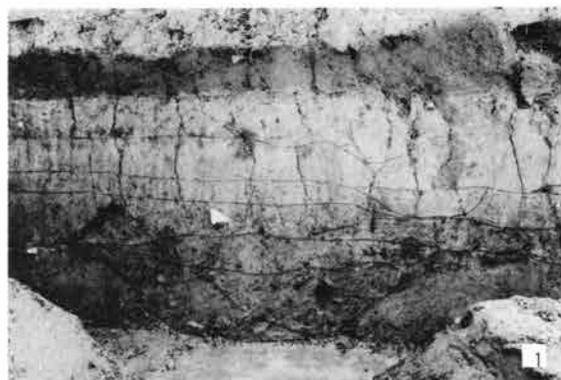
(2) 溝 S D 20201内側板出土状況



(1) 墨書土器



(2) 土層断面



各遺構検出状況

1. S D 20201断面, 2. S X 20203高杯出土状況, 3. S K 20205平面, 4. S K 20202平面
5. P-2 (柱穴), 6. P-3 (柱穴)





16



26



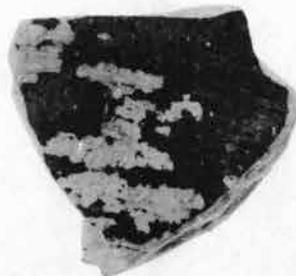
24



62



1





(1) 調査前風景(南東から)



(2) トレンチ全景(南から)



(1) 井戸Ⅰ・井戸Ⅱ(東から)



(2) 井戸Ⅰ



(1) 土坑 S K07



(2) 土坑 S K03断面



(1) 調査前風景(北から)



(2) 城館北端部(北から)



(1) 調査風景(南から)



(2) 土壇状遺構 S X01 検出状況(南から)



(1) Cブロック 石仏等検出状況(東南から)



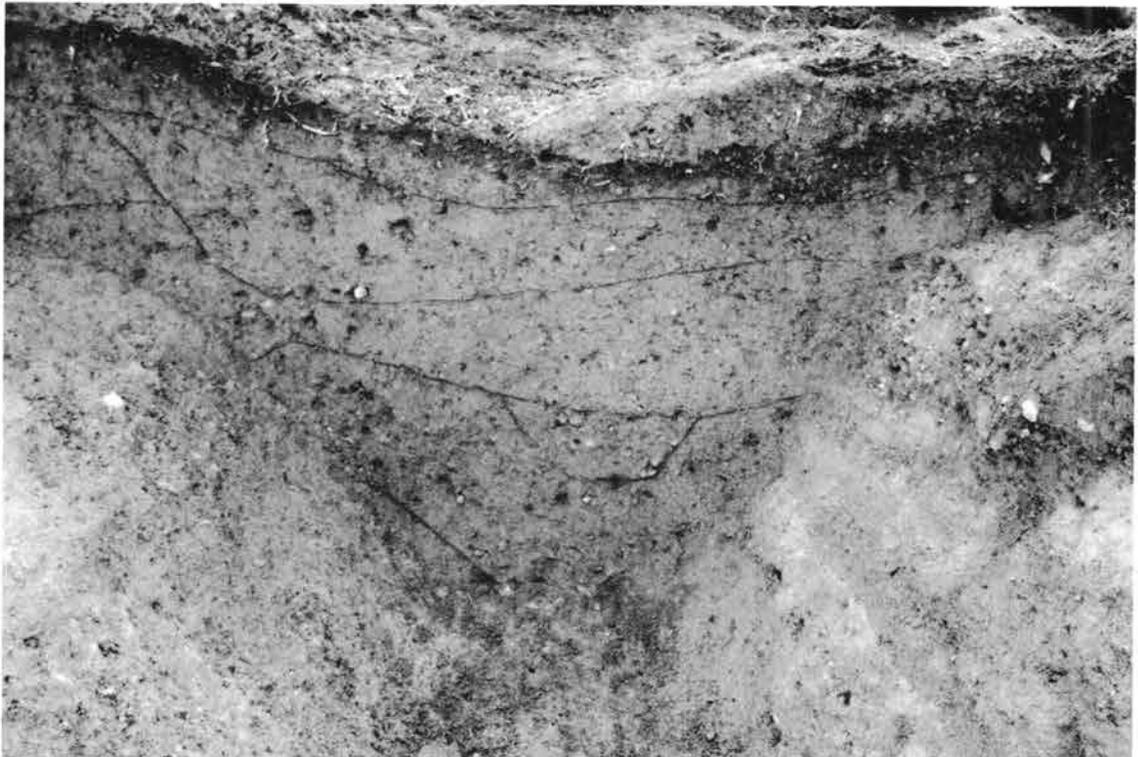
(2) Cブロック 石仏検出状況(東南から)



(1) 石仏検出状況(東から)



(2) S X04検出状況(南から)



(3) Cブロック 南端堀S D07土層断面(東から)

京都府遺跡調査概報 第34冊

平成元年3月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)